『Dynamite!!』と『戦極』が大晦日緊急合体!!

kamipro

紙のプロレス

MMA & PRO-WRESTLING MAGAZINE

enterbrain MOOK

2009

141

特別定価940yen

本誌独占!! スペシャル対談!
バカサバイバー×皇帝in USA

青木真也×エメリヤーエンコ・ヒョードル

皇帝の拳にアメリカ大大大熱狂!!

11.7ストライクフォース徹底リポート

疑惑の裁定をドゥ・ザ・ジャッジ!!

特集 レフェリング

12.25『ハッスル・マニア』も延期……!?

ハッスル危機一髪!!

12.31『SRC』有明大会中止!
DREAM vs『戦極』実現へ!

格闘大連立、再び!!

ダイナマイトなサプライズ!
大晦日に"超黒魔術"炸裂!!

谷川貞治 FEG代表

安田会長、ありがとう!
まさに『やれんのか!大晦日!2009』!!

大晦日大激震座談会

世界はまかせろ!!

失なわれた"最高峰"を取りもどせ!!

大会速報、選手ブログは携帯で!
kamiproMove

2009 No.141 CONTENTS
kamipro

年間MVPは安田会長!!

マット界、起死回生の秘策アリ!

MMA & K-1

PRO-WRESTLING

Columns

大晦日緊急合体!!

『Dyamite!!』と『戦極』が

乱 大興奮

この企画も止めないでくれ！

ドンペンくんもビックリ!?『Dyamite!!』と『SRC』（以下『戦極』）が大晦日緊急合体だ!!

ありえないウルトラサプライズがマット界を襲った。本誌発売時には記者会見等で大々的に公式発表されていると思われるが、12・31『戦極』有明コロシアム大会がここにきて中止！ 同イベントで行なわれる予定だった吉田秀彦vs石井慧の柔道金メダリスト対決が、（あくまで締め切り11月14日の時点では）なんと興行戦争先だった『Dyamite!!』内で実施されることになるというのだ。『Dyamite!!』の隠し球は吉田vs石井だったなんて！

大晦日さいたまスーパーアリーナに参戦するのは吉田や石井だけではない。『戦極』のトップファイターたちが続々とさいたまスーパーアリーナに乗り込み、DREAMファイターと対抗戦を行なうという。これは燃えるぜ〜！ 五味、おまえもいいかげん燃えてくれ！

それしても——一年の締めくくりの大晦日、緊急中止に緊急合体、やるかやられるかの対抗戦。その背景にはイベンターI側のやむにやまれぬ事情があるのかもしれないが、なんてドラマチックな展開なんだろう。

『Dyamite!!』につけられたサブタイトル〝勇気のチカラ〟にはいまだにしっくりいってないファンが多いと思われるが、今回の緊急合体にGOサインを出した安田隆夫ドン・キホーテ会長になんてふさわしいことか！ 安田会長、バンザ〜イ！

今回の合体劇に思い起こすのは、2007年の大晦日だ。〝格闘大連立〟と呼ばれたFEGと旧PR

大晦日 大混

（興奮のあまり）いま話しかけないで！

今回の合体劇に思い起こすのは、2007年の大晦日だ。"格闘大連立"と呼ばれたFEGと旧PRIDEの緊急合体によって、『やれんのか！ 大晦日！ 2007』が準備期間4週間という状況下で奇跡的に行なわれた。そして、当時の日本格闘技界を包み込んでいた暗雲を遠くへ吹き飛ばす鳥肌モノの内容となった。

あのイベントに参加資格は充分にあったが、やむにやまれぬ事情で見送った選手は多い。桜庭和志だってその一人だ。

あれから2年――。日本マット界の苦しさは、当時以上なのかもしれない。この苦境を打破すべく、日本格闘技界の生き残りを懸けて、トップファイターたちが大晦日に集結。大会タイトルは『Dyamite!! 勇気のチカラ2009』であるが、しかし――我々にはどう見ても『やれんのか！ 大晦日！ 2009』としか読めないのである。

男の中の男たちよ、出てこいやーっ!!

CE FEDOR VS ROGERS

鳥肌立った!!

皇帝、金網初陣!!
魔人を一撃粉砕!!

[2009.11.7 STRIKEFORCE／M-1 GLOBAL FEDOR vs ROGERS]
米国イリノイ州シカゴ郊外、シアーズセンター
WAMMA世界ヘビー級チャンピオンシップ 5分3R
◯エメリヤーエンコ・ヒョードル
vs ブレット・ロジャース×
(2R 1分48秒 TKO)

11.7 STRIKEFORCE FE

世界中が鳥

強いわっ!!

現地熱烈大歓迎!!
“世界のワオ木”が皇帝とアメリカで再会!!

青木真也×エメリヤーエンコ・ヒョードル in USA

聞き手／佐藤大輔

青木真也 × エメリヤーエンコ・ヒョードル

皇帝×バカサイバーin USA!! "60億分の1"ヒョードルが参戦した11・7ストライクフォース・シカゴ大会を我らがワオ木さんが現地生観戦！ 想像以上にファンからサイン攻めにあった青木真也は、ヒョードルが劇的勝利を収めた翌日、ひさしぶりに皇帝と対面をはたすことになった。このスペシャル対談の司会を務めるのは、青木とともに渡米した"煽りVアーティスト"佐藤大輔氏!! 待ち合わせ場所に早く着きすぎてしまった青木真也と佐藤大輔は、とてつもなくおもしろかった昨日のイベントの感想を雑談がてら語り始めたのだった――。

――昨日はおもしろかったなあ。

青木 ヒョードルもやっぱり凄かったけど、ジェイク（・シールズ）もよかったですねぇ。いいっすよねぇ、あの「ナイス、パスガード！」みたいな。

――あれは相手がメイヘム（ジェイソン・ミラー）だからあのタイトな展開を回せたんじゃない？ 普通の選手だったら一本極まってんでしょ。

青木 そうっすね。あと、ジェイクがギロチン引っかけてバックに回ったじゃないですか。あれ、芸術ですよね。芸の術です！

――でも、ここはね、青木選手と意見は違うけど、ボクはジェイク・シールズはちょっとイヤだったのね。わかるよ、凄いのは。わかるけど、でもあそこまで攻めたら一本極めなきゃダメだと思いますよ。そこの評価の差は、やってる人間との違いかもしれないですけど。

青木 それも凄くわかるんですけどね。

――ま、青木選手みたいな楽しみ方してんのは日本で15人ぐらいしかいないから。

青木 15人もいるかなあ……。

――でも、それは"ネット格闘技"だと思いますよ。ちゃんとお金を払って会場に来た人は、もっとハッキリしたモノを観たいもん。

青木 ジェイクのパスにはお金払う価値があるんですけどねぇ。

――でも、サブミッションの人ってね、青木選手も含めてだけど、やっぱりそういう壁はあると思うよ。ストライカーと違って、一本取らないと沸かせられないみたいなところは、凄く損な役回りだと思いますよ。でもそれは青木選手だけの十字架なわけでしょ。カッコイイと思うけどね。

青木 この十字架を背負えるヤツがどれだけいるんだ、みたいな？

今年の４月、『DEEP M-1 CHALLENGE』でエキシビションながら肌を合わせた二人。対面はそれ以来のこと。念のため断っておくが、前髪を染めているのは青木真也であってC-C-Bの笠浩二ではない。

――そうそう。で、これはあくまでこちら側の価値観でだけど、格闘家の仕事は人を感動させてなんぼだから。そうでしょ？ で、生意気な青木真也が日本でも、そしてアメリカでもなぜこんなに人気あるかというと、お客さんが試合を観て感動するからですよ。

青木 泣き芸をですか？

――いや、あれはどうかと思うんだけど（笑）。試合を観て「スゲエ！」と思うんだよ、最終的に一本極めるから。

青木 そうかもしれないですね。

――そう。だからこっちのショッピングモールで若いお姉ちゃんに「あなたの試合を全部観てる！」とか声をかけられるんですよ。

青木 でも、こっちに来たら、もっとアメリカで闘いたくなると思ってたんですよね。

――そこは意外だけどね。

青木 あんましっすね。もっと来たくなると思った。

――いまの青木選手の立ち位置からすると、「アメリカ行きてえぜ！」って言ったほうがいいんですよ。そうすると「ちょっと待って」ってDREAMから慰留されてVIP待遇されるみたいなさ。

青木 「アメリカ行きた〜〜い！」（笑）。

――待遇が良くなるよ（笑）。

青木 でも、もっと来たくなると思ったっす、ホントに。だって観に行った人はみんな言うんすもん、「アメリカは凄い！」って。でもよ〜く考えたら、みんな年齢が上の人たちなんですよね。

――うん。そこは核心だね。世代の壁、ありますね。

青木 アメリカに憧れのある人たちっていうか、簡単にいうとバブル世代の人たちっていうんですか。金もいっぱい持って、そういう価値観の人たちというか。

――あるいは、そこに憧れてた人たちというかね。青木真也はあらかじめ不景気だからね。

青木 そうっす。格闘技がいいとき知らないもん。

――だから本当の意味でPRIDEのいい時期を知らないっていうのが、いいのかもしんないですね。

（ここでヒョードルが登場）

――ほらほら、PRIDEが良かった頃の象徴が来たよ（笑）。ヒョードルさん、おひさしぶりです！

ヒョードル ヨロシクオネガイシマス（笑）。

青木 よろしくお願いします。昨日の勝利おめでとうございました！

ヒョードル ありがとう（微笑）。

青木 （右腕のギプスを指差して）ケガは大丈夫なんですか？

ヒョードル すぐに治ります。強く殴られたのでさすがに痛いですけど。

青木 試合後の会見では「危ないと思った場面は一度もありませんでした」って言ってましたけど。

ヒョードル そうですね。すべては考えられる範囲内の出来事でしたから。顔面を殴られることだって、絶対に起きえないことではないじゃないですか。

――しかし、幸せですよ。リングスから始まって、どんどん幻想と実力が大きくなって、マーケットも大きくなって、こんな凄い試合を間近で観られてることは。

ヒョードル ありがとうございます（微笑）。

青木 前田日明さんに感謝しましょう。リングス総帥、前田日明先生に。

ヒョードルのファイティン・グオペラ!! 入場からフィニッシュまで鳥肌モノの内容。足りないのは髙田延彦の解説くらいだ。「いま話かけないで！」（試合に集中する髙田調）。

ヒョードル選手には「強い!」しか言えない。強いにつきる（笑）

——ホントね、そんなこと言ってると怒られるからね。

青木　でも前田さん、ボクのこと、スッゲエ好きみたいです。

——まあ、いいや。しかし、ヒョードルさん、今日の盛り上がりはホントに凄かったですね。

ヒョードル　ストライクフォースで闘ったのは初めてですから、あんなに大歓声を受けたのはビックリしました。日本ではずっと闘ってきたのでファンの皆さんから温かい歓声を受けることはある意味、想像はできるんですけど。

——あと途中で「USA!」コールが起きたのもいままでにないシーンじゃないですか。最初はみんなヒョードルさんを応援してたけど、「そうだ！　ここはアメリカだった。ロジャース、ガンバレ！」みたいな。

ヒョードル　ロジャースもいい選手ですからね。

——で、それに対抗して「ロシア！」コールも起こりましたもんね。あのコールは気がつきました？

ヒョードル　ここシカゴにはロシア人のコミュニティがあることは知ってましたし、実際にロシア国旗を持ったファンもいたようですね。その旗は見えませんでしたけど、あの「ロシア！」コールは励みになりました。

——青木選手はヒョードルさんの試合はどうだったの？

青木　もうわかんないっすよね。「強い！」しか言えない。強いにつきる（笑）。

ヒョードル　ありがとうございます（微笑）。

青木　っていうか、ヒョードルさんが勝ったあと、ボクがケージの中に入っていったの知ってます？

ヒョードル　いや、まったく気がつきませんでした。

青木　ドサクサにまぎれて入っちゃおうぜ！　って。

——でも、なんか溶け込めずに手持ち無沙汰な感じでいたんです。優勝の胴上げをやってるときに周りでVサインしながらジャンプしてる若手選手みたいに。

青木　そうですね、そんな感じでした（笑）。

ヒョードル　どうして溶け込めなかったんですか？

青木　いや、なんか関係者が怖かったんですよ。おっかないなって。

ヒョードル　そんなことないですよ（笑）。

青木　すいません、ビビリなもんで。

——でも、アメリカで見るヒョードルさんというのは、日本で見るよりもより客席に溶け込んでるというか。会場の空気のなかに飲み込まれながら光ってるというか。なんていうのかな、アメリカの空気の中で一人違う空気を出してる、みたいな。

ヒョードル　そうですか。私はいつもと変わらないんですけど。

——ヒョードルさん本人はそうでしょうね（笑）。

青木　はい！　ヒョードル選手に質問なんですけど、アメリカで試合をするうえで気をつけるポイントはどこですか？　教えてください！

ヒョードル　時差に身体を合わせることですね。そこさえ気をつけていれば、どこで試合をしても一緒です。とくに変わりはありません。

青木　あ〜、やっぱり時差ですよね。ボクもそう思います。あとストライクフォースのグローブって、日本のものと違いがありませんでした？　ボクが触った印象だ

と、薄くて硬いから拳のケガが怖く感じたんです。

ヒョードル　ああ、確かに日本とアメリカとでは使っているグローブが違いますね。

日本のファンはヒョードル選手のことを待っているんです！

私も日本に戻って闘いたいと強く思っています

高いところに登る
ハーサルの最中、
り込んで"来たる
チェックに余念が
フはとくに注意せ
大会翌日、メイへ
ェイク・シールズ
する日はくるの
したのか『PRID
ツを着込んだ"変
インをせがまれる
「今成正和」の名
低だけど、おもし
だ。今成選手、ご
ざいます。❹対
た佐藤大輔は青
メラを回す。『Dy
Vでその模様は見
こに行ってもサイ
ンヤ・エイオキ」
音)。驚異的な認

っています。いつか神様がそんな機会を与えてくれることを祈ってます。

青木　やっぱり日本のファンのほうがア

――日本の皆さん、5倍のギャラで行くそうです（笑）。

青木　そういうわけじゃない。要は、そう

あおき・しんや■1983年5月9日、静岡県出身。修斗世界ミドル級王者、WAMMA世界ライト級王者、DREAMライト級王者。打倒BJペンの呼び声が高い軽量級屈指のグラップラー。180cm、70kg。

EMELIANENKO FEDOR■1976年9月28日、ウクライナ出身。PRIDEヘビー級王者、現WAMMA世界ヘビー級王者。"60億分の1"の異名を誇る世界最強の男。183cm、103kg。

ことを待っているんです！

と、薄くて硬いから拳のケガが怖く感じたんです。
ヒョードル　ああ、確かに日本とアメリカとでは使っているグローブが違いますね。でも、実際にはそんなに違和感はなかったですけど。
青木　で、今回ヒョードル選手は初めてのケージだったじゃないですか。テクニックの面で気をつけることってありました？
ヒョードル　試合で使うテクニックの違いはとくにありませんが、普段の練習では、窮屈なポジションから逃げる練習はたくさんしてきました。
青木　ああ、ケージに身体を押し込まれないように。
ヒョードル　そうですね。
――来年は一緒に上がるかもしれませんね、ストライクフォース。
青木　あるのかなあ。
ヒョードル　そうなってほしいですね（微笑）。
青木　次はどこの団体に上がりたいと思ってますか？　ちょっとイジワルな質問ですけど（笑）。
ヒョードル　……日本です（笑）。
青木　ククク。すいません（笑）。気を使っていただいて。
ヒョードル　いえいえ、本当に日本のリングに上がりたいんですよ。日本のファンは格闘技を愛していますから。
青木　日本のスタッフも、日本のファンも、み～～～んなヒョードル選手のことを待ってるんです。無理強いはしませんけど、また『やれんのか！』みたいなイベントをやったときには一緒に上がってほしいです。
ヒョードル　わかりました。繰り返しますが、私は日本に戻って闘いたいと強く思っています。いつか神様がそんな機会を与えてくれることを祈ってます。
青木　やっぱり日本のファンのほうがアメリカよりヒョードル選手を愛してると思うんです。ヒョードル選手がいつでも帰ってこられるようにリングを温めて待っていますから！
ヒョードル　よろしくお願いします。アオキ選手には日本を代表する格闘家になってほしいですね。これからも頑張ってください。
青木　はい、打倒ダナ・ホワイトで頑張りましょう（笑）。
ヒョードル　（微笑）。
（ここでヒョードル退席）

○

――あらためて聞きますけど、どうでしたかアメリカは。
青木　おもしろかったですよ。でも、夢のないこと言っていいですか？　今回アメリカに来てみて、そんなにアメリカに出てかなくてもいいんじゃないのかなって思ってしまったんですよ。
――それ、本音ですよね。これだけ「アオキ、アオキ！」ってちやほやされたら普通は浮かれるんでしょうけど、意外と冷めてましたからね。日本よりも認知度は凄いにもかかわらず。
青木　でも、実際ファッションもあるじゃないですか、こっちのノリって。
――盛り上がってるから盛り上がる、みたいな？
青木　「飲んどこうぜ！」みたいな。
――そう。だからよく言いますけど、ホットドッグ早食い選手権でもみんな盛り上がるよね。
青木　たとえばギャラが5倍10倍になるんだったらわかるけど……。
――日本の皆さん、5倍のギャラで行くそうです（笑）。
青木　そういうわけじゃない。要は、そういうメリットでもないかぎりないですよね。
――あ、そうですか。
青木　メチャクチャ強いヤツと闘えるとか、BJペンとかとやれるんなら話は違うけど。アメリカに定住しようとは思わなかったですねぇ。
――よっぽどやりたいヤツがいないかぎりっていう。そもそも青木選手はそういう世代じゃないってことでしょ？
青木　朝日昇さんが「アメリカ、ヤバいよ！」って言ってたんですけど、そうとは思わなかったですね。アメリカで評価されてるイコール、世界で評価されてるっていうことは、ボクの誇りでもあるんですけど。逆に、日本でやってもこれだけアメリカで評価されてんだっていうのもありますよね。
――あぁ、そうか。「場所が変わって何が変わる？」っていう話ですね。
青木　はい。日本でボクがやってきたことも間違いじゃなかったんだって。それがよくわかりました。
――じゃあ、DREAMに言いたいことは「どんどん魅力的な選手をつれてきてほしい」っていうことですね。
青木　そうっすね。ボクは日本と世界をつなげている自負はありますから。日本でやっていてもアメリカでこんだけ認知されている。このまま続けていけば、まだ昔の熱を日本に取り戻せると思います。
――じゃあ、日本に帰ろうっか。
青木　押忍、押忍！

【09年11月8日（現地時間）／米国イリノイ州シカゴ郊外のホテルにて収録】

世界はまかせろ!! 青木真也アメリカ視察プチレビュー！

❶バカと青木は高いところに登る!?　大会前日のリハーサルの最中、勝手にケージに入り込んで“来たるべき日”に備えてチェックに余念がない青木。スタッフはとくに注意せず。顔パスだ！❷大会翌日、メイヘムを封じ込めたジェイク・シールズとご対面。対戦する日はくるのか？❸どこで入手したのか『PRIDE武士道』Tシャツを着込んだ“変態”ファンからサインをせがまれると、青木はなんと「今成正和」の名前を書き込む。最低だけど、おもしろいからオッケーだ。今成選手、ご結婚おめでとうございます。❹対談の聞き手を務めた佐藤大輔は青木に密着取材でカメラを回す。『Dynamite!!』の煽りVでその模様は見られるかも。❺どこに行ってもサイン＆握手攻めの「シンヤ・エイオキ」（アメリカでの発音）。驚異的な認知度だった。

青木真也×エメリヤーエンコ・ヒョードル

MMA戦績10戦全勝。
そんな売り文句でヒョードルの記念す
べき全米生中継デビューの相手を務める

ロジャース　ヒョードルの距離に入りす
ぎてしまった。また、なぜだかわからない
けど、パンチを積極的に出せなかったこと

パンチを出していくことだった。でも、な
ぜかそれができなかったんだ。ヒョード
ルのグラウンドにも対応できていたし、準

られないのであれば、こっちからオランダ
でも、どこへでも出ていくつもりだよ。
―ストライクフォースと提携関係にあ

魔人は強かった

元タイヤ修理工が皇帝を追い詰める!

Brett Rogers

ブレット・ロジャース

"魔人"は本当に強かった! CBSによる全米生中継されたヒョードルのストライクフォースデビュー戦。
その相手を務めたロジャースが、予想以上の健闘を見せ、ヒョードルとともに全米のお茶の間にインパクトを与えた。
そんなロジャースの試合後の生の声を、記者会見での発言を交えてお届けしよう。

聞き手／Matthew Rock　撮影／Esthe Lin（STRIKEFORCE）　構成／堀江ガンツ

ＭＭＡ戦績10戦全勝。そんな売り文句でヒョードルの記念すべき全米生中継デビューの相手を務めることになったロジャースだったが、下馬評は決して高いとはいえなかった。

なにしろファイター一本で生活できるようになったのは、6月にアルロフスキーを倒したあとと、つい最近。それまではタイヤ修理工として働くかたわら、成功を夢見てＭＭＡのトレーニングに励むブルーカラーの兼業格闘家だったからだ。

そんなロジャースが、この一世一代のチャンスでその力を発揮。皇帝ヒョードルを相手に「あわや」のシーンも作ってみせた。

最後は強烈すぎる氷の拳の前にマットに沈んだが、その評価はおおいに高まったと言えるだろう。米国ＭＭＡ界にまた一人、怪物が生まれた。

――かなりの激闘、好勝負でしたが、今日の試合の感想を聞かせてください。

ロジャース　最後のストップに関しては満足していない。確かに完璧なダウンを奪われたが、パウンドをもらいながら、意識はしっかりしてたんだ。下された結果に関しては尊重しているが、自分の中では負けたとは思ってないよ。

――闘ってみて、実際のヒョードルはイメージと違いましたか？

ロジャース　ヒョードルのことは世界最強のファイターとして、敬意を払って対戦したんだが、ケージの中で向かい合ってみて、凄く落ち着いていることが印象に残っている。激しい試合をしているのに、心が静かでゆとりすら感じた。こんなファイターは初めてだったね。

――今日の敗因はなんだと思いますか？

ロジャース　ヒョードルの距離に入りすぎてしまった。また、なぜだかわからないけど、パンチを積極的に出せなかったことだ。もっとアグレッシブにパンチを出すべきだったよ。もしかしたら、ヒョードルの重圧を感じていたのかもしれない。自分の力を出しきれなかったことが悔やまれるね。

――ヒョードルとは再戦してみたいですか？

ロジャース　ヒョードル自身が「再戦したい」と言ってくれてるんで、喜んで受けて立ちたい。

――再戦したら勝つ自信はありますか？

ロジャース　間違いなく、いまここにいる自分と違う自分を見せられると思う。まあ、期待してくれ。

――今日はどんな作戦を立てていましたか？

ロジャース　スタンドアップで積極的にパンチを出していくことだった。でも、なぜかそれができなかったんだ。ヒョードルのグラウンドにも対応できていたし、準備は万全だっただけに残念だよ。

ストレートでヒョードルを流血させ、ケージ際に追い込むロジャース。皇帝がこんな姿を見せることだけでも貴重。ここ数年で皇帝を最も苦しめたのはロジャースだろう。

ヒョードル戦で人生を変えるチャンスを与えられたと思っている

――今後、ヒョードルと対戦する選手に、皇帝攻略のアドバイスは何かありますか？

ロジャース　ヒョードルの対戦相手にかい？　宿題は自分でするべきだよ（笑）。

――ヒョードルを倒すのは、なぜこれほどまでに困難なのだと思いますか？

ロジャース　とにかくスピードだね。あれはヘビー級とはとても思えない。とくに右パンチのスピードは脅威だ。あれでいままで何人も倒されているわけだからね。今日だって、俺は右のパンチを一番警戒していたし、来るのがわかっていたのによけられなかったんだ。

――今夜は敗れたものの、ＣＢＳによる全米生中継のメインイベントを務めたことについてどう感じていますか？

ロジャース　とても光栄なことだし、誇りに思っているよ。俺の人生はＭＭＡで闘うたびに変化しているし、今回のヒョードルとの試合は、これからもっと大きく変わるチャンスを与えられたんだと思う。

――次に闘ってみたい相手はいますか？

ロジャース　今回はヒョードルとの試合のために、3カ月間トレーニングを積んできたんだが、試合のことだけにフォーカスして挑むのはじつはこれが初めての経験だった。俺はもうフルタイムのファイターで、ロークラスの選手でもない。いまは誰でもいいから、ベストのファイターと闘いたいと思っているんだ。ストライクフォースのヘビー級チャンピオンであるアリスター・オーフレイムとの試合には、とくに興味がある。彼がもしアメリカに来られないのであれば、こっちからオランダでも、どこへでも出ていくつもりだよ。

――ストライクフォースと提携関係にある、日本のＤＲＥＡＭには興味はありますか？

ロジャース　ストライクフォースからそういう話があれば、ぜひ上がってみたいね。それこそ、ＤＲＥＡＭはアリスターの主戦場の一つでもあるから、日本で彼と闘えたら最高だ。

――では、これからの目標を聞かせてください。

ロジャース　今日の試合はＭＭＡで10連勝したあとの最初の一敗だった。でも、今日の結果は恥じてはいない。いままでタイヤ修理工のワーカーだった俺が、世界最強を競う試合をするファイターへの飛躍してきたんだ。今回の負けは俺をより強くするはずだし、もっとトレーニングを積んで、ベストのファイターになりたい気持ちがより強くなった。そのためにも、すぐにでもトレーニングを再開するつもりだよ。

――ロジャース選手の今後に期待してます！

【09年11月7日／米国イリノイ州シカゴ郊外、シアーズセンターにて収録】

BRETT ROGERS■1981年2月17日、米国ミネソタ州ミネアポリス出身。06年にＭＭＡデビュー。その後、エリートXC等で活躍し、今年6月アンドレイ・アルロフスキーを1R KOで下し名を上げた。196cm、120kg。

世界のTKプロフェッショナル解説

ヒョードルはなぜ苦戦したのか!?

**恒例のTK解説、今回のお題はもちろんヒョードルの試合!
衝撃のKO勝ちを収めたヒョードルだが、1ラウンドの危ない場面にヒヤッとした読者も多いはず。
そこで、ヒョードルはなぜ苦戦したのか、さらにあらためて知るヒョードルの強さについても語ってもらった。**

聞き手／高崎計三　構成／松下ミワ

ヒョードルの「あっちゃいけない」攻め

――ヒョードルvsロジャース戦はリアルタイムで観られましたか?

髙阪　はい、ネットの生中継で観ました。凄い時代になりましたよね(笑)。

――まったくです(笑)。で、試合の印象はいかがでしたか?

髙阪　強かったのは強かったんですけど、ちょっと「アレッ!?」と思うシーンもありましたね。まー、それはあとで話すとして、序盤ヒョードルが打撃でバーッと突っ込んでいって、いなしだけでロジャースを転がすシーンがあったじゃないですか。

――1ラウンド序盤でしたね。

髙阪　あっちゃいけないじゃないですか、そういうことは。

――あっちゃいけない?(笑)。どういうことでしょう?

髙阪　ちゃんと崩してタックルとかいうんじゃなくて、力だけで投げ飛ばしてるんですよ。しかも、15キロぐらい重い相手を。相撲でいう下手投げみたいな感じですよね。しかも横綱が格下を投げちゃうような。ヘビー級同士だと、スパーでもあんなことはないですよ。あのシーンを観たときどうしようもない差は感じましたね。

――モノが違う、と。

髙阪　ただ、1回目はそれで倒れて、2回目は倒れないからタックルに入ったんですよね。いままで、低いタックルにいくヒョードルというのは記憶にないですし、倒せなかったんだっていうのはちょっと意外でした。でも結局最終的には倒したんですけど。

ケージに対しては準備不足?

――初のケージという部分ではどうでしょうか?

髙阪　金網を使って試合をするという意識はまったくなかったと思いました。1ラウンド後半に十字を取りにいって、失敗してガードになったじゃないですか。

――十字にいったときは、実況が「コールマン戦と同じ技だ!」と言ってましたね。

髙阪　でも、あの場所で仕掛けても網が邪魔なのと、あと逆に相手に利用されちゃうんですよ。普通だったらあそこでは十字にいかないというか、もうちょっと網とのスペースを空けたり、逆に網を利用して立ち上がるとかしてると思うんですよね。

――金網対策を充分にしていたら。そのあとはピンチでしたね。

髙阪　十字に失敗してガードになって、顔面にパンチを落とされたというのも新鮮でしたね。仰向けになってパンチを打たれてる姿も、そうは見ないですよね。ちょっと調整不足というか、金網の中で試合することに対して準備不足という気もしないでもなかったです。

――それは意識的な問題でしょうか?初めてだけどなんとかなるだろうみたいな感覚もあったんでしょうか。

髙阪　そんな感じだったのか、焦って仕掛けちゃったか。

――1ラウンド、スタンドで金網に押し込まれたときに、網を使って反転するのではなく、前に突き飛ばしましたよね。

髙阪　はい。それも含めて、ケージの形状を利用して試合をする気はなかったと思いますね。

「ダメだこりゃ」と思ってしまったロジャース

――ロジャースについては、どんな選手だと分析しましたか?

髙阪　ボクは初めてロジャースの試合を観たんですけど、最初にいなされただけで倒されちゃったという部分で、たぶん「ダメだこりゃ」というか、「へたに攻めるとまずいぞ」という意識になったと思います。だから打ち合ってなかったですよね。2ラウンドにヒョードルが網に釘づけにしてラッシュをかけたときもガードを固めて、一切返してませんでしたから。「どうしようか……」と思ってたんじゃないのかなあ。

――でも序盤に鼻を直撃したロジャースのパンチはドンピシャでしたよね。

髙阪　そうですね。ジャブでした。でもそのあとは、「攻めてるヒョードルに頑張ってるロジャース」というふうにしか見れなかったですね。

――1ラウンドに関して言えば十字だったり肩固めだったり、あんなに勝機を逃すヒョードルって初めて見た気がするんですが。

髙阪　確かに。たぶん、ロジャースのほうがファーストコンタクトのあと「やるぞ」じゃなくて、「どうやったら負けないか」になっちゃって攻めていけなかったと思うんですよね。ディフェンスや距離をはずして逃げることや、スタミナの回復とかには重点を置いて一生懸命やってました。だからでしょうね。そしてそれによってヒョードルも少しバテてたかなと思いました。

ですけど。

を利用して試合をする気はなかったと思

一度手の骨を折ってるのに、普通あんなにおもいきり打てないですよ

ヒョードルの歯車は狂いかけていた？

——ロジャースも逃げるのにスタミナを使いはたしちゃった感じでした。

高阪 それでヒョードルも逃げる相手をなんとかしようとしてて疲れちゃったのかなあ、と。スタンドから寝ているロジャースに飛び込んでパウンドを打ったのも、勝ちを急いでいるのかなと思いました。網に邪魔されたりとかリングの感じと違うというところで、若干歯車が狂いかけてたのかもしれないですよね。でもね、それでも出だしのところで頭を押さえてますからね。……イヤですねえ、ああいうのは。

——イヤですか（笑）。ロジャースのデカさを持て余した感じはないですか。

高阪 どうかなあ。当たらないパンチは多かったですよね。一回当たってそのあとが空振りとか。そういう点を見ても、歯車が狂ってた感はあったかもですね。

——負傷の影響は？

高阪 カットを気にするタイプじゃないと思うんですよね。淡々と、「あ、切れたの？」という感じで。流血してるヒョードルはちょっと新鮮でしたけどね。もう全部、そういう方向でしか見れないんですよ（笑）。まあ、とにかく強さはあいかわらずでしたね。歯車が狂ったというか、ちょっとリズムがおかしくなってしまったとき、普通はそこからなかなか修正できないものなんですよ。でも、ズルズルいって判定になったり、突然ガス欠して動けなくなったりすることはなかったですから。

フィニッシュは「ロシアンフック」なのか？

——2ラウンドにはラッシュをかけましたが、あまり当たってなかったですよね。

高阪 ガードの上からでしたからね。ただ、ロジャースがまともな神経の持ち主だったら、ガードしてた腕がしびれておかしくなってるはずですよ。

——腕殺しですか！

高阪 ガードの上からでもあれだけ食らえばね。ヒョードルのパンチはメチャクチャ痛いんで。あのあと、ロジャースはあからさまに手が下がってましたから。ガードしてた腕が効いちゃったのかもしれないですね。

——そしてフィニッシュのパンチになるわけですが、ストレートかフックか判別が難しいパンチだったと思うんですが。

高阪 ヒジがちょっと返ってるんでフックではあるんですが、でもあれは「突き」ですよね。モーションがないんですよ。アルロフスキー戦のフィニッシュとまったく一緒だし、シルビア戦でちょっとガクッといかせたのもそうでしたね。

——ボクシングでいうオーバーハンドというのとも違うんでしょうか？

高阪 違いますね。「突き」ですよ、やっぱり。総合のヘビー級の選手であんなパンチが打てる選手はほかに見たことないです。それに一度手の骨を折ってるのに、普通はあんなおもいきり打てないですよ。

——あれはロシアンフックなんですか？

高阪 いやぁ～……ロシアンフックってなんなんでしょうね？（笑）。ボクもよくわからないんですけど、とにかく彼のはオーバーハンドみたいに外側から出るんじゃなく、身体と同時に腕が出てるんですよね。それでヒジが返っていて、身体と一緒にねじ込むようなものなのかなと思うんですけど。「1、2」じゃなくて、「1！」で打ち込む。

——だからみんな食らっちゃう、と。

高阪 しかも今回のはアゴでしたからね。殴られた側の話としては、効くのと痛いのと両方なので、あれは凄く腹が立つんですよ（笑）。ロジャースやアルロフスキーはアゴにもらったからきれいに倒れたけど、あれを頭のてっぺんに打ってきたりするんです。そんなとこに打ったら拳が割れちゃうから、普通はおもいっきり打てないはずなんですよね。だけどおもいっきり打ってきて、しかも拳がスレッジハンマーみたいに固い。何か、中学生が先生に「何やってんだおまえ！」って頭を殴られてるような感じなんです。

——まさにゲンコツ食らう感じ（笑）。

高阪 だから倒れるポイントじゃなくても、どんどんこっちのスタミナがなくなっていく感じなんですよね。身体がしびれて、だけど痛いからムカつく（笑）。負けたほうの肩を持つわけじゃないけど、「あれはしょうがないよ」って言ってやりたくなりますよね。

ヒョードルはまだ強くなる！

——結局、全体的に見たらヒョードルの「苦戦」ですかね。

高阪 苦戦だと思いますよ。アルロフスキー戦のときとはまた違って。あのときは、アルロフスキーに光を消す闘い方をされたんだけど、最後に彼自身が勇み足をしちゃって食らっちゃった。今回はヒョードルが自分から攻めてはいるんだけど、ちょっとずつ歯車が狂いかけたというか。

——ヒョードルももう33歳ですけど、衰えではないですか。

高阪 そうではないと思いますけどねえ。衰えてきてる選手が打てるパンチじゃないですから。ただトップで勝ち続けてる選手って、迷いというか、自分の内面を見つめだしたりする時期があるんだけど、そういう時期なのかなあ。でも、勝っちゃったからなあ（笑）。よっぽど精神力が強いのか……。それか、何も考えてないか。

——両方な気もしますが（笑）。

高阪 そういう意味では伸びしろがあるとも言えますからね。まだ強くなりますよ。でも強くなりすぎちゃって、もう闘う意味のある相手がいなくなってきてますよね。お客さんももう、「ヒョードルが見られてうれしい」という時期でもなくなっているというか。

——あとはブロック・レスナーぐらいしか……。

高阪 あ、いましたね（笑）。レスナー戦は観たいなあ。それが実現したら、現地で観たいですね。パンチの音とかも聞こえるような状況で、ぜひ観戦したいと思います。

【09年11月9日／都内・アライアンスジムにて収録】

STRIKEFORCE

C
EMMA

11月上旬のシカゴ郊外には、
かつて日本でも感じられた独特の熱気が漂っていた。
皇帝ヒョードル、ケージ初参戦。舞台はストライクフォース。
帝国UFCを猛追せんと、新興プロモーションが誕生しては消えているが、
ストライクフォースは着実に成長を遂げている。今回のビッグイベントは、
全米4大ネットワークの一つ、CBSがバックについて初めてのものとなる。
その大会から見えたものは——かつてのMMAの首都——
理想の日本格闘技の姿そのものだった。

文／橋本宗洋　写真／Esther Lin（STRIKEFORCE）

11.7 ストライクフォース シカゴ大会現地レポート

USAから見えた
JAPANESE M

シカゴは、映画好きにとってはたまらない場所だ。
最近でいえば『ダークナイト』が撮影された街であり、僕の世代にはケビン・コスナーの『アンタッチャブル』が忘れられない(クライマックスの階段での銃撃戦は、シカゴ市内のユニオン・ステーションで撮影された)。それになんといっても『ブルース・ブラザーズ』。ロケ地を回ってるだけで一日じゅう楽しめる。
それにまあ、海外っていったら買い物だ。僕も日本人なので、外国に来ると買い物をしないと落ち着かないというか、やたら物欲が湧いてくる。日本にいるときはまったく興味なかったアバクロなんて覗いてみちゃったりして。ブルース・ブラザーズのダン・エイクロイドが経営するライブハウス&レストラン『ハウス・オブ・ブルーズ』のグッズコーナーでは周りがあきれるくらいの勢いで買い物させてもらった。
だが、そういったことにまったく興味を示さない人間もいる。ほかならぬ青木真也だ。この男、ホンットに格闘技のことしか頭にないのである。到着当日。まずは市内観光でも、ということになって街に出たのだが、青木はあからさまに手持ちぶさた。何かやりたいことはあるかと聞かれると「ん~、格闘技が観たいっす」。
青木が唯一、行きたいと言ったのはスーパーマーケット。「こっちの人が普段どんなもの使って、何食べてんのか知りたいっすね」と言う。これはなかなか通な旅行者の姿じゃないか。と思ったら、さんざん吟味した結果、買ったのはプロテインバー一本だけ。「値段も安いしプロテインの含有量も日本のより多い」と満足げだったのだが、まあ不思議な男である。
そんな青木が、アメリカで見たものの中で初めて目を輝かせたのは公開計量の様子だった。ファブリシオ・ヴェウドゥムを見ると「うわ、デケェ! デカくなってないっすか?」。さらにジェイソン・〝メイヘム〟・ミラーとジェイク・シールズを比較して「いまの時点ではシールズのほうがデカいんですけど、それは水分を抜ききらずにリミットをクリアしてるからなんですよ。きっと明日になったらメイヘムのほうがデカいはず。ってことは……」と次々に選手たちの仕上がりを分析してみせる青木。完全に水を得た魚なのであった。

I could see JAPANESE MMA from USA.

あるいは、ホテルのロビーで雑談していたときのこと。同じホテルにレナート・ババルが泊まっていることを聞くと「マジっすか!? オレ大ファンなんすよ!」と凄まじく興奮。ホテルの庭でコーヒーを飲んでいるババルを発見するとテンションはさらに上昇し、一緒に写真を撮ったときには、これ以上ないってくらいの笑顔を見せたのだった。いわく「すげぇ~。オレもう格闘技やめてもいいわ」。ダメに決まってるわけだが。
青木がアメリカに着いてまず気にしていたのは「みんな、オレのこと知ってるんですかね?」ということだった。僕は「そりゃあ知ってるでしょう」と答えたのだが、実際には「知ってる」なんてレベルじゃなかった。
公開計量の会場に青木が姿を現わした瞬間、アメリカのMMAファンは騒然。「エイオ~キ~!(AOKIをアメリカ人が読むとこうなる)」の声が押し寄せ、サインだ握手だ写真だでなかなかステージまでたどり着けないような状態だったのである。どう控えめに言っても「大人気!」だ。
その翌日(大会当日)、会場に向かう前にショッピングモールに立ち寄った際も、ファンから写真をせがまれていたんだから人気はホンモノである。しかも声をかけてきたのは二十歳そこそこと思われるギャル。「大ファンなのぉ♥」って感じでミーハーっぽいんだが、そのミーハーファンが写真をせがんでいるのが、アメリカでは一度も試合をしたことのない青木なんだからクラクラする。
青木と写真を撮ってご満悦の彼女に話を聞いてみると、青木の試合は全部観ているとのこと。
「やっぱり試合がおもしろいし、ライト級が一番好きなカテゴリーだし」
そ、そうですか。カテゴリーとか言っちゃいますか……。これ、逆パターンを考えてみたらありえないくらいのことじゃないだろうか。たとえばジェイク・シールズがDREAMを視察に来て、大宮あたりのショッピングモールで女性ファンにキャーキャー言われたりするだろうか。そのファンが「やっぱり一番レベルが高いのはウエルター級でしょ」なんて言うだろうか。
ちょっとこれは大変なことになっていると思い、大会会場のシアーズセンターでも何人かの観客に話を聞いてみた。シンヤ・アオキのことを知っているかと聞くと、全員が「もちろん知ってるよ」。MMAニュース番組でも試合が取り上げられているし、動画をチェックすることだって簡単だから、ということらしい。
もちろん、MMAの頂点はUFCだ。でも、MMAイコールUFCってわけでもないらしい。UFCのブームはMMAのブームにつながり、ネットで細かい情報をチェックするファン(マニア)を激増させた。「ライト層の取り込み」なんてことがよく言われるが、少なくともアメリカで会場に来るくらいのファンは、それなりにマニアだってことなんだろう。そして彼らにとっては、シンヤ・アオキもインターネットなどで「よく知っている」選手なのだ。
ライブで観たことこそないが、それを言ったらUFCだってライブで観る機会はそう多くなく、PPVやネット映像で観るファンのほうが多いだろう。「情報は入ってくる」、「テレビもしくはPCのモニターで観るファイター」という点では、アメリカのファンにとってジョルジュ・サンピエールもシンヤ・アオキもMMAファイターとして同じステージにいる人間。それほど区別されることなく、評価の対象になっているということだ。
にも言わない。
さらに青木は、文句を言われないのをい

「日本だから」「アメリカだから」という垣根をアメリカは作っていない

ど区別されることなく、評価の対象になっているということだ。

こういうことは、まあ頭ではわかっていた。でも、実際にアメリカに行き、そこでサイン攻めに遭っている青木の姿を見ると実感度合いがハンパじゃない。DREAMは、そして青木真也の試合は、確実にアメリカのMMAファンに知られているし、興味を持たれている。ここ数年、なんとなく日本はアメリカを特別視して「仰ぎ見る」感じになってしまっていたが、アメリカではまったくそんなことはないのだ。日本を見下してはいないし、「日本だから」「アメリカだから」という垣根も作っていない。

あたりまえすぎる感想かもしれないが、世界はつながっている。まあ、アメリカのファンがDEEPの結果まで気にしているかどうかはわからないが、少なくとも青木のことはみんな知っていて、大好きなのだ。青木の活躍、彼のやってきた試合は、日本とアメリカを確実にリンクさせているということだ。

さて、その〝日本を世界につなげる男〟青木はというと、ファンの反応に驚きつつ、それにはすぐさま慣れてしまったらしい。公開計量の会場では自分の人気ぶりよりもメイヘムやシールズの仕上がり具合に意識が向く。それが青木らしさってもんだろう。『ストライクフォース』のスコット・コーカーCEOにリクエストされて壇上で挨拶を行ない、またしても大歓声で迎えられると（これだけでも相当に凄いことだ）、今度はアリーナへと降りていく。設営中とのことで取材班がケージに近づくのは許されなかったのだが、青木はかまわず前進。で、スタッフも青木のことは知っているから、特別扱いでスルーしてくれる。ケージに近づいていっても、誰もなんにも言わない。

さらに青木は、文句を言われないのをいいことにケージの中にも突入！　金網にバウンドしてみたり、シャドーしながらマットの感触を確かめたりと、かなり長い時間ケージを味わっていた。あとで聞いてみると、実際にここで闘うことになったときのためにいろいろと確認していたらしい。

ケージの中の青木。しかもアメリカ。これがじつに新鮮でイイ光景なのだ。青木自身は「敵地」を現実問題として捉え、こっちは「画になる光景」として見ていたという違いはあるが、ここでまた一段階、日本とアメリカのつながりが太くなった気がした。

大会そのものも、日本とアメリカのつながりを濃厚に感じさせるものだった。この大会は全米4大ネットワーク（地上波放送）の一つであるCBSで生中継されたビッグイベントなのだが、そこに日本のファンにもおなじみの選手が大量に登場していたのだ。

メインイベントはエメリヤーエンコ・ヒョードルvsブレット・ロジャース。セミはジェイソン・〝メイヘム〟・ミラーとジェイク・シールズのミドル級タイトルマッチ。それにゲガール・ムサシvsソクジュ（幻のスーパーハルクトーナメント準決勝！）があり、さらにファブリシオ・ヴェウドゥムvsアントニオ・シウバ。中継枠には入らなかったが女子マッチとしてマーロス・クーネンvsロクサン・モダフェリ戦もあった。

スコット・コーカーCEOに話を聞いてみたところ、このマッチメイクは「とくに日本のファンを意識したってわけじゃない」らしい。『ストライクフォース』の地上波デビューのためにいいカードを並べたら、こうなっただけということなのだ。

逆に言えば、日本のファンにもおなじみの選手たちの試合が、アメリカでもしっかり「全米地上波放送向けコンテンツ」になっているということだ。ファンもそれに反応している。会場はギッシリ満員。1万2000枚のチケットが、大会2日前の時点で「98パーセント売れている」という公式発表もあった。

正直なことを言えば、僕自身は記者会見、計量、大会と取材していて、いつものような「海外に取材に来ている」という感じがしなかった。たとえばUFCに日本人選手が出場して、その取材に行った場合は完全に「外に出てる」という感覚があるのだが、今回はそうでもないのだ。いい意味で微妙な感じ、とでも言えばいいのか。

会見の席上でアメリカ人の記者に質問されたり、計量や試合の場でファンの大歓声を浴びているのが、僕がよく見知った選手ばかりなのである。実際に日本でインタビューしたことのある選手も多い。そういう選手たちが、アメリカのビッグイベントで試合をしている。アメリカのファンを熱狂させている。へんな表現かもしれないが「おまえら、凄かったんだな！」と思ってしまったというか。

いや、それはもちろん凄いに決まってるのだが、僕たちが日本であたりまえに見ていたメイヘムやムサシが〝ワールドクラス〟なのだと、アメリカであらためて気づかされたのである。

実際、彼らが繰り広げた試合は素晴らしいものだった。どの試合も一進一退。ヴェウドゥムvsシウバは、やや地味な展開だったものの、そのテクニカルな攻防はヘビー級のイメージを軽く超えるものだったと思う。ソクジュの攻撃を落ち着いて返しながら、最後はパウンド連打で仕留めたム

日本の試合にも注目し、彼らにとっては青木真也もスター、あるいはアイドルになっ

サシの爆発力と成長ぶりもインパクトがあった。

シールズvsメイヘムは〝ザ・アメリカンMMA〟とでも言うべき内容だった。シールズのしつこいタックルとパスガード。それを切り返し、バックチョークで一本を取りかけたメイヘム。手に汗握る攻防とはこのことだろう。その密度で言えば、年間ベストバウト級じゃなかったか。階級を上げて臨んだ試合で実力を出しきり、メイヘムとフルラウンド闘って勝利を得たシールズの強さには本当に感服させられた。

そして興奮のピークはヒョードルvsロジャースだ。序盤のパンチ一発で鼻から出血したヒョードルは、優勢に試合を進めながらもアームロックを仕掛けたところで体勢を返され、パウンド連打を浴びてしまう。ひさしぶりに迎える、そしてアメリカのファンは初めて目の当たりにするヒ

今回のストライクフォースは、「海外に取材に来ている」という感じはしなかった

I could see JAPANESE MMA from USA.

ョードルのピンチらしいピンチに、場内のボルテージも上がりまくる。そうやって盛り上がるだけ盛り上がって、最後はヒョードルの芸術的な右ストレート一発。

「皆さんの応援のおかげで勝てました。これは〝私の〟勝利ではなく、〝我々の〟勝利です」

ヒョードルの勝利者インタビューも、どことなくテンションが高い。劇的、かつ完璧なエンディングだった。

もしかすると、僕が受けた大会の印象と、日本でネット中継を観た人のそれはだいぶ違うのかもしれない。やっぱり会場で観たら、試合そのものだけでなく観客の〝熱〟という要素も加わるわけで、しかもその〝熱〟がアメリカのファンは異様なのだ。

といっても、日本と比べてどっちが上かという話ではない。質が大きく違うということだ。日本のファンが、演出も含めた大会全体を〝観賞〟している感じなのに対して、アメリカのファンは能動的に〝大会の一部〟になっている。

たとえば、この大会は中継のタイムスケジュールに合わせるためなのか、試合ごとに微妙な間が空いていた。試合終了から判定結果が読み上げられるまでの時間にスポンサーのCMが流されたりもする。その前に前座の試合開始は午後6時からで、5時50分に第1試合が始まってしまったら、グッズ売り場でTシャツを買おうとしていあわてて記者席に戻ったりもした。

だからまあ冷静に見れば完全にグダグダなのだが、観客もそれにつられてグダグダになることはなかった。いざ試合が始まれば、信じられないくらいに熱狂する。ジェイク・シールズのねちっこいグラウンド・コントロールにはブーイングも起こったが、それも含めて観客たちが自ら大会に起伏を作っている感じだ。

日本のファンは、たぶん同じ展開になってもシールズの寝技をじーっと見守っているんだと思う。こういう見方は、まさに〝違い〟でしかない。シールズの闘い方に対して〝ブーイングをしてまで盛り上がる〟のと〝じっくり見守る〟ことに、レベルの違いはないんじゃないか。

こういう部分でも、今回は単なる海外取材とは感覚が違ったのである。日本でも見たことのある、よく知っている選手が大量に出場していたからこそ「アメリカンMMA最高！ それに比べて日本は……」という、単純なアメリカ崇拝にはならなかった。

確かに、MMAの最高峰はアメリカであり、UFCだ。でも、今回の『ストライクフォース』はUFCに劣らないくらいレベルの高い試合が続出していた。一方で最高峰を体感しているアメリカのファンは

ートダウン』で人気者になったメイヘムがそういう役割なのかもしれないが、メイヘ

日本の試合にも注目し、彼らにとっては青木真也もスター、あるいはアイドルになっている。また試合の見方、盛り上がり方に違いはあるが、それは観戦レベルの差ということではない。アメリカのファンも、シールズのパスガードにまで熱狂しているわけではないのだ。

青木も、大会を見終えた感想として「試合のレベルはメチャクチャ高いですけど、ファンとか演出とか、大会全体は日本も負けてないっすね」と語っている。

「シールズにもブーイングが飛んでましたしねぇ。あんなに凄いのに。まあ、僕は僕で日本を盛り上げようって気になりましたよ。やりたい選手と闘えるならアメリカで試合することもあるでしょうけど、アメリカを主戦場にするとか、移り住むとかってことじゃないっすね。日本も充分いけますよ」

青木も、アメリカと日本の、MMAにおける〝地続き感〟を肌で感じたんだろう。日本でしか試合をしていないのに、アメリカのファンは自分のことを知っている。驚くくらい評価されている。だったら、日本で勝負できる。アメリカに行ったからこそ、自分が〝世界と向き合う日本人ファイター〟であることに自覚的になったということかもしれない。

ただ、僕が日本とアメリカで大きな差を感じたことが一つだけある。この大会は地上波生中継だったのだが〝飛び道具〟がなかったのだ。CBSサイドからは「ジーナ・カラーノは必須」といった要求もあったようなのだが、最終的なマッチメイクは実力と実績がネームバリューに直結したもの。『エリートXC』にはキンボ・スライスという〝飛び道具〟がいたが、今大会にはいなかった。MTVの番組『ブリー・ビートダウン』で人気者になったメイヘムがそういう役割なのかもしれないが、メイヘムは人気とパフォーマンスと実力のバランスがとれた選手だ。

もしかすると、CBSサイドからの評価は低いのかもしれない。スコット・コーカーが「もっと話題性のある選手はいないのか」「結局ジーナはどうなるんだ」とプレッシャーをかけられていた可能性もある。だが、ともあれ大会は成立し、ファンは熱狂していたのである。試合を観ながら「これ、マニアックすぎないか？ 視聴率、大丈夫か？」なんて一瞬も考えなかった。

そして、繰り返すがそういう大会の主要メンバーは、日本で活躍してきた選手なのだ。DREAMとの提携によって、彼らが再び日本で試合をする可能性もある。ムサシは、大会翌日のファンイベントでアメリカのファンから次の試合の予定を聞かれ「日本の大晦日か1月のストライクフォース」と答えている。

もしかすると、この大会とまったく同じ、あるいは遜色のないレベルのマッチメイクを、日本でも実現できるかもしれないのだ。「地上波だから」「一般ファンに向けて」なんてことを考えず、格闘技の魅力だけで勝負することも不可能ではないかもしれないのだ。そのために乗り越えなければならない壁が存在するのは確かだが、〝実例〟はもうある。それも、日本とは別次元ではない〝地続き〟のアメリカに。青木が考える「充分いける」日本の大会もそういうものだろうし、その言葉には「そういう大会を日本で作っていかなきゃいけない」という思いが込められていたはずだ。

僕がシカゴでみたのは〝遠く離れたアメリカの大会〟ではなく〝理想のジャパニーズMMA〟だったような気がしてならない。

――UFCのダナ・ホワイト代表が「ダン・ヘンダーソンはストライクフォースと契約した」と発言し、驚いているのですが、ダナの発言は本当なんですか?

ダン いや、まだストライクフォースとはカジュアルな話をしただけで具体的な話はしてないし、当然契約書にサインなんかしてないよ。それにUFCとの話し合いが終わったわけじゃないんだよ。

――そうなんですか!? じゃあ、ダナはなんであんな発言を……。

ダン まあ、おそらく俺に対する駆け引きなんじゃないかな。「ストライクフォースに行くならどうぞ」ってね。実際、俺のことをストライクフォースもCBSも興味を持ってくれているんで、検討しても悪くないんじゃないかと思ってる。俺にとってはUFC以外にもオプションが増えたということなんだよ。UFCとは交渉というより、条件を提示されただけで、この条件を「飲む」か「飲まない」かの二者択一で交渉も何もない状況なんだ。これはMMAがUFCの独占市場になっていた弊害だと思うね。

――UFCが提示する額に納得しなかったら、去るしかないという、あまりにプロモーター側が強すぎる現状があるわけですね。

ダン そうなんだ。こんな状況はプロスポーツとして健全な状況とは言えないよ。だから、ストライクフォースが大きくなってくれたことは、ファイターにとって非常にいいことだと思う。

――今回、あなたの要求額とUFCの提示額にはかなりの差があったわけですか?

ダン そんなに大きな差ではないよ。UFCからのオファーも悪いものではないけれど、自分が期待している額とは開きがあるんだ。それがいくらかは言えないけ

UFCと契約更改交渉難航!
渦中のダンヘンを
ストライクフォース会場で直撃!!

UFC離脱濃厚!! ストライクフォース参戦か!?

Dan Henderson

ダン・ヘンダーソン

「UFCのやり方は交渉の余地すらない」

UFCとダンヘンの契約更改が難航している。
ダナ・ホワイトはすでに「ダンはストライクフォースに行くだろう」と発言するなど、
移籍は時間の問題と見られているが、ダンヘン自身はどう考えているのか？
ソクジュのセコンドとして訪れたストライクフォースの会場でダンヘンを直撃した。

聞き手／Matthew Rock　撮影／Josh Hedges（UFC）　構成／堀江ガンツ

Photo:Esthe Lin

ソクジュのセコンドとして、11.7ストライクフォースシカゴ大会の会場に現われたダンヘン。時期が時期だけに、さまざまな憶測を呼ぶこととなった。はたしてダンヘンのストライクフォース参戦、さらに日本マット再登場は実現するのか？

けれど、自分が期待している額とは開きがあるんだ。それがいくらかは言えないけどね。

――それは、UFCがあなたをそこまで高く評価してないということなのでしょうか？

ダン　それはダナに聞くべき質問だよ。どんな評価をしてるんだってね。

――あなた自身はPRIDE二階級王者、『TUF9』のコーチ、マイケル・ビスピン戦での勝利などが、契約に反映されてなかったと感じていますか？

ダン　まず、『TUF9』のコーチをするために、多くの時間を割いたことは事実だね。それらがどのような評価をされて今回のオファーになったのかはわからないし、それらが反映されているかどうかもわからない。なんせ交渉の余地がないような感じなんだからね。

――金銭面以外でUFCとのあいだに問題はありませんでしたか？

ダン　細かいことまで言えばいろいろあるよ。『UFC100』でのマイケル・ビスピン戦後のプレスカンファレンスでは、俺とアンデウソン・シウバを闘わせるって発

で倒すこともできるし、またはテイクダウンしてパウンドを落とすやり方でもいいね。まあ、どのポジションであっても殴り

ルニア州出身。
アトランタと
グスKOKトー
に冠王に輝く。
cm、84kg。

てきたファイターだし、日本で試合をすることは好きだからね。

してるのかい？　彼もけっこう年齢がいってるのに頑張るね。俺より年上の人間

Dan Henderson

CBSの視聴者数はUFCの番組視聴者数より多いのが魅力

表したはずなのに、実際はビクトー・ベウフォートにアンデウソン戦のオファーをしたりね。「なんだそりゃ」って感じだよ。まあ、これはそんなに大きな問題ではないけど、問題の一つではあるね。

——では、UFCがアンデウソン・シウバ戦をオファーしてきたら、再契約するのでしょうか？

ダン　アンデウソンと再戦することには興味があるけど、それはもちろんファイナルシャル的な面も考慮してもらわないとね。偉大なチャンプである彼との試合なんだから、それ相当の金額にならなければおかしいだろう？

——プロとしてはあまりにもあたりまえのことですけどね。あなたはアンデウソン・シウバとの再戦を再三訴えていましたけど、それはあの無敵のチャンピオンに勝つ自信があるからなんでしょうか？

ダン　もちろん。勝てない相手との試合を熱望するなんておかしいだろう？　彼を倒すのは、俺しかいないと思っているよ。

——UFCでミドル級、ライトヘビー級の両方で〝便利屋〟的に使われたことについては不満ではありませんでしたか？

ダン　いや、そこに不満はないよ。階級をまたいで試合をすることは自分が望んだことだし、充分に満足している。両方の階級のチャンピオンとも闘えたしね。

——では、あなたがUFCに対して契約で強気に出られたのは、やはりストライクフォースという選択肢があったからですか？

ダン　そのとおりだね。実際、ストライクフォースという選択肢も悪くないんじゃないかって思ったからさ。ファイターはすべての面でプロモーターの言いなりになる必要はないんだ。

——ストライクフォースのどこに興味を持ちましたか？

ダン　やはり全米4大ネットワークのCBSや、大手ケーブルテレビ局のSHOWTIMEがスポンサーになっていることは興味深いことだよ。CBSやSHOWTIMEのネットワークの視聴者数はUFCのそれよりも多いんだからね。

——ストライクフォースで闘いたい相手はいますか？

ダン　とくに誰というのはない。それはUFCでも一緒で、チャンピオンになりたいし、それにつながる試合がしたいだけなんだ。

——ちなみにゲガール・ムサシについてはどう評価していますか？

ダン　ムサシは素晴らしい選手だよ。でも、俺はソクジュが倒してくれると信じている（このインタビューはムサシvsソクジュ戦の前に収録）。もし俺がムサシと闘うとしたら、リラックスしてストライキング

現在、WOWOWで放映中のリアリティショー『TUF9』で、アメリカチームのコーチを務めた。『TUF』のコーチで、さらに知名度を高めたダンヘンは、次なる目標として4大ネットワークCBSへの登場を目論むのか？

PRIDE活動休止後
ダン・ヘンダーソン
UFC全試合REVIEW

［08.3.1 UFC82 Pride of a Champion］
米国オハイオ州コロンバス・ネイションワイドアリーナ
×vs アンデウソン・シウバ
（2R 4分52秒 チョークスリーパー）
ミドル級に階級を下げたダンヘンは、ここでもいきなりタイトルマッチ。これもUFCとPRIDEの事実上の統一戦として行なわれたが、アンデウソンの圧倒的強さの前に完敗を喫し、無冠となった。

［07.9.8 UFC75 Champion vs. Champion］
英国ロンドン・The O2
×vs クイントン・“ランペイジ”・ジャクソン
（5R終了 判定0-3）
UFC初参戦でいきなりランペイジの持つライトヘビー級王座に挑戦。このときダンヘンもPRIDEの同階級の王者であったため、事実上の王座統一戦となったが、僅差の判定負けを喫した。

ハレス

ストライクフォースではミドル級から
ヘビー級までどの階級で問題ないよ

で倒すこともできるし、またはテイクダウンしてパウンドを落とすやり方でもいいね。まあ、どのポジションであっても殴り倒すだけさ（笑）。

――では、ジェイク・シールズやジェイソン・"メイヘム"・ミラーとの対戦には興味はありませんか？

ダン　さっきも言ったように、誰と対戦したいとか、そういう気持ちはまったくないんだよ。誰が来ても殴り倒すだけだからね。

――もし、ストライクフォースと正式契約を結んだら、ミドル級とライトヘビー級のどちらを希望しますか？

ダン　マッチアップ次第だね。ファンが一番エキサイトする階級で組んでほしい。俺自身はミドル級からヘビー級まで問題ないからね。

――ヘビー級でも大丈夫ですか！

ダン　ああ！　なんならエメリヤーエンコ・ヒョードルへの次の挑戦者でもいいくらいさ（笑）。

――確かにPRIDEでは、アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラと対戦したりもしてますもんね。

ダン　だから、どの階級でも俺自身は問題ない。一つ要求したいのは、階級はどこでもいいからビッグファイトを組んでくれっていうことだけだね。

――もし、ストライクフォースと契約したら、日本マット再登場の可能性も出てきますが……。

ダン　もちろん、可能であれば日本で試合をしたいよ。俺は日本でキャリアを作ってきたファイターだし、日本で試合をすることは好きだからね。

――今年の大晦日に電撃出場とかしてほしいですけどね（笑）。

ダン　そういう話はないけれど、ちゃんとオファーがあれば可能性はあるかもね。でも、大晦日まではあまり時間がないから、現実的にはちょっと無理かな。

――あ、もう時間的に無理ですか。日本では2週間前のオファーとか平気でしてるんですけどね（笑）。さっきの質問とかぶりますが、日本の団体と契約しているで興味がある選手というのはいませんか？

ダン　興味以前に、いまどんなファイターがいるか知らないんだよ（笑）。俺もずいぶん留守にしてしまっているからね。

――たとえばミドル級だと桜庭和志選手なんかがいます。

ダン　へえ、サクラバはまだ現役で試合をしてるのかい？　彼もけっこう年齢がいってるのに頑張るね。俺より年上の人間がまだ頑張ってるなら、やっぱり俺ももっともっと試合をしていかないとな（笑）。

――では、今後のプランを聞かせてください。

ダン　今後については、まず契約問題をクリアにしないとね。いまのところUFCかストライクフォースというのがベストの選択になると思う。数週間のうちには結論を出す予定だよ。

――今後UFCを離脱して、ストライクフォースに戦場を移す選手は増えていくと思いますか？

ダン　もちろんそういうファイターは現われると思う。さっきも言ったとおり、いまのUFCの態度は彼らが提示したオファーを受けるか否かだけで、まったく交渉する余地もないんだ。今回の自分の状況がまさにそれだしね。ただ、ストライクフォースの成長によって、もう一つ選択肢ができたし、こういったオポジションができるということは、ファイターにとっても、ファンにとっても喜ばしいことだし、MMAというスポーツが発展していくうえで重要なことだと思うよ。

――では、しばらく離れている日本のファンにメッセージをお願いします。

ダン　日本のファンの前で試合をしていないのはとても寂しいよ。可能であれば、年に一度は日本で試合ができればと思っているんだ。これからの俺の進路は数週間のうちに決まると思うし、ストライクフォースと契約することになったら、提携しているDREAMへ参戦する可能性も出てくるから、楽しみにしていてほしいね。

［09年11月6日／米国イリノイ州シカゴ郊外、シアーズセンターにて収録］

DAN HENDERSON■1970年8月24日、米国カリフォルニア州出身。グレコローマンレスリング米国代表としてバルセロナ、アトランタと五輪に二度出場後、97年にMMAデビュー。2000年にリングスKOKトーナメント優勝し、PRIDEではウェルター級、ミドル級の二冠王に輝く。07年よりUFCに参戦。『TUF9』ではコーチを務めた。180cm、84kg。

[08.9.6 UFC88 Breakthrough]
米国ジョージア州アトランタ・フィリップスアリーナ
○ vs ホジマー・"トキーニョ"・ハルハレス
（3R終了 判定3-0）
連敗であとがないダンヘンは、"BTTの秘密兵器" トキーニョと対戦。ダンヘンは驚異的な極めの強さを持つトキーニョにテイクダウンを許さず、判定で上回り、UFC復帰後初勝利を挙げた。

[09.1.17 UFC93 Franklin vs. Henderson]
アイルランド・ダブリン州ダブリン・O2アリーナ
○ vs リッチ・フランクリン
（3R終了 判定2-1）
ライトヘビー級に転向した前ウェルター級王者フランクリンと、ライトヘビー級契約で対戦。ダンヘンはフランクリンの隙のない闘いぶりに攻めあぐねるも、スプリットの判定で辛勝。前王者を倒した。

[09.7.11 UFC100]
米国ネバダ州ラスベガス・マンダレイベイ・イベントセンター
○ vs マイケル・ビスピン
（2R 3分20秒 KO）
リアリティショー『TUF9』のアメリカチームvsイギリスチームのコーチ同士の対戦。ダンヘンは『UFC100』で組まれたこの大一番で、豪快な右フックで失神KO。あらためて存在をアピールした。

11.4〜11.9 米国イリノイ州シカゴ上陸!!

ストライクフォース ズンドコ旅日記

「シカゴは常に新しい血を求める」(映画『シカゴ』より)。
ヒョードルが初めてケージに入るという
記念すべき大会となった11.7『ストライクフォース』。
ヨーロッパ的な歴史を感じさせる街並みで
アメリカ商業の中心地として栄えるシカゴに
ライター・橋本宗洋さんと取材に行ってまいりました!! 文/坂井ノブ

ヒョードル、青木のほかにもいろいろありました!!

11.4 Wed 16:00 シカゴ・オヘア空港 松井MVP!!

いままでの出張はカリフォルニアとかネバダとか西海岸ばかりだったんですが、今回はカナダに近いミシガン湖岸の街・シカゴに初上陸です。あらかじめ寒いとは聞いてましたが、実際かなり寒い!! 着いたときには気温4℃! 今回は重量級ライター・橋本宗洋さんとの二人旅だったんですが、シカゴ在住の佐藤直子さんに通訳をお願いして、英語ができない僕らのヘルプをお願いしてました。レンタカーを借りて空港から30分のホテルにチェックインを済まして、さらに車で1時間かけてシカゴ市内で佐藤さんと合流。スポーツバーで飲んでたら、テレビでワールドシリーズの中継が。松井の打席がめぐってくるたびに打ちまくり、そのたびに歓声が起こる。日本人として非常に感慨深かったです。★

11.5 Thu 12:00 シカゴ・CBS 前々日記者会見

この日はシカゴ市街地のど真ん中にあるCBSのスタジオで実施された記者会見。昼時だから会見前にランチ(サンドイッチとソフトドリンク)も出されました。メインの4カードに出場する8選手と、前座試合に出場するマーロス・クーネンとロクサン・モダフェリが登場。カリフォルニアからやってきたメイヘムは「シカゴは寒い!!」と毛皮を着込んでハイテンション! 集まったマスコミ陣もメイヘムのパフォーマンスには大笑いしてました。会見前に流されたCBSのドキュメンタリー番組では、ヒョードルの故郷でのトレーニングや生活にも密着して興味深かったんですが、印象に残っているのはロジャースの紹介VTR。地元シカゴ南部出身で労働者階級から成り上がってきた男のストーリーです。日本にいるとロジャースの情報はあまり入ってきてませんでしたが、これはかなりグッとくる仕上がりでした。★

11.5 Thu 17:00 シカゴ市内 観光地ロケハン

11月6日に青木選手がシカゴ入りするということで、市内の観光地で撮影できたらいいなとあちこちロケハン。佐藤さんに教えてもらった地元スポットを次々と散策しました。ミレニアムパークにある銀色に輝く豆のかたちをしたオブジェ、シカゴ・ブルズの本拠地ユナイテッドセンターにあるマイケル・ジョーダンの銅像(タイトル写真参照)、ウィリス・タワー(旧名シアーズ・タワー)の103階から出窓のように突き出た透明ボックス、シカゴのダウンタウンを見渡す夜景などなど、短時間でいろんなところをドタバタとめぐってきました。結局、翌日に青木選手と行ったのは"豆"でした。★

11.6 Fri 12:00 シカゴ市内 青木選手シカゴ入り

この日の朝早くシカゴ入りした青木選手やDREAMスタッフの方々と合流してシカゴ市内へ。しかし時差ボケもきつそうなので観光もそこそこに名物を食べようということでシカゴ・ピザの店へ。しかし、ここで注文のボリュームを誤ってしまい巨大で分厚い生地のピザに四苦八苦。日本時間だと深夜〜早朝の時間帯なので確かにきつい……。しかし、この店で残されたピザはお土産用に包んでもらい、橋本さんが夜食でおいしくいただきました。★

11.6 Fri 17:00 シアーズセンター 前日計量

会場のシアーズセンターがあるホフマンエステーツという街はシカゴの中心から車で1時間という郊外にあります。ホテルから会場までは車で約10分なんですが、その道の真ん中には車にはねられたアライグマの死体が転がってたりとワイルドな環境です。さらに、会場周辺では本誌編集次長・松林が会場の外ではシカと遭遇するというおとぎ話のようなエピ

境です。さらに、会場周辺では本誌編集次長・松林が会場の外ではシカと遭遇するというおとぎ話のようなエピソードも。こんなところに誰が集まるんだと思ってたら、時間になると大勢のファンがわらわらと集まり開始時間には大熱狂!! 一番人気はもちろんヒョードルです。シカゴというとロスやベガスに比べてMMAにはなじみが薄い土地ですが、ロシア系や東欧系の移民がかなり多く、この土地での開催を希望したのはヒョードルだったとのこと。観客もロシアっぽい顔立ちのファンも多くて、「俺たちのチャンピオン!」といった感じの熱の入りよう。熱いです。MMAのマニアックなファンもいて、選手も丁寧にサインや記念写真に応じています。とはいえUFCの前日計量ほどオーガナイズされた感じのイベントではなく、あっちこっちで勝手にやってる感じ。計量で登場したソクジュのセコンドでUFC離脱が噂されるダン・ヘンダーソンが現われたときはどよめきも起こってました。★

道路の真ん中にアライグマの死体が転がり、シカが出現する会場で取材!!

11.7 Sat 18:00 シアーズセンター 大会当日

大会前まではあちこちで取材をしながら時間をすごし、いざ大会へ。会場に入ると売店ではTシャツが飛ぶように売れてました。18時試合開始といっていたのが、なぜか17時50分から試合開始という日本では考えられない進行でスタート。僕はケージサイドの記者席で速報を書きながら、『kamipro』のtwitterを更新などあわただしく作業に追われていたんですが、メイヘムの入場と、ヒョードルの試合だけは手が止まり目が釘づけに。ヒョードルのロシアンフックがガツンと入る瞬間をこの目で見て大興奮!! 日本の大会場で行なわれるMMAやK-1では客席と遮断されたプレスルームで速報作業をすることが多いんですが、このリングサイド記者席はぜひ日本でも導入してもらいたい!!(ただし無線LANと電源は必須)。アドレナリンが出て速報もスピードが上がるというものです。大会後の会見は3部構成で、メイン以外の選手が出てくる第1部、12月大会で復帰するカン・リーも登場した第2部、そしてヒョードルとブレット・ロジャースが登場した第3部という凄いボリュームでした。2年前に本誌で取材したときには映画出演のオファーが来てると言っていたベトナム系米国人カン・リーは、もはや映画スターで、その撮影の合間の大会出場になる模様。時の流れを感じました。★

11.8 Sun 12:00 選手ホテル 一夜明け取材

前日に大会が終わり、選手も関係者も続々と帰っていく中で、ヒョードルだけは翌日も残っていました。ファンとのランチミーティングというイベントが行なわれ、前夜の試合のイベントの映像を観ながら本人が解説するという豪華な内容でした。登場したのはヒョードルのほかにゲガール・ムサシとファブリシオ・ヴェウドゥム。すっかり自分の試合に見入って解説を忘れてしまい、ヒョードルに笑顔で突っ込まれるムサシといったホノボノした場面もありました。また、アントニオ・シウバに勝ったヴェウドゥムの映像をヒョードルがじーっと観ていたのが印象的です。我々はこのイベントの前後で青木選手とヒョードルの対談および表紙撮影をするという任務があり、朝からプレッシャーがかかってましたが、なんとか無事に終えることができました。自分が表紙を撮る、しかもホテルの外でのロケということで緊張はMAX。念には念を入れて橋本さんと佐藤さんで表紙の試し撮り。はためく星条旗と青空をバックに凛々しく決めていただきました。さて、その帰りに「スポーツ・オーソリティ」という日本でもおなじみの大型チェーン店に寄ったんですが、そこには格闘技コーナーがあり普通にUFCのオープンフィンガーグローブが流通しているという現実を目撃。最後の最後であらためて格闘文化の広がりを感じました。★

11.9 Mon 10:00 シカゴ・オヘア空港 帰国

帰りの便を待ちながら空港の外でタバコを吸って待っていると体重100キロぐらいのアメリカンガールがドタドタドタと奇声を上げながら全速力で目の前を走っていきました。何事だと思って走っていく先を見たら、ヒョードルとワジム代表が!! CBS地上波中継は全米で約500万人が観たということですが、ヒョードルもいままでとは違う段階に足を踏み入れたということでしょう。この次、ヒョードルがアメリカで闘うときにどんなフィーバーが起こるのか。あらためて楽しみです。

11.7 ストライクフォース"密航者"の証言アリ!

俺たちのやれんのか! 大晦日! 2009

～DREAM vs 戦極～

座談会

ヒョードルも凄かったし、ニッポンの大晦日も凄いことになってきた!
というわけで、今回の座談会はヒョードルvsロジャースが行なわれたストライクフォースから大晦日の噂話までを激語り。
DREAMvs戦極という"エサ"を蒔かれては、もう変態的妄想は止まりません!

聞き手／ジャン斉藤　写真／山口比佐夫、乾晋也、Esthe Lin（STRIKEFORCE）

座談会出席者

――松林さんはストライクフォースを観に、またアメリカへ行ってきたらしいですね。

松林 いやあ、あれは行くよね。

――海外へのフットワークが軽いわりには、自宅からそう遠くないはずの原タコヤキ君の結婚披露宴には「あ〜あ、行くのが億劫だなあ……」って、さんざんボヤいてたのに。

松林 タコヤキ君の結婚披露宴と、超絶頂期を迎えているアメリカのMMAを一緒にしてもらっちゃあ困るよ！ タコヤキ君夫妻とは比べ物にならないくらいアメリカMMAは熱さ全開だからね、しっかり観ておかないと。ところで日本での評判はどうだったの？

ガンツ やっぱり評判はいいですよ！ 今回はウェブで無料生中継してたので、観ている人数が普段のUFCより多かった感じですし。WOWOWに加入してなくてもパソコンさえあれば観られたわけですから、おそらく同日に日本で行なわれた『戦極〜第十一陣〜』よりも観てる人ははるかに多かったんじゃないか、と(笑)。

――ウェブの無料生中継は、公式発表で4万人が観たという発表ですね。

ガンツ しかも最初の放送だけで4万人だからね。翌日からも何度も観られるから、観た人間の数は膨大に膨れあがっているでしょう。

――現地の盛り上がりはどうでした？

松林 アメリカの大会でありがちな、メインカードの頃になると観客がドッと集まってくるという感じだね。スコット・コーカーが前日に「チケットは98パーセント売れた」と言ってたけど、その言葉どおり空席もほぼなかったし。

――それにしても、今回のストライクフォースは、どうしてあんなヘンピなところで開催したんですかね。

松林 今回の会場になったシアーズセンターはホフマンエステーツという、シカゴのダウンタウンから車で1時間くらいかかる場所だったんだけど、聞くところによるとシカゴってロシア系とウクライナ系とポーランド系の巨大コミュニティがあるみたいなんだよね。

ガンツ 巨大なヨーロッパコミュニティがあるらしいですよね。でも、ボクが聞いた話だと、それは偶然だって話らしいですよ。大都市の大会場を急きょ押さえようとしたら、もうあそこしか空いてなかったという。

松林 あ、そうなの？ でも、そのロシア系の巨大コミュニティがあるからヒョードル側はシカゴでやりたがったという話もあるよね。だから会場にもロシア系の観客は凄く多かった。メインイベントの観客の騒ぎ方なんて、「USA！」コールと「ロシア！」コールが飛び交って、完全に〝米ソ対決〟みたいな感じだったもん。

――この時代に冷戦構造が(笑)。

松林 ただ、ヒョードルの入場のときにはアメリカもロシアも関係なしに大騒ぎだった！

ガンツ いまやヒョードルはMMAの神様みたいな感じですからね。

松林 あと凄かったのは、アメリカのMMAの会場ってほとんど白人のお客さんばっかりで、黒人のお客さんってめったに見かけないんだよね。でも、試合後に会場の外へ出たら、ブレット・ロジャースを応援してた黒人の観客と、ロシア系の観客が殴り合いの大ゲンカをしてたんだよ(笑)。

ガンツ ガハハハ！ いいですねぇ(笑)。

――そういう話を聞くと、アメリカは絶頂期なんだってしみじみ思いますよね。Uインターと新日本の対抗戦で大会後にファン同士がケンカしてるのと同じじゃないですか(笑)。

ガンツ 日本でその熱をかろうじてたもってるのは、高谷軍団ぐらいですからね(笑)。

――それに今回のストライクフォースって、全米4大ネットワークの一つCBSで放送されたじゃないですか。こんなマニアックな大会を地上波放送するなんて、日本の感覚からすると考えられないですよね。

松林 でも、4大地上波の中では最低視聴率だったらしいもんなあ。

――いや、それは当然ですよ。だって、番組冒頭がアントニオ・シウバvsファブリシオ・ヴァウドゥムなんていう、ブラジル人同士の試合ですよ。まあ、かつての日本も大晦日にアレキサンダーvsナツラというロシア人vsポーランド人をやって、裏の矢沢永吉ライブに視聴率で圧勝した過去はあるんですけど(笑)。

ガンツ でも、今回のCBSはティーン層と30代の視聴率ではトップになってるんですよね。だからじつは

座談会出席者

松林 貴
うまいものとおもしろいものがある場所には、ぶらりと現われる本誌・編集次長。今回はシカゴ郊外で行なわれたストライクフォースにちゃっかり密航。

堀江ガンツ
本誌・編集部員。変態座談会主宰者であり、その変態道は海を渡ってUFCにまで通じている。今回はDREAM vs 戦極の対抗戦実現に妄想が止まらない。

[2009.11.7 STRIKEFORCE／M-1 GLOBAL FEDOR vs ROGERS]
米国イリノイ州シカゴ郊外、シアーズセンター
◯マーロス・クーネン vs ロクサン・モダフェリ×
（1R 1分05秒 腕ひしぎ十字固め）
和術慧舟會所属でヴァルキリーにも参戦しているモダフェリがストライクフォースに参戦。モダフェリはパンチからテイクダウンを奪うが、モダフェリの腕を取ったクーネンがくるりと回転して鮮やかな腕十字を極めた。

[2009.11.7 STRIKEFORCE／M-1 GLOBAL FEDOR vs ROGERS]
米国イリノイ州シカゴ郊外、シアーズセンター
◯ファブリシオ・ヴェウドゥム vs アントニオ・シウバ×
（3R終了 判定3-0）
この試合に勝ったらヒョードルと闘いたいと宣言していたファブリシオ。スタンドでも、グラウンドでもシウバを圧倒したが、勝負は判定決着に。3-0で勝利したものの、ヒョードル戦即決定の気運を高めるにはあと一歩？

[2009.11.7 STRIKEFORCE／M-1 GLOBAL FEDOR vs ROGERS]
米国イリノイ州シカゴ郊外、シアーズセンター
◯ゲガール・ムサシ vs ソクジュ×
（2R 3分43秒 TKO）
“幻のスーパーハルク準決勝”は、ソクジュがテイクダウンを奪えば、ムサシが強烈なパンチでソクジュを追い込むというスリリングな展開を経てムサシのKO勝ちに。ムサシのパウンドでソクジュが失神し、TKO決着となった。

[2009.11.7 STRIKEFORCE／M-1 GLOBAL FEDOR vs ROGERS]
米国イリノイ州シカゴ郊外、シアーズセンター
ストライクフォース ミドル級チャンピオンシップ5分5R
◯ジェイク・シールズ vs ジェイソン・“メイヘム”・ミラー×
（5R終了 判定3-0）
アメリカでも大人気のメイヘムは、階級を上げてミドル級王座に挑戦したジェイクと対戦。グラウンドが得意なジェイクはメイヘムを巧みにコントロールし判定勝ち。しかし、会場からは強烈なブーイングが送られた。

CBSにとっては大成功だったという話もあります。というのは、CBSって老舗のネットワークであるがゆえに、視聴者の高齢化が問題になってて、今回は若い層を取り込むためにMMAをやったらしいんですよ。だから、目的は達成できてるって。

松林 あくまでも俺が現地で見た感じでは、あらゆる意味で「まだまだUFCの牙城は崩すには時間がかかるんだろうな」って。これがいいたとえなのかわからないけど、駅伝のチームがあるとすれば、UFCはすべての区間にスターランナーを揃えてるチーム。だけど、ストライクフォースにはUFCのスターランナーたちでも勝てない怪物ランナーが一人だけいる。

――それがヒョードル。

松林 そういうこと。怪物ランナーが一人だけいるんだけど、かなり大きくタイムを離された2位のチームってところかな。

ガンツ まあ、ストライクフォースはようやくスタート地点に立った感じだと思うんですよ。いままでのストライクフォースって、日本で言うところのDEEPみたいな規模だったわけじゃないですか。そのDEEPに突然フジテレビがついて、佐伯さんが「ま、ま、間に合わんわ！」ってバタバタしてるようなもんで（笑）。

――やっぱり日本とは市場規模が違いますから、アメリカだとDEEPがPRIDEに化けかねないですよね。

松林 うん。その話に通じるんだけど、現地の青木真也人気は日本で想像していた以上に凄かったからね。だって、ショッピングモールを歩いていたら、ティーンの女の子が寄ってきて「シンニャ・エイオキですよね？」って。その女の子はMMAが大好きで、しかもライト級が一番好きなカテゴリーという、いわゆる〝変態〟だったんだけど（笑）。

――そういう変態がウジャウジャいる、と。

ガンツ やっぱりMMAに国境はないんですよ。ボクもイギリスにUFCを取材にいったときに「Oh！カミプ〜ロ！」って言われましたからね。「なんで俺のこと知ってんの⁉」って（笑）。

松林 しかもそれってイギリス人じゃなくて、マンチェスターまでUFCを観に来ていたフランス人に言われてたからね。

ガンツ そうそう。で、「去年、PRIDE無差別級GPをさいたまスーパーアリーナまで観に行ったんだ！」ということを一生懸命伝えてきました（笑）。

――だからアメリカだと、そういう変態だけを相手にしても、ある程度商売が成り立つわけですね。

松林 でも、それ以上にライト層もいるわけだよね。CBSで放映していた大会前の煽り番組を観ながら、「これ、どんな人たちが観てるんだろう？」って思ったよ。

ガンツ アスレチックコミッション管轄の下で開催してるから、完全にスポーツの一ジャンルとして認められてるみたいですよ。だから「NBAが好きだ」とか「テニスも観るよ」という感じで「タイガーウッズ、凄いよね。でも、格闘技にもタイガーウッズみたいなヤツがいるらしいぜ。ヒョードルっていうんだけど」という認知のされ方。

DREAMvs戦極対抗戦！

Sakuraba

Kazuo Misaki

Shinya Aoki

VS

Mizuto Hirota

Zaromskis

Makoto Takimoto

Tatsuya Kawajiri

VS

Takanori Gomi

いまのストライクフォースはDEEPに突然フジがついた感じ

――そういう人たちって、ジェイク・シールズの試合とかをどう観てるんですかね。

ガンツ 野球でいうと、地味だけど仕事が抜群にできる中日の〝アライバ〟を観てる感じじゃない？「職人だねえ」みたいな。

松林 でも、単純に退屈だったよね。競技面に重点を置いて観れば興味深い試合なんだろうけど、俺はたとえ技術が洗練されていなくてもマーク・コールマンみたいな試合のほうがグッとくる。

――違う意味での〝変態〟だから（笑）。

松林 だって会場でも4、5ラウンドは試合中にブーイングがあったし、判定のときにもブーイングが起こってたけど、あれは判定じゃなくて試合全体に対するブーイングでしょ。そういう意味では、競技的レベルはもの凄く高いんだろうけど、MMAのファン層を広げるにはふさわしくない試合だったな。

――そこで「視聴率のためにスーパーハルクを投入しないと！」なんてMMAの未来を憂えるアメリカ人はいるんですかね？

松林 いないんじゃないの？（笑）。逆に視聴率を獲っても、それがおもしろいかどうかはシビアに判断するでしょ。

ガンツ まあ、アメリカがこれからどうなるかわからないけど、とにかくボクらが観たいカードはストライクフォースが一番実現させてくれるなって感じですよね。

――ザロムスキーもストライクフォースと契約しちゃったみたいですし。

松林 ザロムスキーってDREAMのウェルター級王者でしょ。ストライクフォースがDREAMとの提携団体とはいえ、チャンピオンが簡単に他団体と契約しちゃっていいのかって話じゃないの？

――まあ、提携といえども、同じテーブルにつけますよというレベルですからねぇ。

松林 ああ、でも、冷静に考えたらおかしいよなぁ。

――まあ、そうなんですけど。DREAMは独占契約してるわけじゃないし、ボクは外人選手は最終的に全員アメリカに取られるもんだと思って見てますから。ちょっと冷めすぎか（笑）。

松林 最初からあきらめてるんだ（笑）。

――それくらい経済力に差がありますしねぇ。でも、ザロムスキーってウェルター級ですよね。重い階級はまだしも、ウェルター級以下はアメリカとのファイトマネーに差はなかったはずなんですけどね。

ガンツ いまやストライクフォースは桜井〝マッハ〟速人がほしくてしょ

同じホテルに泊まってたんだよね。で、そのホテルのロビーにコーヒー

ウトってあまりないじゃないですか。

松林 うん。たいてい対戦相手の物

ガンツ　いまやストライクフォースは桜井“マッハ”速人がほしくてしょうがないらしいからね。だからマッハvsザロムスキーの再戦がなぜかストライクフォースで行なわれたりするかもしれない（笑）。

――来年あたり、アメリカでライト級の需要も格段に上がるかもしれないですよね。そうなると日本はいい選手たくさんいますからね……とんでもないことになってなきゃいいけど。

松林　まあ、日本のトップ選手の価値がそれによって上がっていくんだったらかまわないけどね。

ガンツ　うん。ボクはもう単純にいいカードが観られるんだったら、どこのリングでもどこの団体でもいいよ。だってTBSにボロボロにされるよりは、ネットPPVとかで観たほうがマシじゃない。

――たとえば、いまの日本でジョシュ・トムソンvs青木真也を実現させるとなると、いろんなハードルがあるじゃないですか。でも、ストライクフォースだとわりとすんなり実現しそうですよね。

松林　日本だと、TBSサイドの「それ、どんな選手ですか?」からスタートだよなぁ、きっと。

――「ボブ・サップより数字は持ってるんですか?」とか。いまのTBSに視聴率のこと言われたくないんだけど（笑）。

UFCがいまいち爆発しないのは趣味嗜好が日本人と違うから

ガンツ　そんな制約が出てくるなら、べつに日本じゃなくたっていいよ。我々が観たいカードはもうどんどんストライクフォースで実現してくれって感じだし。逆に言ったらUFCの人気が日本でそこまで爆発しないのは、実況解説がいまいちなのと、やっぱり趣味嗜好が日本人とちょっと違うところに要因があるのかもしれないですよね。たとえば今週末の『UFC105』（英国マンチェスター大会）だと、ランディvsブランドン・ベラが発表されてるけど、日本人からすると「ランディの使い方、こうじゃないでしょ!」っていう感じじゃない。

松林　要するに、UFCって「コイツとコイツが強いから、それを闘わせたらどうなるんだろう」というマッチメイクがほとんどで、そこは凄く単純でストーリーとかは関係ないからね。

ガンツ　まあ、よく考えたらストライクフォースだって、ヒョードルの金網デビューの相手が何もいきなりブレット・ロジャースじゃなくてもいいだろうって感じだけど。

松林　ロジャースは強かったけど、逆にヒョードルってあんまり練習してないのかな?

ガンツ　練習してなくてあの動きはできないでしょう。

松林　いやね、俺はたまたま選手と同じホテルに泊まってたんだよね。で、そのホテルのロビーにコーヒーサーバーとかが置かれているコーナーがあって自由に飲めるんだけど、試合当日の朝、ヒョードルは俺と一緒に列に並んで紅茶を入れていたからね（笑）。

――ルームサービスを頼めばいいのに（笑）。

松林　で、ヒョードルがのんびりと紅茶を飲んでるときに、ソクジュとかほかの選手はホテルのフィットネスルームで汗を流してるんだよ。しかも前々日くらいに近くの「スポーツ・オーソリティ」に行ったら、ヒョードルも買い物をしてたって話で。「いったい、いつ練習してるんだ?この人」って感じなんだよね。

――ミステリアスですよね。アメリカのマスコミには「クマを倒したのは本当ですか?」とか繰り返し聞かれてるみたいですし（笑）。

ガンツ　今回の試合を観たら、ますます“クマ殺し”の信憑性は増すだろうね。最後のパンチとか、はえーのなんのって!

松林　あと、2ラウンドに金網際のラッシュでワン、ツー、スリー、フォー、ファイブ……って全部で15発くらい振ったじゃない。あれ観て、「この速さはなんだ!」と思ったよ（笑）。

ガンツ　ロジャースもパンチが来るとわかってるのによけられないという。それはやっぱりハートの強さというのもあるんだろうね。

――なんかアメリカに行ってからのヒョードルって、PRIDE時代より神がかってますね。昔から強かったけど、ヒョードル主体のベストバウトってあまりないじゃないですか。

松林　うん。たいてい対戦相手の物語が主軸だったよね。

ガンツ　アメリカに行ってからというか、PRIDE後期からの成長が凄まじいんだよ。ミルコに勝ったあたりからパンチの技術がガンガン上がってるんだろうね。最強になってから、さらに強くなってるという。

――だから実力も人気もいまが全盛期ですよ。

ガンツ　とにかくヒョードルの試合がもっと観たいですよ。次から次へと観たい。このヒョードルが観られる幸せというのがいま頃になってわかったというか（笑）。

松林　できれば日本で観たいんだけどなあ。ストライクフォースが日本で大会をやることには支障はないの?

――ストライクフォースの日本大会開催どころか、肝心の大晦日がとんでもないことになってますけど（笑）。なんと、本日11月8日の時点で、『Dynamite!!』と『戦極』がここへきて合体するという噂が流れてますね。ホントはこの座談会の直前にサダハルンバのインタビューを収録するはずだったんですけど、諸事情により延期になって……。

ガンツ　いろいろと動いてるんだろうねぇ。

――とりあえず確定と言われているのが、有明コロシアムの『SRC』は中止になったらしいこと。もしかしたら、この号が店頭に並ぶ頃にはいろいろと発表されてるかもしれないですが、そうなると必然的に石井慧vs吉田秀彦は『Dynamite!!』

本誌が勝手に提案する DREA

Hayato "MACH" Sakurai　VS　Akihiro Gono

Kazushi Sakuraba

Hiroyuki Takaya　VS　Michihiro Omigawa

Marius Zaromskis

この大晦日が視聴率的にコケたら二度と大晦日はできないかも

でやることになると思われるんですが……。

ガンツ 『Dynamite!!』に「もの凄い隠し球がある」って聞いていたけど、それが石井vs吉田だなんて誰も思いつかないよ（笑）。

――もともと対抗戦の話は浮上してたらしいですけど、一度は『戦極』側が断ったという話だから、今回の合体案にはビックリですよ！

ガンツ だからプロレスの歴史を見たらわかるとおり、苦しいときは交流したくなるんだよね。96年の新日本vsUインターみたいなもんで、新日本は新日本で北朝鮮イベントのせいで借金まみれだし、Uインターも似たような状況だし、だから今回もそんな感じなんじゃないの。FEGも『戦極』も背に腹は代えられないというか。でも、TBSとして考えたらこれ以上の展開はない。魔裟斗の引退試合と石井慧のデビュー戦を流せるんだから。

松林 いま日本の格闘技界が持てる駒を全部投入するという感じだよね。しかし、すでに券売までしてるのに大会がなくなるのは異常事態だよ。

――大会前日に中止発表するどこかの団体よりは1億パーセント、マシですけど（笑）。つまらないことを言うと、絶対に一つにまとまることはありえないのもマット界の歴史ですよね。まだまだ予断は許さないというか。

ガンツ 現段階では大晦日ですらどういう座組みになるかはわからない。参加を拒む選手やジムも出てくるかもしれない。それに来年以降はまた違うかたちになると思うんだけど、それはまだどうなるかは誰にもわかってないという。

――そのまま石井慧がDREAMに参戦するかというとそれはわからないですし。石井慧からすると、そもそも『戦極』への所属意識はないんでしょうけど。

ガンツ いい意味でないよね。フリーというか。

――でも、こうなってくると、ホントにスタジアムバージョンを満員にできる気がしてきましたね。谷川さんは「チケットは凄く売れてる！」と息巻いてるけど、実際このままじゃ満員は厳しかったと思うんですよね。

ガンツ いまでもマッチメイク次第のところはあるじゃない？ ホント、全精力を傾けないと満員は難しいよ！ この大晦日が視聴率的にもしコケたら、二度と大晦日はできないかもしれないんだから。

――こうなったら有力候補カードの青木vs川尻はやめて、二人とも『戦極』との対抗戦に出るしかないでしょう！

ガンツ ホントにそうだよ。青木vs川尻は直球カードすぎて、魔裟斗の引退、石井vs吉田、DREAMvs『戦極』に比べるとお祭り感には欠けるからね。青木vs川尻を本当に大事に思っているなら、このカードはDREAMのメインイベントでやるべきだと思うけどね。魔裟斗の前座でやるカードじゃない！ というわけで、ここで大晦日のカードを発表します！

――あ、勝手に（笑）。まず、大会全体の構成から決めましょう。第一部はK-1甲子園とK-1のワンマッチでいいでしょ。第二部がDREAMvs『戦極』の対抗戦、第三部はスーパーハルクに自演乙、所英男やKIDが登場して、石井慧vs吉田秀彦、魔裟斗の引退試合がある。

ガンツ で、大注目のDREAMvs『戦極』はこういうのがいいと思うんだよねぇ。まず先鋒戦は、小見川道大vs高谷裕之のフェザー級対決！ 次はマッハvs郷野をやらせていただいます！

俺たちのやれんのか！大晦日！2009 ～DREAMvs戦極～ 座談会

サダハルンバいわく、石井vs吉田というスーパーカードが決まっていなければ、DREAMvs戦極構想も実現には至らなかったとか。やっぱり石井の総合デビューは格闘技界の将来を担うほど重要なのだ。

――なんでこんなに自信満々に言ってるんだ（笑）。

ガンツ で、中堅戦がザロムスキーvs瀧本誠。そして！ 川尻vs五味もやるべきですよぉぉぉぉぉ!!

――炎上してるところ申し訳ないけど、五味はもう『戦極』の選手じゃないです（笑）。

ガンツ この際、細かいことは気にしない！ だってファンの誰もが観たいはずだし、五味にはもう一度燃えてほしいよ！ モチベーションを言うんなら、ヒョードルだって、シウバだって、ノゲイラだって、PRIDEのチャンピオンたちはまだまだ第一線で闘ってるじゃない！

――桜庭和志や吉田秀彦だってボロボロなのに闘ってる。

ガンツ 五味にはこのタイミングを逃さないでほしいなあ。

――というか、「川尻vs五味」や「青木vs五味」の希望を活字にすること自体が、なぜかタブーになってたじゃないですか。ファンはみんな観たがってるのに。正直言って、このカードが政治的な都合やマネージメントの勘違いで実現できないなら、業界の未来は暗いと言わざるをえないですよ！

ガンツ というわけで、五味vs川尻は決定です！ 続いての副将戦は青木真也vs廣田瑞人のライト級チャンピオン対決！

――青木からすれば、北岡の敵討ちですね。

ガンツ 『戦極』側の北岡が青木のセコンドにつくという複雑なシチュエーションもおもしろい。そして最後の大将戦は、三崎和雄vs桜庭和志ですよぉぉぉぉぉぉ!!

――いやあ、これはぜひ実現してほしい（笑）。

ガンツ それ以外にも北岡悟や横田一則とか、菊野克紀とか人材はいっぱいいますから。弾はつきないよね。

――田村潔司戦や桜庭和志戦を希望している菊田早苗の出番はなし？

ガンツ 菊田さんねぇ……、マヌーフとかでいいんじゃないのぉ（テンション低めで）。

――ダハハハハ！ 急に投げやりになった（笑）。

ガンツ まあ、このドサクサにまぎれて、普段できないことをバンバンやってほしいよ。

――こうなったら大会タイトルも『Dynamite!!』じゃなくて『やれんのか！大晦日！2009』でいいでしょ。せめて第2部だけでもそうしてほしい。

ガンツ そして会場の天井に〝ある物体〟がブラ下がっていてほしいよ！（笑）。

――本部長、よろしくお願いします！（笑）。大晦日のあとはまたケンカしてもかまわないんで、今回だけは力を合わせてほしいですよね。

ガンツ 苦しいときは助け合って生きていこうよって。というわけで、皆さん、12月31日は『やれんのか！大晦日！2009』でお会いしましょう！ さようなら～!!

松林 ……どうでもいいけど、俺が原タコヤキ君の結婚披露宴に行きたくないくらい、魔裟斗の引退試合には完全に興味がないね、キミらは（笑）。

【09年11月10日／都内・エンターブレインにて収録】

アメリカでも「アオキはしゃべりすぎ」の声殺到!?

11.7シカゴ郊外シアーズセンター

ストライクフォース会場でファイター&関係者に Shinya Aoki について聞いてみました!

アメリカMMAマニアにとって“まだ見ぬサブミッションアーティスト”であるSHINYA AOKIが、アメリカ初上陸! 11.7ストライクフォースシカゴ大会に来場すると、予想以上に歓迎されたが、ストライクフォースの選手、関係者はAOKIをどう見ているのか? 現地のファイター&関係者に片っぱしから聞いてみました。

取材／Matthew Rock　構成／堀江ガンツ

Trevor Prangley

トレバー・プランクレー
(元ボードッグミドル級王者)

❶彼のロングパンツは大好きだよ（笑）。独特なサブミッションゲームで試合をコントロールする素晴らしいファイター。ぜひストライクフォースにこれまでにない新しいキャラクターを持ち込んでほしいね。❷トップにランクされるファイターだったら誰と闘っても素晴らしい試合になるんじゃないかな。逆にトップレベルじゃないファイターとのマッチアップはすべきではないと思うよ。彼の貴重なプライムタイムを無駄にしちゃいけないよ。ジョシュ・トムソン、ギルバート・メレンデス、エディ・アルバレスが相手だったら間違いなくエキサイティングな試合を見せてくれると思う。❸二つの団体が提携したということは素晴らしいことだよ。ぜひお互いにトップのファイター同士の試合を組んでほしい。そうすれば、ファンには誰が強いのかって証明することができるし、ファイターにとってはもっと試合するチャンスが増えるんだからね。チャンスがあったら日本でも試合することを楽しみにしてるんだ。

Emelianenko Fedor

エメリヤーエンコ・ヒョードル
(WAMMA世界ヘビー級王者)

❶アオキが見せてくれてるパフォーマンスはとても素晴らしい。でも、まだストライキングのテクニックを向上させないといけないでしょうね。❷とても難しい質問だね。……ストライクフォースのトップファイターたちなんかはどうかな？ チャンピオンのジョシュ・トムソンとかね。❸契約絡みのことはマネージャーであるワジムに任せていますが、ぜひ日本に戻って皆さんの前で試合ができたらと思っています（微笑）。

Jake Shields

ジェイク・シールズ
(ストライクフォース世界ミドル級王者)

❶驚くべきファイターだよ。彼のスキルとタレント性が大好きなんだ。ただ以前、試合途中で試合を投げ出すような行為があり、ファイティングスピリットに疑問視する声があったよね？ 最近の試合は観てないんだけどウォリアーのスピリットを身につけてタフになってると信じているよ。彼のテクニックに関しては、その素晴らしさを尊敬してるし、彼のテクニックを観るのが大好きなんだ。❷ちょっと残念なのは、昔はお互いに170ポンド（ウェルター級）で試合をしていたのに、自分は185ポンドに、アオキは逆に155ポンドに落としてしまったことで、試合をするチャンスがなくなってしまったことだね。まあ、将来的にまたお互い170ポンドに戻ることもあるだろうから、対戦が実現したら、絶対にエキサイティングな試合になるよ。俺以外、155ポンドのファイターでいえば、アオキとギルバート・メレンデスの試合が一番観たいね。数年前に実現寸前までいきながら、ケガもあって流れてしまったんで、ぜひ実現させてほしいカードだね。❸日本にはたくさんいいファイターがいるので、誰とでもいいから日本で試合してみたいね。ジャカレイやサクライとの再戦はいい試合になるんじゃないかな。DREAMウェルター級トーナメントのチャンピオンである、マリウス・ザロムスキーとの試合も興味があるよ。

Marloes Coenen

マルース・クーネン

❶本当に素晴らしいファイターね。格闘家の友人がアオキのDVDを観ながらいつもテクニックを練習してるの。グラップリングについては、MMAの最先端だと思う。❷ギルバート・メレンデスね。絶対にエキサイティングな試合になるはず。❸もちろんエメリヤーエンコ・ヒョードルvsアリスター・オーフレイム。これはストライクフォース、DREAMにかぎらず、世界最高のカードの一つだと思うわ。

Bob Cook

ボブ・クック
(AKA MMAヘッドコーチ)

❶アオキは間違いなく世界でベストのサブミッションファイターだね。ほとんどの試合をKOや判定じゃなくて、サブミッションで勝利を収めてるだろう？ こんなファイターはいまなかなかいないよ。❷ジョシュ・トムソン、ギルバート・メレンデス、それにビトー・"シャオリン"・ヒベイロとの再戦はグッドマッチアップだと思うよ。❸DREAMウェルター級王者のマリウス・ザロムスキーは、とてもエキサイティングなファイターなんで、彼とストライクフォースウェルター級トップレベルの選手との試合が観たいよ。あと個人的にマッハ・サクライの昔からのファンなので、再戦が観たいね。

Jason "Mayhem" Miller

ジェイソン・"メイヘム"・ミラー

❶アオキが来てるんだって？ スゴイスゴイ！ 彼は世界でベストのファイターであり、世界でナンバーツーの「オワライゲイニン・ファイター」！ 世界ナンバーワンのオワライゲイニンはオレダ！（笑）。❷トムソンやメレンデスとの試合はもちろんおもしろくなるよ。でも、ただ単にストライクフォースのファイターと試合をするんじゃなくて、ぜひアオキにはアメリカに来て試合をしてほしい！ アメリカのファンは彼のことを理解するのにスコシ時間がかかるかもしれないけど、きっと彼のファイティングスタイルに惚れ込むはずだよ。❸ここでは名前は出せないけど、マジで嫌いな奴がいるんだ。まず彼の顔が好きじゃない！ そのほかにも興味のあるファイターがたくさんいるけど、いまは一人の男のことだけ、ジェイク・シールズとの試合のことに集中してるんだ（このコメントは試合前に収録）。

❶今回来場する青木真也をどう評価しているか？　❷青木真也と誰の対戦に興味がありますか？
❸DREAMおよび日本を主戦場にしている選手で闘いたい相手は？（選手に対しての質問）　ストライクフォースvsDREAMで観たいカード（関係者に対しての質問）

King Mo

キング・モー

❶アオキは好きなファイターの一人なんだ。グレートファイターだし、とくにサブミッションのスキルは素晴らしいね。それに彼の『バカサバイバー』は最高だよ(笑)。❷ギルバート・メレンデス、それにジョシュ・トムソンと闘えば、最高の試合になるだろうね。ぜひアメリカ、 ストライクフォースで試合をしてほしいね。❸次の試合はストライクフォース12月19日の大会、まだ対戦相手は決まってないんだけどね。センゴクは自分のホームだけど、DREAMとストライクフォースの提携関係によって、DREAMのファイターと闘える可能性が出てきたんで、楽しみなんだ。

Apy Echteld

アピ・エクテル
(M-1 グローバル副代表)

❶アオキが来るのは聞いていたよ。個人的にとても好きなファイターなんだ。スタイルは個性があるし、また違った総合格闘技のイメージを楽しませてくれてるからね。ぜひ、アメリカに来て成功を収めてほしいよ。❷アオキはハイレベルのファイターだからね、世界トップレベルのファイターと誰と試合しても問題ないよ。グッドマッチアップという意味では、ニック・デイアスがいいんじゃないかい? 当時、日本人最強と言われたゴミ(五味隆典)から勝利を収めているからね。アオキがアメリカで成功するためには、まず名前を売れるような相手を選んでから、次のステップでビッグネームのファイターとの試合をしていくのがベストだと思うよ。❸ストライクフォースとDREAMの提携のほかにM-1を忘れてないかい? ヒョードルとムサシの差はまだあるようにM-1にもライトウェートを含め若手のファイターが成長してきてるんだ。あと1〜2年でDREAMやストライクフォースのトップレベルのファイターたちと同じレベルになるから楽しみにしててほしい。

Martijn de Jong

マルタイン・デ・ヨング
(ゴールデングローリーコーチ)

❶アメージングファイター! 同時にパラエストラのファイター。じつは自分もパラエストラの中井先生から柔術の黒帯を授かってるんだよ。とにかくグラップリングの技術は素晴らしく、アメージングなグランドゲームで相手をコントロールするんだからね。❷カワジリとの日本人対決は観てみたいね。また最高のマッチアップはアオキvsBJペンだろうね! 二人とも信じられないような柔術のテクニックを持ってるからね。❸もちろんアリスターとヒョードルだよ。あとエディ・アルバレスvsメレンデスはエキサイテイングなおもしろい試合になるだろうね。

Nate Moore

ネイト・ムーア
(今大会出場ファイター)

❶とにかく素晴らしいテクニックを持った、DREAMのチャンピオンにふさわしいファイターだね。アオキがストライクフォースに参戦してくれたら、アメリカのファンにとっても、プロモーションにとっても、また同時に我々ストライクフォース契約ファイターにとっても嬉しいニュースになると思う。❷とにかく誰が相手でもアオキのベストの試合を観たいよ。❸ストライクフォースとDREAMの提携はプロモーションをするうえで素晴らしいことだよね。ぜひ、お互いトップのファイター同士が一つのベルトを賭けた交流戦が定期的に行われることを期待してるよ。

Vadim Finkelstein

ワジム・フィンケルシュタイン
(M-1グローバル代表)

❶とくにグランドの技術に優れた素晴らしいファイター、ベリーグッドだね。❷とにかくアメリカに来て試合をすべきだよ。ここアメリカにはたくさんストロングファイターがいるからね。❸今回のようにヒョードルやムサシのようにM-1を代表するファイターがストライクフォースに参戦できるようになったし、M-1でも若い選手が育ってきてるから今後が楽しみなんだ。同時にDREAMとも交流戦を行なっていければと思ってるよ、DREAMと仕事するのはいろいろと苦労も多いけどね(笑)。

Fabricio Werdum

ファブリシオ・ヴェウドゥム

❶スピードがあり、素晴らしい柔術のテクニックを見せてくれる好きなファイターの一人なんだ。同じグラップラーとして、彼の試合にはいつも注目しているよ。❷ギルバート・メレンデスとの試合はエキサイティングな試合になるんじゃないかな。ちょうど自分とヒョードルの対戦をライト級にしたみたいなカードだろう?(笑)。❸日本のファンのことも、日本で試合をするのも大好きなので、ぜひ日本とアメリカで半々ずつ試合ができたらと思ってるよ。いまのストライクフォースとDREAMの関係なら、それが可能だと思うからね。

Kelly Kahl

ケリー・コール
(CBSシニアエグゼクティブバイスプレジデント)

❶もちろんアオキのことは知っているよ。ぜひともアメリカで試合をしてほしいね。とてもダイナミックな動きでエキサイテイングな試合をするからね。とにかくサブミッションは素晴らしい! 次はアメリカで試合をしてくれることを願っているよ。❷CBSは全米に放映することが仕事なんで、マッチメイキングはスコット・コーカーとストライクフォースのマッチメイカーに任せるよ。我々はファンが喜んでくれるカードを組むように最善をつくしてるし、ベストのプロモーションを行なっているんだ、同時にMMAがスポーツとして成長できるようにね。アオキに関してはたくさんのファンが彼の試合を観たがってるんで、ぜひ実現させたいね。❸ストラクフォースの素晴らしいところはDREAMやM-1と提携することによって、世界中からベストのファイターをアメリカに呼んで、ベストのファイトカードを我々CBSのネットワークで放映できるようにしているところなんだ。UFCは巨大な団体になったけど、ストライクフォースは世界中の団体とアライアンスを組むことにより、今後まだまだ成長していく可能性を秘めてるんだよ。

Ryan Parsons

ライアン・パーソンズ
(メイヘムのマネージャー)

❶とにかくアメージングなファイター。自分のお気に入りの一人なんだ。彼のスタイルは他と異なってるばかりでなく、他人がやらないことを好んで実践してるんだからね。サブミッションゲームはトップレベル。しかも常に動き回れる素晴らしいアスリートだよ。❷ギルバート・メレンデスとの試合は観てみたいね。二人は異なったグラップリングのスタイルなんで非常に興味があるんだ。❸ヒョードルvsアリスター戦を実現してほしいね。あとキング・モーとヒョードルの試合にも興味があるんだ。ヒョードルはヘビー級では小さいほうだし、体重も5キロ程度しか変わらないんだよ。あとはメイヘムとジャカレイの試合を日本の大晦日、『Dynamite!!』で実現できれば最高なんだけどな。彼らは日本のファンの前で決着を見せる義務があるんだからね。

Scott Coker

スコット・コーカー
(ストラクフォースCEO)

❶世界で1番か2番にランクされるファンからみてもプロモーターからみても魅力のある素晴らしいファイターだよ。❷ジョシュ・トムソン、またはギルバート・メレンデスだね。とにかく、すぐにでもストライクフォースのケージに入ってほしいんだ。これはスポーツなので、誰が勝つかなんて問題じゃないだよ。ここストライクフォースでアオキの試合を実現させようよ! ❸アオキvsジョシュ・トムソンまたはギルバート・メレンデス、ジェイク・シールズvsサクライ、ニック・ディアスvsマヌーフ、そしてヒョードルvsアリスターというファイトカードを実現させたいね。

Sokoudjou

ソクジュ
(スーパーハルクトーナメント決勝戦進出者)

❶本当にこの会場に来るのかい? 信じられないよ。とくに彼の柔術スタイルが好きなんだよ、相手をつかんだら絶対に極め落としてしまうんだからね。❷間違いなくBJペンとの試合。実現したらファンは大喜びだろうね。❸この試合のあと『Dynamite!!』でミノワマンと試合が予定されてんだ、スーパーハルクトーナメントの決勝でね。今後も日本で試合をしたいし、次回の試合のあとは少し滞在したいと思ってるんだ。

Esther Lin

エザー・リン
(ストライクフォース・フォトグラファー)

❶アオキの大ファンなんで今回会場で会えるのが嬉しいですね。とにかく彼のファイティングスタイルは独特で大好きなんです。また、いままで見たこともないサブミッションをやったりと、試合を観るのが楽しみなんです。❷カワジリとの試合はどうなりそうなんですか? 一番観たいのはBJペンとの試合です。近い将来に実現すればと祈ってます。そのほかではジョシュ・トムソン、ギルバート・メレンデスとの試合は観てみたいですね。❸マリウス・ザロムスキーの試合は、誰とカードが組まれても観るのを楽しみにしています。 あと、DREAMのあの白いケージは、ストライクフォースでも採用してほしいと思うぐらい素敵でしたね。

Scott Smith

スコット・スミス
(ストライクフォースミドル級ファイター)

❶DREAMチャンピオンのアオキのことかい? エキサイティングな試合を見せてくれる素晴らしいファイターだよね。❷ギルバート・メレンデス。いい試合になるだろうし、ファンも観ていて楽しめると思うよ。❸ストライクフォースと契約にした際に「日本でも試合をしたい」って言ってるんだ。とにかくチャンスがあったら対戦相手は誰でもいいから日本のファンの前で試合はできることを楽しみにしてるよ。

Gegard Mousasi

ゲガール・ムサシ
(ストライクフォース世界ライトヘビー級王者)

❶155ポンドでは世界でトップ3に入るファイター。グラップリングは素晴らしいし、またテイクダウンの技術が優れてる。またクリンチに入るタイミングがいいので、スタンドアップに付き合わないように試合をコントロールしてるね。❷大晦日にカワジリと試合をするって聞いたけど、どうなんだい? カワジリとはエキサイティングな試合になるだろうから、ぜひ観てみたいと思ってるよ。でも、一番観たいのはアオキとBJペンとの対戦。おそらくケージではBJが、リングではアオキがアドバンテージがあると思うんだけどね。❸今回のソクジュとの試合もDREAMのファンが喜んでくれると信じているよ。DREAMにはとくにライト級、ウェルター級にいい選手がいるし、ジャカレイvsジェイク・シールズ戦なども注目の試合になるだろうね。今後、さらに交流戦が実現すればファンにも喜んでもらえると思う。

❶今回来場する青木真也をどう評価しているか? ❷青木真也と誰の対戦に興味がありますか?
❸DREAMおよび日本を主戦場にしている選手で闘いたい相手は?(選手に対しての質問) ストライクフォースvsDREAMで観たいカード(関係者に対しての質問)

アメリカMMAメディアが見た Shinya Aoki

SHERDOG

Loretta 記者

❶たくさんの特技を持ってる素晴らしいファイターですね。ファンは彼の自信過剰な面も好きだし、それをリングで実践してるところがますますファンを魅了していると思います。シャオリンとの試合はちょっと残念な内容だったけど、みんなが認める素晴らしいファイターなので、トップファイターたちはみんな対戦したがっていますね。❷ストライクフォースには155ポンドの素晴らしいファイターがいるので、個人的にもぜひアオキとの対戦は観てみたいですね。ジョシュ・トムソン、ギルバート・メレンデスとはエキサイティングな試合になるでしょうし、シャオリンもストライクフォースに来るので、その3人の誰かとの対戦に期待しています。❸前からDREAMで話題になっていたムサシとソクジュの試合がストライクフォースで今回組まれることになったし、DREAMウェルター級トーナメントのチャンピオン、ザロムスキーをストライクフォースで観られることを楽しみにしています。彼はここ3試合すべてハイキックでKO勝利を収めていますからね。ストライクフォースのウェルター級トップファイター、ニック・デイアスたちとエキサイティングな試合になることは間違いないでしょう。もちろん、ジェイク・シールズがウェルター級で試合をするなら、最高のカードになります。

MMA Fan House

Ariel Helwani 記者

❶ライト級で世界で3本の指に入る素晴らしいファイター。彼が持ってるカリスマを考えるとアメリカに来ないのは大きな間違いだよ。大スターになれる要素を兼ね備えてるのにね。❷ドリームマッチは間違いなくBJペンとの対戦だろうね。❸DREAMとストライクフォースが提携したということは素晴らしいことだよ。今回もメイヘム、ソクジュの試合がここアメリカで実現できたんだからね。また今後はジャカレイの試合も組まれていくだろうし。地球上の異なった地域からいろいろなファイターが同士が対戦していくのはファンにとっても喜ばしいことだからね。

Sports Illustrated

Josh Gross 記者

❶素晴らしい才能を持ったサブミッションファイターで、ほかのサブミッションファイターとは異なった独特の動きを見せてくれるトップレベルにランクすべきファイターだね。❷パワルフなレスリングのバックグラウンドを持ってて、ストライキングができて簡単にテイクダウンを取られないファイターとの試合を観てみたい。アオキがトップレベルでどのように通用するかテストするためにね。❸DREAMのウェルター級トーナメントのチャンピオンであるマリウス・ザロムスキーはストライクフォースと契約したけど、ウェルター級契約でジェイク・シールズとの試合を観てみたいね。絶対にいい試合になると思うよ。あとDREAMにはとくにライト級にいい選手がいるからね、アオキやカワジリとか。ミドル級にもタフな選手がいるから今後おもしろいマッチアップを期待できると思う。

Yahoo! Sports

Kevin Iole 記者

❶とても素晴らしいファイターで飛び抜けたサブミッションの才能を持ってるアスリート。ちょっと話しすぎる面があるけどね。そろそろもっと上のレベルを目指して、世界のトップレベルのファイターと試合を行なっていくべきだと思うよ。❷BJペンとの試合だね。オールランドのファイターだし、お互いが「世界でベストは自分だ」と思ってるんだから、それを証明してほしいよ。お互いにサブミッションゲームには抜きん出た才能があるし、オールラウンドのファイターだからね。とにかく実現させてほしいカードだね。❸成功するカギとなるのはお互いの団体の各階級トップクラス同士が試合を行なっていくことだろうね。もし、ショーケースとしてのカードを組むようであれば、せっかく提携した意味がなくなってしまうと思うよ。たとえばDREAMライト級王者のアオキだったら、ストライクフォースの暫定王者であるギルバート・メレンデスの試合などが最高のカードになるだろうし、団体同士の提携の意味が出てくると思うよ。

Gilbert Melendez

ギルバート・メレンデス
（ストライクフォース世界ライト級暫定王者）

❶「He is a MAN！」、彼は男だよ! アオキは日本でベスト、BJペンはアメリカでベスト、そして俺はその二人より強くなって、世界でベストのファイターになる予定なんだ。アオキとは試合をするのはもちろん、チャンスがあれば一緒に練習もしたいね。❷大晦日にアオキとカワジリが対戦するって噂があるけど、やめてほしいよ。ベストのカードは、アオキとこの俺の試合だからね。絶対にグレートなマッチアップになるよ! ❸アオキ以外だと、エディ・アルバレス、カワジリ、JZ（カルバン）と素晴らしいファイターがたくさんいるからね。彼らとジョシュ・トムソンが絡むカードもおもしろいだろうし、マッハ・サクライとジェイク・シールズやニック・ディアスのカードは最高のものになるんじゃないか? とにかく、DREAMとの提携によって、たくさん素晴らしいカードが実現する可能性が出てきて楽しみなんだ。

Shamar Bailey

シャマール・ベイリー
（今大会出場ファイター）

❶一言で、スリックなファイター。対戦する誰もがグランドゲームは危険だって知ってるからね。その持ってるユニークなテクニックは試合を観戦してる人たちをいつも驚かせてくれるし、本当にタフなファイターだよ。❷とてもいい質問だね、155ポンドにはたくさん良いファイターがいるからね。ジョシュ・トムソン、ギルバート・メレンデスらストライクフォースのトップとの試合は絶対にエキサイテイングなものになるだろうね。❸日本で試合できるのが昔からの夢でもあったんだ。ぜひDREAMのファイターと日本で試合ができれば光栄だよ。

Daniel Cormier

ダニエル・コーミアー
（アテネ五輪レスリングアメリカ代表、ストライクフォース契約ファイター）

❶柔道をベースにいろいろなテクニックを盛り込んで、素晴らしい試合をしてるいい選手だね。❷ライト級には世界にたくさん強豪がいるよね。その中でもトップのジョシュ・トムソン、BJペンとの試合は、非常に興味深い試合になると思うよ。❸日本のファンはテクニックも含め試合を観る目が肥えてるので、チャンスがあれば日本で試合をしてみたいね。

CBS全米生中継第一弾イベント大成功！
MMA界の台風の目
ストライクフォースの今後を語る

「我々の目標はUFCに勝つことじゃない。MMAをスポーツとして浸透させることです」

ストライクフォースCEO
スコット・コーカー

ついに“皇帝”ヒョードルのデビュー、米4大ネットワークCBSでの全米生中継に成功したストライクフォース。いまや飛ぶ鳥を落とす勢いだが、コーカーCEOは今大会をどう総括し、これからどんな戦略を持っているのか。また、次々とDREAMトップファイターがストライクフォースと契約しているが、“提携関係”はどうなっていくのか？ 気になる今後を大会終了直後に聞いてみた。

聞き手／坂井ノブ、Matthew Rock　撮影／Esthe Lin（STRIKEFORCE）

——今夜は素晴らしい大会でしたね！

コーカー　ありがとう！　メインカード

——そして、なんといってもヒョードルの強さにあらためて驚かされました。

ね。この試合を観たら、ヒョードルのファンに、またMMAのファンにならないほ

——今大会の反省点は何かありますか？

コーカー　大会があまりにも大成功し、

今夜の試合を観て、ヒョードルファン、MMAファンにならないほうがおかしい

――今夜は素晴らしい大会でしたね！

コーカー　ありがとう！　メインカードは本当にファンタスティックだった！　こんなにファンの熱狂を肌で感じられることなんて、そうあることじゃないからね。私はこれまで格闘技ファンとして、またプロモーターとして、たくさんの試合を観てきたけれど、まれに「マジックではないのか？」と思うほど、アメージングな試合になることがある。今夜のメインイベントは、まさにそのマジックが起きたかのような試合だったよ！

――確かに、凄い試合でした。

コーカー　とくにブレット・ロジャースには驚かされたよ。彼のボクシングスキルの高さはわかっていたけど、これまで何人ものファイターが倒されてきたヒョードルの鋭いパンチを1ラウンドに数発もらったのに、驚異的な打たれ強さを見せてくれた。もっと驚いたのは彼のグラウンドゲームだ。ヒョードルにテイクダウンされてもコントロールされることなく立ち上がっていたし、下になってもリバースすることに成功したんだからね。今夜ロジャースは、ただのハードパンチャーではなく、コンプリートファイターだと証明したんじゃないかな。

――ロジャースは敗れたものの、逆に評価は大きく上がった気がします。

コーカー　そのとおりだね。今回の彼の素晴らしい闘いぶりは、アンドレイ・アルロフスキー戦の勝利がフロックではなかったことの証明にもなっただろうね。

――そして、なんといってもヒョードルの強さにあらためて驚かされました。

コーカー　私もだよ（笑）。とにかくヒョードルはスーパースターであること、また世界最強のファイターであることをあらためて証明したと思う。いまヒョードルを倒せるファイターがいると思うかい？

――今夜の試合を観ると、なかなか思いつきませんね。

コーカー　そうだろう。1ラウンドは鼻のカットもあって、少し押されていたのに、2ラウンドにもの凄いスピードの右フック一発で逆転勝利を収めるんだからね。この試合を観たら、ヒョードルのファンに、またMMAのファンにならないほうがおかしいんじゃないかというほど、素晴らしい試合だったと思う。プロモーターとしてヒョードルのプロモーションに関われることはとても光栄なことだよ。

このところ1ラウンド決着続きだったヒョードルが、ひさびさに2ラウンドまでもつれ込む激闘となったことで、じつに見応えがあった今回のメインイベント。地上波テレビにとっても最高の試合だったか。

――今大会はほかのメインカードも充実してましたね。その中で今大会のMVP、ベストマッチを聞かせてください。

コーカー　それは決まってるじゃないか。MVP文句なしにヒョードル！　ベストマッチももちろんヒョードルvsロジャースだよ。そう思わないかい？

――異論がある人はほとんどいないでしょうね。ヒョードルの次の試合はいつになりますか？

コーカー　スケジュールに関しては、M―1側とも、またヒョードル自身とも相談しないといけないけど、来年早い時期には実現させたいと思っているよ（この後、ヒョードルの拳のケガが発覚。コーカーは「ヒョードルの復帰には4～6カ月かかる」と発言している）。

――ヒョードルの次の相手は誰が候補に挙がっていますか？

コーカー　今夜勝利を収めたファブリシオ・ヴェウドゥムは候補の一人だろう。なるべくその時点で最も強いファイターを挑戦させたいと思っているよ。

――多くのファンが望んでいるヒョードルvsアリスター・オーフレイムが実現する可能性はどれくらいありますか？

コーカー　ヒョードルの次の試合としては難しいかもしれないけど、来年春以降、夏までには実現させたいね。アリスター自身、今年の年末はK―1もあるし、両者がベストの状態のときにマッチアップできたら、と思う。

――今大会の反省点は何かありますか？

コーカー　大会があまりにも大成功し、ファンタスティックなものとなったことだね（笑）。

――大成功なのが反省ですか？

コーカー　こんなにもハイレベルで内容の濃い大会というのは、MMAの歴史を見渡しても何度もないことだと思う。だから、次回からの大会でいかに今大会のレベルに近づくか、そしてこれ以上のショーを開催できるか。それだけハードルが高くなったし、大きな課題が生まれたと思うよ。

――今大会はストライクフォース初のCBSでの全米生中継でしたが、いつもと勝手が違う部分はありましたか？

コーカー　世界最強の男ヒョードルの全米デビュー、CBSの全米放映、シカゴという大都市での開催と初めてのことが多く、プロモーションに関しては違いがあったけど、ファンに最高の試合を提供するという意味ではいつもと同じだったよ。

――ストライクフォースがCBSの「テレビ番組」となったことで、今後、CBSの意向がマッチメイクに反映されたり、直接CBSがマッチメイクに介入することはあるのでしょうか？

コーカー　いや、その可能性はきわめて低いでしょう。CBSは我々のマッチメイキングを信頼してくれているので、相談することはあっても介入することはないと言えますね。

――MMAのビッグイベントは、PPVで収益を上げるビジネススキームが定着しつつありますが、今回はPPVなしでも収益は上がりましたか？

コーカー　正確な数字は来週にならないと集計が終わらないからわからないけど、

我々はビジネスとしてMMAイベントを開催しているんだよ。もちろん、利益が上がるようなスキームを作りあげている。それにCBSのほかにもスポンサーがついているからね。

――では、今後もPPVをやる予定はありませんか？

コーカー 今後の状況にもよるけど、それも選択肢の一つとして考えているよ。

――今大会に青木真也選手が来場しましたが、彼にオファーをかける用意はありますか？

コーカー ぜひともストライクフォースに参戦してほしいし、DREAM契約選手の中でいま一番参戦してほしい選手がアオキだよ。今回会場に来ていたファンの反応を見ただろう？　アオキが登場しただけで凄い反響だったじゃないか。彼はアメリカで試合をしたことがないが、コア層のあいだでは、〝まだ見ぬトップファイター〟として認識されているんだ。DREAMとは、アオキのストライクフォース参戦に関して、いい話し合いができたら、と思っているよ。

――青木選手が参戦してきたら、ストライクフォース世界ライト級王者ジョシュ・トムソンとのダブルタイトルマッチの可能性もありますか？

コーカー 当然、チャンピオン同士のマッチアップもしたいし、タイトルを賭けたビッグファイトにしたいと思っているよ。

――ストライクフォース世界ミドル級新王者のジェイク・シールズが青木選手との対戦を熱望していますが、たとえばキャッチウェートで実現する可能性はありますか？

コーカー ジェイクとアオキはMMA最高のグラップラー同士だから、二人の対戦は個人的にも実現させたいし、コアファンも喜びそうなマッチアップだね。ただ、ジェイクは185ポンド（約84キロ＝ミドル級）にしたばかりだし、ウェルター級以下の体重に落とすことは困難だと思うんだ。アオキが将来、ウェルター級に階級を上げたら、真っ先にマッチアップしたいカードだね。

――今回、DREAM関係者とも会談を持ったようですが、どんな話し合いになりましたか？

コーカー 頻繁に選手の交流を行ない、今後も協力し合っていこうということを確認したよ。これまでも交流については何度も話しているからね。

――大晦日の『Dynamite!!』への選手貸し出し要請はありませんでしたか？

コーカー 具体的に「誰」というのはまだ

予想以上にファンに知れ渡っていた「シンヤ・アオキ」の名前。アメリカ有力MMAサイトでもライト級ランキングの１位をBJペンと争う青木真也の米マット登場は、多くのアメリカ人ファンが待ち望んでいることだろう。

フリーエージェントと契約しただけで DREAMからの引き抜きじゃないよ

なかったけど、要請があれば前向きに協力するつもりだよ。逆にDREAMのファイターにも来年以降、ストライクフォースに参戦してほしいしね。

――DREAMとは提携関係にあるにもかかわらず、DREAMで闘っていたトップファイターと次々契約を結んでいるのはなぜですか？

コーカー 我々は常にベストのフリーエージェントファイターと契約してきたし、それは今後も変わらない。いまは結果的にフリーエージェントの大物が、DREAM参戦経験があるファイターである場合が多いけど、偶然そうなっているだけだよ。

――では、引き抜いているわけではない、と。

コーカー 契約上問題のあるファイターは誰一人いないよ。それにDREAMとは提携関係にあるから、ストライクフォースと契約しても、継続してDREAMに参戦することは可能だしね。

――では、メイヘム、ジャカレイ、ムサシらが再びDREAMのリングに上がる予定もあるわけですか？

コーカー 時期的には不明だけど、彼ら元DREAMファイターだった選手が希望すればDREAM参戦を許可するつもりでいるよ。

――逆にストライクフォースの選手のDREAM参戦が実現しないのはなぜでしょうか？

コーカー 時期的なもの、またタイミングの問題だと思う。いままで私は今夜のヒョードルの全米デビュー、CBSの全米放映という大仕事があったため、ほかのことを考える余裕がなかったのは事実なんだ。それが終わったいま、DREAMとは具体的な話し合いができればと思っているよ。

――キング・モーやDREAMウェルター級王者のマリウス・ザロムスキーとも契約したそうですが、彼らはどのように使っていくつもりですか？

コーカー キング・モーは12月19日にサンノゼで開催されるビッグマッチに出場予定。まだ対戦相手は決まっていない。ザロムスキーについては契約したばかりで、これから詰めていかなくてはならないけど、間違いなくタイトル戦線に絡んでくる選手だと思っている。もしジェイク（・シールズ）が再びウェルター級に落としてくるなら、当然、ジェイクvsザロムスキーというカードが浮上してくるだろう。個人的にはこのウェルター級タイトル戦線に、ぜひサクライ（桜井〝マッハ〟速人）

今年、ヒョードル、ロジャースに連続KO負けを喫したものの、大物ムードたっぷりのアンドレイ・アルロフスキー。DREAM、『Dynamite!!』への参戦も噂されているが、日本初登場は実現するか？

マッハ・サクライやザロムスキーをジェイク・シールズと闘わせたい

スコット・コーカー

に加わってほしいと思っているんだけどね。

—ジェイク・シールズ、ザロムスキー、マッハが揃えば、ウェルター級も一気に活気づきますね。

コーカー　さらにストライクフォースのウェルター級には、ニック・ディアスがいるし、レジェンドのフランク・シャムロックもいる。ホットな階級になることは間違いないよ。

—あとフリーエージェントの大物でいえば、ダナ・ホワイトが「ダン・ヘンダーソンはストライクフォースと契約した」と言っていますけど、実際のところどうなんでしょうか？

コーカー　ダン・ヘンダーソンと話をしているのは事実だけど、まだ具体的な条件提示もしてないし、もちろん契約も結んでいない。来週からもう少しシリアスな話をすることになると思う。ダンは今回、会場にも来ていたからみんなも誤解したかもしれないけど、ソクジュのセコンドとして来ただけで、契約を締結したわけじゃないんだよ。

—ストライクフォースとしてはUFCが支払えないほどの大金をダンヘンに支払う準備があるのでしょうか？

コーカー　UFCのオファーがいくらだったのか、まったく把握してないのでなんとも言えないよ。我々は、我々の基準で彼を評価し、オファーをかけるだけさ。

—ダンヘンが参戦したら、どういったマッチアップを考えていますか？

コーカー　まだ、そこまでは考えていないけど、ストライクフォースのミドル級は非常に充実してきているので、ファンに喜んでもらえるマッチアップが実現できると思う。もしダンがライトヘビー級を希望したら、ムサシとの対戦も考えられるね。

—それは素晴らしいカードですね！　やはり元PRIDE二階級王者で、『TUF9』コーチであるダンヘンが参戦することは、ストライクフォースを成長させるために大きな手助けになると思いますか？

12月19日に開催されるストライクフォースの次のビッグマッチでは、前世界ミドル級王者カン・リーがひさびさに復帰。いまやムービースターである彼の復帰でさらに盛り上がるか。

じつは現ストライクフォース世界ヘビー級王者であるアリスター。ヒョードルやファブリシオ、アルロフスキーとの対戦が実現すれば、ビッグファイトになることは確実だ。

コーカー　ダンはそれだけでなく、アトランタ、バルセロナ両オリンピックのレスリング代表選手だからね。アスリートとして全米での知名度は高いし、MMAをスポーツとして、またストライクフォースを成長させるのに役立ってくれることは間違いないよ。

—ダンヘン以外にもUFCからストライクフォースに移籍する人、また他の団体からの選手は、これからも増えていきそうですか？

コーカー　先ほども言ったとおり、元UFCにかぎらず、フリーエージェントであるいい選手とは積極的に契約していきたいと思っている。じつは来週、ヘビー級のトップファイターとの契約を発表できる予定なんだ。楽しみにしていてほしいね。

—ジョシュ・バーネットが参戦してくる可能性はありますか？

コーカー　ジョシュとは直接話しているわけではないけど、興味を持っているのは事実だよ。ただ、まずはアスレチックコミッションとライセンスに関する問題をクリアにしてほしい。そうすれば、もっと具体的な興味が湧くだろうね。

—ストライクフォースの次のビッグマッチはいつですか？

コーカー　12月19日、ストライクフォースのホームであるサンノゼのHPパビリオンで開催されることになってる。

—そこでは、どんなメインカードが組まれる予定ですか？

コーカー　今日の大会後の会見で発表したとおり、前世界ミドル級王者カン・リーvsスコット・スミスがメインカードになるだろう。これはもともと10月10日に組まれていたカードなんだけど、カン・リーが映画のプロジェクトでスケジュールが調整できなかったんだ。それがようやく提供できてうれしいよ。あとは、ホナウド・ジャカレイvsマット・リンドランドのミドル級トップファイター同士の対戦。ライト級世界王者ジョシュ・トムソン、女子王者サイボーグも参戦する予定だよ。テレビディールはSHOWTIMEでの生中継が決定している。

—では、これからのストライクフォースの目標を聞かせてください。

コーカー　最近よくUFCと比較されるんだけど、UFCはMMAのビジネスをしているし、我々ストライクフォースも同様にMMAのビジネスをしている。UFCは素晴らしいファイターを抱え、メディアパートナー、スポンサーと契約してるんだ。そして同様に我々もトップレベルのファイター、メディアパートナー、スポンサーと契約してるんだよ。たとえば昨日アナウンスしたようにEAスポーツはストライクフォースをプライマリーの団体としてMMAのテレビゲームを市場にリリースしてくるんだ。ストライクフォースがSHOWTIMEのサポートでテレビでのビジネスを始めてからまだ7カ月しか経ってないのに凄い勢いで成長してきてるし、7カ月経ったいまは夢であったCBSのサポートを現実に受けられるようになった。重要なのは他の団体が何をしているかではなくて、我々がMMAがスポーツとして浸透し成長させるのがゴールだし、そのために何をしなくちゃいけないかであって、毎朝目が覚めたらそのことだけを考えてるんだよ。

—わかりました。これからのストライクフォースにおおいに期待しています！

【09年11月7日／米国イリノイ州シカゴ郊外、シアーズセンターにて収録】

米4大ネットワークCBSのストライクフォース全米生中継はなぜ実現できたのか?

CBSシニアエグゼクティブ バイスプレジデント
ケリー・コール

世界最大級の視聴者数を誇る米4大ネットワークCBSで、全米生中継された11.7ストライクフォース。これがMMA与える影響は甚大だと思われるが、なぜCBSはヒョードルの試合を全米放映しようとしたのか。また今後、MMA放映をどう考えているのか。CBSシニア・エグゼクティブバイズプレジデントであるケリー・コール氏に話をうかがった。

聞き手／Matthew Rock　撮影／Esthe Lin（STRIKEFORCE）

——今大会から全米放送がスタートしましたが、CBSがストライクフォースを放映しようと思った理由はなんですか?

コール　CBSは昔からボクシングを放映していたし、MMAのコンテンツに興味を持っていたんだ。それでエリートXCと契約、放映を始めていたんだけど、ご存知のとおりエリートXCは残念な結果となってしまった。

——経営母体であるプロエリート社の倒産により、活動停止してしまいましたね。

コール　ただ、それと並行して、我々の子会社でもあるケーブルテレビ局SHOWTIMEがストライクフォースと契約したこともあって、「今後CBSがMMAを扱うのであればストライクフォース」という自然な流れになって、その可能性を話し始めてたんだ。その交渉を続ける中で、ストライクフォースが世界最強のファイター、エメリヤーエンコ・ヒョードルと契約したこともあり、そのヒョードルの試合を全米ネットワークで放映するということが、CBSがMMAビジネスに戻るきっかけとなったんだ。

——では、かなり「ヒョードルありき」の部分があったんですね。

コール　そのとおり。全米生中継にゴーサインを出すための大きな後押しになったよ。

——今回CBSでは、ストライクフォースを一般視聴者に広めるために、どんなことをしてきましたか?

コール　さまざまな宣伝活動をしてきたが、とくに今回はヒョードルを神話的な存在として全米ネットワークに乗せてプロモーションを行なったんだ。もちろん彼の存在を知っている人はMMAファン以外にはいないだろうから、不安はあったよ。でも、逆にミステリアスな存在として、番組を観たくなるように仕向けようとしたんだ。そして対戦相手のブレット・ロジャースについては、ワークラスから這い上がって成功をつかもうとしている、まさにアメリカ的なストーリーの持ち主だからね。そこを大衆に売り込んできたんだ。

——神話的な世界最強の男に、ブルーカラーがアメリカンドリームのために挑むという図式ですか。

コール　そのとおり。そうすれば、神秘的なヒョードルにも興味を持つし、ロジャースにも思い入れを持ってもらえると思ったんだ。今後は、さらにMMAというスポーツが一般に浸透するために必要なことはどんどん行なっていく予定だよ。

——正直、まだまだ一般市民のMMAへの理解は低いと思いますが、たとえばMMAのどういった面をアピールしていく予定ですか?

コール　MMAはスポーツであり、選手たちは素晴らしいアスリートたちなんだということをアピールしていきたいと思ってる。具体的にはテレビを観ているファンが、友だちに「CBSでやってるストライクフォースを観てごらんよ」と言わせるような環境にしたいんだ。情報を伝える手段として、テレビや映画を観るというのは、一番わかりやすいからね。今回もCBSのテレビネッ

トワークはもちろんのこと、ラジオや新聞、インターネットという媒体

ビジネスマンだ。いま我々にとって重要なことは、UFCを意識するよ

討論の余地はあるということだよ。
——MMAを地上波放映し、視聴率

——以前、CBSが放映していたエ

を放映する立場としてもいちファ

きたが、とくに今回はヒョードルを

からね。今回もCBSのテレビネッ

トワークはもちろんのこと、ラジオや新聞、インターネットという媒体を通じて宣伝してきたんだ。

——ロシア人のヒョードルをアメリカの視聴者は興味を持つと思いますか？

コール　もちろん！　まるで『ロッキー4』のようじゃないか（笑）。考えただけで興奮するよ。ヒョードル自身、ミステリーに包まれているし、とてつもなく強いファイターだ。ただ、『ロッキー4』のドラゴと違うのは、ヒョードルは悪役じゃないこと。そして、ブレットはそれこそ『ロッキー1』のときのロッキーのように、アメリカンドリームをつかもうとしている、尊敬できるアスリートだ。今回の試合はみんな、どちらに勝ってほしいではなく、どちらにも勝ってほしいと思って観るんじゃないかな。

——今回のストライクフォースと同時間帯に、UFCが名勝負選を無料放映していますが、こういった妨害についてどう思いますか？

コール　UFCの妨害は今回が初めてではなく、毎回、我々（CBS&SHOWTIME）の試合があるときには同じように無料放映してるからね。そして、裏番組で無料放送をするというのは、ビジネスの観点から理解できることだし、しょうがないよ。UFCは素晴らしい団体だし、ダナ・ホワイトはとても優秀なビジネスマンだ。いま我々にとって重要なことは、UFCを意識するより、自分たちのショーを通じてMMAがスポーツとして観衆に受け入れられるよう良いものにすることなんだよ。

MMAを地上波放映するために〝色物〟が必要だとは思わない

——全米ネットワークでMMAを放映するうえで、ネックとなる部分はどこですか？

コール　やはり全米だと地域によっては文化が異なるからプロモーションをするうえで受け入れられない可能性はあるんだ。でも、試合自体はCBSのネットワークでは同じ内容で放映しているし、今後も全米を通して同じプロモーションをしていく予定だよ。

——一般視聴者からMMAという〝バイオレンス〟を放映することへの抗議はありませんか？

コール　ほかのスポーツを見てごらん？　アメリカ最大のスポーツであるフットボールは〝バイオレンス〟だし、アイスホッケーだってそうだろう？　バスケットボールだって観る人は観るし、観ない人は観ないだけだよ。それに、いまだってたくさんの人が「MMAはボクシングよりもバイオレンス性はない」って主張してるだろう？　とにかく討論の余地はあるということだよ。

——MMAを地上波放映し、視聴率を獲得するには、キンボ・スライスのようなモンスター、フリークスは必要不可欠だと思いますか？

コール　いや、全然そうは思わないよ。我々にはヒョードル、ジェイク・シールズという世界でベストのアスリートがいるんだよ。彼らがベストのパフォーマンスをしてくれれば、必ず視聴者は目を向けてくれる。これはどんなスポーツでも同じことだよ。

今大会の前は、全米の視聴者には“無名”の存在であっただろうヒョードルとロジャース。しかし、CBSでの全米生中継後は、その知名度が跳ね上がったに違いない。CBSはヒョードルの次戦も放映すると言われている。

——かつてCBSでのエリートXC中継で人気を博したキンボ・スライスが、『TUF10』に出演していることについてどう思いますか？

コール　キンボは我々が放映してるときも良い視聴率を稼いでいたし、いまでも視聴者からの人気はあるようだね。ぜひ、今後とも成功してほしいし、MMA人気向上に貢献してほしいよ。

——以前、CBSが放映していたエリートXCが失敗した理由はなんだと思いますか？

コール　一言で言うのは難しいけど、結果として彼らはMMAのプロではなかったということだと思う。しかし、ストライクフォースのCEOであるスコット・コーカーは20年以上もMMAビジネスに関わっているプロだ。エリートXCとは、まったく違う結果が出ると確信しているよ。

——CBSがストライクフォースのマッチメイクに介入する可能性はありますか？

コール　いや、その可能性はない。マッチメイクについては、その道のプロであるスコットおよびマッチメイカーに任せてあるよ。

——CBSやSHOWTIMEでは、『TUF』のようなリアリティショーの放映に興味はありますか？

コール　現時点では難しい質問だね。もちろん興味はあるけど、今回のショーがどのような結果になるかも踏まえて検討していきたいと思ってる。まずはリアルなショーを視聴者に観てもらって、必要があればそれをサポートする番組を、ということになるんだろうね。

——ダン・ヘンダーソンが、ストライクフォース参戦確実と言われています。このことについてどう思いますか？

コール　ダンはグレートファイターだね！　彼と契約の話をしていることはもちろん聞いているけど、まだ確定はしてないようだよ。もし、噂どおりストライクフォースに参戦してくれるようになれば、ショーを放映する立場としてもいちファンとしても非常に嬉しい事だけど、この件はスコットに任せてるんで自分が口を挟むことではないんだ。

——ストライクフォースがUFCを抜くためには何が必要だと思いますか？

コール　UFCは業界最大の素晴らしい団体だし、たくさんのグレートファイターを抱えてるよね。でも、すべてのグレートファイターを抱えてるわけじゃないんだよ。ダナはスマートな頭の持ち主で、人々を惹きつける方法を知っている。でも、スコットは彼らと違う方法でストライクフォースを成功させてきたんだ。そういうスコットのプロモーションの仕方を我々は尊敬しているし、全米ネットワークを最大限に利用してサポートしていこうと思っているよ。

——MMAはボクシングを超えるバトルスポーツになれると思いますか？

コール　間違いなくボクシングを超えるバトルスポーツになる可能性を秘めているし、すでに同じレベルまできてると思う。我々CBSはMMAがさらに大きくなる手伝いをしていきたいと思っているよ。

——では、今後のCBS&ストライクフォースの目標を聞かせてください。

コール　年間にスペシャルなショーをいくつかはさみながら、レギュラー番組の一つとして扱えるようにしたい。そうすることによって、広く全米の視聴者にMMAを浸透させていきたいと思っているよ。

【09年11月6日／米国イリノイ州シカゴ郊外、シアーズセンターにて収録】

会的なブランクを被らないようにするの
かって話をボクがしたら、青木もそれに対
分に可能性はあると思っていたわけでし
ょ。柔道がダメならアメリカっていう選
口ぞえしたことで、警察学校に入る前に青
木をマネージメントしていた人間が怒っ
面倒を見ないってどういうことって話じ
ゃないですか。メシ食わせてやれとは言

「ぶっちゃけ、UFC系が動いてるじゃないですか」

青木真也代理人が語る アメリカ参戦の可能性

長谷川匡生 公武堂社長

青木真也の柔術衣につけられたパッチを見るたびに「公武堂ってなんじゃいな?」と思っている人は多かったんじゃないでしょうか。公武堂とは名古屋の格闘技ショップにして、店主は青木真也の代理人を務めているんです! 今後の動向が世界中から注目されているワオ木さんですが、長谷川社長はどう考えているのか?

聞き手/ジャン斉藤

――長谷川さんは青木さんの代理人になるんですか?

長谷川 う~ん、そんなたいそうなものじゃないですよ。青木真也の苦情処理係。クレーム処理担当。エアバッグみたいな感じですね(笑)。

――あ~、いつ何時でも波紋を起こしますからね、青木真也は(笑)。長谷川さんはウェブ中継されてる『公武堂TV』なんかでも露出はされてますけど、『公武堂』は名古屋の格闘技ショップという扱いでよろしいんでしょうか。

長谷川 『公武堂』は武道用品のメーカーみたいなかたちから始まって、ボクで三代目。創業でいったら70年以上になります。

――へえ~、由緒正しいお店なんですね。

長谷川 祖父の時代からメーカーをやってまして、ボクの父親、二代目の途中から小売業中心になったんです。東京の人たちなんかは、たとえば青木が入場するときの柔術衣に『公武堂』のパッチがついてるから「あれはなんなんだ?」って思っていたでしょうね。

――青木さんとはいつ知り合われたんですか?

長谷川 もともと東海3県の近県で静岡なんかの話が聞こえてきたときに、プロとして活動してる選手に青木真也がいるってことは聞いてたことがあったんです。で、柔道時代にけっこうやんちゃなことをやってたって話も聞いてて。

――あ~、昔から評判はよくなかったんですか(笑)。

長谷川 その青木がプロになったって話は聞いてたんです。で、ある機会に青木とメシを食うことがあって、そのときにボクが思っていること、たとえば格闘競技者の環境の問題点ですよね。選手がいかに社

会的なブランクを被らないようにするのかって話をボクがしたら、青木もそれに対して意見を強く持っていて。あれは2004年頃の話かな。

──それは修斗のチャンピオンになる前のことですね。

長谷川　で、プロ柔術がたまたま名古屋でやってたこともあって、青木が試合に出るたびにスポンサードしていたんですね。そうして彼が大学を卒業して警察学校に入ってしばらく経ってから電話がかかってきたんです。最初は警察を辞めようかっていう相談だと思ってたんで「辞めちゃいけないよ」って言ってたら、もう辞めてたんですよ（笑）。

──相談するまもなく（笑）。

長谷川　「お父さん、お母さんも心配するから辞めちゃいけないよ」って言ったら、「いや長谷川さん、じつは辞めてるんです」って（笑）。

──そのとき青木さんは今後のことをどう考えてたんですか？

長谷川　青木もすでに言ってるようにUFCから親しい人を通じてオファーが来てる、と。

──たしか、いきなりBJペン戦のオファーだったんですよね。で、このファイトマネーならプロとして食っていけると思って警察を辞めたとか。

長谷川　そうなんですね。青木からすれば、警察の世界に入って柔道がやれると思っていたら、修斗の経歴が引っかかって試合すら出られない。やっぱり格闘家の自

「俺は選手の面倒見たりなんかできねえ！」青木は一度、捨てられてるんですよ

分に可能性はあると思っていたわけでしょ。柔道がダメならアメリカっていう選択肢があったんでしょうね。確かにアメリカって悪くないし、アメリカっていうのも選択肢の一つだと思ったんですけど、「いや、ちょっと待ってよ」と。ボクらでいうと榊原（信行）さんは地元なので、「PRIDEと話をしてみるか？」っていう話を振ったんですよ。ただ、ボクがそうやって

先月行なわれたUFCのゲームイベントにはアメリカからUFCの幹部が来日。イベント後の懇親会では「アオキは今後どうするんだ?」と話題の的になっていたそうな。

口ぞえしたことで、警察学校に入る前に青木をマネージメントしていた人間が怒っちゃって。

──あらら。

長谷川　ボクとしては、青木真也という素質のある子をアルバイトしながら格闘技をやらせるのはちょっとしのびないと思っていたんです。それが良いことか悪いことかじゃなくて、青木にはなんの不安もなく格闘技に打ち込んでほしいと思っていた。ただ、そうなると舞台はかぎられてくるじゃないですか。

──自然とメジャープロモーションになってきますよね。

長谷川　それでPRIDEさんとしても「ぜひ青木真也に上がってほしい」という話だったんですけど、元マネージャーから「おまえは何者だ!?」みたいな話になって。「おまえ、偉そうに首を突っ込んできやがって。おまえは青木真也がプロの世界に行って、もし失敗したり、それこそケガをして選手寿命が絶えたときにケツ持てるのか」っていう話をしてきたんです。ボクとしては、青木のマネージャーを気どっていたわけじゃないし、「じゃあ、そちらで青木の面倒を見ていただけるってことですか？」って聞いたら「俺はそんな選手の面倒見たりなんかできねえ！」って言ってきたんですよ。

──なんじゃ、そりゃ（笑）。

長谷川　「できないって、そうしたら青木は今後どうするんですか？」「知らねえよ、そんなもん。おまえが面倒を見ろ」「じゃあ預かります」という話になった。

──長谷川さん、売り言葉に買い言葉じゃないですか（笑）。

長谷川　ボクもそこは多少感情的になっちゃったの（笑）。だって、文句は言うけど面倒を見ないってどういうことって話じゃないですか。メシ食わせてやれとは言わないけど、いちおうそういう環境を作ってあげるとか就職を斡旋するとかしないとダメじゃないですか。だから青木は一度、捨てられてるんですよ。

──長谷川さんがUFCじゃなくてPRIDEの道を考えたのはどうしてなんですか？

長谷川　ボクはその当時、海外に出た選手の活躍も見ながら純粋に感じていたことは、やっぱり日本のファイターが最後に戻ってくるのは日本だと思ったんですよ。でも、海外を主戦場にしていると、その日本に土壌が作れてるかどうかっていうのは凄く微妙なんですよね。海外で闘ってるのはもちろんトップファイターだし、アメリカで実績を残してる選手がいるのも事実なんですよ。もちろんボクは海外がダメだって言ってるわけではないし、海外は選択肢のうちの一つなんですよ。ただ、青木真也が選手を辞めても格闘技業界に残るとなった場合に、やっぱり日本のベースはしっかり作っとかないとダメだっていう気持ちがボクにはあったんですよ。

──引退後に日本で生活する以上は。

長谷川　そうなんです。で、日本にもちゃんとしたビッグプロモーションがあるじゃないか、と。「まずそこを経験してからアメリカに行っても遅くないんじゃない？」って。海外に行ってまったく言葉も通じない、名前も知られてないところでやるよりは、ちゃんとした受け皿がある団体でやったほうがいいんじゃないかって。あの子がちゃんとプロとしてやっていくには、修斗やDEEPがダメっていうんじゃなくて、せっかくビッグプロモーションがあるんだからそこを一回は踏んどくの

はいいことじゃないかっていう気持ちはあったし。で、そのときに、青木の先生である中井（祐樹）さんが凄く良いことを言ってくれたんです。「青木はPRIDEに就職したんだから間違ってないのよ」って。その話を聞いたときに、中井先生はホントわかってくれているなと思ったんですよ。ボクも青木をPRIDEに就職させたつもりだったんです。ボクはその当時のPRIDEであればまず間違いなく、青木がプロとして成長するだろうと思ったんですよね。

――でも、その直後にフジテレビショックがあったじゃないですか。

長谷川　ありましたねぇ（苦笑）。結局、紹介した会社が潰れちゃったわけですからねぇ。PRIDE消滅後は、試合のあてがないのに青木も練習するしかないし、ボクが何かしてあげられるかっていったら、ホントに面倒を見るだけですよ。「もしもお金が途切れても、ウチがお金は出すから心配するな」って。やっぱり安心してトレーニングできる環境っていうのは、当然トレーニング場の環境もあるけど、やっぱり精神面での安定感も必要だと思うんですよ。あとは選手が自分の置かれた立場を自覚して、いかにストイックに練習する気持ちがあるかどうかだけなんです。その信頼関係が青木とボクのあいだにはあるんで。たとえば青木は「社長に生活の面倒見てもらってるから、いいや飲みに行っちゃえ！」っていうタイプじゃないでしょ。

――そこは凄くストイックですよね。そのあいだにほかのプロモーションからオファーはなかったんですか？

長谷川　ぶっちゃけて言えば、やっぱりそういう声やお誘いはありましたよね。そりゃもういっぱい。

――いっぱいありましたか（笑）。

長谷川　大なり小なりかかわらずありましたよ。でも、『武士道』でデビューさせてもらって「青木、頑張れ！　ワッショイ！　ワッショイ！」ってやってきた人たちが、なんとか努力しようとしているあいだはやっぱりあっち行ったりこっち行ったりという感じじゃなかったですよね。だからそういう意味でいったら『やれんのか！』が実現したときは嬉しかったですしね。

――でも、青木さんって、発言も行動もかなりフリーダムな人だから、長谷川さんからすればけっこう大変じゃないですか？

長谷川　確かにね、最近まで「青木真也ってこうあるべきじゃないか」っていうのをボク自身が持ってたところがあるんです。でも、青木真也の価値観はどこまでいっても青木真也の価値観なんだなって。青木は青木の一番やりたいやり方をやればいいんだ。べつにカッコつけるわけじゃないけど、それのためにボクが頭を下げてすむことがあったらそれでいいんだって。青木はもう自分で自分の好きなことをやればいいんですよ。好きなことを言えばいい。だから「ムエタイ、おもしろいでしょ？」って言ってもいいんですよ。

――それが青木真也なんだからしょうがない。

長谷川　さすがにね、あのときは葛藤があったんです。

――さすがにありますよね（笑）。

長谷川　そりゃそうですって！（笑）。お客さんにブーイングされる青木真也っていうのがもの凄く納得できなくて。「こんだけのことをやってて、あの一言でブーイングされるってどういうことよ？」っていう不満が自分の中にあったんです。でも

青木真也代理人が語る
アメリカ参戦の可能性

ウェルター級GP参戦は最後まで反対でした。DREAMをやめて海外に行こうかって

考えてみたら、ボクらは好きで青木を盛り立ててるわけだし、好きで青木と一緒にいるわけだから、打算的なものでどうだとか駆け引きしてるわけでもなんでもないので、もうとことん付き合っちゃえばいいんじゃないかって自分の中でもう整理しちゃえたんですね。

――でも、じつはウェルター級GP参戦を最後まで反対したのが長谷川さんなんですよね？

長谷川　それは警察学校を辞めたときとは真逆のことで、「青木、DREAMをやめて海外に行こうか」って。

――ダナ・ホワイトの胸に飛び込もう！（笑）。

長谷川　ボクも海外に行ったからってべつにどうだって話じゃないんです。あのときは大人の都合で青木にそんなことさせてていいのかっていう葛藤があったんです。でも、じつは青木のほうが腹が据わってたんですよ。「しょうがないですよ。これ仕事だもん」って。そこまで青木が言うんだったらボクもとことん青木の流れに付き合っていけばいい話なんで。

――一回目のカルバン戦も大変だったんじゃないですか？

長谷川　青木が腕を吊って控室に帰ってきた時点で、4月20日の後楽園ホールを押さえたらしいですからね。

――ダハハハハ！　幻のワンマッチ興行プランですね（笑）。

長谷川　「試合が終わったばかりなので、ちょっと待ってください！」って話なんですけど（笑）。

――青木さんって、けっこうな無理なオファーが多いじゃないですか。よくトラブルにならないですよね。

長谷川　それはですね、職業格闘家として最終的に青木は出された仕事に対して凄く前向きな受け止め方をするんですよ。選手だから当然プレッシャーもかかるし、ナーバスになると思うんです。だけどボクは青木のそういう姿がわかってるから、ボクは逆にいうと、揉めるポイントを探すよりも落としどころを探したほうが早いんです。それはね、ボクの器量がどうだっていうよりも最終的に青木がそういう姿勢でいてくれるからボクが話できるんですよ。だってもしも青木が「冗談じゃねえよ、1億持ってこいよ」って話になったらオレ、○○さんと変わらないもんね（笑）。

――ダハハハハ！　ところで大晦日の川尻戦のオファーは来てるんですか？

長谷川　まったくないですね。

――え～、まだないんですか！　さすがDREAM（笑）。

長谷川　何も話がないから気持ち悪いんですよ（苦笑）。

――ファンのあいだでは「大晦日が終わったら、青木はアメリカに行っちゃうんじゃないか」みたいな話がありますけど。

長谷川　ぶっちゃけた話をすれば、もうUFC系が動いてるじゃないですか。

――渋谷でやったゲームの発表イベントのときもそんな話があったそうですね。

長谷川　もし青木が海外に行かなきゃいけない事情になったらそのときに行けばいいことであって、これは青木とも話して

か。だからそういう意味ではボクらはビジネスライクっていったらまたヘンな言

――いまの青木真也は、世界と日本をつなげる存在ですからね。

青木はチャンピオンになっても格闘技界にまだまだ返せていない

けない事情になったらそのときに行けばいいことであって、これは青木とも話してるんですけど、まだまだ日本の格闘技界に返せてないことがいっぱいあると思うんですよ。それはマスコミの皆さんしかり、青木真也っていう素材を楽しんでくれてる人たちに対してボクは返せてないと思うんですよ。青木真也もみんなに何かを返したいって話があって、「ベルトを獲ることで返したい」って言ってたけど、それでもまだ返せないと思うんですよ。

——まだまだ。

長谷川　極端なことを言えば、現役でやってるうちは返せないんですよ。せめてどうすればいいかといえば、みんなが一番喜ぶ場所で闘うことです。そのときにアメリカが選択肢ならアメリカですよ。日本が選択肢なら日本ですよ。だって青木真也が海外に行って日本のＭＭＡ人気が落ちるんだったら、青木が帰ってきたとき焼け野原を見ることになるんで。それが彼にとって幸せかどうかって話だけですよ。それをボクが冷静に見ますけど、最終的にジャッジするのは青木です。そこで冷静にいろんな人の意見を聞くことはあるかもしれないです。だからときには好き嫌いに関わらずＵＦＣの人間とも会わなきゃいけないかもしれないし、ＤＲＥＡＭさんともお話ししなきゃいけないかもしれないし、その他のビッグプロモーションと話をすることがあるかもしれないです。でも、青木はＤＲＥＡＭさんに対して後ろ足で砂かけるつもりはまったくないんで。

——それこそ日本の基盤をぶち壊すことになりますよね。

長谷川　それが職業として格闘家をやってるということだと思うんですよ。やっぱり揉め事ってビジネスでいったら最悪なんですよ。関係を切るなら必ず円満に「じゃあまたご縁があったらしましょう」っていう話であったりとか、「今回はご縁がなかったんで、また次回、お願いしますね」っていうのがビジネスじゃないですか。だからそういう意味ではボクらはビジネスライクっていったらまたヘンな言い方になっちゃうかもしれないですけど、プロ格闘家っていうザックリした言い方じゃなくて、職業、生業としてる格闘家としたときに揉めるんじゃなくて、お互いに探し合う話し合いがいいんですよ。でも、この業界ってだいたいは「テメエ、この野郎！」って話でしょ。

——くだらないですよね。

長谷川　そうでしょ。それってボクはあまりクレバーじゃないんじゃないかなと思っちゃうんですよ。たとえばヘンな話だけど「あいつは使うな」とか「こいつを出すんだったらウチは出さないぞ」っていう話ってどうなんだろうって思っちゃうんですよ。

——そんなことやっても自分の自尊心を保つだけですもんね。

長谷川　それって凄い小さい世界観じゃないですか？　しかもまったくファン不在だし。チケットを買ってくれる人や応援してくれる人たちが不在のところでそんなもんでジャッジされていいのかっていう。だからボクは逆にいうと、青木がＵＦＣって言ったのはＵＦＣのライト級にも素晴らしい選手たちがいるから言っただけのことで、ＵＦＣに是が非でも出たいってわけではまったくないんですよ。ＵＦＣにそういう選手がいることも事実だし、青木もグローバルな意味合いでＭＭＡを考えたときにＵＦＣの財力に選手が集まってきてることは事実だから。率直にいうと読売ジャイアンツみたいなもんじゃないですか。そういう中で、青木真也がＤＲＥＡＭのライト級にいることに価値がないかっていったらそうじゃないと思うんです。

——いまの青木真也は、世界と日本をつなげる存在ですからね。

長谷川　ＵＦＣに行ったらＵＦＣで実績を残すかもしれないです。だけど、青木が帰ったときに日本のＭＭＡがどうなってるかっていう話ですよ。そこに焼け野原しかないんだったら、ボクはＵＦＣには行かせないですよ。ファンとかマスメディアの方々が「青木はＵＦＣに行ってＵＦＣの連中を全部潰すしかない。日本のＭＭＡを維持するためにはそれしかねえんだ」ってなったらみんなの後押しだから行くかもしれないですね。でもそうじゃなかったら、いまＤＲＥＡＭさんのベルトを巻かせてもらってる以上はね。ボク、この前ちょっと複雑だったのは、青木がベルトを獲って リング上で「返すことができました」って言われたときにちょっと寂しくなっちゃったんですよ。

——まだ返してない、と。

長谷川　いや、そんな早く返してもらっても困るし、オレの手元を離れてってもらっちゃ寂しいよ、っていう（笑）。なんか娘を嫁に出すみたいな。奇しくも誰かも「娘を嫁に出す」って言ってましたけど、ボクはそういう意味じゃなくて、青木が育っていく過程にボクもとことん「いいよ、もう社長は」って言われるまで付き合おうと思ったんですよ。そういう関係です。だから青木の海外の問題とかは時が判断することであって、ボクらがどうのこうのっていう話じゃないです。いまは皆さんの後押しだったり時代の要望がなければボクはどうのこうのっていう感じではないし、青木もそうだと思いますね。

——よくわかりました！　今後も青木さんを盛り立ててください！

【09年11月某日／都内某所にて収録】

名古屋に行ったら公武堂でお買い物だ！ どうしても行けない人はウェブから注文！
お金がない人は公武堂TVを観よう!
公武堂／愛知県名古屋市中区大須3丁目5-15
TEL.052-241-2511（代表）URL http://www.koubudo.co.jp/shop/
公武堂TV→http://www.stickam.jp/profile/koubudotv
（毎週月曜日23:00～）

"I編集長の遺伝子"をシカゴで発見！

真の殺しを持つ男

ジョン・コロシはストライクフォースにいた！

「殺し」という言葉をご存知だろうか。「殺し」——。それは"活字プロレスの始祖"であり元『週刊ファイト』編集長の井上義啓氏、通称・I編集長が生み出した最重要ワードである。

I編集長といえば、本誌でも長年にわたってご登場いただいたマット界の大提言者で、また「プロレスは底が丸見えの底なし沼」や「バード（バーリ・トゥードの意）」など、数々の名文句を生み出したことでも有名。「殺し」はその中でもI編集長の十八番であり、I編集長自身、殺しとは「殺気と恐怖を併わせ持った試合」のことを指す、また「殺しを持っている人物は力道山、前田日明、長州力の3人だ」と語ったこともあるのだ。

しかし、じつはもう一人、「殺し」を匂わせる究極の人物に、我々は出会ったことがあるのだ。それがジョン・コロシである！　……え？　名前が一緒なだけじゃないかって？　いや、それだけも殺し幻想は充分すぎるのだ。

そのジョン・コロシだが、本誌との出会いは06年8月の格闘技イベントMARS。その日、コロシはネックロックで一本負けを喫していた。しかも、リングインする際になぜかショーツを穿き忘れるという、「殺し」とはほど遠い、うっかりした一面ものぞかせていたのだった。

試合後のインタビューでは、我々がI編集長という人物や「殺し」について説明すると、「今日はオレに"殺し"がなかったから負けたんだろうな……」と、コロシはしきりにうなだれていた。しかし、その一方で「じつは、オレにはヒョードル並みのパウンドが打てるんだ」と、殺しの片鱗をのぞかせてもいたのだ。

そんなコロシに『kamipro』が制作したI編集長の殺しTシャツをプレゼントすると、コロシは「これからはこのTシャツを身に着けて殺しを磨く！」と固く誓ってくれたのだった。

それから3年、すっかりその存在を忘れていたが、なんと今回のストライクフォースにコロシが参戦しているではないか！　その情報は『kamiproドットコム』のフォトニュースで初めて知ったのだが、3年ぶりに見たコロシの姿はタトゥーが身体中を這うように入っており、以前にも増して殺しのオーラを帯びて見える。さすがI編集長の遺伝子、日々殺しを成長させてきたというわけか。

といいつつも、今回の結果も判定負けだ……。どうやら、対戦相手に試合をコントロールされ、得意のパウンドも出せなかったようである。やはり、コロシには「殺し」はないのだろうか。

いや、コロシのプライドのために言っておくと、彼の戦績は11勝6敗。たまたま我々が注目した試合で負けているだけで、やはり勝ち星が先行する有望なファイターには違いない。真の殺しが花開くのはまだこれからということか。

神出鬼没なコロシだが、次こそは殺しをまとったその姿を試合で見せてほしい。頑張れ、コロシ！　（文／松下ミワ）

以前、インタビューした際に、殺しTシャツをプレゼントし、着てもらって撮ったのがコチラの写真。おそらくコロシがインタビューを受けた媒体は、全世界でも本誌だけだろう。

Dynamite!!と戦極ドッキングで
夢のカード続出の予感!

ドン・キホーテの安田隆夫会長

ありがとー!!

谷川　うふふふふふふふふ。
——なんですか、いい大人が昼間から。

谷川　……そうなの？　なんかそれはぜんぜんピンとこないけど。だって、ヒョー

いだなんて。許せないよぉ!!
——あ、スッパ抜かれたことは問題ない

コロシアムの会場予約をキャンセルとしたという噂が流れてましたが、『戦極』の

大晦日、サダハルンバの黒魔術炸裂！

Dynamite!!でDREAM vs 戦極やります！

FEG代表

谷川貞治

11月半ばになってもほとんど音沙汰なし状態だった大晦日が、一気に動きだした！
そのいまだかつてないサプライズを、"仕掛人"であるサダハルンバに直撃！
マット界はあと5年は生き残るぞー！

聞き手／ジャン斉藤

谷川　うふふふふふふふふふ。
——なんですか、いい大人が昼間から。
谷川　いやあ、ボクって頑張ったよねぇ。
——ダハハハハ！　いきなり自画自賛ですか（笑）。
谷川　ちょっと、今回くらいは『kamipro』もほめてよ。
——まあ、ウチはK—1の悪口しか言ってないですからねぇ。今回の件でちょっとだけ谷川さんの株が上がったと思いますよ。
谷川　ええっ、ちょっとだけ!?
——……またすぐ下がると思いますけど。じつはそろそろ本誌のほうで2009年のMVPを募集する時期なんですよ。
谷川　あ！　もしかして、ボクも候補に入ってるの？
——どうなんですかね。いつもワーストMVPのほうには入ってるんですけどね（笑）。
谷川　んあ〜。でも、もしかしたら大逆転になるかもしれないよね！　ちなみに、それって2000年代のMVPとかもやるの？
——いや、いつもは年間のMVPだけですね。
谷川　そうなんだ。でも、もし2000年代のMVPも選ぶんだとしたら、ボクは魔裟斗くんかサクちゃんあたりが1位だと思うね。ボクの中では、ボク以外では文句ナシに魔裟斗ですよ。
——いまファン投票したらヒョードルやミルコになると思いますけど。

日本のMMAが非常に元気がない中で二つに分かれて大会をやってもダメ、と

谷川　……そうなの？　なんかそれはぜんぜんピンとこないけど。だって、ヒョードルなんて何をしたのかわからないじゃない。簡単に言うと、負けなかっただけでしょ？
——あ、いまの発言で谷川さんの株がどんどん落ちてます（笑）。
谷川　えー！　絶対に魔裟斗くんだと思うけどなあ。
——まあ、無駄話はここまでにして、マット界を揺るがすビッグニュースが今日の『東スポ』で報じられましたね（このインタビューは11月12日に収録）。……残念ながら、裏一面扱いでしたけど。
谷川　し、失礼な扱いだよねぇ！（小鼻をピクピク膨らませながら）。
——ソックリさんを大々的に載せた「プレスリーは生きていた！」ですら一面だったのに（笑）。
谷川　こんなビッグニュースを裏一面扱いだなんて。許せないよぉ!!
——あ、スッパ抜かれたことは問題ないんだ（笑）。
谷川　いや、まだ『戦極』さんとは完全に話がまとまったわけじゃないから、こういうことをされるとホントに迷惑なんだけど。どうせだったらバーンと派手にやってほしいじゃん。
——そんなこと言ってて、じつは谷川さんが『東スポ』にリークしてたりするんじゃないですか？　読んだ感じでは『東スポ』が独走した印象は薄いんですけどね。
谷川　そんなことは絶対にありません（キッパリ）。だって、ボクだったら『東スポ』なんかに流さないもん。
——それはそれで失礼な話ですけど（笑）。もしかしたらこの号が発売されている頃には、すでに何かしら発表されてるかもしれませんが、もうすでに〝この件〟についてはいろんな噂が飛び交ってますよね。
谷川　そうですね。まあまあ、なんでも聞いてくださいよ。
——ズバリ言って、『Dynamite!!』と『戦極』とのあいだにいったい何が起こってるんでしょう？
谷川　えー、この本が発売されてる頃には何もなかったかのようになってるかもしれませんが……。
——そうなったらブッチギリのワーストMVPです！
谷川　現状の話をすると、大晦日に有明コロシアムで『戦極』さん、さいたまスーパーアリーナで『Dynamite!!』をやる予定だったのが、『Dynamite!!』の中で吉田秀彦vs石井慧の試合、それからDREAMvs『戦極』の対抗戦が行なわれることになりました。
——はっはー!!　『戦極』は大晦日の有明コロシアムの会場予約をキャンセルとしたという噂が流れてましたが、『戦極』の大晦日イベント自体がなくなるということですか。
谷川　おそらくそうなります。
——一部では大晦日にDREAMと『戦極』の対抗戦があるんじゃないかという噂もありましたけど、なぜそこで『戦極』が中止になるんですか？
谷川　まあ、そこはホントに『戦極』のオーナーであるドン・キホーテの安田（隆夫）会長の決断ですよ。今回の件でボクは何回も安田会長とお話しさせていただいたんですけどね。
——「安田会長の決断」といいますと？
谷川　つまり、安田会長というのは、総合格闘技の大ファンでもあるし、ボクなんかよりもよっぽど格闘技を愛している人なんだよね。
——まあ、谷川さんは選手の名前すら憶えないですから。
谷川　まあ、ボクはファンしか見てないからね。で、その安田会長が、日本のMMAが非常に元気のない中で、このまま二つに分かれて大会をやってもダメなんじゃないか、と。そういう思いがあって一緒にやることを決断してくれたんだと思います。
——安田会長の大英断だったということですか。
谷川　だからボクも「安田会長、このままでいいんですか？　やりましょうよ！」とお話をさせていただいたんですよ。ついては、ぜひボクとしては『Dynamite!!』と『戦極』を一緒にやらせていただきたいと、ひたすら頭を下げました。
——谷川さんが安田会長にお願いをしたわけですか。
谷川　うん。

11月12日の『東スポ』では、なんと「DREAMと戦極大みそか合体」と大々的（裏一面）に報じられた。正式に発表させる前の報道だが、いったいこの特大ニュースはどこから流出したのだろうか……!?

07年末、旧PRIDEスタッフとFEGが手を取り開催に至った『やれんのか!』。『やれんのか!』の場合は本当にイチからのスタートだったが、『戦極』は大会をキャンセルしての合体になる。それゆえに、開催に至るまでどんな障害があるのか、想像すると大変そうだ。

石井vs吉田のようなスーパーウルトラカードは何年に一度しか組めない

―曙さんを獲得したときは電信柱の陰に隠れて待ち伏せしていたけど、今回はドン・キホーテ本社近くの電信柱に隠れていた、と。

谷川　そうそう（笑）。安田会長が入ってきたところを捕まえて話をしましたよ。

―いつ頃から電信柱の陰に隠れてたんですか？

谷川　いや、それはホントに10月末のことですね。

―つい最近ですねぇ。しかし、なんでまたこのような行動に出られたんですか？

谷川　やっぱりいま、格闘技界がもの凄く盛り上がって、ビッグサプライズになるのが『Dynamite!!』と『戦極』の対抗戦だなと思ったからです。これしかない！　ただ、10月に『kamipro』のインタビューを受けたときはまったく頭の中には入ってなかったんだけど。

―だって「吉田vs石井がTBSで放送されることは絶対にない！」と言いきってましたもんね。最後に「もしかしたら『Dynamite!!』で実現しているかもよ、うふふふ〜」って言ってましたけど、完全にギャグだったじゃないですか。

谷川　完全にギャグだったよね。でも、そのギャグに本気になってやってみようって思ったから、こういうことが実現できたんだよ。やっぱりスーパーカードですからね、吉田選手と石井選手の試合は。視聴率も凄く獲れるんじゃない〜？

―……あれ、前回の取材で谷川さんは「石井vs吉田なんて魔裟斗くんに比べたら数字は獲れないよ！」って吠えてましたよね？　そこは載せませんしたけど。

谷川　（いきなり立ち上がって）い、いいかげんなこと言うな〜!!（怒）

―ダハハハハハハ！　ああ、すいません。そうですね、言ってませんでしたね、そんな失礼なこと（笑）。

谷川　そんなこと言ってないよ！　だってボク、魔裟斗の引退と石井vs吉田で紅白超えると思ってるんだよ！

―ククククク。じゃあ、やっぱり視聴率のことを考えて今回の行動があったということですか？

谷川　そりゃあったほうがいいですよ。こんなスーパーウルトラダイナマイトビッグカード、何年に一度しか組めないからね。

―そこには来年のテレビ事情を含めての行動もあったんですか？

谷川　うーん、とりあえず来年のことは頭にはないです。だから格闘技自体が普通にやってても盛り上がらないいまの環境があるんで、そういう意味では何かしないといけないというのが大きな理由ですけどね。でも、安田会長に言われたんだよなあ。話をしてるときに何度も「谷川の黒魔術にかかっちゃいけない、いけない」って。

―んあ〜！　黒魔術は『kamipro』発のネーミングですから、それは安田会長が本誌を読んでる証拠ですね（笑）。

谷川　そうだよ。安田会長は『kamipro』の読者みたいだからね。

―安田会長、ありがとうございます！　今後もハッスル……、いや、頑張っていき

どうする！どうなる!? 大晦日！

DREAM vs 戦極炎の対抗戦！

	DREAM			戦極	
フェザー級	高谷裕之	所英男	山本"KID"徳郁	日沖発	小見川道大	金原正徳
ライト級	菊野克紀	川尻達也	青木真也	五味隆典	廣田瑞人	北岡悟
ウェルター級	桜井"マッハ"速人	マリウス・ザロムスキー		瀧本誠	郷野聡寛	
ミドル級	田村潔司	桜庭和志		ジョルジュ・サンチアゴ	三崎和雄	
その他	ミノワマン	ボブ・サップ	ゲガール・ムサシ	泉浩	吉田秀彦	石井慧

ますので、できれば『kamipro』どころかウチの会社自体を丸ごと買ってくださいっ!!

谷川 できればK−1もお願いします（小声で）。

——何を言ってるんですか、いったい（笑）。しかし、今回の件って谷川さんの中で勝算はあったんですか？

谷川 勝算という話になると、安田会長の中に1パーセントでもやる気がなかったらボクと会わなかったと思うんですよ。ボクは会ってくれた時点でもう勝算はあると思いましたね。

——あ〜、なるほど。

谷川 そこからは安田会長との話し合いだったんだけど、ハッキリ言って安田会長はね、いままで交渉してきたどのファイターや関係者よりもぜんぜん面倒くさい最強だったよ。

——安田会長、最強っ!! やっぱりあそこまで財を成した方だから、そういう面は当然あるでしょうね。

谷川 やっぱ凄いわ！ こんなにコテンパンにやられたことはなかったもんね。もうぜんぜん敵わないですよ。

——ただ、1パーセントでもやる気があればという話でしたけど、『戦極』からすれば、有明コロシアムで普通に開催したほうがいろいろ面倒事は避けられたじゃないですか。どうして谷川さんの〝黒魔術〟に乗ってきたんですかね。

谷川 それはまあ安田会長に直接聞いてみたほうがいいと思うんだけど、やっぱりいまの格闘技界ってあちこちに分散していても、いいことは何もないと思ったんじゃないかな。それだったら一つに集結して組んだおもしろいカードを安田会長自身がファンとして〝観たい！〟と思ったんだろうね。

——だったら、ついでに『ハッスル』も混ぜてくださいよ。

谷川 （無視して）だからこそ安田会長は本当に凄いんですよ！ 5年後、10年後の格闘技界を考えると今年が最後のチャンスになると思ったんでしょう。ボクらとしても、一番のポイントになったのは、やっぱり吉田vs石井という最高のタマが『戦極』さんにあったことなんです。もしこのカードが実現していなかったら、DREAMvs『戦極』もないだろうからね。

——吉田vs石井がなかったら、谷川さんが電信柱の陰で待ち伏せしなかったということですか。

昨年行なわれた赤坂サカスでの『Dynamite!!』開催発表記者会見の前に、じつは『戦極』とのコンタクトもあったとか。「今年は絶対に二元中継はない!」と言ってたサダハルンパだが、こうなると大晦日は何があるかわからない。

戦極はテレ東でほぼ決まってたという話だからこそこの決断は苦しかったと思う

谷川 うん。正直あまり視界に入っていなかった。ボクもね、いままでのどんな交渉よりも一番苦しかったもんね。03年の曙参戦とか、07年のK−1と旧PRIDEスタッフの大連立とか、どの交渉よりも数倍苦しい闘いだった。まあ、それはお互いにそうだと思うけどね。

——これはあくまでも想像でしかないんですけど、安田会長が交渉に応じたというのは、『戦極』も『戦極』でこれ以上イベントを続けていくことには何かしら障害や問題があったということなんですかね。

谷川 『戦極』自体、ボクはしっかり観てないからよくわからないけど、やっぱり石井を取っただけじゃダメだってのは、安田会長もわかっていたでしょうね。

——この段階でいまだにテレビ局が決まってないという苦しさもあったんでしょうか。

谷川 いや、そこは聞くところによるとテレビ東京でほぼ決まってたという話だし、逆に決まってるがゆえに今回の決断は苦しかったと思いますよ。

——会場も予約している、チケットも販売している、テレビ決まっている。そこで今回のような決断を下すのはなかなか難しいですよね。

谷川 ホントに安田会長でしかできないことですよ。

——石井慧サイドも『Dynamite!!』で試合をするということは承知してるんですか？

谷川 そこはボクは直接しゃべってないからわからないなあ。ボクが話したのは、ホントに安田会長と『戦極』の幹部の人だけですからね。國保さんとも話してないですし。

——あ、國保さんとは話してない。なんか、そこも凄く複雑そうですね。

谷川 でもまあ、『Dynamite!!』にとってのビッグサプライズというのは、もうあらゆる面でやりつくしてるじゃないですか。でも今回は、おかげさまで魔裟斗引退だけでチケットが2万枚ぐらい売れてるんですよ。

——そんなに！

谷川 だから、興行的に何かをやる必要はとくにはないんだけど、やっぱり大晦日らしいサプライズというと、もうタレントが闘うとか、異種格闘技の大物が参戦するというのはやりつくしてるし、だ

このタイミングの意味とは!?
三崎和雄、GRABAKAから独立！

11月8日、マスコミ各社にリリースで三崎和雄のGRABAKA退団が報告された。大晦日前のこのデリケートな時期に、いったいなぜ!? 同リリースでは三崎のコメントはもちろんのこと、GRABAKAのボスである菊田早苗も「チームは離れても、三崎和雄をよろしくお願いいたします」とコメントしている。三崎といえば、5月に公務執行妨害の容疑で逮捕、起訴されたことを受け、『戦極〜第九陣〜』中村和裕戦以降、無期限謹慎中となっており、泉浩や横田一則のセコンド以外ではなかなか公の場で見かけないのが現状だ。はたして今回の退団が大晦日参戦への一つの動きなのか!? 今後も三崎の動きには要注目だ。

K－1とPRIDEが対立してた時代は対立することで盛り上がってた

から今回の件は、いま考えうる最高のサプライズだと思いますよ。それと、いまのマット界の現状って、またK－1とPRIDEが対立していた時代とは違うもんね。あのときはお互いが対立することで盛り上がってたけど、いまは対立しても何もプラスはないでしょ。だから、一緒にやることが最大の策なんですよ。

——交渉の過程の中で、『戦極』は開催のままお互いに選手の貸し借りをする案や、二元中継案のお話はなかったんですか？

谷川　もちろん出たけど、ゴールは最初からお互いにこれしかなかったんですよ。で、やっぱり二元中継というのはちょっと難しいんです。

——でも、はたから見ると、大会を中止してまで一緒にやるほうが難しそうに見えますけど。

谷川　でも、へんな話、中止してないほうがやりにくかったと思いますよ。というのは、有明コロシアムで大会は開催しているのに、放送だけTBSになるなんてありえないし、スポンサー問題もある。『やれんのか！』が二元中継できたのは、テレビもスポンサーも何もついていなかったからですよ。

——そう考えるとやっぱり中止しかないか。このドッキングによって『戦極』とDREAMの対抗戦をやるということはもう間違いないんですよね？

谷川　間違いないです。それはもう全面的に〝潰し合い〟の対抗戦をやりたいよね！

——おもしろくなってきましたねぇ！

谷川　それは誰が出るということじゃなく、ソクジュと試合が決まったミノワマン選手以外は全員候補ですよ。桜庭選手も田村選手もKIDくんも所くんもそうだしね。

——対戦カードも非常に気になりますが、その前に、谷川さんは『戦極』の選手の名前はご存知なんですかね？（笑）。

谷川　えーっと、聞いてますよ、いろいろと。

——じゃあ、どんな選手がいるのか、お願いします！

谷川　あのー……ライト級チャンピオンの、ひ、ひ、ひ、廣田（瑞人）選手？（小声で）。

——お、凄い（笑）。

谷川　あとは金原（正徳）選手でしょ。う〜〜〜〜と、それに横田（一則）選手とか……小見川選手がいいよというのはいろいろわかってきました。あと三崎（和雄）くんもいるしね!!（唯一自信満々に）。

——ああ、谷川さんが「モラルがない」とケチョンケチョンに大批判をした。

谷川　もうやめてよ、いいかげんなことを言うのは。

——いいかげんかな（笑）。でも、これはもうスタジアムバージョンが満員になるんじゃないですか？

谷川　いや、間違いなく満員になると思いますよ！　このままいってもホントにチケットなくなるよ。いまだかつてないぐらいの勢いだもん。

——皆さん、お買い求めはお早めに！（笑）。

谷川　だからボクらは今回の大晦日は絶対に成功させないといけないよね。ボクらプロモーター同士は仲良くして、逆に選手たちはいがみ合って格闘技を盛り上げてくれたら、あと5年ぐらいはいろんなことできるだろうし。

——これは谷川さんにお聞きすることではないですが、来年以降も『戦極』は行なわれるんですか？

谷川　もちろんやるでしょう。そこは大晦日が終わったあとの話し合いになると思うけど、対抗戦みたいなのは定期的にやっていきたいし、それがいいコンテンツになっていけばいいよね。

——このまま合併して新イベント設立というのはないんでしょうか？

谷川　それはないです。まあ、理想とすれば、セ・リーグとパ・リーグじゃないですけど、しのぎを削ってお互いに盛り上がっていければいいんじゃないかな。そういう総合の二大勢力図という感じでお互いにイベントと試合で選手を磨き合ってやれればいいなって。

——でもマット界って一つに集結しようというときでも、なかなか一つにならないじゃないですか。そういう心配ってないですか？

谷川　まあ、これをきっかけにまた格闘技界は大きく動くのは間違いないよ。いまはないだろうけど、そういうことも大晦日が終わったらいろいろ起こってくると思いますよ。とりあえずは大晦日。その先のことは考えてないよ。まあ今回は『kamipro』でも安田会長を表紙にしてくださいよ。

——表紙はさすがに難しいですけど、これからはドン・キホーテ以外で買い物はしませんよ！

谷川　ボクもドン・キホーテの歌が大好きだからね。格闘技ファンはみんな、ドン・キホーテに買い物に行け！　……そんなこと言ってて、結局、話がご破算になったりしてね。うふふふふ。

——ワーストMVPおめでとうございます！

【09年11月12日／都内・某ホテルにて収録】

今回のドッキングに成功したのは、ひとえに安田会長のおかげというサダハルンバ。しかし、サダハルンバをも圧倒する安田会長の交渉術というのは非常に興味深いぞ。

vs戦極対抗戦

大晦日、急転直下でDREAMと『戦極』の対抗戦実現の機運が高まっているが、対抗戦となると新鮮味あふれる試合が目白押し。どんなカードを組んでいいか、マッチメイカーも嬉しい悲鳴を上げそうだが、本誌はいち早くケータイサイト『kamipro Move』でアンケートを実施。ファンが選ぶ、DREAMvs戦極の観たいカードはこれだ!

構成／堀江ガンツ　撮影／乾晋也

1

新旧ライト級絶対エース対決
青木真也 vs 五味隆典

日本ライト級の新旧エース対決がファン投票1位!　PRIDE後期、日本人初のPRIDE王者として、日本マット界に軽量級を確立した五味隆典。対するはPRIDE末期に頭角を現わし、PRIDE活動停止後は、DREAMの大黒柱として、いまや日本が誇る世界のアオキとなった青木真也。UFCによる買収後の新生PRIDEで対戦が期待されていながら、その後はDREAM、『戦極』と違う道をいったことで実現しなかった夢のカード。現在、すでに五味は『戦極』を離れてはいるが、絶対に実現してほしいカードだ!

2

DREAMvs戦極ライト級現王者対決
青木真也 vs 廣田瑞人

青木vs五味に次いで僅差の2位となったのが、DREAMと『戦極』の現ライト級王者対決。廣田は青木の盟友であり、同じ極めの強さには定評がある北岡のサブミッション地獄をしのいで、得意の打撃でKO。見事に戦極ライト級王座を奪取したが、その打撃は青木をも粉砕するのか!?　もしくは青木が廣田を極めるのか!?　KOか一本決着必至のライト級頂上対決だ。

3

ミスターDREAMvsミスター戦極
川尻達也 vs 北岡悟

3位もライト級トップ同士の対決。両者ともチャンピオンではないものの、武田幸三戦、JZカルバン戦勝利や魔裟斗との激闘で、いまやDREAM人気ナンバーワンの川尻と、現在二連敗中ながらインパクト抜群の闘いとキモ強ぶりで戦極の“顔”である北岡。この二人の一戦は、チャンピオン同士の闘いに勝るとも劣らない、緊張感あふれる試合になることは確実だ。

4
サブミッション日本一決定戦
青木真也vs北岡悟
日本マット界の寝技頂上対決。普段はDEEP道場でともに切磋琢磨する仲の二人だが、ライト級の頂点をきわめるためには、避けては通れない対戦か。同じサブミッションでもパワーで一気に極める破壊的な関節技の北岡と、餌をまいて捕らえて仕留める青木のスタイルは、ある意味、水と油。はたしてどちらの寝技が上回るのか?

5
夢のミドル級スーパースター対決
桜庭和志vs三崎和雄
日本ミドル級のトップスター同士の一戦。PRIDE時代は桜庭がミドル級(現ライトヘビー級)、三崎がウェルター級（現ミドル級）と接点がなかったが、三崎は07年大晦日の『やれんのか!』で"魔王"秋山成勲を成敗し、大ブレイク。対する桜庭は秋山と因縁浅からぬ関係とあり、見えないトライアングルを感じさせる禁断の一戦でもある。

6
DREAMvs戦極"殴り者"対決
川尻達也vs廣田瑞人
DREAMライト級の"殴り者"である川尻と、戦極ライト級屈指のハードパンチャーである廣田の一戦。武田幸三をKOし、魔裟斗とド突き合った川尻の拳は、廣田をも倒すことができるのか? それとも廣田が総合の打撃で知名度に勝る川尻を食うのか?　男と男の殴り合い必至の一戦。大晦日のベストバウト候補となるだろう。

7
フェザー級の"神の子"vs戦極王者
山本"KID"徳郁vs金原正徳
DREAMフェザー級GPと7月のK-1 MAXでまさかの連敗を喫したKID。しかし、この男がフェザー級の主役であり、"上位概念"であることはいまだ変わらない。そのフェザー級のアイコンと、戦極フェザー級王者の対戦がランクイン。金原のリーチ差を利した打撃と、動き回る寝技は、驚異の爆発力を誇るKIDに通用するか?

8
好勝負必至! ウェルター級トップ対決
桜井"マッハ"速人vs郷野聡寛
10年にわたって日本の中量級を牽引してきたマッハと、UFCウェルター級トップ戦線でもまれてきた郷野のウェルター級日本人トップ対決。ファイトスタイルこそ違うものの、どちらもスタンド、グラウンドともにハイレベルな選手同士だけに、好勝負間違いなし。

9
実写版『ろくでなしBLUES』
高谷裕之vs小見川道大
これぞ実写版『ろくでなしBLUES』！ 日本を代表するケンカ魂の持ち主がリング上でタイマンを張る一戦。どちらも引くことを知らず、相手をとにかく叩きのめすスタイルだけに、フェザー級とは思えぬほド迫力で、殺気と血の匂いが漂う一戦となるだろう。

10
伝説のライト級頂上対決再現
川尻達也vs五味隆典
日本ライト級の夜明けとなった伝説の一戦。この二人の凄まじい闘いが、日本にライト級をもたらし、PRIDE武士道を作り上げ、それがいまのDREAMや『戦極』を作りだしたと言っても過言ではない。川尻が熱望するリベンジマッチ、はたして名勝負は再現されるか?

kamipro Move ユーザーが選ぶ

12.31『Dynamite!!』で観たい!!
DREAMvs

対抗戦に浮かれるK-1ギライの皆さま……

魔裟斗を忘れるな!!

DREAM vs『戦極』の団体対抗戦が行なわれる可能性が濃厚とのことで、ここ数年では一番の盛り上がりとなること間違いナシの今年の『Dynamite!!』。

対抗戦はもちろん楽しみではあるが、忘れちゃいけないのが、今年の『Dynamite!!』で、何よりも早く発表されていた注目カード、魔裟斗の引退試合だ。

どれぐらい注目かというと、対戦相手の発表前から10万円の「VIP魔裟斗引退試合スペシャルシート」が当初予定の40席が数分で完売。急きょ100席に増設するも即行で完売（※これだけでチケット売り上げ1000万円！）するぐらい魔裟斗の引退というのはプレミアムでダイナマイッ！　な出来事なのだ。

今年の4月1日に行なった引退発表会見で大晦日での引退を表明していた魔裟斗は7月には「ファンの望む試合」として川尻達也と対戦し、激闘を繰り広げたのは記憶に新しいが、その会見で魔裟斗は引退試合の相手は「今年の（K—1MAX）チャンピオン。最強最高の選手と闘いたい」とアピールしており、その言葉どおり10月の決勝大会でジョルジオ・ペトロシアンがぶっちぎりの強さで優勝を飾ると、谷川貞治EPの「もうちょっと考えたほうがいい」との声も振りきり、自らペトロシアンに「大晦日、空いてるかな？」と対戦要求。ペトロシアンもこれを承諾し、両者の対戦がほぼ内定……していたのだが、大会翌日にペトロシアンの右手甲の骨折が判明。

診断の結果、ペトロシアンは全治3ヵ月で試合出場は不可能に。魔裟斗いわく「これも運命」と、かねてから引退試合の相手として望んでいたアンディ・サワー戦が11月12日に行なわれた会見で発表となった。

プロデビュー以来、6敗（※勝利は54！）を喫している魔裟斗が唯一、同じ相手に2度負けているのがサワー。ともにK—1MAX世界王者に2度輝いており、魔裟斗もサワーの強さは認めているが、これまでの2戦は1DAYトーナメントの準決勝、決勝で行なわれているため、「ワンマッチだったら絶対に負けない」と自信マンマンの魔裟斗にとっては最後にリベンジをはたしリングを去るというのが自らの引退の最高の花道だと、以前から筋書きを書いていたという。

この試合は通常のK—1ルールの3分3R制では決着がつかない可能性も高いとのことで、3分5R延長1Rの特別ルールで行なわれる。すでに川尻戦前からサワー戦を想定して練習していたという魔裟斗は「KOで勝って、2000年に宣言した『僕の時代が終わりました』と宣言したい」と、因縁の相手にリベンジを誓えば、一方のサワーも魔裟斗引退試合の相手になることを予感していたらしく対策はすでにバッチリ。

「その日は魔裟斗のファンも、そうでない人も、みんなが彼の応援をするでしょうから、完全に倒さないと判定で勝つことは難しいでしょう。魔裟斗、この世紀の一戦を盛り上げるためにボクは最高のヒールになろう。ボクはキミを絶対にKOする」と、お互いに完全決着を宣言しているのだ。

通常、引退試合といえば、勝負論は度外視したマッチメークとなる場合が多いが、〝カッコつけマン〟を自称する魔裟斗は最後の最後までガチガチの勝負論を見せつけたうえで、自らの最高の幕切れを演出をする腹づもり。もちろん、「シュートボクシングを背負って闘う」と明言しているサワーも、引退する魔裟斗に勝ち逃げを許す気など毛頭ない。

DREAM vs『戦極』の対抗戦が盛り上がれば盛り上がるほど、〝反逆のカリスマ〟魔裟斗の炎が熱く燃えたぎるのは確実。大炎上必至の今年の『Dynamite!!』、はたして、魔裟斗はやれんのか!?

業界の中枢から遠く離れて……

ターザン山本63歳「打倒・谷川」宣言！

大晦日に伝説のプロレスイベント

『夢の懸け橋』開催決定!!

ターザン山本がついに決起！　95年4月2日、『週刊プロレス』を発行するベースボール・マガジン社が主催し、新日本プロレス、全日本プロレスをはじめとした主要13団体が集結、東京ドームに6万人を集めて開催された『夢の懸け橋』が14年ぶりに帰ってくる。今回は会場を東京ドームから、新木場1stリングに変更。新日本、全日本といったメジャーではなく、どインディー10数団体が集結して、大晦日に開催される。ドームから新木場へ、メジャーからどインディーへ。いまのターザン凋落を見事に表現したこのイベント。なんでこうなっちゃったのか、ターザンと茶飲み話をしてきました。

聞き手／堀江ガンツ

――山本さん、ついに立ち上がりましたね！　どインディーを集めて大晦日に『夢の懸け橋』をやるとは(笑)。

山本　いまの俺にとって、これベストな立ち上がり方じゃない？

――べ、ベストですか！

山本　だって俺、一文無し人生だよ。ガ、ハ、ハ、ハ、だから。それを考えたらこれはベストですよぉ！　大晦日に『Dynamite!!』、『戦極』が開催される中で、それとは比較しようがない極小の新木場（1stリング）でしょ？　誰も注目してないところに意表を突くというのはさ、興奮するよねえ。打倒・谷川ですよぉぉぉ！

――新木場で「打倒・谷川！」を叫ぶわけですか……。

山本　あんなデカい会場で嘘っぽいことやりやがってさ。ハッキリ言って、現代は極小の世界にしか真実はないんですよ！　だから俺は大晦日、最もバカバカしいことをクソまじめにやってやるよ！

――ちなみに今回、どういった経緯で山本さんがこの『夢の懸け橋2009』に協力することになったんですか？

山本　突然、電話がかかってきたんだよね。誰だか知らないけど「『夢の懸け橋』を青年時代に観たプロレスラーが集まって、もう一度あれをやりたい。『夢の懸け橋』という名前を使いたいので、協力してもらえませんか？」と言ってきたんで、「おっ、そうか。東京ドームでやるのか？」って聞いたらさ、「新木場です」って。

――ダハハハ！「ドームでやるのか？」って聞く山本さんものんきで

新木場で
年末年始を生き抜け！

これは
〝年越し派遣村
プロレス〟だ!!

すね（笑）。そんなわけないじゃないですか！

山本　いや、電話の相手が誰だか知らないからさ。お金持ってる人かと思って。

――でも、結局は全然違ったわけですね（笑）。

山本　でもさ、『夢の懸け橋』を14年後にまたやるっていうのも『いちご白書をもう一度』みたいだな、と思って、おおいに喜んだんだよ。

――そんなきれいな話じゃないでしょ（笑）。ちなみにそのあと打ち合わせとかで、今回の運営側とは話し合ったんですか？

山本　話したよ。キャットファイトをやってる人だった。

――キャ、キャットファイトですか？

山本　それを運営してる人。おもしろいんだよ、キャットファイト。FMWにいたミス・モンゴル（Aky）もいたよ。あの女のコが30すぎなのに色気があってカッコいいんだよな。着てる服とか色彩感覚とか、センス抜群。キャットファイトのコーチをやってる人には見えないぐらい。思わず名刺を渡しちゃったよ。色気のある女性だね。

――もしかして、ミス・モンゴルにコロッといっちゃったんですか？

山本　いったねえ。一目惚れですよ！

――そういうことですか（笑）。下世話な話ですが、ギャラの提示はあったんですか？

山本　あったよ。

――おいくらだったんですか？

山本　…………（無言で指を数本立てる）。

――○万円。ロフトプラスワンのギャラみたいですね（笑）。

山本　それで「ちょっとさあ、いくらなんでもそれは低いんじゃないか」と言って、上乗せさせたよ。

――おっ、凄い！

山本　△万円上乗せさせましたよ。やっぱり俺がやる以上は、俺の媒体力と宣伝力で凄い効果あるじゃない。だから最初の○万円というのはさ、どう考えてもちょっと低いよな。

――まあ、確かに山本さんがこうやって出ることで、今回『kamipro』に一応4ページ載るわけですからね。

山本　でも「ちょっと待て、興行というのは水ものだぞ。もしかしたら客が入らなくて未払いになるかもわからない。だから手付け金として△万円よこせ」って今日持ってこさせたよ。

――手付金（笑）。いま格闘技界、プロレス界、"未払いブーム"ですからね。『夢の懸け橋2009』は『ハッスル』よりはちゃんとしてるんじゃないですか？

山本　そういうことだね。『ハッスル』はいい噂を聞かないんだよなあ。山口さんは元気にしてるの？

――半年以上会ってませんけど、元気ではないでしょうね。

山本　そうかあ。素人がこの時代に興行なんてやるもんじゃないよな。プロでもお手上げなのに。

――『夢の懸け橋2009』をやる前に、それを言っちゃ元も子もないでしょう（笑）。

山本　でもさ、今回はキャットファイトやってる責任者の人をはじめ、みんな根っからのプロレス好きだから「これはイケるな」と思った。

――参加してる皆さん、プロレス好きそうですよね。記者会見のあとに、なぜか山本さんが参加するレスラーに記念撮影攻めに遭うくらいですからね（笑）。

山本　ある意味、彼らは僕が『週刊プロレス』やってたあの黄金時代の孫弟子みたいな感じだな。どインディーに『週プロ』イズムが隔世遺伝してるんですよ！

――かたちを変えた一揆塾みたいな感じですか？

山本　いいねえ、それ！　今度、彼らをつかまえて「なんでおまえたちこういうことやってるんだ？」って取材して、どっかにそれを持ち込むか。この新木場を一つのドラマとして本にまとめるとかさ。妄想がどんどん広がってきたよ！

――まあ、いまテレビのノンフィクション番組なんかでも、ホームレスとか失業者、ワーキングプアとかばっかりですからね。

山本　俺もヤバいよな。現実的に俺もホームレス一歩手前だよ！

『夢の懸け橋2009』はかたちを変えた一揆塾なんですよおおお！

――じゃあ、今回の大晦日は「年越し派遣村プロレス」ってことでいいんじゃないですか？（笑）。

山本　いいな、それ。状況がきわめて近いよ。時代性があるし、こりゃやる前から谷川に勝ってますよぉぉぉぉ！

――新木場で炊き出しやってくださいよ（笑）。

山本　そうそう、炊き出しはやるべきだな！

――そういえば山本さん、家を取られるとか取られないとかって話はどうなったんですか？

大会プロデューサー、ターザン山本と『夢の懸け橋2009』出場選手たちの集合写真。"大物"リッキー・フジ、Aky（ミス・モンゴル）ほか、どインディーレスラーに囲まれて、なんだか嬉しそうなターザン。きっと居心地がいいのだろう。

山本　取られるよ。もうヤバいよ。

――それどんな状況なんですか？　ローンを支払ってないってことですか？

山本　そうそう。毎月のローンだけじゃなく、年に2回のボーナス払いもあるんだよ。そんなもん払えるわけないよ！　よくいままで払ってきたよ、20年間。

――ちゃんとボーナス月はボーナス分払ってたんですか？

山本　30数万円を3月と9月に払ってたよ。

――それはキツいですね。

山本　キツいよ！　そんなもんできっこないよ！　だからどうにでもなれ！ってね。家を取られたら、誰か俺を住まわせてくれる人いないかね？　これから転々と渡り歩かなきゃいけないよ、ネットカフェとか。

――では、今回の『夢の懸け橋』でお友だちを作ってください（笑）。規模がまったく違いますけど、95年にやった『夢の懸け橋』って実数で何人入ったんですか？

山本　5万人近く入りましたよ。

――実数でそんなに入ったんですか！

山本　そうだよ。それにボクたちは興行会社じゃないから、招待券がないじゃない。だからほとんど実券だよ！

――ほぼ実券で5万近くって凄いですね。

山本　でも、2階スタンドが3000円、その次が5000円、1万円、3万円だったから、たいした収益じゃないんですよ。

――でも4万枚以上売れたわけですよね？

島流しにされてたどり着いた新木場が俺にとって最後の最後の楽園なんですよ！

山本　相当経費がかかってるわけ。だってあのとき「3万3000枚売れないとペイできない」って言われたもん。

――凄いペイラインですね。3万3000枚売れるなんてこと、いまはほとんどないですよ。

山本　3万3000枚売れるってことは、平均単価1万円として3億3000万円だから。でも、13団体に参加してもらって、新日本、全日本にギャラ2000万円、残りが一律500万円でしょ？　それだけで、もう1億円近くになるじゃない。剛竜馬にも200万円払ったし。プロレスバカの試合に200万円ですよ！

――まさにバカな金の使い方ですね（笑）。

山本　で、会場費がもろもろ込みで1億円。それに設営費がかかるんだよ。しかも、13団体全部の控室を用意して、ホテルも用意して、出ていく金額がもの凄いわけですよ。

――それは金かかりますね。

山本　あとはルー・テーズを呼んだり、大木金太郎さんを呼んだりして、二人に200万円ずつ払ってね。飛行機代だってかかるしさ。馬場さんなんて、前の日、全日本が九州で興行やってて、6人タッグなのに大分から14人連れてきたからね。その飛行機代とか全部払わなきゃいけないんだから。だから興行というのは目に見える以外の経費が山ほどかかるわけですよ。

――なるほど。じゃあ、大成功に見えて儲けは少なかったんですね。

山本　でも、ベースボール・マガジン社は出版社なんで、事業部としては、ちょっとでもプラスになればいいわけよ。それに、その前にみちのくプロレスの大田区体育館の興行を200万円で買って、売り上げが2000万円以上あって、大儲けしたしね。

――ボロ儲けですね！　それでうまみを覚えてドームでやっちゃったわけですか？

山本　いや、ドームでやった理由は違うんですよ。そのときベースボール・マガジン社の若社長が、東京ドームの興行会社に「4月の2日、空いてますからおたくでやりませんか？」って言われて、人がいいから「やりますよ」って言ってしまったわけよ。で、先に場所取ってしまったわけよ。

――社長が勝手にドーム押さえちゃいましたか（笑）。

山本　ビックリしたよ！　なんのプランもないのにドーム押さえちゃってさ。「どうするんですか？」って聞いたら「新日本と全日本の交流戦やればいいんじゃない？」とか、事業部の責任者が言うんだよ。できっこないじゃない、そんなの！

――ダハハハ！　簡単にできるなら、両団体がとっくにやってますよね（笑）。

山本　無知ほど恐ろしいものはないわけよ。

――そして最終的には全女の日本武道館2連戦（96年）を買って大赤字を食らって。

山本　そう。全女のときは松永会長が「ウチが押さえた日本武道館2連戦、買い取ってくれないか？」って、事業部に言ってきたんですよ。松永会長はこのままじゃ大赤字食らうのがわかってたんだよね。

――もうあの当時は、女子プロブームが下火でしたからね。

山本　それなのに事業部は何も知らないから「じゃあ武道館の興行を買いましょう」って、買っちゃったんだよ。俺は「無理だよ」「失敗するよ」って言ったんですよ。で、これは絶対に失敗する、これは自分の業績に傷がつくと思ってさ。それが『週プロ』を辞める原因の一つですよ。

――たしか、あの武道館2連戦の直前に辞めたんですよね。

山本　逃げるが勝ちだ、みたいなね。だから俺は振り回されたんだよね。本体の『週プロ』の仕事をやってるときに、よけいな興行をやることによって時代に振り回されたわけだよ。そのとき、会社としては興行でいい思いしたからさ、それで調子に乗りすぎたんだよね。

――『夢の懸け橋』からメチャクチャになったわけですからね。ドームでやったことで、長州に睨まれて。

山本　で、あげくのはてにはさ、『夢の懸け橋』と同じ日にWARが後楽園でやってね。『週プロ』はどちらかというと反体制派のアウトローだったのが、ドームでやることでメジャーになっちゃって、WARを支持した『ゴング』がアウトローになったわけよ。立場が逆転して、『週プロ』が体制派になるという最悪のイメージができてしまったわけよ。

――それで求心力が急速に失われましたよね。

山本　メジャーになるとさ、プロレスファンって引くじゃん。マイナーなほうに心が揺れるじゃない。こっちは、いい迷惑だよ！

――で、それが遠因で『週プロ』を辞めて、いまこうなってしまったわけですね（笑）。

山本　どん底ですよ！　だから原点に返って、今回は最も小さなことをやってやるよ。

――14年経って、たどり着いたのが『夢の懸け橋2009』。

山本　島流しになって、流れ流れて一番小さな島にたどり着いて、俺はその極小の世界を、俺自身の最後の最後の楽園にしようと思ってる。ここが俺のラストシャングリア、最後の桃源郷なんですよぉぉぉ！

――では大晦日、新木場で頑張ってください。僕はさいたまスーパーアリーナに行かせていただきます。

［09年11月10日／都内・某喫茶店にて収録］

新旧『夢の懸け橋』比較

大会名	
『夢の懸け橋2009』	『夢の懸け橋』
日時	
2009年12月31日	1995年4月2日
会場	
新木場1stリング	東京ドーム
収容人数	
約300人	約5万人
参加団体	
格闘探偵団バトラーツ	新日本プロレス
VKF	全日本プロレス
リッキーフジ JAPAN TOUR	FMW
下田大作自主興行	UWFインターナショナル
鬼龍頭	リングス
COMBO	みちのくプロレス
DZW	藤原組
CPE	パンクラス
ピンクタイガーモンスター軍	IWAジャパン
西口DOOR	剛軍団
信州プロレス	全日本女子プロレス
	LLPW
	JWP

ターザン山本PRESENTS

『夢の懸け橋2009』

～大晦日プロレス祭り～

東京・新木場1stリング

12月31日（木）開場 17:00 開始17:30

チケット料金

最前列 4,000円／自由席 3,000円

お問い合わせ

夢の懸け橋2009実行委員会 TEL.090-8649-8861

おまえは誰だ!?

ワタシはココで闘いたい!

『戦極～第十一陣～』が

最後の"戦"になってしまうのか?

初の両国国技館進出となった11.7『戦極～第十一陣～』。
大晦日の『SRC』有明コロシアム大会につながるはずだった今大会だが、
ここにきて有明大会中止が濃厚となってしまった。
はたしてこれが最後の『戦極』だったのか? 両国大会翌日、大晦日出場候補選手たちに
意気込みをうかがったが、彼らの運命はいかに? そして、両国大会の休憩時間に突如現われ、
ハイテンションで去っていったリュウ・トクリはどうなるのか……。

大晦日が真のフェザー級GP決勝ですよ!!

11.7『戦極』で日沖発に判定勝ち！
大晦日に戦極フェザー級王座を懸けて金原正徳と激突へ！

小見川道大

今月のくそったれ節

本来なら戦極フェザー級GP決勝で当たるはずが、日沖のドクターストップにより実現しなかった小見川vs日沖戦が11.7『戦極～第十一陣～』で実現。小見川はこの幻の決勝戦で、僅差の判定勝ち。フェザー級GP決勝で敗れた金原正徳との対戦権利をついにつかんだ小見川はいま何を思うか。試合翌日に直撃した。

聞き手／堀江ガンツ　撮影／菊池茂夫　試合写真／乾晋也

――昨日は、日沖戦勝利おめでとうございます！

小見川　ありがとうございます。

――それにしても、リング上でまさか「小見川道大、くそったれ！」って叫ぶとは思いませんでした（笑）。

小見川　ハハハハ！

――やはりご自身としては、勝ったものの内容には納得いってない感じですか？

小見川　内容には納得いってませんね。でも、勝ったからいいかな、と。

――結果には納得いってるわけですね。では、「小見川道大、くそったれ！」っていうのは、どんな感情からの発言だったんですか？

小見川　あのときは、ホントに自分に対してのいら立ちですね。もっともっとできるのに。こんなもんじゃねえだろって。

――攻め込めるシーンでいけなかった場面とかがあったわけですか？

小見川　いくつかあったんですけど、なんせ俺、一週間前に脚をケガしちゃって、なんもできなかったんですよ。練習もできないし、試合中も思うように動けなくてストレス溜まってたんで。それで自分に対して頭にきて、マイクで叫んじゃったんですけど。

――「俺の身体、くそったれ！」と。

小見川　はい、クソーッ！　みたいな。気合いは入ってるのに身体が全然ついてこないなって。ただ、こんな条件の中で勝ったっていうは、一つ自信にはなりましたけどね。

――脚のケガっていうのは、どんな状態なんですか？

小見川　練習中にヒザの上を打撲しちゃって、尋常じゃない腫れ方をしたんですよ。いまも屈伸すらできない状況ですか

［11.7 戦極～第十一陣～］
東京・両国国技館
フェザー級ワンマッチ
◯小見川道大 vs 日沖 発×
（3R終了 判定 2-1）
身長差、リーチ差を活かし、アウトボクシングに徹する日沖をなかなか攻略できず、序盤、苦戦を強いられた小見川。しかし、ひたすら前へ前へ出て積極的に攻め込み、最終3ラウンドまで手を緩めず、僅差の判定勝ちをものにした。

脚のケガで屈伸もできない状態だった。もう今回は気合いと根性だけでしたね

らね。だから自分の体重支えられないんで、極力寝技は避けたんですよ。

――それで立ち技勝負だったんですか。どんな練習で打撲したんですか？

小見川　スパーリングでヒザ蹴りをやろうとしたとき、相手の頭とヒザの上が正面衝突みたいになっちゃったんですよ。脚に頭が突き刺さる感じですね。それで脚の血管が壊れたらしくて、真っ青になっちゃって。それでも「なんとか大丈夫だろう」と思ってたら、その夜、メッチャ腫れちゃって。脚は次の日も動かず、その次の日も動かず（笑）。

――結局、当日を迎えてしまった、と。それは焦りますね。

小見川　焦りましたよ。治療してもよくならないし。イライライラして、「ホントにこれで試合できんのかよ」って思ってましたから。だから、なんとか試合はやりましたけど、正直、ガードポジションとかとったとき、ここ（患部）にヒジでも落とされたら、もう終わりでしたよ。

――単なる脚へのヒジ打ちだけで悶絶してましたか。

小見川　バレてなかったから助かりましたけどね。だから、わかんないように、俺、トランクスの下にテーピングしてヒザまでのスパッツ穿いてたんですよ。

――そうだったんですか。

小見川　試合でアドレナリンが出てるから、痛くてもそんなにわかんなかったですけど、筋肉が動くかどうかが心配でしたね。ローキック一発で悶絶する可能性もありましたからね。ホント、いまだから言えますけど、バレなくてよかったですよ。

――じゃあ、寝技を捨てて立ち技勝負するしかない中で、あれだけのリーチ差がありながらアウトボクシングをされて、相当やりにくかったんじゃないですか？

小見川　やりにくかったですね。でも、そんなこと言ってられないんで。気合いッスよ、今回は。気合い！　試合内容もクソもなくて、最終ラウンドとかは、根性だけでしたね。

――試合後、日沖選手は判定に若干の不満も口にしていましたが、判定についてはどうですか？

日沖のドクターストップにより、敗者復活で勝ち上がった金原正徳と戦極フェザー級GP決勝を争った小見川。しかし、準決勝でのダメージもあり、1－2のスプリット判定で涙を飲んだ。次は両者同じ条件での決着戦が期待される。

小見川　いや、べつに。俺が判定するんじ
で」ってわけにいかないですよね（笑）。
――強いというより、うまいって感じで
小見川　次に勝ったほうがホントのチャ

小見川道大

サンドロだろうが日沖選手だろうが文句があるならもう一回やってもいいよ

小見川　いや、べつに。俺が判定するんじゃないんで。脚が動けば、もっとちゃんと勝てたのにっていう悔しさがあるだけですね。

――あと國保さんも試合後に言ってましたけど、けっこう試合前に日沖選手に対して痛烈な言葉を浴びせてたじゃないですか。あれもプレッシャーになったりしました？

小見川　あんなのプレッシャーになんないですよ。俺の言ってることは全部本音だし。でも、一週間前にケガしたときは、「ケンカ売っといて、できないっていうのもな……やるしかねえな」って。

――「ケガしたから、ちょっとケンカなしで」ってわけにいかないですよね（笑）。

小見川　前回の戦極フェザー級GP決勝で「2試合闘える身体作ってこい！」って言っていながら、こっちが闘う前から「できません」って言うわけにはいかないですからね（笑）。

――2試合どころか1試合闘う身体もできてねえじゃねえかって（笑）。

小見川　だから、もう気合いだけでしたね。

おみがわ・みちひろ■1975年12月19日、茨城県出身。柔道での輝かしい実績を引っさげ、05年にPRIDE武士道でデビュー。その後、UFCにも参戦し、その才能が『戦極』で開花。今年開催された戦極フェザー級GPでは、優勝候補を次々と下し、準優勝の戦績を残した。ネコ好きというオチャメな一面も持つ。168cm、65kg。

――実際に闘ってみた日沖選手の印象はどうでしたか？

小見川　強いと思いますよ。強いと思うんですけど、なんか……どうなんですかね？

――強いというより、うまいって感じですか？

小見川　そうですね。打撃なんかも効いた攻撃ってないんですけど、ハイキックとかがポーンポーンってくる感じで。

――じゃあ試合のダメージ的にはそんなにありませんか？

小見川　試合のダメージはないですね。悪いのは脚だけです。

――脚が治れば大晦日もいけますか？

小見川　治らなくてもやりますよ（笑）。

――金原正徳選手とのフェザー級タイトルマッチが濃厚ですもんね。どっちかというと、前回の金原戦のほうがひどい身体だったんじゃないですか？

小見川　そうですね（苦笑）。準決勝の（マルロン・）サンドロ戦が終わってすぐのときはアドレナリンが出てるから、「全然まだまだできる」って感じだったんですけど、時間が経ってクールダウンしてきたら、身体中が痛みだしちゃって（笑）。「えーっ？　なんだよこの身体」みたいな。サンドロは強かったですしね。でも、前回あの状況でできたんだから、金原戦だろうが、もう一回サンドロ戦だろうがやりますよ。

――それはサンドロが前回の判定についていろいろ言ってるから、「やらなきゃならねえな」っていうのがあるんですか？

小見川　「やらなきゃいけない」とは思わないですけど、「あ、そう？　べつにもう一回やってもいいよ」みたいな。や「まあ、言ってればいいじゃん、やってやるよ」と。

――「ちょっと順番待ってろよ」と。

小見川　はい。やってもいいよって。

――では、次の大晦日は金原正徳選手とのフェザー級タイトルマッチが濃厚ですけど、どんな気持ちですか？

小見川　次に勝ったほうがホントのチャンピオンだと思います。俺ん中ではまだフェザー級GPは終わってないんで。

――なるほど。まだフェザー級GPの〝プレーオフ〟が続いてる感じですか。

小見川　そうなんですよ。金原選手はまだ暫定チャンピオン。次がホントのチャンピオン決定戦ですよ。

――大晦日が真の戦極フェザー級GP決勝戦というわけですね。

小見川　はい。

――練習はいつから再開予定ですか？

小見川　とりあえず、脚の痛みが引いてからですね。試合前はとにかく試合ができるように応急処置しただけで、治療らしい治療はしてないんで。とにかく一回、痛みをとることを優先して治療しながら、試合に向けての練習をしていきたいですね。

――ケガさえ治れば、今回とまったく違う動きができる自信がありますか？

小見川　当然ですね。俺はあんなもんじゃないですから。昨日は自分がくそったれでした。次はくそったれバージョンじゃない小見川道大を見せますから。

――わかりました。では大晦日、期待しています！

【09年11月8日／都内・某ホテルにて収録】

こうして、ボロボロになりながらも日沖発に勝利し、大晦日、金原正徳との戦極フェザー級タイトルマッチへの意気込みを語ってくれた小見川。

しかし、12・31『SRC』有明大会中止が濃厚となったいま、この戦極フェザー級タイトルマッチも開催がきわめて微妙になってしまった。

はたして、小見川は悲願のタイトルマッチに辿り着くことができるのか？

西垣　光岡選手との試合は声援とかも凄くて人気者って感じでしたよね。

て噂を聞いたんですけど、ぶっちゃけ、自信はありますよね？

に飲む用にヴァームゼリーを買ってくるんだけど、じつは飲まないとか。

なんとかのマイクパフォーマーってキャッチフレーズが付いてますよ

名（迷）インタビュアー
戦極グリーン・

大好評！　戦極ガールの突撃企画、再び！

横田一則と戦極グリーン西垣梓の戦極、いざっ！

11月5日に発売された『kamiproSpecial』では登場予定だったものの風邪のため欠席となってしまった〝戦極グリーン〟西垣梓がひさしぶりに登場！　今回、戦極グリーンが直撃した『戦極』ファイターは〝戦慄のマイクパフォーマー〟こと横田一則。意外な共通点も発覚した2人による戦慄の戦極トーク、いざっ！

構成／阿修羅チョロ　撮影／梅木麗子　試合写真／乾晋也

全然ハゲてないですよ

西垣　光岡選手との試合は声援とかも凄くて人気者って感じでしたよね。
横田　けっこう試合のときは友だちがいっぱい応援に来てくれるんで。
西垣　なんか観てて思ったんですけど、ヒイキがモノ凄いなって。
横田　ヒイキですか？（笑）。
西垣　カメラも横田さんしか撮ってない感じだったんで。
横田　そんなことないでしょう（笑）。だけど、全体的に見ても声援は俺と光岡さんの試合が一番多かったんじゃないですかね。試合中も応援合戦みたいなのもあったし。
西垣　もう、凄かったです！
横田　日本人同士っていうのもあるし、俺も光岡さんもけっこう人を呼ぶんで、そのやり合いが凄かったって友だちとかも言ってたんで。
西垣　友だち多いんだなぁって思って。何人ぐらい応援に駆けつけていたんですか？
横田　今回は130〜150のあいだぐらいじゃないですかね。
西垣　凄〜い！（パチパチパチ）。私、そんなに呼べないですよぉ。……試合には出ないですけど（笑）。
横田　アハハハハハ！　だけど、ラウンドガールやってる姿を観に来るファンもいるんじゃないですか？
西垣　いや、私の友だちでは、いても2人とかですよ。
横田　西垣さんは「天然」って聞いたんですけど、それっぽいですね。
西垣　いや、普通の20代ですよ。
横田　いや〜、普通ではないと思いますけど（笑）。
西垣　横田さんは大晦日は廣田（瑞人）選手とタイトルマッチをやるって噂を聞いたんですけど、ぶっちゃけ、自信はありますよね？
横田　自信はありますね。前に一回勝ってるっていうのもあるし。
西垣　じゃあ、満々ですよね？
横田　満々です（笑）。まあ、廣田選手みたいに打撃で来てくれる相手のほうが正直やりやすいですよね。
西垣　打撃が得意なんですよね。
横田　寝技も全然できるんですけど、打撃のほうが好きなんで。まあ、どっちでも大丈夫ですけど。
西垣　でもホント、このあいだの試合、凄かったです。試合もマイクも。
横田　いや〜、投げはよかったと思うんですけど、風邪ひいちゃって体調がよくなくてヤバかったですよ。

髪を伸ばすとブラックマヨネーズの小杉とまったく同じ髪型なんです

西垣　あ、そうだったんですね。でも全然イケてましたよ！
横田　ホントはもっと動けたはずなんですけど、きつかったッスねぇ。
西垣　そうは見えなかったです。横田選手って、試合前にいろいろとゲン担ぎをするって聞いたんですけど、今回は何をやったんですか？
横田　ゲン担ぎっていってもいっぱいあって、いつも決まった服や同じ靴で行くとか。マウスピースも何個かあるうちの決まったモノで試合をするし。あとは、リングに入るときは絶対にロープの3段目から入るとか、リングの上は神聖な場所なんで、靴では上がらないとか、そういうこだわりが凄くあるんですよ。試合前に飲む用にヴァームゼリーを買ってくるんだけど、じつは飲まないとか。
西垣　意味わかんないです（笑）。
横田　ただ、持っておくことが大事、みたいな。自分で買って持って行くんですけど飲まない。そうすると負けないんで。なんか、よくわかんないけど、そういうジンクスがたくさんあって。毎回そういうのが増えていくんで、人からは「面倒臭いね」とか「大変でしょ」って言われるんですけど、ホントに大変です（笑）。
西垣　もしかしてA型ですか？
横田　いや、O型なんですよ。
西垣　じゃあ、AOですよ、きっと。
横田　たぶん、そんな感じだと思います。凄いへんなところで几帳面なんで。家とかでも見えてるところはキレイにしていたいっていうか。
西垣　あ〜、私もです。裏はメッチャメチャですけど（笑）。でも、そういういろんなゲン担ぎをしたのが、いかったんですねぇ。
横田　はい、いかったです（笑）。そういうこだわりが多くて。次の試合が決まったら、またお墓参りに行こうと思ってて。自分の先祖だけじゃなく、前回も知り合いで応援に来てくれる人のお墓参りに行ったんですけど、行ったときには負けないんで。
西垣　それ、守護霊！（キッパリ）。
横田　そうなのかなぁ（笑）。
西垣　きっと付いてるんですよ、守護霊が。そういえば、横田選手って、なんとかのマイクパフォーマーってキャッチフレーズが付いてますよね？　……漢字が読めなくて申し訳ないんですけど（笑）。
横田　〝戦慄のマイクパフォーマー〟ですね（笑）。
西垣　〝せんりつ〟か。そのキャッチフレーズは自分的にありですか？
横田　いや、あれは勝手に付けられたんで（苦笑）。まあでも、付けられたからには、マイクパフォーマンスはしなきゃいけないんだなっていうのがあるんで、試合前に何を言おうっていうのを凄く考えてますね。
西垣　期待に沿っちゃうぞ、みたいな（笑）。エライですねぇ！
横田　そこは一応、エンターテインメントとして。郷野（聡寛）さんにも「そこをレベルアップしろ」って言われてるんで（笑）。郷野さんはしゃべりが凄い上手じゃないですか？
西垣　上手ですよね。このあいだの試合後は英語でマイクアピールしてましたよね？
横田　西垣さんは海外生活が長いみたいですけど、全部わかりました？
西垣　はい、わかりました。
横田　俺はわかんなかったんで、英語も覚えなきゃなって思いましたね。
西垣　あと、試合後に、おでこネタをやってましたけど、ホントは気にしてるんですか？　あんまりハゲてるとかは思わないんですけど。
横田　それはたぶん、試合のときの俺しか見てないからですよ。普段、髪の毛を伸ばすとホントにひどいことになってるんで。ブラックマヨネーズの小杉（竜一）っているじゃないですか？　あの人とまったく同じ髪

名（迷）インタビュアー

戦極グリーン・西垣梓とは？

これまで廣田、郷野、金原を相手に天然トークを繰り広げてきた戦極グリーンだったが、風邪のため『第十陣』後の泉インタビューは急遽戦極レッドが担当。『SRC』で卒業予定だった戦極グリーンは今回が最後の登場になってしまうのか？

『kamipro Special 2009 JULY』掲載

『kamipro』No.136掲載

『kamipro』No.139掲載

『kamipro Special 2009 DECEMBER』掲載

横田一則 × 戦極グリーン 西垣梓

[09.11.7『戦極〜第十一陣〜』東京・両国国技館]

○横田一則 vs 光岡映二×

(3R終了 判定3-0)

廣田瑞人の持つ戦極ライト級王座への挑戦権を賭け光岡映二と対戦した横田。風邪で体調が悪かったという横田だが、得意の打撃や投げを決めてフルマークの判定勝ち。試合後は"戦慄のマイクパフォーマー"のキャッチフレーズどおり(?)に自らのハゲ隠し論を長々と説明し、場内は微妙な空気に。ようやくタイトル挑戦権をゲットしたかに思えたが……。

型なんですよ。もうスッカスカで。みんなには「離れ小島」って言われてますからね（苦笑）。

西垣 ふ〜ん、離れ小島なんだ。

横田 M字ハゲなんですよ。なんかで調べたんですけど、O型の人のハゲ方ってM字にハゲるみたいで。

西垣 私もちょっとありますよ。

横田 えっ、ないでしょう？（笑）。ちなみに血液型は何型ですか？

西垣 Mです（キッパリ）。……あ、間違えた（笑）。

横田 血液型がM型っておもしろいなぁ（笑）。やっぱ、凄いッスねぇ。

西垣 私、MっぱげのO型です。

横田 あ、O型ですか。A型はたしか、てっぺんからハゲるんだったかな？ O型はM字にハゲるって。

西垣 でも、全然気にならないです。

横田 試合のときは細工をしてるからわかりづらいですけど、試合から2週間ぐらい経つと、まあ、ひどい！

西垣 そんなことないと思いますけど。じゃあ、このあいだのマイクパフォーマンスは何点ですか？

横田 いや〜、俺の中ではうまくいったかなぁって思ったんですけど、やっぱ、長かったなぁって。

西垣 郷野さんとか、周りの人からはなんて言われました？

横田 郷野さんには「よかった」って言ってもらえて。ただ、光岡さんにバックステージで「マイクなげ〜よ」って言われました（笑）。

西垣 闘った相手からダメ出し（笑）。

横田 あと、三崎（和雄）さんには「あんなに汗かいて光ってる状態でアピールしても見えづらい。一回汗を拭ってカメラの前に行けばよかったのに。全然ダメだ」って言われて。

西垣 凄い具体的ですね（笑）。

横田 確かに汗で光ってたら、おでこのちょっと生えてきてるところがわかりづらかったと思うんで、そこは失敗しましたね。そこまで頭が回らなかったのは、まだまだだなって。

西垣 いや、生えてるところもちゃんと見えたし、みんなわかったと思いますよ。99パーセントは。

横田 ホントですかぁ。でも、友だちとかにも「わかりづらかった」とか「マイクなげっ」って言われたし。だから、「前回、俺はハゲてないって言いましたけど、ホントはハゲてます。隠してるだけです」って言ってやめておけば、会場は「ドカン！」で終わったんじゃないかって、ちょっと反省してるんですけど。

西垣 アハハハハ。そんなに気にしなくて大丈夫だと思いますよ。

横田 いや〜、次の課題ですね。

西垣 横田さんは強くて笑いが取れる選手を目指してるんですよね？

横田 やっぱ、見た目がカッコいいキャラじゃないんで。自分みたいなタイプは笑かしていかなきゃいけないなって。魔裟斗とかとは違うんで。

西垣 ちなみに、理想のファイターって誰なんですか？

横田 理想っていうか、自分が新たに切り開いていかなきゃいけないなと思うんで。これからは、ハゲファイターでいこうかなって。

西垣 アハハハハハ。ドンドン切り開いていってください！（笑）。

横田 「ハゲでも強いんです」みたいな感じで、なんか特徴を出したいですよね。試合以外の部分も期待されるっていうのも大事だと思うんで。

西垣 キャラは大事ですよね。マイクパフォーマンスを注意された三崎さんがグラバカから独立されたみたいですけど、どう思います？

横田 俺は変わらず試合前は三崎さんと練習したりして支えてもらってるんで。ずっとアニキみたいな感じで関係は変わらないと思います。今後もセコンドは三崎さんと菊田さんに付いてもらおうと思ってるし。

西垣 今度の試合はマイクを注意されないように頑張ってください（笑）。

横田 頑張らないとなぁ。三崎さんには前回も「『俺はハゲてないです』って言ってたけど、おまえ、完全にハゲてるぞ！」って言われたんで。

西垣 アハハハハ！ そういえば、ベルトを獲ったらプロポーズしたいって言ってた方がいたんですけど、それはどう思いますか？

横田 えっ、もしかして光岡さん？

西垣 はい。そうみたいです。

横田 それは申し訳ないことしたなぁ。まあでも、時期じゃなかったってことだと思いますよ。……凄くへんな話をしていいですか？

西垣 はい、大丈夫ですよ。

横田 たとえば、交通事故とかで亡くなっちゃう人っているじゃないですか。でも、それは運命なんですよ。結婚とか、そういうのも全部運命とかタイミングだと思うんで。知り合いでも10年付き合っていても結婚しないヤツもいるし、そういうのもタイミングだと思うんで。だから、光岡さんはまだプロポーズするタイミングじゃないんですよ、きっと。

西垣 そうなんですね、きっと。

いままで生きてきて、じつは3回死にかけてるんですよ

横田　俺は人生はすべてがそういうふうに回ってると思うんで。そういうのって絶対あると思うんだよなぁ。俺、自分自身が生かされてるなって思ったことが3回ぐらいあって。

西垣　えっ、なんですか、それ？

横田　夜中の2時ぐらいに凄い酔っ払って歩いていたら、デカい道路でおもいっきりコケたらしくて。で、うしろからでっかいトラックが来たんですけど、俺に気づいてギリギリで急ブレーキかけて止まってくれたたみたいで。……まったく覚えてないんですけどね（笑）。

西垣　へぇ～、それ、一歩間違えたら死んでましたよ。

横田　そうなんですよ。一緒にいた人から「ホントに死ぬ寸前だったよ！」って言われたし。しかも、同じ日にもう1回やったらしくて（笑）。

西垣　え～っ、もう完全にお酒に飲まれちゃってますね（笑）。

横田　そうッスね（苦笑）。そういうことがあって、「あ、俺って生かされてるな」って凄く思ったんです。

西垣　でも、3回生かされたって言ってましたよね？

横田　もう一回はヤバイっすよ。これ、あんまり言えないんですけど、競馬の有馬記念があった日の夕方ぐらいから酒を飲んでたんですよ。

西垣　またお酒ですか（笑）。

横田　そうなんですけど（笑）、帰りに電車の扉が開く側に寄っかかっていて。そしたらドアが開いた拍子に携帯のカバーが電車とホームのあいだに落ちちゃって。「あっ、やっちゃった」って思いながらも、とりあえずホームに降りて電車が行ったあと、そのまま線路に降りて探したんですよ。

西垣　え～、それ危ないですよ！　……でも、線路に降りるのがメッチャうらやましいです。

横田　あ、そこなんだ（笑）。

西垣　はい（笑）。で、どうなったんですか？

横田　探してるあいだに電車が来ちゃって、「これはヤベェな」って思ったんですけど、登ろうとしたら失敗して落ちて轢かれたら死ぬなって思ったから、とりあえず、ホームの下に隠れようと思って。

西垣　スゲー！

横田　それで「ウィーン！」って電車が行ったから、「よし、大丈夫だ」って、また探し出したら、「ガンッ！」っておもいっきり電車にぶつかって。

西垣　え～～っ!?　怖っ!!

横田　電車の車両とかでちょっと出っ張ってるところがあると思うんですよ。で、酔っ払ってたのもあると思うんですけど、通り過ぎたと思ったら、まだ通り過ぎてなくて、その出っ張ったところが頭に直撃して。もうちょっと出っ張りがデカかったら確実に死んでましたね。

西垣　ケガはなかったんですか？

横田　それこそ頭にラインが入って、血も出てましたからね。それでホントにヤバかったのは、そのとき電車を止めちゃって。

西垣　えっ、電車を止めるとヤバイって言いますよね。

横田　だから、この話あんまり言いたくないんですよ。損害賠償とか凄いって聞くんで、聞かれても「俺、知らない」って言い張ってるし。

西垣　（小声で）内緒にしてたほうがいいと思います。

横田　ですよね（笑）。そのあと、そのまま電車に乗って地元に戻って、また飲んだんですけどね。

西垣　まだ飲むんだ（笑）。

横田　友だちからは「どうしたんだよ、その傷！」って言われながらも、平然とそのまま飲んでましたからね。

西垣　酔うと無敵になるんですか？

横田　いや、楽しくなっちゃうんで。まあ、そういうことがあったのに生きてるんで、生かされてるなって。

西垣　あ、そういえば、横田選手って4月3日生まれなんですよね？

横田　そうです。

西垣　私も一緒なんです。

横田　マジっすか？　O型？

西垣　O型で牡羊座。ウチのお父さんも同い年で。

横田　えっ!?　お父さんと同い年って自分がですか？

西垣　いや、間違えました（笑）。

横田　おもしろいッスねぇ、西垣さん（笑）。同い年なわけないですよね。

西垣　お父さんも私たちと誕生日が一緒なんですよ。

横田　へぇ～、それは凄いなぁ。

西垣　これも運命ですかね？（笑）。

横田　だと思いますよ。俺は出会いもすべてが運命だと思ってるんで。

西垣　なんか細木数子さんみたい。人生の相談とかしたいですよ。そういえば、『ザ・シークレット』って読んだことありますか？

横田　ないです。

西垣　私がアメリカに住んでるときのベストセラーで、自分が思ったことを引き寄せてるって感じで、思ったら現実にそうなるっていう本なんですよ。科学的な根拠もあったりして、ちょっと読んでもらいたいです。凄いポジティブになるんです。

横田　それはおもしろそうだなぁ。まあ、自分はもともとポジティブなんですけど（笑）、そういうのは凄く興味がありますね。

西垣　いままでタイトルに挑戦できなかったのも、それも運命とか？

横田　それも運命なんで、仕方ないと思ってましたね。だけど、今回、北岡選手が勝つとしたら、あっさり勝つと思ってたんですよ。そしたら、彼に挑戦権がいってたんだなって思うんですよ。でも、彼があそこで負けたっていうのは、俺がそろそろベルトに挑戦してもいいよっていうお告げなんだなって。今回はそれが必然だったんじゃないかと思いますね。

西垣　私もそんな気がします。じゃあ、最後にタイトルマッチに向けての意気込みを聞かせてください！

横田　まだ、次の試合はどうなるかわかんないからなぁ。なんかいろいろとバタバタしてるみたいだし。

西垣　そっか。じゃあ、私に対するメッセージ的なものでもいいんで。

横田　西垣さんは次の大会で卒業するってことですけど、こうやって知り合ったのも何かの縁だと思うし、あと誕生日が同じっていうのもあるんで、最後の花道を飾ってあげられるようないい試合を見せますよ！　……試合があればですけど（小声で）。

西垣　うわっ、嬉しい。あとマイクパフォーマンスも期待してます！

横田　それも頑張らなきゃな（苦笑）。

【09年11月10日／都内・『グラバカ』にて収録】

よこた・かずのり■1978年4月3日、千葉県出身。順天堂大学柔道部主将として活躍したのち、04年9月にデモリッションでプロデビュー。その後、無敗でDEEPライト級王者となり08年8月から『戦極』を主戦場に。07年10月にはシュートボクシング、09年7月にはKrushと立ち技にも積極的にチャレンジ。172cm、70kg。

にしがき・あずさ■1984年4月3日、東京都出身。09年3月の『戦極～第七陣～』から戦極ガールとして活動。08年にはミスユニバースのファイナリストとなり、モデルを中心にテレビ東京の『やりすぎコージー』のやりすぎガールなど幅広く活躍中。留学経験も豊富でイングリッシュはペラペラです。168cm、B84、W56、H83。

マスヴィダル　……ヒック、……ヒック。
──シャックリが止まらないみたいです

戦極ライト級最高の注目株!

ホルヘ・マスヴィダル

JORGE MASVIDAL

北岡悟の決死の再起戦はこの男に粉砕された。じつは、戦極ライト級ナンバーワンとの呼び声も高いホルヘ・マスヴィダル。北岡の足関をかいくぐりKO勝利を収めたマスヴィダルは、どんな戦略でこの闘いに挑んだのか。また、世界ライト級戦線についても聞いてみた。

聞き手／松下ミワ　撮影／菊池茂夫　試合写真／乾晋也

『どんな状況に置かれても大事なのは顔面を破壊することだ』

北岡悟、暗黒の再起戦！

マスヴィダル ……ヒック、……ヒック。

——シャックリが止まらないみたいですね（笑）。

マスヴィダル ……ヒック、そうなんだ。昨日、凄くいいお肉を食べて、人生で一番の晩餐って感じだったんだけど、なんだか食べすぎたのか、胸焼けがして調子が悪いんだよ。

——そんな素敵な食事だったんですか？

マスヴィダル イエス、マッザカギュウ！

——それはごちそうですね！

マスヴィダル お店の人がお肉を持ってきてくれて、自分で焼くスタイルだったんだけど、それもおもしろかったしね。だから昨日の夜はきっと「マッザカギュウ、マッザカギュウ……」ってうわごとのように言いながら眠ってたと思うな。ヒック。

——そんなに夢中に（笑）。それは勝利後の食事だっただけに、よけいにおいしかったでしょう。

マスヴィダル そのとおり（ニヤリ）。

——昨日の北岡選手との試合を観たら、足関が得意な選手はマスヴィダル選手が怖くてしょうがないんじゃないかと思います。

マスヴィダル そう思うのが妥当だよ。でも、足関だけじゃなくて、いまやすべてのファイターがオレを恐れてるんじゃないのか？

——おお！ そもそも北岡対策としてはどういう練習をしてたんですか？

マスヴィダル 普段どおりのレスリングや打撃の練習をしてたのにプラスして、師匠のホワン・カルロスやヒカルド・リボーリオと一緒にテイクダウンされたときの対処、そのあとの立ち上がり方というのを繰り返し練習したんだ。キタオカと

[09.11.7『戦極～第十一陣～』]
東京・両国国技館
○ホルヘ・マスヴィダル vs 北岡悟×
(2R 3分03秒 TKO)
いつものように、目をギョロっとさせて気合い充分の入場シーンを飾った北岡は、序盤からタックルを奪い、マスヴィダルの足を執拗に攻めるが、マスヴィダルも北岡の顔面に打撃を入れまくり、1ラウンド終わった時点で北岡の顔は真っ赤に。2ラウンドにはパウンドで北岡を追い詰めTKO勝利。北岡の再起を完全に破壊した。

の試合はテイクダウンを取られてからの対処法を一つでも間違えるとそれが命取りとなることが予想されたから、どう動くのかというのを入念にやったんだよ。

——では、足関対策も万全だった、と。

マスヴィダル　まあね。それに一番大事なのは、どういう状況に置かれても必ずキタオカの顔に攻撃を入れていくことを念頭に置いて闘うということだ。相手が極めにくるにしてもプレッシャーをかけられてるにしても、とにかく相手の顔面に攻撃を与え続けるということが大事だからな。

JORGE MASVIDAL

——とはいえ、足を取られたときは相当ヤバかったんじゃないですか？

マスヴィダル　正直、とても痛かったね（苦笑）。足を取られたときにバキバキバキバキって音がしてたからな。最初にキタオカが背中を上にして足首を極めてきたときに、オレも足でキタオカの顔面に蹴りを入れたんだけど、そしたらキタオカはチラッとボクの目を見て、体勢をグルッと入れ替えてまた絞ってきたんだ。そのときにはもう7回ぐらいバキバキバキって鳴ってたけど、オレもそこで打撃をやめるわけにはいかなかったからね。

——よく耐えられましたねえ。

マスヴィダル　（胸を叩きながら）ハートさ。サムライ魂だよ！

——ただ、今回の試合は北岡選手にとって再起をかけた大事な試合だったんですよ。

マスヴィダル　ああ、「引退しようか迷ってた」という話は記事で読んでたよ。だけど、キタオカは素晴らしい実績を残してるし、ここで引退したらもったいないなと思ってたから辞めなくてよかったんじゃないか？　今回は復帰戦にしては相手がちょっと悪かっただろうけどね（ニヤリ）。

——そういう引退したくなるような気持ちというのは体感したことありますか？

マスヴィダル　うーん、オレはまだMMAのキャリアが始まったばかりだから、辞めたがる選手の気持ちは正直わからないな。いまはMMAが楽しくてしょうがないからね。

——なるほど。ちなみに、北岡選手といえば、独特な入場シーンでも有名です。

マスヴィダル　ああ、（目をギロッとさせて身体を揺らしながら）こうだろ？

——ワハハハハ！　そっくりです！（笑）。

マスヴィダル　じつを言うと、あの入場シーンはオレも凄く好きなんだ（笑）。それに、真面目な話、試合のときもああいうゆるい動きをしながらパッとスピーディに打撃を出したりすると有効だからね。だから、ああいう彼の戦略は使えるなと思ってるし、凄く興味深いよ。

——じつは注目してた、と（笑）。しかし、マスヴィダル選手は多くの戦極ファイターから〝ライト級最強の外国人選手〟だと言われてて、昨日の試合ではそれが証明されましたね。

マスヴィダル　そう言ってる人たちは凄く賢いね。「よくご存知で」って言ってあげたいよ。

——そのマスヴィダル選手にとって、母国でもあり格闘技が盛り上がってるアメリカを主戦場にするというのはあまり念頭にないんでしょうか？

マスヴィダル　いまのところ、オレもアメリカではベラトールというイベントと契約してるから、そのトーナメントには参戦するかもしれないな。ただ、オレはどこの団体に上がるにせよ最強になりたいだけなんだ。強い選手と試合をして勝ちたい、ただそれだけだよ。もちろん戦極のチャンピオンにもなりたいし、ベルトを獲ったら戦極のチャンピオンとしてDREAMのチャンピオンとも闘わないといけないだろうしね。それはリングであれストリートであれ、ナンバーワンがオレの目標さ。

——ストリートファイトでもナンバーワンですか⁉

マスヴィダル　フフフフ、まあね（不敵な笑みを浮かべて）。

——こ、怖い。たとえば、DREAMライト級王者の青木選手なんかは「BJペン

が最強だ！」ということを言われてます

マスヴィダル　とても技術が長けててス

とは対照的に心が異常に強いところだよ。

レたちは実際にアメリカから日本に来る

アオキはテクニックが素晴らしい一方精神的な部分が伴なってないかな

が最強だ！」ということを言われてますけど、世界のライト級というのはどう見てます？

マスヴィダル　やっぱりBJペンはいまのライト級では最強かもしれないよね。ただ、ここ2年でアオキが倒したファイターはやっぱりハンパないよ。アルバレスにも勝ったし、JZ、シャオリン、そしてハンセンにも勝ってる。そういう戦績を見るとBJよりもアオキのほうが凄いと思わざるをえない。だから、BJペンとアオキが闘ったらどんな結果が転がって出るのか、それは凄く楽しみだよね。

――マスヴィダル選手もそこに割って入ろうというのは思います？

マスヴィダル　オレもいずれはそこに入ると思うけど、いまはまだ負けてしまった選手にリベンジしたい気持ちのほうが強いな。だから一番はホドリゴ・ダムを倒したいということなんだが、それに勝ったらどんどん強い選手と闘っていきたいと思ってるよ。オレが突然上の選手と闘うというのは、まだできないと思うしね。

――意外と堅実なんですね。

マスヴィダル　そうかい？（照）。

――では、いま話に挙がった青木選手についてはどういう印象がありますか？

マスヴィダル　とても技術が長けててスーパーテクニカルファイターだよな。ただ、それと同時に彼は〝アオキ・タイマー〟というのを持っていて、たとえばJZとの試合だと、首にヒジが当たったと言っては「痛い、痛い」と言って時間を取る、ヨアキムのときも打撃が当たっては「痛い、痛い」と時間を取る。これは何かというと、彼はテクニックが素晴らしい一方で、精神的な部分がそれに伴なってないんじゃないかと思ってしまうよね。だからハートとテクニックのバランスがよくない印象はあるかな。

――なるほど。一方の戦極王者の廣田選手についてはどうでしょう？

マスヴィダル　ヒロタも凄く強い選手ではあるんだが、とくにどこの部分が優れてるというのは指摘しにくいファイターだよね。ただ、彼の一番の強さは、アオキとは対照的に心が異常に強いところだよ。それがすべてをカバーしてるんだ。

JORGE MASVIDAL■1984年11月12日、アメリカ出身。03年にプロデビューし、8連勝を築いて『戦極』に参戦。ライト級GP1回戦のホドリゴ・ダム戦には敗れたものの、その後、ライアン・シュルツ、ハン・スーファンを下し、戦極ライト級最強の外国人として恐れられる。『戦極～第十一陣～』の北岡悟戦で、その強さを証明。ベルト奪取の可能性は恐ろしく高い。

――その廣田選手に、昨日リング上から対戦要求されてましたよね。その対戦を、大舞台である大晦日イベントで実現させたいという思いはありますか？

マスヴィダル　うーん、いまはまだ昨日の試合で足首が腫れてるから、これが1週間ぐらいで完治するなら大晦日でも試合を受けたいね。だけど、完治に時間がかかってしまうようなら、そんな大事な試合はすぐに受けたいとは思わないかな。

――でも、日本の興行というのは急にチャンスがめぐってきたり、オファーも急だったりすることがありますよね。

マスヴィダル　ああ、オレも対戦相手が急に変わったことはあったかな。直前のオファーでも調整できてる状態なら試合はできるが、3日前にやれと言われても、そもそも減量が難しいからね。76キロで闘ってもいいならOKだけど（笑）。

――そうですよね（笑）。ちょっと話は戻りますが、マスヴィダル選手は将来的にもアメリカのイベントを主戦場に闘うことをあまり考えてない感じですね？

マスヴィダル　ぜんぜん。だって、オレは日本が好きだからね。まあ食べ物がおいしいっていう理由もあるんだけど（笑）。でも、できれば日本の大会に参戦し続けたいというのが正直な気持ちだよ。それはオレだけじゃなくて、日本で成功しているファイター全員に聞いても、やっぱりみんな日本がいいと言うと思うよ。たとえばエディやJZもそうだろうし。

――へえ～、エディやJZはそう言ってるんですか？

マスヴィダル　二人とは凄く仲良しだから、よくそういう話をするんだよ。で、オレたちは実際にアメリカから日本に来るまでに28時間かかるんだよね。そうすると、日本に着いたら夜中だろ？　そしたら丸2日間トレーニングができなくなるんだけど、そういう犠牲を払ってでも日本で闘いたいとオレは思うよ。

――それはどうしてですか？

マスヴィダル　大きなきっかけといえば子どもの頃の話になるけど、UFCなんかはオレが幼い頃からずっと重量級が主流だったから、こんな体格のオレにとっては「ああ、自分にはできない競技だなあ」と思うしかなかったんだよね。でもある日、友だちが修斗の映像を見せてくれて、そのときに観たのが佐藤ルミナや桜井〝マッハ〟速人の試合だったんだ。それを観たときに、あんまり大きくない選手がエキサイティングな試合をしてて、とくにルミナなんかは試合が終わったあとに宙返りとかしてただろ？　それを観て、「ああ、自分もこういう世界でなら闘えるかもしれない」と思ったんだよ。だからオレにとっては日本は夢の舞台というわけなんだ。

――憧れだった、と。

マスヴィダル　そう、ずっと日本の総合格闘技のファンだった。それに、ステロイドを打ってそうなビッグな選手のスローな試合よりも、日本のスピーディな試合のほうがおもしろいだろ？　オレはそういう世界にいたいんだよ。

――じゃあ、まだまだマスヴィダル選手の試合は日本で観られると考えていいわけですね。

マスヴィダル　ああ、また来たいね。マッザカギュウを食べに来たいしね。

――次回は食べすぎに注意してお召し上がりください！

【09年11月8日／都内・某ホテルにて収録】

ちょっぴりスパイシーな韓流珍名戦士

辛拉麺

ラーメンのことなら僕にまかせろ！

「ラーメン、つけめん、僕、辛拉麺！」ということで、11・7『戦極』では郷野聡寛に敗れるも、妙ちくりんなリングネームで話題を呼んだ韓流ファイターが本誌初見参！
韓国の国民的食品名を背負うこの男はいったい何者なのか？　麺が伸びる前にお読みください！

聞き手／鈴木佑　試合写真／乾真也

辛拉麺　あ、取材はアイスクリーム食べながらでもいいかな？　さっきそこでチームメイトにもらったんだけど、早く食べないと溶けちゃうからさ。

――どうぞどうぞ。辛拉麺さんは辛いものだけじゃなくて甘いものもお好きで？

辛拉麺　うん。確かに「辛拉麺」は本当に大好きだけど、べつにそればっかり食べてるわけじゃないよ（笑）。

――なるほど（笑）。さて、11・7『戦極』での郷野聡寛戦は初の大舞台ということで相当緊張したらしいですね？

辛拉麺　うん、そうだね。郷野は試合運びがうまくてクレバーな選手だったよ。僕との経験の差が如実に出た試合だったんじゃないかな。やっぱり情けない内容だったと思うから、あとは何も言い訳することはないね（気落ちした表情で）。

――ちなみに郷野戦を終えてから「辛拉麺」は食べました？

辛拉麺　いや、まだ食べてないよ。……ここはスポンサーに気を使って食べたことにしたほうがいいのかな？（笑）。

――ダハハハハ！　「辛拉麺」の製造元の「農心」という会社が辛拉麺さんのスポンサーなんですよね。そこからリングネームも本名のキム・ユンヨンから辛拉麺に変更して。そもそもサポートしてもらうことになった経緯というと？

辛拉麺　……じつは農心はもともと格闘技にはまったく興味のない会社なんだよ。

――え～、そうなんですか？

辛拉麺　最初は僕の知り合いが「君のお父さんはあの有名な『辛拉麺』を作ってる農心の役員なんだから、会社にスポンサーになってもらって商品名をリングネームにしたら注目が集まるぞ！」ってアドバイスしてくれたことがきっかけなんだ。

――韓国では「辛拉麺」は国民的食品らしいですね。

辛拉麺　そうなんだよ。だから、自分から父に相談して。で、父が会社に持ちかけてくれたんだけど、初めは「会社として格闘技に興味がないから名前を使ってもらうのは困る」って言われたんだって（苦笑）。

――あらら（笑）。

辛拉麺　でも、父が社長に「息子が日本で活躍すれば商品も有名になりますから」って根強く交渉してくれて、ようやくOKをもらえたってわけなんだ。

――辛拉麺さんが有名になったら農心でコラボ商品を作るという話にもなってるみたいですけど、普段はどういうふうに支援してくれてるんですか？

辛拉麺　とくに契約金とかはもらってるわけじゃないんだけど、食べ物とか衣類

僕は秋山成勲選手を尊敬してるんだ。あの着こなしには憧れるよ（ウットリ）

をサポートしてくれてるんだ。試合で入場するときに客席に投げ入れた「辛拉麺」とかね（笑）。

―現物支給なわけですね（笑）。今回は「辛拉麺」に絡めて「郷野に激辛スープをかけて動けなくさせる」みたいなユニークなコメントをしてましたけど、あれは事前に考えて？

辛拉麺　いや、その場その場の自分の思いつきでコメントしてるんだよ。たまには僕みたいなつかみどころのない選手がいてもおもしろいでしょ？（笑）。

―なるほど（笑）。ところで日本のラーメンは食べました？

辛拉麺　もちろん食べたよ！　麺類には目がないからね。ただ、僕は小さい頃から「辛拉麺」ばっかり食べてるから、そのスパイシーな味に慣れちゃってるんだよね。だからどうしても日本のラーメンには物足りなさを感じちゃうんだ。まぁ、それはそれでアッサリしておいしかったけど。

―ほかに日本の食べ物でおいしかったものはありました？

辛拉麺　前に青森に行ったことがあるんだけど、そのときに食べたホタテは最高においしかったな～（シミジミと）。一晩で一気に50個くらい食べてね。で、次の日も延々と食べてたから、全部で100個以上はたいらげたんじゃないかな。

―え～、お腹壊しませんでした？

辛拉麺　全然大丈夫だよ（ケロっと）。もともと僕は痩せの大食いなんだよ。焼肉でもなんでも普通の人の10倍くらいは軽く食べちゃうからね。

―凄いですね～。その長身でウェルター級ですし、減量は相当大変なんじゃないですか？

辛拉麺　それが悩みなんだよね～。背が高いぶん普通の人よりエネルギーが必要なのか、ついつい食べちゃうんだよ。とくに日本に来ると食べ物がおいしいからさ。

[09.11.07『戦極～第十一陣～』]
東京・両国国技館
ウェルター級ワンマッチ
◯郷野聡寛 vs 辛拉麺×
（3R終了 判定3－0）

ダン・ホーンバックル戦で衝撃のKO負けを喫した郷野が、復活をかけて奮起。試合を終始リードした郷野は、3Rに強烈な右フックを辛拉麺にヒットさせると、飛びヒザ、アッパーと立て続けに打撃をたたみかけて文句なしの判定勝利。辛拉麺にとってはホロ苦いビッグイベント初登場となった。

―今回、辛拉麺さんが来日して試合するのは3回目だったわけですが、日本にはどういう印象を持ってますか？

辛拉麺　自分の試合以外にセコンドでも来てるから、もう10回くらい来日してるんだけど、凄くクリーンな国っていう印象だね。会場のお客さんを見てても礼儀正しいし、格闘家にとっては一番活動しやすい国なんじゃないかな。

―いまMMAで活躍する韓国の選手が増えてますけど、尊敬するファイターはいますか？

辛拉麺　一緒に練習しているキム・ドンヒョン選手だね。やっぱりUFCで活躍してる姿を見ると刺激を受けるよ。あとはチュ・ソンフン、秋山成勲選手！

―おぉ～！　秋山選手とは面識はあるんですか？

辛拉麺　うん、一緒にスパーリングもやったことあるよ。テレビでよく観てた人だから嬉しかったね！　彼は僕にとって憧れの存在なんだ（ウットリ）。

―へ～。秋山選手の魅力というと？

辛拉麺　やっぱり試合もアグレッシヴだし、闘ってるときの目も鋭くてゾクっとするよね。あと服装も凄くオシャレだし、「これぞプロ！」って感じだね。僕もああいう服装が似合うようになりたいよ。

―なかなかあの着こなしは真似できないですからね（笑）。ちなみに辛拉麺さんの格闘技以外の趣味というと？

辛拉麺　小さい頃から韓国の歴史に興味が凄くあるんだ。日本と韓国は文化も似てるから、韓国の歴史を知ると日本の歴史もよく理解できるんだよね。やっぱり日本はいろいろと興味深い国だよ。

―日本では韓流ブームで韓国の俳優が人気だったりしたんですけど、逆に辛拉麺さんが日本で興味のある有名人は？

辛拉麺　X JAPAN！（即答）。

―へ～！　日本のビジュアル系バンドの元祖ですね。どんなところが……。

辛拉麺　（さえぎるように）もぉ～、独りで～歩けない～♪　時～の風が～強すぎて～♪

―ダハハハハ！　X JAPANの名曲「FOREVER LOVE」ですね（笑）。

辛拉麺　もう死んじゃったけどhideが大好きなんだ。チョーカッコいいよ！

―チョーカッコいいですか（笑）。あと日本のカルチャーで好きなものはありますか？

辛拉麺　マンガも好きだよ。最近だと『のだめカンタービレ』がおもしろかった。ドラマ版が韓国でリメイクされてるんだけど、それも毎回観てたしね。でもやっぱり日本で一番好きなのはXだね！　もぉ～、独りで～歩けない～♪　時～の……（恍惚の表情で）。

―あ、あの、お好きなのはよくわかりましたから（笑）。じゃあ、最後にこれからの目標を教えてください！

辛拉麺　あれ、もう終わり？（寂しそうに）。そうだな～、次は来年3月のHEATに出場する予定だから、それに勝利してまた日本のビッグイベントへの足がかりにしたいね。それと早く「辛拉麺」とのコラボ商品が作りたい！　もちろんもっと辛い味つけにしてね（笑）。

―これからもスパイシーなファイトを期待してます！

【09年11月9日　都内・DEEP道場にて収録】

しん・らーめん■1987年2月2日、韓国出身。今年3月のclub DEEPでDREAMウェルター級GP出場をかけて白井祐也と接戦を展開するも、3Rにチョークスリーパーでギブアップ負け。しかし、9月のHEATでは窪田幸生を1Rで一蹴し、今回満を持して自身初のビッグイベントとなる『戦極』に参戦をはたした。180センチ、80キロ。

前代未聞の大会前日中止発表！
ファイティング・オペラ危機一髪!!

諸君、これが本当の
バッドラックだ!?

緊急特集

『ハッスル』クライシス

『ハッスル』に緊急事態発生！ 年内シリーズ4大会中止の報を受けて、早速マット界では
「このままひょっとして消滅？」なんてキナ臭い噂がちらほら……。
いったいファイティング・オペラの舞台はどうなってしまうのか？
とりあえずお約束なんでいきますか〜？ 3、2、1、ハッスル！ ハッスル!!

萌え萌えハッスラー

KGを励ます会発足！

『ハッスル』緊急特集のトップバッターは、そのキュートな笑顔で赤マル急上昇中のKG!
……あ、あれれ？ どうしてそんなに悲しそうな表情をしているの??
さぁ、明るい未来に向けて、いま思ってることを全部ぶっちゃけちゃってくださ〜い!!!

聞き手／鈴木佑　試合写真／平工幸雄

（KGがおめかし中）

——KGさ〜ん、準備はできましたかぁ？

KG　は〜い、お待たせしました！（満面の笑みで）。

——あら、今日はまた往年の辻ちゃん加護ちゃんばりのステキなリボンですね。普段もそういうガーリーな格好なんですか？

KG　はい！　え、ダメですか？　似合ってないですか？　取ったほうがいいですか⁉（オドオドしながら矢継ぎ早に）。

——いやいや、お似合いだと思いますよ。ただ、今回は『ハッスル』の現状を踏まえて「KGを励まそう！」っていうテーマなんで、そう考えるとそのゴキゲンなリボンは……（笑）。

KG　そっか、今日はそういう話なんですよね。こんなの着けてたらバカっぽいですよね、アハハ……（力なくリボンを取る）。

——あ、テンション下がっちゃいましたか（笑）。そもそもKGさんは10・29『ハッスル』後楽園ホール大会の中止はいつ知らされたんですか？

KG　中止会見前日の合同練習が終わったときでしたね。「もしかしたら興行が中止になるかもしれない」って。

——そんな急な話だったんですね。それは山口日昇社長から？

KG　いや、ジェットさん（＝炭谷信介『ハッスル』広報）からです。山口社長、普段とか電話してもなかなかつながらなくて……。

——電話がつながらない（笑）。まぁ、いろいろとお忙しそうですしね……。ちなみに『ハッスル』がこういう状況になってから山口社長とお話は？

「山口社長が電話に出てくれないんです……」

況になってから山口社長とお話は？
KG　いえ、まだまったく。
——そ、そうですか（汗）。開催中止となった日は後楽園で『ハッスル』関係者が来場したファンに謝罪してましたけど、あれはどうしてKGさんと大原はじめさんも参加したんですか？
KG　自主的に行ったんですよ。楽しみにしてくれていたお客さんに本当に申し訳なかったんで、頭を下げて直接謝りたいなと思って。
——当日は50人ぐらい来場したらしいですけど、中には怒っているファンもいましたよね。
KG　はい。でも、それがあたりまえだと思うんですよ。その方も年間予約シートを購入してるファンで、本当に毎回『ハッスル』を楽しみにしてくださってたので。それでも最後には「今回は残念だったけど応援してるからね」って温かい言葉をかけてくださったんで、本当にありがたかったです。
——中には「選手に罪はないから」って、栄養剤の差し入れまで持ってきてくれたファンもいて。
KG　ホント、凄く心にジ〜ンときましたよね……（シミジミと）。こういう方々の支えがあって『ハッスル』は成り立ってたんだなって。
——さりげなく過去形になってますね（苦笑）。
KG　あ、すいません（小声で）。あの、今回じつはけっこう手売りでファンの方々にチケットを買っていただいてたんですよ。『ハッスル』がこういう状況になって、いつどうなっても悔いが残らないようにっていう

萌え萌えハッスラー

KGを励ます会発足！

か。

——要するに自分の最後の勇姿を見せたいみたいな？

KG　そうですね。いろんな方に「いい試合をするのでぜひ観に来てください！」ってお願いして。それでわざわざ仕事の都合をつけて休みを取ってくださった方もいたのに、こんなかたちになってしまって（申し訳なさそうに）。

——KGさんがデビューして1年経ちますけど、『ハッスル』が苦しい状況は徐々に伝わってきた感じですか？

KG　うすうすとは感づいてましたね。いろいろと噂は聞いていたので……お金のこととか（ボソッと）。

——な、なるほど。今年になってから選手が去っていく状況が続きましたよね。まずKGさんにとって身近な存在の／(^o^)／チエさんやKUSHIDAさんが退団して。

KG　たぶん、チエさんやKUSHIDAさんは疲れちゃった部分があったんだと思います。雑用だったり、扱いだったり……私も詳しくはわからないですけど。でも、お二人がいなくなったときは凄く不安になりましたね。

——二人のぶんの雑用もKGさんが？

KG　そうですね。選手全員分の衣装を用意したり洗濯したり。あとは道場のリングをバラしてトラックに積み込んで会場で組み立てたり……。その後片づけで家に帰れないときは道場に泊まったこともありましたし。

——それだけでも大変そうなのに、ほかに事務仕事も手伝ってたって小耳に挟んだんですけど？

KG　はい。ちょっと前までは月〜金で事務所に常駐してたんですよ。たとえば11時から14時ぐらいまで格闘技の練習をして、15時から18時ぐらいまでプロレスの練習。で、そのほかに電話応対とかいろいろな雑務をやって。それもけっこう精神的にきつかったですね。

本当に申し訳なさそうに、大会が中止になったことを大原とともにファン詫びるKG。こんないまにも泣き出さんばかりの顔で謝られた日には、是が非でも応援するしかないでしょう!

——思いつめちゃっていた、と。

KG　そうですね。私、キックのジムにも通ってるんですけど、事務仕事で練習に行きたくても行けなかったり。あとは……バイトにも行けなかったりして（小声で）。

——あ、まだバイトは続けてたんですか!?

KG　はい。ちょっと生活的に苦しい部分があるんで派遣でマンガ喫茶の受付とか、ケーキを作る工場でひたすらホイップクリームをデコレートしたりとか。もちろん、できれば練習に専念したいんですけど。

——練習じゃギャラがもらえないですからね〜。

KG　そうですね（苦笑）。

——KGさんはまだ20歳なんですよね。年頃の女の子としてはオシャレしたり遊びに行ったりとかしたいと思うんですけど、自分で自由にできるお金は？

KG　全然ないですね。家にもお金を入れないといけないし、もういろいろフラストレーションが……。

——じゃあ、誌面を通じて「KG、プレゼント随時受付中！」って告知しておきましょうか？「KGを励ます会」発足ってことで（笑）。

KG　ありがとうございます！（ちょっと嬉しそうに）。

——KGさんはお母さんと二人暮らしなんですよね。今回の件でお母さんは何か言ってましたか？

KG　「こんなにケガまでして、アンタ、死にたいの？　なんのためにやってるの？　ちゃんと仕事したほうがいいんじゃないの？」って言われました。私が心配をかけたせいで、お母さんも体調崩しちゃったりもしたんで（悲しそうな表情で）。

——えぇ〜!?　そんな状況だとKGさん自身のストレスも相当溜まってたと思うんですけど、どうやって発散させてたんですか？

KG　う〜ん……。私、けっこうすぐ泣くんですね。

——泣くのがストレス解消！

KG　はい（苦笑）。もう、一人になったときとか何も考えたくなくて、ボ〜ッとしてたら自然に涙があふれてきて。あとはヤケ食いしたり、その反動で逆に食べられなくなったりもしましたし。

——そうなるとモチベーションを保つのもなかなか難しいと思うんですけど、練習はずっと続けてたんですか？

KG　そうですね。せっかく小路（晃）先生や大原くんが時間を割いてくれているので、いまはひたすらそれについていくって感じですね。教えてもらえることには感謝の気持ちでいっぱいですし、やっぱり自分で選んだ道なので。

——そうですか……。ちょっとシンミリしちゃったので『ハッスル』で楽しかったことを思い出しましょうか！（笑）。この1年は相当濃密だったんじゃないですか？

KG　やっぱり、いろんな方に出会えたのは財産だったと思います。私、最初はプロレスという世界を全然知らなかったんですけど、DVDとかでその歴史や技術も勉強していって。

——プロレスの世界に徐々に染まっていった、と。最近では、大原さんとの試合の評価が高かったですよね。あの獣神サンダー・ライガーさんも二人のハードヒットな攻防を観て「『ハッスル』にも闘いがある」って言ってたみたいですし。

KG　ありがたいですね！　そのぶんキツい練習をしてるんで、常に身体はアザだらけなんですけど（苦笑）。プロレスを学ぶうえではTAJIRIさんにもいろいろ話を聞いていただいたり、プロとしての心構えを教えてもらったりしましたね。

——なんでもTAJIRIさんとWWEの日本公演を観に行ったときに、KGさんが向こうのエージェントの目に止まったらしいじゃないですか。もしかしたら将来的にはWWE参戦も夢じゃないんじゃ？

KG　もし可能ならば出場したいっていう気持ちはもちろんあります！　お母さんが英語を話せるんでちゃんと勉強して、海外でも認められるようになりたいですし。でも、それにはまず日本で結果を出さないと。

——『ハッスル』にはレギュラー陣以外に大物選手もいろいろ参加してましたよね、長州力さんや高山善廣さんとか

KG　はい。私、試合前には必ず挨拶に行くんですよ。「ご挨拶のほう、よろしいでしょうか？『ハッスル』のKGといいます。今日はよろしくお願いします！」って。大物選手でいうと、いつも天龍さんは気さくにいろいろとお話ししてくれたので凄く嬉しかったです。「（天龍の声マネで）おいKG、今日も頑張れよ！」って。

——ちょっと声マネ似てるじゃないですか（笑）。『ハッスル』がこの先ど

風香さん、引退する前に私と真剣勝負してください!

うなるにしろ、今後の自分の活動についてはどう考えてますか?

KG 私としてはプロレスと格闘技の両方をやっていきたいって思ってるんです。自分が上がれるリングがあれば、どんどん出ていきたいなって。

——『ハッスル』では男子の選手に交じって試合をしてますけど、女子プロレスも観たりするんですか?

KG サムライTVやDVDで観たりしてますよ。やっぱり同性の選手は気になるので。

——だれか意識する女子レスラーはいます?

KG 風香さんが来年の春に引退するじゃないですか? 自分としてはその前に風香さんと……。

——試合をしたい、と。

KG できればガチでやりたいです!(キッパリ)。

——ガチ! なぜプロレスじゃないんですか?

KG 風香さんは総合もシュートボクシングもやってるじゃないですか? 私も立ち技の練習をしてるんで、個人的にはSBルールで試合したいんです。

——は~。やっぱり風香さんに対しては「私のほうがかわいいのに」「私のほうがスターになれるのに」みたいな気持ちが?

KG はい! え? い、いや、違います、そんなんじゃないです!(あわてて)。

——ダハハハ! KGさんもビジュアル的にも技術的にも風香選手と遜色ないと思いますよ。ただ、風香さんは自主興行をやったり、いろいろな衣装にこだわったりと自己プロデュースがうまいですし、一説によると相当稼いでるみたいですから(笑)。

KG ええ、そうなんですか!?

——他誌のインタビューで「プロレスを辞めたら月収が何分の一かになってOLなみの給料になっちゃう」みたいな発言が載ってました。

KG マジっすか!? は~、自分も風香さんみたいにいろんな衣装を着て試合がしたいです……。

——プロモーション一つでこんなに違うというか(笑)。いろんな思いを込めて風香さんとやりたい、と。

KG はい、ガチでやりたいです!(キッパリ)。風香さん、引退前に私と真剣勝負してください!

——Uインター時代の田村潔司みたいですね(笑)。風香さん以外に気になる選手はいますか?

KG 華名さんですね。

——バチバチスタイルで注目されてる選手ですね。

KG 凄く興味ありますね! 試合も立ち技主体で迫力があって「巧いな」って思いますし。

——なるほど。KGさん、じつは華名さんも相当稼いでるらしいですよ(笑)。自分で会社も経営する実業家でもありますし。

KG マジっすか!? どのくらいなんですか?

——プロレスだけで年収●●●万円って言ってました。なんかブロマイドやポートレートとかのグッズ収入が多いみたいで。

KG ……『ハッスル』じゃ全然そんなことやってもらえなかったのになぁ(悲しそうな表情で)。

——KGさんもまだ可能性充分なんですし、これからの売り出し次第ではもっとファンが増えると思いますよ! 『ハッスル』はこういう状況ですけど、次の試合予定で決まってるものはあるんですか?

KG ちょっとまだ正式決定じゃないんですけど、おそらく12月のジュエルスに出場すると思います(後日、正式に参戦決定!)。

——お~、前から噂されてましたけどついに格闘技路線に出陣ですね!

KG いまは打撃の練習が中心なので、試合までにもっと総合の練習をしたいと思います。格闘技デビュー戦でちゃんと結果を残せるように。

——どうですか、将来的にこうなりたいとか具体的なビジョンはありますか?

KG やっぱり苦労かけたぶん、お母さんにはいろいろやってあげたいんですよね。そのためにもプロレスでも格闘技でもナンバーワンになりたいです!(キッパリ)。「格闘技、プロレスだったら近藤朱里だ」って言われるような存在を目指したいですね。

——あれ、いま普通に本名を口にしましたけど、KGって名前に愛着は?(笑)。

KG もちろんありますけど、最終的にはやっぱり本名の「朱里」でいきたい気持ちのほうが強いですね。

——『ハッスル』でKGを名乗って、それ以外のリングでは本名で使い分けるのもいいかもしれないですね。

KG そうですね。とにかく自分のことをいろいろな人に知ってもらって、もっともっと認められたいです!

——お、明るい未来に向けて元気が出てきましたね!

KG いまは『ハッスル』がこういう大変な状況ですけど、いつまでもクヨクヨしててもしょうがないし、乗り越えられない壁はないと思うので! あとは……。

——あとは?

KG とりあえず山口社長に電話に出てもらいたいです(小声で)。

——ダハハハ! こっちもつながるかわからないんですが、KGさんの電話に出るようにお伝えしておきます!

【09年11月4日/都内・ハッスル道場にて収録】

けい・じー■本名・近藤朱里。1989年2月8日、神奈川県出身。08年10月26日の『ハッスル』栃木大会で"カラテガール"としてデビュー。最近は"ケツガール"として越中詩朗直伝のヒップアタックを武器に活躍。地球最後の日に食べたい物は「アイスクリーム」。164cm、51kg。ブログ『☆朱里のハッとした出来事☆』http://ameblo.jp/aaabbbcccdddabcd/

KGがジュエルスに初参戦!
『女子総合格闘技ジュエルス 6th RING』
東京・新宿FACE
12月11日(金) 開場18:15 開始19:00

主要対戦カード
KG vs 未定
【ROUGH STONE GP 2009 60kg級 決勝戦】
アレクサンドラ・サンチェスvs森居知子
【ROUGH STONE GP 2009 54kg級 決勝戦】
長野美香vs鹿児島陽子
【ROUGH STONE GP 2009 48kg級 決勝戦】
小寺麻美vs石川菊代
【48kg契約】
井上由美子vs深岬パトラ
【48kg契約】
山田よう子vsMIYOKO

出場予定選手
石岡沙織、杉山しずか

お問い合わせ
株式会社マーヴェラスジャパン
TEL.03-5458-2536 http://w-jewels.jp

なに？『ハッスル』が一大事!? 俺はいつでも助けに行くぜ!!

リアルドンキーコング

ケビンランデルマンが語る『ハッスル』メモリー

誰よりも必要以上に熱い男・ランデルマンが1年半ぶりに日本に帰ってきたぜ！
もちろん話のテーマは11・7『戦極』……じゃなくて、かつて縦横無尽に活躍した『ハッスル』について！
ひさびさにその4文字言葉を聞いてすっかりハイ状態になったランデルマンの雄叫びを聞け！

聞き手／松下ミワ　構成／鈴木佑　撮影／菊池茂夫　試合写真／平工幸雄

――ランデルマンさん、昨日のスタニスラブ・ネドコフ戦は残念ながら判定負けでしたけど、お話を聞かせてもらってもいいですか？

ランデルマン　おう！　試合には負けちまったけどノー・プロブレムだぜ！（元気いっぱいに）。そもそも昨日の試合の判定には納得いってない部分があるんだ。３ラウンドは取られてたかも知れないが、１～２ラウンドは俺が……。

――（さえぎるように）あ、あ、すいません、ランデルマンさん。今日は『戦極』のことがメインではなく、じつは『ハッスル』についてお聞きしたいんですよ（笑）。

ランデルマン　……ホワット？『ハッスル』ってあの『ハッスル』か？（『ハッスル』ポーズをしながら）。

――はい（笑）。じつはいま『ハッスル』の消滅危機がささやかれてまして、かつてファイティング・オペラの舞台で活躍されてたランデルマンさんに当時の思い出を語っていただきたいな、と。

ランデルマン　な、なんだって？『ハッスル』がそんな危険な状態なのか!?　そうか……。あのな、そもそも俺はプロレスが小さい頃から大好きだったんだ。だから日本でプロレスをやった経験や、それを通して出会った人たちは俺にとって財産であり、『ハッスル』は第二の故郷みたいなもんなんだよ。

――『ハッスル』にそこまでの思い入れがありましたか！

ランデルマン　『ハッスル』という言葉を口にしただけで俺のテンションが上がってるのがわかるだろ？（ニ

ヤリ）。俺はハルク・ホーガンやアン
教えてもらった。それと試合で大ケ
首の手術をするとなればキャリアが
ランデルマン　アメリカだと歴史的
らい俺の心が穏やかになったのも日

プロレスをやると決まったときは大きな夢がかなった気分だったぜ

ヤリ）。俺はハルク・ホーガンやアンドレ・ザ・ジャイアントを憧れの存在として観て育ってきたから、自分が日本でプロレスをすることになったときは、それこそ大きな夢がかなったような思いがしたもんだぜ！

――ランデルマンさんはプロレスの練習も熱心だったって評判を聞いたことがあります。

ランデルマン　なに、そんな評判が？　そいつは嬉しいな！　俺はいつも全力でトレーニングして、全力でリングに上がって自分を表現してたからな。常に俺はプロモーションやファンのみんなに感動を与えたいんだ。だからコーナーポストから飛べと言われれば誰よりも高く、誰よりも遠くという思いだったしな。

――練習を見てくれたのは？

ランデルマン　ほら、ヒゲのあの人だ。ハセセンセイ（日本語で）。

――お～、馳浩さんですね！

ランデルマン　彼こそ真のプロフェッショナルだぜ！（キッパリ）。ハセセンセイは俺が緊張しないように気を使いながら、いろいろなことを教えてくれたんだ。

――ちなみにどんなことを教わったんですか？

ランデルマン　プロレス流のトレーニングはもちろん、「プロとは何か」ってことだな。観客と一体になる方法、そしてどうすれば観客を自分の試合に引き込んでリードできるかを教えてもらった。それと試合で大ケガをしないように、選手同士の信頼関係の築き方みたいなものも学んだな。じつは俺のいままでで一番大きなケガは、MMAじゃなくてプロレスで首を負傷したことなんだ。

――そうだったんですか？

ランデルマン　イエス。あれはツームストンパイルドライバーを食らったときだった。結局、首の頚椎の6番目と7番目を損傷したんだけど、最初は全然気づかなかった。少し時間が経ってから右腕の感覚がまったくなくなっちまって、それでおかしいと思って病院に行ってケガが判明したんだ。

――それはMMAのときにも影響が出たんじゃないですか？

ランデルマン　そうだな。でも当時、首の手術をするとなればキャリアが終わりかねないほど大きなものだったから、薬でずっとだましだまし試合を続けてたんだ。それでようやく去年、手術したんだけどな。

ランデルマンは持ち前の跳躍力で、"スーパーフライ"ジミー・スヌーカばりにリングを所狭しと縦横無尽にファイト！ 盟友マーク・コールマンとともにプロレスへの高い順応性を見せた。

――プロレスにそこまでの代償を払ってましたか。

ランデルマン　まぁ、自分のケガであって他人をケガさせたわけじゃないからよかったぜ。ただ、フィジカル的には100パーセントじゃない状態がずっと続いてたから試合に影響したというのは確かだ。そのぶん精神面でカバーしてたんだけどな。

――ランデルマンさんの『ハッスル』の一番の思い出というと？

ランデルマン　もちろんショー自体も楽しかったけど、俺にとっては練習が終わったあとにみんなで食事をしたり、冗談を言って笑い合ったりしたことがかけがえのない思い出だな。テレビのコマーシャルじゃないがまさにプライスレスなメモリーなのさ……（シミジミと）。

――『ハッスル』ではマスクを被ったこともありましたね（笑）。

ランデルマン　そんなこともあったな～。ヘンなモノをやらせるなとは思ったけどあれはあれで楽しかったぜ（笑）。ただ、そのときに唯一嫌だったのは、リングでバナナを食べろって言われたことだな。いくら俺がドンキーコングって呼ばれてても、それだけは受け入れられなかった。

――それはどうしてですか？

ランデルマン　アメリカだと歴史的に黒人が人前でバナナを食べるって行為は、「黒人は猿みたいにバカだ」っていう人種差別的な表現に取られることがあるんだ。だから俺はそれだけはやりたくないって断った（キッパリ）。まぁ、でもそれ以外は『ハッスル』は楽しかったぜ。

――ちなみに『ハッスル』には高田総統やインリン様みたいなユニークなキャラクターが数多く登場しましたけど、日本人はヘンなことを考えるなって思いませんでした？（笑）。

ランデルマン　いやぁ、日本人の感性はおもしろいなって思ったぜ。ファンもファンタジーの世界だってわかってても、それを本当にドキドキしながら観てたのは興味深かった。俺にとってはそこが『ハッスル』を好きな理由なんだけどな。まぁ、『ハッスル』に関わったことで日本の文化にもいろいろ触れることができてよかったよ。

――勉強になった、と。

ランデルマン　あのな、一昔前の俺は周りのことをろくに考えず、自分さえよければいいっていうタイプだったんだ。だけど、こうやって日本で活動することでいろいろな人々に出会い、人間的にも凄く成長することができた。たとえば、いまのワイフは俺が荒々しかった頃を知らない。だから俺がマンガを読んで感動して泣いてると「ケビン、これはマンガよ？」っていつも言われるんだけど、やっぱりそのくらい俺の心が穏やかになったのも日本に来てからなんだよ。

――また機会があれば『ハッスル』に上がりたいとは思いますか？

ランデルマン　俺を求めてくれるならいつでも出るぜ！　いまは世界的な経済不況だからこういう自体が起こるのもしょうがないことさ。もし、俺が参戦することで『ハッスル』を盛り上げることができるんならなんだってするさ！

――心強いお言葉です！　それでは最後に……最近、ランデルマンさんは『ハッスル』してますか～？

ランデルマン　俺はいつでも『ハッスル』してるぜ！　いまだって毎晩ワイフと『ハッスル』してるさ（笑）。まぁ、ジョークはさておき、俺はいまのワイフと会って本当の意味での愛を知ったんだ。その愛のパワーで『ハッスル』を助けることができるなら俺はいつだって駆けつけるぜ！

――まさにラブ＆ハッスルですね（笑）。今日はありがとうございました！

【09年11月8日／都内・某ホテルにて収録】

KEVIN RANDLEMAN■1971年8月10日、アメリカ合衆国オハイオ州出身。00年にUFCで世界ヘビー級王者となり、02年からはPRIDEに参戦。その消滅後は『戦極』を主戦場とする。『ハッスル』には04年1月の旗揚げ戦から登場。ちなみに写真左隣のきれいな女性は奥さま。178センチ、93キロ。

Uインター、WJの仕掛人が語る

プロレス団体が崩壊するとき

因縁(?)の二人が約8年ぶりに再会!

元Uインター取締役
鈴木健

元WJ取締役
永島勝司

『ハッスル』がピンチだ!『kamipro』読者にとって印象に残るプロレス団体の崩壊といえば、やはりUインターとWJが双璧だろう。今回は95年の新日本とUインターの対抗戦で大成功を収め、我が世の春を謳歌するも、その後、WJとUインター&キングダムで崩壊を経験した二人がプロレス団体の崩壊について激白!

聞き手&撮影／阿修羅チョロ

永島　よぉ、健さん、ひさしぶり!

鈴木　ひさしぶりだねぇ。

――何年ぶりの再会なんですか?

鈴木　もう7～8年になるんじゃないの?　この市屋苑ができてから11年になるけど、永島さんはオープニングのときに来てくれて、それからも何回か来てくれてるからね。

永島　まあでも、WJができてからは来てなかったからね。

鈴木　で、今日はなんの話だっけ?

――え～、あまり振り返りたくはないと思うんですが、『ハッスル』がいま年内4大会中止という危機を迎えていまして、鈴木さんはUインターにキングダム。永島さんはWJで実際にプロレス団体の崩壊を経験しているということで、体験に基づいて話していただければ、と。

永島　俺はもうWJのことはあんまり語りたくねえんだよなぁ。

――そこをなんとかお願いします。

鈴木　大丈夫。ウチの店の最高においしい日本酒を飲ませるから、そのうち口も滑らかになると思うよ(笑)。

永島　ダメだよ!　俺はいま朝4時起きなんだから、もういまぐらいの時間になると眠くてしょうがねえんだから。それに昔と違って、酒飲んじゃうと、よけい口が重くなるから。

鈴木　まあ、そう言わずに乾杯!

永島　乾杯!(グイッとひと飲み)。いや～、うまいねぇ。これは酔っちゃうよぉ。でも、もうダメ!

鈴木　そう思って、永島さんの家まで送る人間も用意してるから。

永島　あ、そう。それは助かるわ。

鈴木　でも『ハッスル』って年内の興行を中止にしたんでしょ?　しかも

後楽園大会の前日に発表したって。

——そうですね。山口社長も「前代未聞の不祥事」と言ってましたけど、崩壊経験者の鈴木さんから見て、いまの状況はどう思われます？

鈴木　Uインターは崩壊してないよ。株式会社UWFインターナショナルも株式会社キングダムも存在してるし、休眠にしてるだけ。だから、いつか永島さんと一緒にやろうかなって思ってるしね。

永島　じゃあ、やろうか!?

鈴木　やりますか！　資金ちょうだい？（笑）。

——えっ、ボクですか。ウチも『ハッスル』と無縁ではないので資金はありません！（笑）。で、永島さんはWJで崩壊を経験されたと思うんですが。

永島　そうだねぇ……（しみじみと）。俺から言わせてもらえば『ハッスル』もね、やめちゃうのが一番だよ。

——あ、やめるのが一番（笑）。現時点では12月25日の両国大会は決行すると言っていますけども。

鈴木　いや、両国もやめたほうがいいと思う。もう、無尽蔵にお金を出してくれるスポンサーとかがいなかったら、やめたほうがいい。

——UインターやWJをやっていたときとはまた時代も違うと思うんですが、やはりビッグスポンサーがいなければ続けるのは難しいと？

鈴木　それもそうだし、あとはなんで『ハッスル』がダメになったかという根本的なことも考えなきゃダメだよね。俺はもう最初からわかってたよ。

俺はもうWJのことは語りたくねえんだよなぁ（永島）

——最初っていつからですか？

鈴木　『ハッスル』始まりの頃から。だって、『ハッスル』ってホントの意味でのトップがいないじゃない？　ウチらの団体にかぎらず、昔、隆盛した団体っていうのは必ずトップ中のトップがいるんだよ。新日本プロレスだったらアントニオ猪木。全日本プロレスだったらジャイアント馬場。ウチには髙田延彦、リングスには前田日明、パンクラスは船木誠勝、必ず一人飛び抜けたスター選手がいたわけだよ。そういう選手がいないと団体は成り立たない。それは力道山時代からそう。

永島　でも、『ハッスル』にも髙田延彦というのがいたじゃない？　それで髙田総統というかたちで引っぱっていったわけでしょ。

鈴木　でも、出方が足りないし、やはり髙田総統ではなくて髙田延彦を出すべきだった。髙田延彦さえ出しておけば、まだ存続してたよ。

永島　そうだろうなぁ。彼はそれだけのオーラを持ってるよね。

——髙田さんはお二人とも思い入れも深いでしょうからね。

鈴木　でもWJって何がダメだったの？　俺はよく知らないんだけど。

永島　もういろんなことがあったからね。テレビの問題もそうだし。

鈴木　WJはテレビがついてたの？

永島　スカパー！でPPVを定期的にやりましょうって話があって、それでカバーできる金はカバーしましょうってなったんだけど、旗揚げ前にスカパー！の体制が変わっちゃって、それでギクシャクし始めたの。

これまで『ハッスル』を牽引してきた存在といえば髙田総統でありエスペランサーだ。永島氏、鈴木氏ともに思い入れの深い髙田であるが、レーザービターンを操るエスペランサーの闘いには否定的で「髙田延彦として闘ってほしかった」と口を揃えた。ビターン！

——旗揚げ前からギクシャク（笑）。

永島　まあでも、とりあえず、旗揚げ戦はPPVでやりましょうとなったんだけど、じつは俺は12チャンネル（テレビ東京）にも話をしてて、いい方向で進んでいたんだけどね。

鈴木　あ、そうなんだ。

永島　そしたら、ある方が違う地上波でやるって話を進めてて。違う地上波でやるっていっても「レギュラーでやってくれんの？」って聞いたら、また違ったりしたけどね。

——テレ東ではプロレス・格闘技の番組はよくやっていますけど、基本的には枠買いということで、団体側でお金を払って放映してもらうというのが多いですけど、そうではなくて？

永島　そのときは放映権料をもらってやるって話も出ていたしね。

鈴木　キングダムでも一度テレ東でやってもらったけど、放映料は20万ぐらいしかくれなかったよ（笑）。

——そうなんですか（笑）。

鈴木　それでコマーシャルも出してもらったりね。そういうのもあったけど、「そんなもんなの？」って当時は思っちゃったよね。だって、リングスでは、毎大会だか毎月だか、WOWOWから2000万円ぐらい出してもらってたって聞いてたしね。

永島　それは大きいねぇ。

鈴木　ランニングコストがそれでペイできちゃうもん。興行収益とか、マーチャンダイジングは全部自分のところもなっちゃうじゃない？　テレビ朝日もそうだったんでしょ？

永島　いまはどうかわかんないけど、俺がいた頃はそういう感じではあったよな。いまはテレビ業界も不況で大変みたいだけど、当時のテレ朝は緩かったからね（苦笑）。

——永島さんもかなり自由に経費を使えていたと聞いています（笑）。

永島　まあ、当時はよかったですよ（笑）。新日本にも年間●億とかスポーンと出てたから。

鈴木　え～、●億！　凄いよねぇ。

永島　たまにレギュラー番組以外にスペシャルをやると別枠でまた出てたから。だから、楽だったですよぉ。

——当時はテレビがついていないとプロレス団体は運営できないっていうところがありましたからね。

鈴木　それも地上波ね。絶対、地上波がないと無理だよ。

永島　いまはテレビ局も裕福じゃないから、どこも厳しいでしょ。『ハッスル』も最終的にはテレビがつかなかったのか？

——それこそフジテレビがつくって話もありましたけど、PRIDEの放映打ち切りとともに立ち消えになってしまいましたね。その後もテレビ東京で30分番組をやったり、大晦日も二度ほど放送してましたけど。

永島　WJと一緒で予定が狂っちゃったところがあるんだ（苦笑）。まあ、『ハッスル』もへんにWWEとかの真似事をしないで、健さんたちとやったみたいに、ああいう仕掛けをやらなきゃダメだったんだよ。

——ああいう仕掛けというのはUインターの対抗戦のことですか？

永島　そう。表ではガチでケンカしてたからね。

——裏ではガッチリ握手してたってことですか？

鈴木　そういうわけではないけど、根底には「プロレス界を盛り上げる」って意識で話をしてたからね。

——でも、ファンの中では、Uインターは新日本に潰されたと思って見てる人も多いと思うんですよ。鈴木さんは永島さんに「この男に潰された」っていう思いはないんですか？

鈴木　いや、それはない。ただ、対抗

戦やってるときは、こっちは素人だったから、ぶっちゃけ、いろいろ騙されたりもしたし、「それだったら、武藤敬司にガチを仕掛けちゃおう」って話も実際あったからね。

——それは一発目の高田vs武藤戦のときですか？

鈴木　そうそう。ちょっと約束と違うことがあってね。

永島　初めて聞いたよ（苦笑）。

——やっぱり、永島さんにはいい感情を持っていない時期もあった？

鈴木　そういう時期もちょっとはあったよ。でも、新日本の言うとおりにやっていけばプロレス界のためになるかもしれないと思ってたし、実際に6万7000人っていう当時の東京ドームのレコードを作ったからね。

永島　あの頃はよかったよなぁ……。

——Uインター的には経営的に苦しいから対抗戦の話を持ちかけたっていう部分もあったんですか？

鈴木　いや、それはないよ。

永島　そりゃ、強がり言ってると思うけどな（笑）。

鈴木　いや、ホントにない。まだそのときは資金がけっこうあったから。それに、長州さんからは「Uを消す」とかも言われたけど、俺たちが考えていたのは、新日本とUインター以外はインディーから何から全部消してしまうってこと。それがプロレス界のためになると思ってやってたんだけど結局はUインターもダメになってできなかった。そうやって淘汰できなかったのが、何団体あるかわからなくなったプロレス界の現状だと思ってる。

永島　まあ、そういうことだよな。

鈴木　だって、ファイトマネー5000円とかで試合してるって聞くからね。しかも交通費込みで（笑）。

永島　嫌な世の中になったねぇ。

鈴木　好きだから続けられるんだろうけど、それはビジネスじゃないよね。プロレスはビジネスにもしなくてはいけない。『ハッスル』もビジネスにできなかったから、こういうことになったんだろうし。もう、いまのプロレス界は崩壊してるよね。

Uインター崩壊の致命傷
安生の道場破り失敗

Uインター崩壊の致命傷だったのが94年12月の安生洋二によるヒクソンへの道場破り失敗。当時Uインターで最強説もあった安生だが、朝方まで酒盛りをし、不本意なかたちで臨まざるをえなかった道場破りで惨敗。のちの集客に多大な影響を及ぼしたという。

WJ崩壊の致命傷
『X-1』開催

旗揚げから興行不振に悩んでいたWJが起死回生としてブチ上げたのが金網総合格闘技『X-1』だ。ブライアン・ジョンストン、マサ斎藤、長州力がプロデュースした『X-1』だったが、当日は空席も目立ち、試合中に金網が壊れるなど、さんざんな結果に終わった。

永島　完璧にそれは言えるよね。もっと策を練ればいいんだけど。

——Uインターは結果的に何が原因で崩壊……じゃなくて、休眠することになったんですか？

鈴木　安生（洋二）がヒクソン（・グレイシー）に負けたからだよね。

——その影響が大きかった？

鈴木　大きかった。要するにプロレスリングが最強でなくてはいけないのに、安生洋二は交渉に行ったのに、その日に当時ブッカーとかをやっていた笹崎（伸司）氏が止めないで最悪の状況でやらせちゃって負けちゃった。それはマスコミのせいでもあるよ。雑誌の売り上げをよくするために、安ちゃんが血だらけになった写真を表紙にしちゃった。そのときは売れたかもしれないけど、プロレス界にはマイナスだけで、プラスはないじゃない？

永島　そうだよね。

——安生さんの道場破り失敗もあったとは思うんですけど、ほかには理由はなかったんですか？

鈴木　（小声で）あるよ。ホントのこと言うから、うまくまとめてよ。なんでUインターを閉めたかというと……（と言って、知られざる事実を明かすも、諸事情によりカット）。

永島　それはまずいよな（苦笑）。

鈴木　絶対出すなよ。いまでも、出されたらまずいんだから。

——じゃあ、Uインターを休眠させる決断をしたときも、それほど金銭的にはヤバイ状況ではなかった？

『X−1』も「やめたほうがいい」ってずっと言ってたんだけどね（永島）

鈴木　お金はまだあった。だいたい、お金がなかったら、そのあとキングダムをできるわけがないじゃん（笑）。

永島　まあ、そうだよな。

鈴木　Uインター最後の日、12月27日、後楽園で「なんでみんなニコニコしてたの？」って話じゃない？

——確かに、あまり悲壮感みたいなものは感じなかったですね。

鈴木　そうでしょ。悲壮感は漂ってなかったから「もっと暗くして」って言ってたぐらいで（笑）。

——でも、『ハッスル』やWJみたいに、選手や関係者に未払いとかはあったんですよね？

鈴木　Uインターのときは選手にはキングダムに行くまで給料はちゃんと払ってたもん。もちろん、未払い金もあったけど、それはスポンサーだったり、知り合いのおじさんとか、アニキとかにはあったよ。だけど、金銭的には大丈夫だった。ただ、これは書けないけど……（と、再び休眠したホントの理由を告白）。

永島　それは厳しいよな（苦笑）。

鈴木　だから、計画的っていうか、そうするしかなかったの。でもさ、いまになって考えると、新日本との対抗戦の頃って、いい思い出だよね？（笑）。

永島　そうだね。……まあ、健さんは借金を完済したからいいけど、俺なんかまだまだだから、飲まなきゃやってらんないよ。……おかわり！

鈴木　今日はご馳走しますんでガンガン飲んでください！（笑）。

永島　ありがとう！　でも、かなり酔っぱらっちゃったよ（苦笑）。あとは何を話せばいい？

——じゃあ、最後に『ハッスル』にエールでも送ってもらいましょうか？

永島　もう、キッパリとやめたほうがいい。いまの時代、プロレス団体をやってもいいことはないから。ダメだと思ったら、キッパリ引かないと、マイナスが増えることがあっても、プラスにはならないから。

——実感がこもってますねぇ。WJも大会中止は何度かありましたね。

永島　あったねぇ。やめる勇気は絶対必要。でもWJもダブルブッキングはあったけど、さすがに後楽園で前日に中止はなかったよ（苦笑）。

大ト
ムに

鈴木　どれぐらい赤字になったの？

とUインターは、まだケリがついて

ったら中邑（真輔）とかがいいよな。

のときは髙田延彦のこともボロクソ

Uインター一夜かぎりの復活興行は必ず実現させせたい（鈴木）

プロレス団体が崩壊するとき

新日本、Uインターの仕掛人として95年10月の東京ドーム大会を大成功させた永島氏と鈴木氏。しかし対抗戦は徐々にトーンダウン。Uインターは96年12月、約5年半の歴史に幕。

鈴木　中止にしてもキャンセル料は発生するけど、やらなきゃギャラは発生しないからね。

永島　そうそう。あとは、横浜でやった『X－1』なんかも「やめたほうがいい」って俺はずっと言ってたんだけどね。

鈴木　あ～、やりましたねぇ。

永島　大会の前に、残念なことだけど、（ジャイアント）落合が道場で亡くなっちゃったんで、申し訳ないけどそれも理由にして「中止にしたほうがいい」って言ってたんだけどね。

――それこそ『ハッスル』じゃないですけど、大会を発表してからでも中止にすればよかった？

永島　中止にしないまでも、いわゆる延期だよな。そしたらオーナーからは「切符も売ってるんでやめられない」って言われてね。「いや、ここでやめるしかない」って揉めたよぉ。

鈴木　どれぐらい赤字になったの？

永島　もう忘れちゃったよ。素人みたいのばっかりだったけど、プロレスよりギャラは高いし、飛行機代とか入れたらハンパじゃないのよ。

――いまになってみれば、『X－1』に出た選手でUFCで活躍してる選手もいたりするんですけどね（笑）。

永島　でも、当時は名前のないヤツばっかりだったから、観たいって思うヤツもいないよな。おまけに金網までブッ壊れちゃうしよ（苦笑）。

――強烈に印象に残ってます（笑）。

永島　あそこで強行したのがのちのWJにとってもよくなかった。だから悪いことは言わない。『ハッスル』も引くときはスパッと引くべき！

鈴木　そうかもしれないね。

永島　まあでも、暗い話ばっかりしててもしょうがねえし、なんかまた、おもしろいことやろうぜ！

鈴木　そうだよね。じゃあ、俺が持ってる切り札を出そうかな。

永島　なんだよ、切り札って？

鈴木　Uインター一夜かぎりの復活興行。もう一度、団体をやろうとはこれっぽっちも思わないけど、一回かぎりだったら絶対に失敗しない。みんなに話をしてオッケーをもらえばできるから。

――いまとなっては、オッケーをもらうのが難しいんじゃないですか？

鈴木　いや、ちゃんと話せば大丈夫。

永島　復活興行じゃなくて、「新日本とUインターは、まだケリがついてない。だから、最後に決着戦をやろう！」でいいんじゃない？

鈴木　違う違う。俺が最初に「Uインター復活興行をやる」って言ったら「オイ、ちょっと待てよ」って。

永島　「冗談じゃねえぞ！　まだ終わってねえぞ!!」ってな（笑）。

鈴木　あ、そのやりとりは書けねえか（笑）。そのへんはうまく書いてよ。

――は、はい（笑）。

鈴木　……長州さんは出せる？

永島　無理だよ。

――長州さんはともかく、新日本の選手は出せるんですか？

永島　それは俺が話するよ。いまだったら中邑（真輔）とかがいいよな。

鈴木　じゃあ、アントニオ猪木は？

永島　猪木は試合はできないけど、飾りとして、なんらかのかたちでリングには上がらせるよ。

鈴木　猪木さんと髙田さんに試合をさせたいと思ってるんだけど。

ながしま・かつじ■1943年、島根県出身。東京スポーツ新聞社、新日本プロレスを経て、02年にWJの旗揚げに関わるも、2年足らずで崩壊。現在は『リアルスポーツ』の編集統轄プロデューサーを務める。すずき・けん■1953年、東京都出身。髙田延彦公認ファンクラブ会長を経て、UWFインターナショナルやキングダムの取締役を務める。現在は世田谷区用賀で串焼き店『市屋苑』を経営。取材時にはアントニオ小猪木や山本喧一も来店。ほかにもプロレスラーや格闘家が多数来店することでも知られている。TEL.03-3707-3223 http://www.ichiokuen.com/

永島　無理無理。それはできない。

鈴木　それはできなくても、絶対に実現させせたいのが、俺と○○○○の一騎討ち。それはプロレスルールじゃなくて、シュートマッチ！　やったら、絶対に俺が勝つから！

――何か因縁でもあるんですか？

鈴木　○○○○は昔からさんざん俺にケンカを売ってきて、PRIDEのときは髙田延彦のこともボロクソに言ってたの。俺は柔道やって、キックボクシングやって、空手もやって、ケンカもやってきてるしね。

永島　若いよなぁ（苦笑）。

鈴木　そのカードを組んだら、お客さんいっぱい呼ぶし、絶対そのときが来たらブチ上げるから！

永島　よし、その話もらった。それはおもしろい！　ちょっと、いま俺がやってる『リアルスポーツ』で取り上げるから、ウチの人間をここに呼んでもいいか？

鈴木　いいですけど、やるんだったら、一面でお願いね！（笑）。『kamipro』の表紙とかは無理？

――さすがに表紙は難しいかと思いますので、リアルスポーツさんにおまかせします！（笑）。

永島　おう、まかせとけ。そういうネタはウチで書くよ。ドカ～ンと！

鈴木　でも、『東スポ』ほうが売れてるんでしょ？　『東スポ』だったら柴田（惣一）さんにお願いすれば載せてくれると思うし。

永島　いや～、ウチだったら「Uインターの元取締役が○○○○に挑戦状！」って、でっかく一面でやるよ！

鈴木　冗談じゃなくて本気だからね。

永島　あ、そう。いや～、今日はいいネタもらったよ。ありがとう！

鈴木　絶対に一面してね。約束だよ？

永島　まかせろって！

――では、『ハッスル』の復活とともに、Uインターの復活興行も期待してます！

永島　だから、復活興行じゃなくて新日本vsUインターの決着戦！

【09年11月6日／都内・用賀『市屋苑』にて収録】

「天龍さんにあんな格好までさせといて、これで『ハッスル』が終わりなんて許さないよ！」

元『週刊ゴング』編集長が語る

プロレスマスコミがなくなるとき

熱血プロレスティーチャー

小佐野景浩

『ハッスル』の年内4大会中止報道を受けて、
一部でささやかれてるのが『kamipro』への間接的な影響。
ここは歴史ある『週ゴン』の終焉を間近で見つめてきたオサポン先生に、
いざというときのためのアドバイスと当時のエピソードを聞きに行かなければ！ だっふんだ!!

聞き手／鈴木佑　試合写真／平工幸雄

日本スポーツを辞めたあとはハローワークにも行ったんだから

――小佐野さん、今回は「プロレスマスコミがなくなるとき」をテーマにお話しいただきたいんですよ。

小佐野　凄いお題目だね、それ（笑）。え、どういうことなの？

――じつは『ハッスル』が年内4大会の中止を発表したことで、一部では『ハッスル』と関係性の深い『ｋａｍｉｐｒｏ』にも影響するんじゃないか？」なんて声も上がってまして。

小佐野　あぁ、なんかよからぬ噂は耳にするけど。

――なので、かつて『ｋａｍｉｐｒｏ』よりも由緒正しい『週刊ゴング』（以下、『週ゴン』）の編集長を務め、その終焉を間近で見てきた小佐野さんに当時の生々しいエピソード……いや、業界の大御所としてアドバイスをいただけたらな、と（笑）。

小佐野　なるほどね（笑）。でも、そもそも僕は07年の3月に『週ゴン』が休刊したときには、すでに発行元の日本スポーツ出版社（以下、日本スポーツ）の人間じゃなかったんだよね。日本スポーツが経営に行き詰まって、04年の8月に身売り後、新体制に移行した時点で会社を辞めたから。

――それはどういった経緯で？

小佐野　まず、当時は金澤（克彦）くんが『週ゴン』の編集長で僕は執行役員だったのね。これが面倒な立場で、経営者側から見れば僕は現場を統括する責任者、社員側から見れば経営者側の人間。要はその中継ぎ役というか。

――板挟み的な役割だった、と。

小佐野　そう、まさにそのとおりで非常につらい立場だったわけ（笑）。で、『週ゴン』は会社の一部署だったけど、日本スポーツの屋台骨をモロに支えていたから「『週ゴン』コケれば、みなコケる」という図式だったんだよね。

――当時、『週ゴン』の発行部数は相当落ちてたんですよね？

小佐野　身売りしたときの部数は、僕が編集長時代に課せられたノルマの40パーセント減で。だから、執行役員時代の僕の最終的な仕事はコストカッター。まぁ、憎まれ役になってしまうよね。社員のリストラは意地でもしなかったけど、編集費や印刷経費、あとはフリーライターの原稿料を見直したりね。その後、自分がフリーとして『週ゴン』に関わるようになってからはその下げた原稿料で仕事しなきゃいけなくなったんだけど（笑）。

――自業自得というか（笑）。執行役員だった頃は相当ストレスも溜まったんじゃないですか？

小佐野　だからヘンな話、家を出ても足が止まって、会社に行けないこともあったよ。で、もう会社を売らなければ倒産するっていうリミットに近い7月の給料支払い日の2日前に、経理の人が僕のところに来たんだよ。最初は「君は執行役員だから今月の給料は我慢してくれ」っていう話かと思ったら、もっと状況は悪化していて「じつは社員の給料を払うお金が足りない。少しでも工面できないか？」っていう相談でさ。

――え～、会社が小佐野さんに無心してきましたか！

小佐野　自分の生活を考えればそんな余裕もないんだけど、女房に相談したら「好きにしていい」って言ってくれたから、とりあえず銀行のお金を下ろして会社に貸したの。

――会社のためにそれこそ身銭を切ったわけですね。

小佐野　いや、会社もそのお金はすぐに戻してくれたんで、ありがたかったよ。僕は戻ってこないことも想定していたから。

――それほどの覚悟だった、と。では身売りが決まったときはひと安心だったんじゃないですか？

小佐野　そうだね。でも、経営陣が変わって会社が新体制になる過程で、僕はもう疲れきっちゃっていた。新体制になる前の社長だった竹内（宏介）さんに任命されて執行役員になったからには、その職を全うする気持ちはあったけど、新体制になればお役御免だと思ってたし。だから旧体制での責務をはたして、体制が替わったら自分の環境をリセットしたかったわけ。僕が旧日本スポーツ勢からの離脱者第一号だったんだよ。

――『週ゴン』を辞めた時点で次の展望は？

小佐野　いや、全然。当初はプロレスの仕事を続けるという強い意思もなかったし、とにかくいままでのしがらみを断ち切りたかっただけだから。『週ゴン』からは「しばらく休んだらフリーとしてやりませんか？」っていう話を退社以前からもらってたけど、とりあえずハローワークまで職探しにも行ったしね。

――熱血プロレスティーチャーがハローワークですか！

小佐野　そう（笑）。当時は43歳だったんだけど、「いったいどういう仕事があるんだろう？」って気持ちもあって、失業保険の手続きついでに一応検索して。で、「編集関係がいいな」とか思って探すんだけど、条件に合う仕事なんかありゃしないんだよ！

――厳しい現実を知ってしまったわけですね（笑）。

小佐野　僕はハワイが好きだから「どうせならハワイの本でも書けたらな」っていう気持ちもあって、出版社に売り込んだこともあったよ。でも、なんせ実績がないから「それよりもプロレスを書いたほうがいいんじゃないか？」って言われて、「他ジャンルの門をくぐるのは簡単じゃないな」って実感もしたしね……（しみじみと）。こっちは1980年の4月に『週ゴン』でアルバイトを始めてから24年半、プロレスの仕事しか知らないわけだからさ。

――プロレス一筋だった、と。

小佐野　天龍さんが「相撲取りが相撲を辞めたら、チョンマゲをつけたただのでっかいオヤジだ」って言ってたんだけど、その意味がよくわかったよ（笑）。

――ダハハハハ！

小佐野　そうそう、前田大作氏が日本スポーツの新社長になったとき、僕はその就任パーティに「天龍さん

長らくのご愛読、本当にありがとうございました

週刊ゴング

重大発表

2007年の3月14日発売のNo.1168で、1984年に週刊化されてから24年間の歴史にピリオドを打った『週刊ゴング』。最終号では「あくまでも前向きな休刊」と記されているが、いまもって再開の声は聞かれない。

を呼べ」って言われたの。だから「しようがねえなあ」と思いながら、天龍さんに「すみません。こういうパーティがあるんですけど」って電話したら、「いいよ」って二つ返事で出席してくれてね。

——そこは〝天龍番〟と言われた小佐野さんとの関係の深さの賜物ですね。

小佐野　そのパーティのとき、僕は天龍さんに「じつは会社を辞めます」って直接言ったのね。天龍さんは一言「そうか、お疲れさん」って、労いの言葉をかけてくれて。で、9月15日の最後の出社日に、天龍さんから携帯にメールが届いたんだよ。

——天龍さんがメール！　な、なんて書いてあったんですか？

小佐野　「自分の意地と女房、優先順位を忘れずに」ってね。

——自分の意地、ですか。

小佐野　要は「会社を辞めるのは男の意地かもしれないけど、一緒に生活する女房を大切にするのも男だぞ。その優先順位は忘れるなよ」っていう天龍さんからの心あるアドバイスで。

——グッとくる話ですね～。

小佐野　でしょ？（笑）。あと、そのパーティには馬場元子さんも来てくれたんだけど、僕は元子さんには会社を辞めることは何も言わなかったんだよ。でも、そのあとに元子さんから竹内さんに電話があって、「小佐野くんが元気なさそうな顔してたけど、何かあったの？」って気にかけてくれていたっていう話を聞いて、すぐに元子さんに電話したの。そうしたら「あなたの再出発のパーティをしましょう」って言ってくれて。

——それは嬉しいですね！

小佐野　で、天龍さんのお店で天龍さん夫妻と元子さんと僕とで飲んで。当時、元子さんは全日本プロレスの取締役に名を連ねてたんだけど、武藤（敬司）社長たちとギクシャクしてる頃だったんだよ。それで元子さんが「もし、私と食事をしてることが人づてに伝わったら、（GAORAの全日本中継で解説をやってる）あなたに迷惑かけない？」って気配りまでしてくれて。だから僕は「ありがとうございます。これは僕と元子さんとの個人的な関係ですから大丈夫です」って。

最後の出社日に天龍さんからメールが届いたんだよね

——これまたいい話だな～。

小佐野　まぁ、退社後はハワイに行ったりして3ヵ月くらい休んだんだけど、04年のノアの年内最終興行に年末の挨拶がてらに顔を出したら、天龍さんがノアに上がる流れが表面化して。じつはその情報は個人的にキャッチしていたから、なりゆきで会場から『週ゴン』編集部に直行して書いた巻頭記事がフリーとしての最初の仕事（笑）。つまり天龍さんに導かれるかたちで、その流れのままにフリーになって、そして現在に至る、と。

——フリーになってから仕事の依頼は『週ゴン』以外からも続々と？

小佐野　フリーになって3ヵ月ぐらいでサムライTV、同じ時期に『日刊スポーツ』の携帯サイト。そのあとすぐに『東スポ』でも連載が始まって、さらに現在は『週プロモバイル』に『Gスピリッツ』……もちろんGAORAの全日本中継も続いているし、レギュラーの仕事だけでもこれだけあるんだからありがたいことだよね。

——は～、プロレスマスコミのフリーとしては断トツの仕事量なんじゃないですか？

小佐野　でも、だからこそ受けた仕事は確実にやらないと。フリーは一回一回がトライアウトだからさ。こうして『kamipro』からも仕事をもらえてるわけだしね（笑）。

——何をおっしゃいますやら（笑）。『週ゴン』の話に戻りますが、休刊前後はどうご覧になってましたか？

小佐野　当時、日本スポーツは（文京区）白山に5階建ての自社ビルを所有してたんだよ。でも「狭くなったから」という理由で売却して茅場町のおしゃれなビルに移転した時点で、「近くに別の物件を借りて、自社ビルは賃貸にすればいいのに。売却するってことは現金が必要なのかな？」とは思ったよね。で、休刊の半年前から外注の遅配が始まって。

——現場もフリーも大変な状況になって。

小佐野　フリーだとこういうときに厳しいよね。たとえ裁判を起こして勝ったとしても未払い分のギャラが支払われる保証はないし、裁判費用だってバカにならない。実際、いまも回収できていない原稿料があるわけだから。まあ、「ギャラが払われるまでは仕事は受けないよ」って選択

緊急企画　元『週刊ゴング』編集長、小佐野氏が〝龍魂込めて〟7・11『ハッスル・ハウス』レポート!!

ハードゲイTGはハッスルの尾てい骨になった　Kamino ゴング No.113 7/11 2007

ブレない！　埋没しない！　最後の天龍革命を見届けろ！

かつてオサポン先生は本誌No,113で、06年の『ハッスル・エイド』で天龍がHGに負けたことを大事件として激語り! そして龍魂込めて、ハードゲイ姿になった天龍についても激筆! 熱いぜ、先生!!

ゴング休刊その後——Gイズム後継雑誌

日本スポーツの経営不振、経営陣の不祥事などによって2007年3月14日発売号で休刊となった「週刊ゴング」。しかし、早くもその年の9月5日に〝Gイズム後継雑誌〟が2冊同時に創刊されている。

一つは大都社から出版された『Gリング』。統括プロデューサーのGK金澤氏が中心となり、5代目『週ゴン』編集長の吉川義治氏、『週ゴン』で活躍したフリーの大川昇カメラマンらが制作。名誉顧問には竹内宏介氏、そしてなぜかイメージガールに夏目ナナが就任してスタート。

もう一つは発行元が辰巳出版の『Gスピリッツ』。こちらは『週ゴン』の2代目編集長だった〝ドクトル・ルチャ〟こと清水勉氏が編集長を務め、スタッフとして5代目『週ゴン』編集長の木幡一樹氏らに加え、小佐野氏もフリーのライターとして参加。

現在、残念ながら「Gリン」は休刊中だが、「Gスピ」は4カ月ごとの定期刊行誌として発行されており、アラフォー世代のをターゲットに絞った誌面作りでマニアのあいだではすっかり定着。魂のゴングはいまだ鳴り響いているのだ！

当初は試合DVDが付録だった『Gスピリッツ』。小佐野氏が聞き手の昭和プロレスラーへのインタビューはファンにはたまらないコク深い内容。

元『ゴング』スタッフだけじゃなく、井上譲二氏やターザン山本！氏など『ファイト』や『週プロ』系の大御所も参加していた『Gリング』。

プロレスマスコミがなくなるとき

プロレスマスコミはちゃんとやれば採算は取れると思うんだよ

肢もあったんだろうけど、そこはやっぱり昔の仲間が一生懸命やっている姿を見たら、ね。オファーがあれば「わかった」ってかたちで協力して。

――そして結果的には前田社長の逮捕（民事再生法違反）が『週ゴン』休刊につながって。

小佐野 うん。きっと前田氏がIT企業の人間ということで、昔から日本スポーツに残ってた人たちも経営のエキスパートに見えちゃったんだろうね。新体制になっていろいろな部署を作って社員数も増やしてたから、絶対に莫大な経費がかかってたと思うし。もう、休刊直前には交通費や出張費すら出なくなってたしね。

――うわ～。じゃあ地方大会も取材できないですね。

小佐野 だから最後の2週間は地方に行ってないはずだよ。そうなると社員のモチベーションも下がってきて、あの頃は「本を作る、作らない」で会社と揉めてたしね……（しみじみと）。とりあえず言えるのは、前田氏の逮捕で銀行からの融資がストップするからお金が回らない。そうなると持ち金はなくなるし、むしろ「返してくれ」っていう債権者が来るわけだから、もうどうにもならないよね。

――自分の古巣であり、プロレスマスコミの一翼を担ってきた『週ゴン』の歴史が終わる瞬間、そばで見ていて何を感じましたか？

小佐野 あのね、僕にとって日本スポーツは04年の夏に一度潰れた会社なの。退社するまでに自分がやるべきことはすべてやりつくしたという気持ちがあったから、その後の『週ゴン』の仕事は僕にとってはほかの媒体でやる仕事と一緒。だから正直そんなにショックじゃなかったんだよ。休刊決定後は退社したときと同様に「おたおたしてもしょうがないだろう」って、また一段落ついたということで、何も考えずハワイに行ったんだけど（笑）。

――『週ゴン』よりも先に『週刊ファイト』が休刊（2006年9月）になりましたけど、それはどうご覧になっていました？

小佐野 プロレス界の不況うんぬんっていうよりも、スタッフの人たちが気の毒だなって感じたね。同じ業界で食ってる以上は、大きなくくりで言えば仲間という感覚だったから。それに当時、僕は『ファイト』では仕事してなかったけど、する可能性だってあったわけでしょ？ そこが休刊になると仕事の選択肢が一つ消えちゃうってことだから、そういう意味でも残念だったよね。

――プロレス不況と出版不況が重なって厳しい状況ですよね。

小佐野 でも、プロレス関係の出版に関してはちゃんと計算してやれば充分に採算は取れると思うんだよなあ。現に前田氏も日本スポーツが事実上倒産したあとに、ターザン山本！さんを担ぎ上げて『週ゴン』を復刊させようとしたじゃない？ 僕のところにも各方面から話が3回来てるからね。

――3回も編集長を打診されたんですか⁉

小佐野 でも断ったよ。それはフリーになってから自分なりに築いてきた仕事と人間関係を大事にしたかったからね。前田氏サイドには「『週ゴン』という看板で本を売ろうとしたってファンはそんなに甘くないですよ」という話はしたよ。いまの読者は名前や看板だけにお金出さないって。

――なるほど……。この不況の荒波の中、プロレスマスコミとして生き抜くにはどうすればいいんですかね？

小佐野 そんなのこっちが知りたいぐらいだよ！（笑）。やっぱりフリーだといつまでもその仕事があるわけじゃないしね。連載があってもいつか最終回が来たら終わりだし。だから逆にいうとお金のことばかり考えてやってたら、先行きの不安に支配されて心も身体がもたないよ。

――お金のことはあまり考えるなと（笑）。

小佐野 まぁ、僕自身が心がけてるのはなるべく現場に顔を出して、ファンの空気を感じて、試合を観ること。観てなきゃ語れもしないし書けないし、その資格もないと思うし。「評論家でございー」とふんぞり返っていても何も生まれないからさ。僕な

“最強”と“王道”がともに拳を振り上げてチャゲ&飛鳥の「YAH YAH YAH」を熱唱……とても10年前には考えられなかった光景だ。プロレス界によくも悪くも波紋を起こしてきた『ハッスル』。このまま時代の徒花で終わってしまうのか――？

『ハッスル』が終わるにしろちゃんとした結末を見せてほしい

プロレスマスコミがなくなると、

んかは「昔のプロレスについて書いてほしい」という依頼がどうしても多いけど、そんな貯金なんていつか使いはたすわけじゃない？ それよりもいま、自分に貯蓄をしていかないといけないからメジャーもインディーも分け隔てなく取材に行くようにはしてる。

——その貯蓄が本当の貯蓄につながるというか（笑）。

小佐野 そうそう（笑）。あとは行った大会について必ずブログで書くってことかな。そうするとけっこう読んでくれて、それが仕事につながったりもするしね。

——とにかく「現場に行け！」と。あの～、単刀直入にお聞きしますけど、小佐野さんは『ｋａｍｉｐｒｏ』という雑誌は業界的にあったほうがいいと思いますか？（笑）。

小佐野 それはあったほうがいいんじゃないの？ いまは事実上、専門誌が『週刊プロレス』一誌だけでしょ。で、あとは『ｋａｍｉｐｒｏ』と『Ｇスピ』があって、その二つは違った切り口で「プロレスっていろんな楽しみ方ができるんだよ」という特色を出して提示してる、と。昔は『ｋａｍｉｐｒｏ』に対して個人的には「ちょっとプロレスをオモチャにしすぎじゃないかな？」っていうか、そのイジり方が上目線に映った部分もあったけど、いまはその頃とは時代も違うしね。基本的にはどんな本でもありだと思うよ。僕個人としても働き口の一つとしてあったほうがいいし（笑）。

——先程の社員の給料を肩代わりしたという男気あふれるエピソードにもつながると思うんですけど、小佐野さんが物事を考えるときって、やっぱり天龍さんの影響は大きかったりするんですか？

小佐野 あぁ、それはある！（キッパリ）。あのね、天龍さんの全日本プロレスに対する愛社精神ってもの凄かったんだよ。そうじゃないとあんな痛みの伝わる試合はできないしね。少なくとも、もらっているギャラ以上のことはしてたもん。僕も自分で言うのもへんだけど、会社員時代は愛社精神を持った人間だったと思うしね。

——そうですよね。もらっているギャラ以上のことというか、もらっているギャラまで会社に提供して（笑）。

小佐野 でもね、へんな話、社員が「これじゃ給料少ないな」って思うぐらいじゃないと会社は成り立たないと思うよ。単純に会社が払ったぶんしか働いてなかったら、利益なんか上がらないもん。

——確かに（笑）。

小佐野 日本スポーツは給料を抑えていたから39年続いたんだろうしね。いま、昔の高校時代の友だちなんかに会うと、それなりの会社に入ってるのがいるわけよ。向こうはピシッとしたスーツを着てるのに、僕なんかこんなアロハシャツ着て、ベースボールキャップ被ってさ（笑）。

——ダハハハハ！

小佐野 プロレスに興味ないヤツに「いま何してるの？」って聞かれて、こっちの仕事の話をすると「いいな、好きなように生きて」って、彼らはうらやましがりはするんだよね。僕も「楽しいよ」なんて強がり言ってさ。でも、もしあのまま日本スポーツに残って会社が存続していたとしたら、もうプロレスを離れて役員として背広を着た人生を送っていたのかなって思うよね。

——最後に、開催中止を発表した『ハッスル』は、今後どうすればいいと思いますか？

小佐野 あのね、山口さんが『ハッスル』の社長就任会見で、たしかこんなこと言ってたような気がするの。「1～2年やって芽が出なかったら、スパッとやめます」って。そのときに内心、「ちょっと待ってくれよ。これだけプロレス界をイジくり回しといて、1～2年やってうまくいかなかったらやめる？ それはないでしょう！」って思ったのね。

——それはプロレスをある種、根底から覆したという部分で？

小佐野 そうだね。それに〝風雲昇り龍〟天龍源一郎、〝王道〟川田利明、〝最強〟髙田延彦……みんなそれぞれプロレス界のトップだよ？ 彼らをあれだけイジくって、それこそあの人は〝王道〟と〝最強〟が肩組んで歌っちゃうような世界を創っちゃったわけだ！

——ダハハハハ！ なんだかすいません（笑）。

小佐野 あのミスタープロレスと呼ばれた天龍源一郎が「フォーッ！」って叫ぶような世界を創っておいて、それがちょっとうまくいかなくなったからって手を引くなんて、「そんなの許さねえぞ」って気持ちはあるよ！（キッパリ）。これで山口さんが手を引いて、新しい経営陣が『ハッスル』を運営するかどうかはわからない。あるいは会社を潰したくても潰せない事情もあるのかもしれない。それでも「まだやろう」という意思を純粋に見せるんなら、僕は「続けてほしいな」って思うよ。

——このまま終わりじゃイメージがよくないですよね。

小佐野 もちろん天龍さんたちをイジったことも山口さんだけの責任じゃないしね。レスラーも自分の意思でやったことだろうし。なんにしろ、『ハッスル』というイベントはプロレス界にいろんな問題提起をしてきたんだから、志半ばで終わるのは残念だよ。もし終わるにしろちゃんとした結末を見せてほしい。

——いまのままでは納得いかない、と。

小佐野 尻切れトンボでしょ。それって、エンターテインメントじゃないよ。両国で結末を迎えるにしろ「ドッカーン！」と驚くようなものを見せてほしいよね、「ドッカーン！」って（手振りを交えながら）。

——「ドッカーン！」ですか（笑）。

小佐野 たとえ12月の『ハッスル・マニア』で本当にピリオドを打つにしろ、「こういう幕の引き方があったか⁉ たいしたもんだ！」というのを見せてほしいよ、うん！

——なるほど。電話がなかなかつながらないようなんですが、山口社長にお伝えしておきます（笑）。今日も熱血的なご教授、ありがとうございました！

小佐野 いえいえ、こんな感じで大丈夫？ で、『ｋａｍｉｐｒｏ』は大丈夫なの？（笑）。

——ダハハハハ！ お察しください としか言いようがございません！（笑）。

【09年10月30日／都内・某所にて収録】

おさの・かげひろ■1961年9月5日、神奈川県出身。フリーのプロレスライターとして『Gスピリッツ』、『東京スポーツ』などで執筆中。またGAORA『全日本プロレス中継』、サムライTV『S－ARENA』などでコメンテーターも務めている。ハワイ情報満載のHPアドレス→http://maikai.boy.jp/index.htm

いくら山口日昇でもヒドすぎる!?

やっぱり恐ろしい山口日昇 座談会

ハッスルエンターテイメント代表取締役

『ハッスル』危機一髪特集のラストを飾るのは、同団体の代表を務める山口日昇氏を考える座談会であります。最近の読者は知らないかもしれないが、本誌の前編集長である山口氏は"鬼畜編集長"の異名を誇っていたんですね。そんなわけで『ハッスル』の今後を考えるうえで、この男の人間性を見ずにはいられないわけですよ!

山口日昇座談会

――今日は、本誌『kamipro』の前編集長であり、現ハッスルエンターテインメント代表の山口日昇さんに詳しい方々に集まっていただきました！

八木 ……ホントは集まりたくなかったけど（笑）。だってさ、この収録場所に来ようと思ってたら天気が急に悪くなってきたし。

ノブ 嵐みたいな天気になりましたね。いまの『ハッスル』は天気すらも悪くする（笑）。

松林 それは「そんな座談会には行くな！」という暗示だよね、間違いなく。そもそも俺はあんまり詳しくないんだけどね、山口日昇さんのことは。しかし、いまの『ハッスル』はデリケートな状況だろうから、載せられない話もけっこう出てくるんじゃないの？

八木 オレ、今日はずっと黙ってるかもしんない（笑）。だって、このメンツでオレだけでしょ、山口日昇の擁護派は。

――そういう八木さんはこの中で山口さんとの付き合いは一番長いですよね？

八木 長いですよねぇ。かれこれ20年ぐらいかな。ボクがまだ10代で、伝説のお笑い雑誌『カジノフォーリー』の編集部にいたときからの付き合いですから（笑）。

ノブ いまのお笑いブームの超先駆けですよね。時代の先を行きすぎて、誰も知らないかもしれませんが。

八木 失礼な（笑）。その超マイナーなお笑い雑誌と超マイナーなプロレス雑誌（当時は『紙のプロレス』）が交換広告をやってて。で、その『カジノフォーリー』が解散になったときに、山口さんに「事務所に机を置かせてください」って頼んでから『紙プロ』編集部に7～8年はいたかなあ。

――ダブルクロスの立ち上げメンバーでもある松林さんは？

松林 俺はべつの出版の仕事をやってたんだけども。そもそも世謝出版時代の『紙のプロレス』創刊号（91年発行）を読んで、「おもしろい雑誌が出たなあ」と。で、当時一緒に仕事をしてた斉藤雄一さんという方がいて……。

八木 伝説の編集マシーン（笑）。

松林 そう。そのとき斉藤さんは『中洲通信』を作っていたのかな？ たしか……。

八木 ウィキペディアにも載ってない小さい小さい雑誌の話がどんどん出てくる（笑）。

松林 その『中洲通信』の編集をやっていた斉藤雄一さんに「今度、こんなおもしろい雑誌が出たよ」って教えてあげてね。それで斉藤雄一さんが山口日昇さんにインタビューをしに行った、と。それで斉藤雄一さんと山口日昇さんが接点を持ったのが関係性のスタートかな。

八木 つまり、高田馬場・早稲田近辺の小さな小さな雑誌の交流ですね（笑）。

松林 そのうちに、いまFEG関連の仕事をしている現ローデスの柳沢（忠之）さんと山口さんが知り合って、『猪木とは何か？』とかを作った。俺もそのあたりの仕事を手伝っているうちに、いつのまにかダブルクロスの立ち上げメンバーになってしまった、と。

初期『ハッスル』に山口氏は裏方として参加していた。旗揚げ会見の出席者、小川直也、橋本真也、榊原信行（当時DSE代表）、中村祥之の4名は、いずれも『ハッスル』から姿を消している。

――で、松林さんはいわゆる、小さい判型の『紙のプロレス』のマスカラスが表紙の号を最後にダブルクロスから離れて、いまのエンターブレイン所属に至るわけですね。

松林 いやいや、いまに至るまでにもサムライTVの仕事や『SRS－DX』とか、いろいろと紆余曲折がありました（笑）。

八木 もともと小さい頃の『紙プロ』って、柳沢さんたちが加わる前は椎名誠さんと目黒考二さんたちが出してた『本の雑誌』っていうミニコミ誌の影響を凄く受けていて。『カジノフォーリー』もそうだけど、いまのサブカルチャーと違ってホントのサブカルチャー誌。まったく世間に届かない雑誌だったよね。

松林 コア向けともニッチ向けともいえない、「誰に向けて作ってるんだ？ これ」って感じでね。まあ、そんな雑誌をおもしろいと思った俺が言うのもなんだけど（笑）。

――で、スモーノブさんは初期『紙のプロレスRADICAL』（現『kamipro』）に加わって。

ノブ はい。いまから12年前、あれは大学2年生の冬休みのことかなあ。小さい頃の『紙のプロレス』はずっと読んでたんだけど、当時通ってた大学の生協の本屋さんでターザン（山本！）が表紙の『紙のプロレスRADICAL』創刊号を買って食堂で読んでたら、「スタッフ募集」の告知が載ってて。それで応募して入社したんだよね。でも、俺は面接の日に山口さんが失踪してて、八木さんと吉田（豪）さんに採用してもらったから、厳密に言うと最初は接点なかったんだよ（笑）。

八木 ちなみに、オレはたぶん山口日昇周辺で唯一利害を伴なわずに付き合いが続いているんですよ。で、今回の座談会をやるのに、松林さん、さいちん（斉藤）、ノブという利害関係ありまくりの3人じゃあまりにも刺々しいからってことで呼ばれたんでしょうけど（笑）。

――まあ、業界の一部では『ハッスル』危機の噂に伴なって、「『kamipro』はどうなるんだ？」みたいな声も上がってるそうですし。

ノブ どうなるんだろうねぇ……。

――利害関係がなければ凄くおもしろいでしょうねぇ。だって、利害があってもそこそこ楽しいんだから（笑）。でも、どうかと思うのは、利害関係がないくせにあるふりをして度量の大きさをアピールしたがったり、被害者ぶってる関係者な

座談会出席者

八木賢太郎
本誌・非番でおなじみのフリーライター。今回の座談会出席者の中で山口日昇との付き合いは一番古い。

松林貴
本誌・編集次長。ダブルクロスの立ち上げメンバーの一人。おいしいものとおもしろいものがある場所にふらりと現われる。

坂井ノブ
本誌編集部。現編集部の中では山口日昇との付き合いは最年長。大喧嘩の末、ダブルクロスを離脱した過去があり。

ジャン斉藤（司会）
本誌編集長。"マット界の條辺剛"としていろんな意味でハッスル中。

んですけどね。

わって山口さんが社長になった、オ

はないし、自分でも経営に向いてな

山口さんは自分でも経営には向いて

んですけどね。

松林　まあ、いまの山口さんは関係する各方面のフィールドがはるか昔とは違って、とんでもなく広がってるから、ヘタにおもしろがってるとどんな方面の方が怒るかわからないですよ！

――それならば、「度量の大きさをアピールしたがってるおまえが『ハッスル』に投資しろ！」って話なんですけど。その『ハッスル』の経営が芳しくないって話はだいぶ前から流れてましたよね。

八木　そもそも主催がドリームステージエンターテインメントからハッスルエンターテインメントに変わって山口さんが社長になった、オレはその立ち上げ時点から歯車はおかしかったと思うよ。

松林　えーっ!?　賢太郎はその時点からそう思ってたの？　いまとなっては「それ、早く言ってくれよ！」って、いろんな人から言われると思うよ。

ノブ　スタートからダメ！　というか出航前から嵐の船出でしたからね。

八木　まるで今日の天気のような感じで（笑）。まったく利害がないオレからフォローすると、本人は社長をやりたくなかった。たぶん本心はそうだと思う。率先してやった感じではないし、自分でも経営に向いてないのはわかってたと思うんだよね。

――やらざるをえなかったということですか？

八木　ほかにやる人がいなかったんじゃない？　それに、あの頃の『ハッスル』には可能性があった。まだ選手も関係者も盛り上がってたでしょ。

――経営うんぬんの話の前に、プロレスの可能性を追求する熱があったということですね。

八木　ホントかどうかわからないけど、何人かの選手に（「社長をやってくれ」と）頼まれたって話も聞いたよ。「山口さんがやってくれないんだったら『ハッスル』からは手を引く」みたいに。

常に賛否両論はあったが、ファイティング・オペラの世界観は、日本プロレス界に計り知れない影響を与えた。あの新日本ですら『レッスルランド』なんていう企画をやったんだから。

山口さんは自分でも経営には向いてないことはわかってたと思うんだよね

ノブ　でも、ホントに選手がそんなこと言うかなあ？　うしろできっと誰かがネジを巻いてたんじゃないかなという推理もできると思うんですよ。

八木　言い方が冷たいねえ、キミは（笑）。そういえばさ、こないだしみじみ思い出したけど、かつての山口さんをよく知る某女史が酔っぱらうと常々、「山口日昇はいつかデカいことをやる男なの」って言ってたけど、ついにデカいことをやったなと思ってさ（笑）。

ノブ　今回はデカデカと新聞に載りましたからねぇ。

――八木さんから見ると、『ハッスル』がこうなってしまったことには特別違和感はないんですか？

八木　経営に関しては、まさに想定の範囲内でしょ？　山口さんって目の前に100万円あったら110万円使う人だから。それはもうもともとの素養の問題で。だいたい「オレは金に困ったことない」っていうのが口癖なんだから。はたから見てるとずっと困ってるような気がするんだけど（笑）。

ノブ　僕も何度もその言葉は聞いてますけど、いま思えばそのハッタリが言えてた時代が懐かしいですよ。

八木　ちなみに、こないだ「中学生以来、初めて金に困ってる」って弱音を吐いてたよ（笑）。

――じゃあやっぱり経営は任せちゃダメだったんですか？

八木　任せちゃダメっていうか、山口日昇という人間の使い方だろうね。なんか見てると全部を山口日昇に背負わしちゃったというか。背負わしちゃったんじゃなくて、山口さんが背負いたがったのかもしれないけど。

松林　俺は『ハッスル』のソフト的な裏側の部分ってまったく知らないんだけど、このあいだの会見で山口さんは「ここ1年半から2年、自分がソフトに関われなかった」という話をしてたけれども、そのへんはどうなの？

ノブ　そんなこともないと思うんですけどねぇ。マッスル坂井は、大会中止会見直後に「僕は山口さんから『マッスルがハッスルに上がるっておもしろいじゃん』って言われました」って告白してましたから。

八木　でも、あんまりガッツリは関わってなかったみたいですよ。夏頃に「ひさびさにオレがマッチメイクした」みたいなことを言ってたし。それまでは作家チームに任せてたんでしょ。

――どうして作家チームに任せてたんですか？

ノブ　……あきたんだろうね。

――あ、そんな理由で（笑）。

ノブ　だって2年くらい前、山口さ

山口日昇座談会

んが坂田（亘）や島田（特命係長）さんを前に「あきちゃったんだよね〜」って道場でブーブー言ってるのを聞いたよ。「なんでこの人、こんな場所でみんなのテンション落ちること言うんだろ？」って思ったけど。

——でも山口さんは『ハッスル』の社長だったわけでしょ。作家チームがいるとはいえ、あきたからっていいんですか（笑）。

八木 いや〜、ホントにあきたんじゃないの？ だって『kamipro』もあきたじゃん。

松林 毎号毎号、締め切り1週間前になると仕事を放り出して失踪してたし。

——確かに『紙のプロレスRADICAL』も20号くらいであきてましたね。

八木 いろんなことにあきる人だから、それはしょうがない。金のどんぶり勘定とあきっぽさっていうのは性格だからさ。それを責めてもどうにもなんないっていうか。

——ぜんぜん責めるつもりはないんですけど、じゃあなんでこうなるまで続けちゃったんですかね。

ノブ 昔は失踪できて、ちゃぶ台をひっくり返せたけど、いまは立場的に失踪させてもらえないから。ちゃぶ台も重すぎて、もはやひっくり返せないでしょ。

八木 そこは規模が大きくなりすぎたよね『ハッスル』は。放り出せないレベルになってしまった。どこかの掲示板にも「いくら山口日昇でも無責任すぎる」みたいな書き込みがあったじゃん。

ノブ でも、それもかなり矛盾をはらんだ言葉ですよね。「カレーは辛いものだけど、いくらなんでも辛すぎる」って文句言ってるみたいな（笑）。

——誰に怒られるかわからないからあまり大きな声では言えないですけど、自分からすると、まだ責任は取ってる感じはするんですよね。だって、昔の山口さんを知っていれば、こうやって会見に出てくるだけ凄いじゃないですか（笑）。

八木 「山口日昇をなんだと思ってたんだ」って話だよね（笑）。しかし、なんでみんな山口さんに全部を任せたんだろうね。混乱するに決まってるじゃん。だって『kamipro』ではさんざん「山口日昇はテキトーだ」と言ってきたわけでしょ。半分冗談だと思ってたのかな。

ノブ 世間は「まさか、ここまで無責任なわけがないだろう」とか思ってたんじゃないですか。

八木 そうなのかなあ。

——でも、本誌をつぶさに読んでる人はわかると思いますけど、じつはそういうメッセージを1年半くらい前から誌面を通じて送ってたんですよ。「お金が足りない」特集をやったり（笑）。

八木 ストレートには出せないなりに（笑）。とにかくもともと変わってないんだって。みんなが山口日昇を信用しすぎだよ。

ノブ でも、八木さん。ここ1年、編集部にいた人間だったら、誰も信用はできないと思います。

八木 ダハハハハ。いつからそんなこと言う子になっちゃんたんだ、おまえ。オレが面接したときはかわいい青年だったのに（笑）。まあ、確かに信用してないっていうのはアレだけど、優秀な経営者だとは思ってないよね。

ノブ もちろんですね、それは。

八木 でも、ちょっとできる経営者っぽい感じになっちゃったじゃない。

——PRIDEで田村潔司や小川直也のブッキングをしたり、初期『ハッスル』のプロデューサーとしては成功したりしましたからね。

八木 その部分の優秀さはいいんだけど、やっぱり経営者としてだよね。経営は苦手だから、無理ですよ。だから山口さんに経営も任せた時点で、すでに穴の開いたゴムボートで台風の中を出港するような状態だったんですよ（笑）。

松林 まあ、ただ山口さんだけの問題ではないと思うんだけどね、『ハッスル』がこうなってしまったのは。プロレス団体ではあたりまえなところの券売の営業っていうのも、あんまり機能してなかったという話も聞こえてきているし。

——『ハッスル』も収益はともかく、プロレスの可能性がまだ見えてたらよかったんでしょうけど。ここ1年くらいは回を重ねるにつれて内容が……。ウチも取りあげなくなって。

ノブ 失速していったよね。山口さんが言ってたのは、リング上が薄くなった理由としては「自分がストーリーに関わらなかったこと」と「スタッフ間のコミュニケーション不足」と「出役の出たり入ったり」っていう部分が影響してた、と。でも、要は山口さん自身のマネージメントの問題じゃないかって気がするんですよ。自分がストーリーに関われるような体制を作らなきゃいけなかった。あるいは関わらなくてもおもしろくできるようにしなきゃいけなかった。「スタッフ間のコミュニケーション不足」って、それもずいぶんな言い方だなと思ったんですけど。

——坂井さんは現場で見てて、コミュニケーション不足って感じました？

ノブ 会議はイヤっていうほどやってたけどね。ここ1年ぐらいの現場はわからないけど、山口さんとスタッフ間のコミュニケーションなんじゃないかなって気がする。

松林 スタッフ同士のあいだではなく、いわゆる上下のコミュニケーションってこと？

ノブ 誰に対してもコミュニケーション不全だと思うんだよ。そもそも山口さん、連絡つかないことが多いし、なかなか電話に出ないでしょ。

八木 なんかリアルな話になってきた（笑）。

——会えば「お互いに腹を割んなきゃダメだ」って話になるけど、それでもプロレスするんだっていう雰囲気はありますよね。

松林 そのプロレスラーぶりもね、以前までの『kamipro』編集長という立場までなら笑えたけど、『ハッスル』を運営する会社の代表という大きな責任がある立場になっちゃったからね。

ノブ でも、ここまでやったんだから、このまま貫き通してほしいとも思うんだけどね。

八木 スーダラ人生を。まあでもいまでも元気でしょ、なにげに山口日昇は。いまだにハッスルしてますよ。それが空元気なのかどうかはわからないけど。

ノブ でも、『ハッスル』はどうなるんですかね。まだ、いまでもやりたいのかなあ。

——博打的視点から見ると、いま席を立っちゃったらもう賭けられないからまだ賭場に座り続けてる印象が凄くあるんですね。

八木 まあ、そりゃあそうでしょ。それが真実じゃない？

——だから見えてくるのは『ハッスル』に対する愛情とか責任よりも、まだ勝負からオリてないってことなんですね。

八木 オリないよね。麻雀やると、一番面倒くさいタイプだね。

松林 勝負を続けているかぎりは〝負け〟ではない、という。でも、その勝負に付き合う周りの人たちはそんなわけにはいかないからね。

八木 だからさ、規模はどうであれ、根幹はホントにちっちゃい『紙プロ』のときと変わんない。どんな規模でも山口日昇のやってることは同じ。

——いまはそういうスーダラを指差して笑ってあげる人がいないのかもしれないですね。笑ってすむレベルじゃなくなってるんでしょうけど。

ノブ 周りの人も、みんな余裕がないしね。それにオレらに見せてる見苦しいところはまったく世間には

規模はどうであれ、根幹は『紙プロ』のときと変わらない。やってることは同じ

届いてないと思うし。

八木　またそういうことを言う、この子は（笑）。でも、フォロー役として来てるから言うけど、偉人ってそういうもんですよ。

ノブ　偉人だから……しかたないんですかねぇ（笑）。

八木　身内にはさ、あとで聞くと見苦しいことをいっぱいしてるんだよ。あの長嶋茂雄だって叩けばいろいろと埃も出るわけですよ。

松林　大山倍達総裁もたくさん出たしなあ……。

八木　大山倍達だって出るわけです。手塚治虫だってあとで聞くといろんな見苦しいところはいっぱいあるわけですよ。

ノブ　いまそういう見苦しいところを告発して辞めていくのが従業員としては一番気持ちいいんですけど、それをやっちゃうとね、大きな山にちっちゃいゴミを捨ててくようなもんだと思うんで後味が悪いですけど。

八木　ホントに気持ちがささくれてるねぇ。個人的な怨恨は抜きにしてしゃべれないのか（笑）。

――まあ、坂井さんはダブルクロス周辺で2番目に怨恨がありますから（笑）。

八木　誰だよ、一番目は（笑）。

ノブ　一番目の人に比べたら、僕のは怨恨なんて呼べる代物じゃないですよ。むしろ『ハッスル』周辺の人のほうが怨恨を持ってる可能性は高いと思います。

――ちなみに自分は個人的な怨恨は全然ないの？

ノブ　全然ないですよ。

――それは付き合いが終わった時点で判断するものでしょ。……いや、「殺す、殺さない」の電話のときはあったかもしれない（笑）。

ノブ　「殺す、殺さない」の電話（笑）。

――けっこう武闘派ですよね、山口さんは。この業界ってハッタリかましてくる人はバカみたいに多いけど、ホントに殴りかかってくるのは山口さんと前田日明だけのような気がする（笑）。

八木　大会中止会見のときに右頬が腫れてて「誰かに殴られたんじゃないか？」みたいなことがネットに書かれてたのね。そこは言っときたいんだけど、山口日昇はただ殴られてるようなおとなしいタイプじゃない（笑）。

松林　山口さんはたとえ相手がどんな人間であれ、殴られたら倍どころか、とことん殴り返すタイプの人間だからね。

八木　そうそう。もしも裏でそういう騒動があったら、今頃は絶対に警察沙汰の騒ぎになってますよ。

松林　いくら自分に非があったとしてもそこは絶対に譲らないのが山口日昇さん。

八木　そういう意味じゃあネコ被ってるのかな、最近は。しかし、悪口しか言ってないね。

ノブ　そんなことないですよ（無表情で）。

八木　ほめるところはないの？

ノブ　いやあ……。やっぱみんな天才だって言いますよね。確かに山口さんがいなかったらあのドキドキする空間、2005～2007年ぐらいまでのキラキラと輝いてた『ハッスル』はできなかったのは間違いないですから。

八木　作家としての部分では天才なんだと思うんだよね。

ノブ　本人も言っているように、お金を管理するプロデューサーとか制作の進行管理をするべき立場の人がもっといて、山口さんはストーリーライターとかに徹したほうがよかったと思うんですよね。あとは「あきた！」ってなったときの対策をどう立てるか。

松林　ちっちゃい頃の『紙プロ』も結局、創刊号から5号ぐらいまでは山口さんが作りたくて作っていたんだけど、そのあとに柳沢さんと組んでからの『紙プロ』は厳然と柳沢忠之色になってるからね。

八木　『Rintama』は、ほぼオレや若手がやってたし。『紙のプロレスRADICAL』の初期とか、『紙プロ』のちっちゃい頃の初期とかくらいじゃないかな、やる気があったのは。

松林　じゃあ、結論としては「あきちゃうからしょうがない」ってこと？

ノブ　でも、労少なくして自分の名前とかイズムをデカくすることに関しては天才的ですよ。その反面、周りの人がケツを拭いてきた膨大な歴史があるということを後世に語り継ぐのがボクらの役目かなという気はします。そこで僕らが鍛えられたのはまぎれもない事実ですから。

――だから『ハッスル』に関わって迷惑を被っている人がいっぱいいるのかもしれないから、あんまりこういう言い方はよくないけど、あまり驚きはない展開なのかもしれないですね。

八木　身内は想定内の光景（笑）。だって世謝出版（ダブルクロスの前身）は何号目かの打ち上げの飲み代で傾いたんだから。

ノブ　の、飲み代で。そんなに飲んだんですか？

八木　5次会まで30人ぐらい飲んでて。それであっという間にその号の売り上げが消えて、会社の現金も消えたけど、年末の大井競馬場の万馬券で戻したっていう（笑）。そこからもう基本的に山口イズムは変わってないから。

松林　ということは逆説的に、『ハッスル』の代表になってイズムを変えていたら、いまの状況は迎えていなかったってことになるね。

八木　たぶん山口さんがいま考えてるのは「1億円あったら競馬で増やすのにな」ってことだと思う。

ノブ　そろそろ年末も近いし、有馬記念で一発逆転があるかもしれないのかな……？

――競馬で一発逆転かあ……。って、それ、いまのターザン山本！とあまり変わらないですよ！

【09年11月某日／『kami-pro』編集部にて収録】

第48回

バリジャパ復活したので観てきました

花くまゆうさく

豆リングの汁

WOWOWでやっと『TUF』が放送されて楽しんで観てるが、ゲスト声優でカーツ佐藤さんの名前があったときはビックリしたなぁ。ナゼ？

バリジャパ復活したので、観てきた。ルミナが勝ったのでホッとする。マイクもいい感じ。欲いえば、ダウン取ったあとはパウンドでなく足関いってほしかったなぁ。そしたら会場もっと爆発したと思う。今後の残り少ない試合は、新鮮な組み合わせが観たい。ルミナvs所戦って実現可能じゃないかな。

リオンは門脇戦のようにサイド取られても無理には起きずに、ペケーニョのギロチン不発にさせて作戦勝ち。それにしても、小ノゲイラの負けは悲しくて落ち込みました。昔は、あんなに強かったのになぁ……。

五味はスタミナ切れてボロボロだったけど、それでも気持ちの強さが出て魅力的だった。マイクも自然でいい感じ。

マイクといえば、こないだの『戦極』の郷野英語マイクもよかったし。不思議な判定を、自分へのクソったれで締めた小見川マイクもよかった。そして、いま無性に辛拉麺が食べたい。

Hanakuma Yusaku
◎松井が活躍するとホントうれしい。

金ちゃんのどこまでやるの？

第40回 神様お願い！の巻

先月、DEEPの試合後に田村（潔司）さんへの対戦を表明して、このコラムでも闘いたい思いを載せてもらったんだけど、全然進展がないんだよね（苦笑）。

でも、今年こそ大晦日に試合してみたいし、自分にとって田村さんはUインターの新弟子時代から「超えなきゃならない」と思ってた壁だからね。対戦が実現するように、このあいだ思い立って、伊勢神宮にお参りしてきたんだよ。

ちゃんとスーツ着てさ、賽銭箱の前だけじゃなくて、中まで入れてもらってね。「大晦日に対戦が実現しますように」ってお願いしてきたよ。

もう、俺にできることは神頼みぐらいだからさ（笑）。

それにしても、田村さんってなんで、あんなにモテるんだろうね？

これは女性にというより、対戦表明っていう意味だけど。俺以外にも菊田（早苗）も対戦表明してるし、柴田（勝頼）くんなんかもそうだよね。

なんで、みんな対戦したがるかっていうと、やっぱりあの思わせぶりな態度っていうかさ、好意があるようなそぶりだけするキャバ嬢みたいなところがあるんだよ（笑）。それでなかなか〝落ちない〟から、みんな意地でも対戦しようと思うんだろうね。

まあ、俺もその一人なんだけど、もし田村さんがダメなら、田村戦を懸けて菊田や柴田くんとやるっていうのでもいいんだけどな～。

とにかく、いまは試合がしたいから。伊勢神宮の神様が俺の願いを聞いてくれることを祈ってるよ（笑）。

あと今月はヒョードルの試合をネットで観たんだけど、やっぱりヒョードルは強いね！

対戦相手のブレット・ロジャースは、ほとんどテイクダウンされたことがないって聞いてたからさ、ヒョードルはどうやって倒すんだろう？って凄く興味があったんだよね。

結局、スタンドの右フックでKO勝ちしたけど、1ラウンドに何度かロジャースをちゃんとテイクダウンしてるところが、また凄かったよ。ヒョードルって、おもいきり踏み込んだフックを打ちながら、胴タックルにいって倒すのが凄くうまいんだよね。

あのフックからの胴タックルって、相手にとってはなかなか切れなくて、嫌なもんなんだけど、やるのも難しいんだよね。俺なんかも練習してるけど、なかなか成功しないからさ。

あの技術をヒョードルはリングスの頃から使ってて、レナート・ババルなんかも、それでテイクダウンして勝ったんだよね。あのリングスの頃から使ってる技術がいまでも充分通用するっていうのが、ヒョードルの凄さだよ。

そして、なんといってもあの最後の右フックが凄いね。あれだけ踏み込んでおもいきり打てる選手ってなかなかいないよ。ヒョードルはこの試合で拳をケガしたらしいけど、そりゃ拳も壊れるだろうね。だから一流空手家みたいにヒョードルが拳をガチガチに鍛えたら、さらにとんでもない選手になると思うよ。

ああいうヒョードルの凄い試合を観ちゃうと、近い将来、なんとかしてブロック・レスナー戦が観たいよね。このヒョードルvsレスナーこそ最強決定戦だし、実現したらファンみたいな気持ちでわくわくしながら観るだろうな。

でも、その前に自分の試合を決めないとね（苦笑）。

神様、どうかよろしくお願いします！

Hiromitsu Kanehara
◎本音炸裂コラムほぼ毎日更新中！
金原弘光オフィシャルHP
http://www.hiromitsu-kanehara.com/

kamipro books

驚ガク! 衝ゲキ!! kamipro booksシリーズ!
死闘インタビューの歴史的目撃者になれ!!

魔王 秋山成勲 二つの祖国を持つ男

秋山成勲なのか
チュ・ソンフンなのか——。

2006年12月31日大晦日『Dynamite!!』秋山成勲vs桜庭和志戦で発生したクリーム塗布事件。この一件以降、秋山は日本では悪質な反則選手、片や韓国では悲劇の元・在日韓国人と、評価が真っ二つに分かれた。本書籍は秋山成勲が、柔道界での挫折ののち、総合格闘技家としてデビューして"魔王"と呼ばれる怪物に至るまでを検証するノンフィクションである。

B6変型判　264ページ
定価=1,680円（本体1,600円+税）

PRIDE機密ファイル 封印された30の計画

ついにその秘密のベールを解禁!!
PRIDE幻の超極秘プロジェクト!!

★高田vsヒクソンの前座に前田日明登場!?★長州力、橋本真也、船木誠勝の参戦計画★ホイスvsケアー消滅の計画★PRIDEが小錦獲得に動いた!?★"皇帝"ヒョードルを二度破った男 ほか

その消滅から早2年——世界最高峰のリングに封印された30の計画を発掘! さらに青木真也、三崎和雄ら6大インタビューも同時収録!

B6変型判　292ページ
定価=1,680円（本体1,600円+税）

新日本プロレス学習帳

"業界の盟主"の魅力を
凝縮したインタビュー12連発!

★鈴木みのる&獣神サンダー・ライガー★小林邦昭★平田淳嗣★金本浩二★山本小鉄★新倉史祐★田中秀和★中西学★天山広吉&金原弘光★マサ斎藤★永田裕志★中邑真輔

『kamipro』に掲載された新日育ちのレスラー&関係者のインタビューが一冊に! これを読めば老舗団体の過去・現在・未来がまるわかり!

B6変型判　320ページ
定価=1,680円（本体1,600円+税）

八百長★野郎

ミスター高橋本から7年......
"呪いなき"時代のプロレス再入門書!!

★マッスル坂井★大槻ケンヂ★菊地成孔★森達也★杉作J太郎★ミスター高橋★菊池孝★高木三四郎★ハチミツ二郎★鶴見亜門★プロレス業界初"台本"全文掲載!

カミングアウト当事者から元ファンの知識人まで総動員してプロレスを再考! "プロレスの向こう側、『マッスル』"の世界に迫る!

B6変型判　296ページ
定価=1,680円（本体1,600円+税）

生前追悼 ターザン山本!

え、ターザンが死んだ!?
90年代プロレスを徹底検証!

★浅草キッド★いしかわじゅん★堀辺正史★更級四郎★松本晴夫★杉山頴男★谷川貞治★山口日昇★金沢克彦★市瀬英俊★小島和宏★菊地成孔★Oka-Chang★原タコヤキ君★椎名基樹 ほか

『週刊プロレス』編集長として辣腕を振るった山本さんの人生を通して、90年代プロレスブーム、はたまたプロレスという生き様を振り返る!

B6変型判　304ページ
定価=1,470円（本体1,400円+税）

プロレス狂の詩 夕焼地獄流離篇

プロレス狂がシビれる
凄玉たちのインタビュー集!

★ジェラルド・ゴルドー★後藤達俊★小畑千代★ザ・グレート・サスケ×韮澤潤一郎★中島らも★大槻ケンヂ★シーザー武士★ダニー・ホッジ★高山善廣×金原弘光★真樹日佐夫★三池崇史

メインストリームからはみ出さずにはいられなかったファイターや、リング内外の裏表を凝視してきた関係者へのインタビューがテンコ盛り!

B6変型判　304ページ
定価=1,890円（本体1,800円+税）

U.W.F.変態新書

ダメな大人たちへ捧げる
"変態"とUWFの晩餐!

★UWF★前田日明★船木誠勝★高田延彦★桜庭和志★ターザン山本!★キン肉マン★PRIDE★プロレス★変態とは何か?（菊地成孔スペシャルインタビュー）★変態解説

プロレス界の一大潮流となったUWF。そのUWFに人生を学び、人生を狂わされた変態的プロレスファンたちが、UWF神話を語り倒す!

B6変型判 296ページ
定価=1,680円（本隊1,600円+税）

吉田豪のセメント!! スーパースター列伝 パート1

吉田豪インタビュー11連発!!
インタビュー本の最濃傑作!

★ストロング小林★阿修羅原★康芳夫★倉持隆夫★サムソン・クツワダ★猪木快守★イーデス・ハンソン★田中健一★小川宏★鶴見五郎★田代まさし

プロインタビュアーの吉田豪が、『紙のプロレスRADICAL』誌上で聞き手を務めたロングインタビューの一部を完全徹底再録!!

B6変型判　344ページ
定価=1,890円（本体1,800円+税）

底なし沼 活字プロレスの哲人 井上義啓 一周忌追善本

井上義啓とは底が丸見えの
底なし沼である——!!

★『週刊ファイト』&『SRS・DX』激筆再録★『猪木は死ぬか』、『不在証明あるいは猪木へのレクイエム』★新間寿★夢枕獏★ターザン山本&吉田豪★『kamipro』ラスト喫茶店トーク ほか

"活字プロレスの父"井上義啓氏の一周忌追悼本!! 氏を偲ぶインタビューや、人生最後の旅模様を振り返るエピソードも収録!

B6変型判　312ページ
定価=1,680円（本体1,600円+税）

紙の破壊王 ぼくらが愛した橋本真也 爆勝証言集

破壊王の三回忌追善本!!
泣けて笑えるエピソード満載!!

★破壊王ファミリー★天山広吉★西村修★山田千景（獣神サンダー・ライガー夫人）★馳浩★藤波辰爾★田中秀和★ケビン・ランデルマン★三浦大輔（横浜ベイスターズ投手）★折鶴兄弟 ほか

破壊王の原点である新日関係者が語ったエピソードが盛りだくさん! みのもけんじ書き下ろし『紙のプロレス・スターウォーズ』も収録!

B6変型判　304ページ
定価=1,890円（本体1,800円+税）

eb! enterbrain 発行／株式会社エンターブレイン 〒102-8431 東京都千代田区三番町 6-1 TEL.0570-060-555（代表）
発売／株式会社角川グループパブリッシング
[エンターブレイン総合サイト] http://www.enterbrain.co.jp/

ヘイ! ユー! 最近、ハッスルしてるかい? ……え? ハッスルしてない? そりゃいったいどういうことなんだい? 悩みがあるならドンドン打ち明けてもいいんだぜ! そんなことより、ここ最近のジャパンはめっきり冷え込んできたな。景気まで冷え込んだら一目散だから、そんな寂しいことは言うなよな。そんじゃあ、今月も始めるか。3、2、1、ドゥ・ザ・ハッスル!

140号へのお便り紹介

石井慧×亀田興毅がよかった。亀田の大ファンなので、石井との初対談、おもしろかったです。
【北海道・山口怜さん・会社員・21歳】

D カメダの大ファンというのはめずらしいな。きっと、ジョージ・タカハシとユーぐらいじゃないのかい? クックックック。しかし、この顔合わせはニュースペーパーでも見たぞ。ひょっとして仕掛人は『kami-pro』だったのか? だったら、ユーたちもなかなかやるぜ!

メモ8が語る「俺の女子格闘技」がおもしろかった。『kami-pro』はもっと女子格を取り上げるべきです!!
【香川県・佐々木輝さん・自営業・41歳】

D ま、まさかメモ8というヤツの抗議にグッとくるボーイがいたとは……。今号でもエッチな目で観ていいのかどうか、さんざんディスカッションしてるみたいだから、ヒマだったら読んでくれよな!

私はブル中野の大ファンです。いまも本当にひさしぶりにブル様の言葉が聞けて嬉しい限りです。ブル様と長谷川咲恵の引退7番勝負のビデオ、ありますす。フォールのとき下から抱きしめたブル様に涙した自分がいまもいます。

金網の青春、持ってないんです。絶版で手に入りません。読みたいです。ブル様、元気そうで本当に嬉しいです。あなたは本当に最高で最強でやさしく温かいレスラーです。
【山梨県・小田切めぐみさん・会社員・37歳】

D オレもブルサマというガールには感動した! ああいうスピリットをもったヤツがレスラーっていうんだって、やっとわかってきたぜ。しかも、なかなかのビューティフルガールじゃないか。クックックック……。ミスター・ヤナギサワは次回ぜひ紹介しろよな!

「柴田勝頼と語る! プロレスラー船木誠勝」がおもしろかった。プロレスも格闘家も生き方とオーラが大事だと思います。船木さんやミルコは武士です。だからファンも感動すると思います。その船木さんの現在を柴田選手が語ってくださって、いまパンクラス時代の友・鈴木さんとの関係など、楽しく読めました。

【青森県・阿部寛さん・ニンニク加工業・35歳】

D これは、オレが編集部にいたときに収録されてたけど、シバタってボーイはなんて好青年なんだい!? 正直、いきなりファンになったぜ! サインくれ! そういえばシバタはケージマッチでも勝ったみたいだな。しかも、しっかりカミスペの表紙にもなってたそうで、なかなかのちゃっかり者だな!

PRIDE燃えつき症候群のミルコ。アメリカで戦績を上げられず、「商品価値」は大暴落してしまったわけですが、なんとか巻き返してもらいたい。早々に日本へ主戦場を移してあと2〜3年、もう一度、あの強いミルコを復活させてほしいのです。そんな足がかりになるような企画だったと思います。付記コメントもよかった。
【静岡県・荻野平馬さん・会社員・37歳】

D ユーはカズシ・サクラバの大復活のようにミルコにも復活してほしいってヤツだろ? まあ、誰もがそう思ってるが、時間ってのは思ってる以上に残酷なんだ。ユーもウカウカしてたら部下に追い抜かれるときがくるかもしれないぜい。え? オマエはとっくに抜かれてるだろって!?

● 140号
おもしろかった記事
RANKING

NO.	
1	石井慧×亀田興毅
2	ブル中野
3	船木誠勝 変態座談会
4	北岡悟
5	金ちゃんのどこまでやるの!?

さすがにビッグ対談だけあって、サトシとコウキの対談がトップを飾ったみたいだな。個人的には今回のランキングはなかなか納得できるぜ。とくに、ブルサマというガールとシバタというボーイが出た座談会はオレ的にもヒットだ! 金ちゃんのキクタに対するメッセージもナイスだったしな。ようやく時代がオレのフィーリングについてきたってとこだ!

やったな、マツイ!
オレはずっと前から応援していたぜ!

広島県・梶間浩幸さん/Oh! これはまた凄い線を突いて描いてきたじゃないか。前号に載った博士のサンとドーターだろ? 博士、よかったな!

たけしくん と フミちゃん

大阪府・剣洋人さん/ヒロトは毎号ナイスなイラストを送ってくれるから好きだ! これからもドンドン載せるからはりきって送ってくれよな!

!!
ブ”
リン
えた15歳って……。太もものぶっとさも含めて要注目の人材だ! でも、イ
で掲
こと
とこ
『世紀末の格闘技』
玲子はすまなそうに言ったが、千歳はぜんぜん気にしていなかっ

ファンキーでクレイジーなアイツが
読者のメッセージを
Check it out!!

"読者ペイジ" ジャクソン

「海外から見たDREAMとは?」がよかった。PRIDEがあったとき、フジが相当仕切っていたのであまり感じませんでしたが、いまはやっぱり……そのとおりだと思う。【神奈川県・大内和彦さん・会社員・35歳】

D 海外で扱われるジャパニーズMMAがサップやカンセコじゃあ、正直こっちだって胸を張って「ディス・イズ・ジャパニーズ!」とは言えないよなあ。こんなときにシンヤ・アオキという看板はグッジョブだぜ。フレンズになれるかっていうと、それは話は　別だけどな!

帰ってきた"キモ強"北岡悟インタビューを待っていました。五味選手のコメントで逆にパワーが戻ったのかもしれませんね。第一線での活躍を期待しています。【兵庫県・春名義行さん・会社員・43歳】

D タカノリ・ゴミで思い出したけど、あのファイヤーボーイはマサト戦を目指してたそうじゃないか。いったいどうなってるんだい? 7月のマサト戦の候補がタカノリとタツヤ・カワジリだったってのは、あながち遠くもなかったってことかい?

金ちゃんのコラムがおもしろかった。菊田に関してまったく同感。カズ中村、瀧本、泉あたりとやってほしいと思う。もしくはキング・モー、あるいはジャカレイ。【熊本県・尾方隆博さん・ノアヲタ・30歳】

D キクタってボーイは最近『kamipro』に出すぎじゃないのかい? え? カラーがいいだって!? そんなもん、レギュラーのオレだって一度もカラーになったことがないのに、ユーに渡せるか!（怒）。

「大衆をナメるな」座談会がよかった。言いたいことを言ってくれたから(笑)。【静岡県・佐久間孝さん・会社員・37歳】

D 今回の座談会に反応しているボーイズ&ガールズはなかなか多いみたいだな。しかしよお、こんだけ嗜好が細分化している世の中で、大衆もクソもあったもんじゃないぜ。だって、最近の大衆的出来事というとのりピーぐらいだろ? ……しかし、そう考えるとのりピーって凄いよなあ。

青木真也のインタビューがよかった。青木選手のインタビューはいつもぶっちゃけ話が多くてはちゃめちゃな感じがするけど、なんだかんだ言ってもちゃんとチャンピオンになるから凄いと思う。これじゃ、誰も文句は言えないですよね。【埼玉県・高橋ゆうさん・会社員・33歳】

D しかし、最近のシンヤ・アオキは、二言目には「BJペンと闘いたい」って言ってないかい? いったいどんだけ強いんだって思うよな、そのBJペンってボーイは。いいかげん、オレもその対決は観たくなってきたクチだぜ。

15歳のゲノム戦士こと定アキラのインタビューはなかなか深い内容でした。「まともな神経なら正視に耐えない」プロ練ってどんなんだろう。それに耐えた15歳って……。太もものぶっとさも含めて要注目の人材だ! でも、インタビューでは「はい」「頑張ります」としか言ってなくて、ほとんど宮戸と博士がしゃべってると思います。【福島県・毒柴さん・非人間国宝・38歳】

D 15歳というのは、なかなかしゃべらないもんだよな。オレが15のときもなかなかのシャイボーイだったぜ。当時のオレの写真でも見るかい?……え、けっこうだって?

今回は堀辺師範の雷電の話がおもしろかったです。規格外に強いから横綱になれない力士がいるなんて、堀辺先生はなんでも知ってるから本当に凄いと思います。これからもわからないことはどんどん堀辺先生に聞いてほしいと思います。【神奈川県・てっちゃんさん・会社員・27歳】

D しかし、センゴクが『SRC』になるってのは、オレ個人としては凄く残念だぜ。なんかセンゴクってネーミングは微妙なラインを突いててグッとくるんだよな。ライデンも悪くないけど、アルファベットになっちゃー、ちょっと考えさせてくれって話だぜ。

佐伯さんのインタビューを読んで、佐伯さんはホントにマット界を動かしている人なんだなと思いました。でも、波に押されてしまうのは、佐伯さんの人の良さのせいだと思います。これからもDEEPを応援しています!【東京都・タナベナオトさん・美容師・25歳】

D ナオトはえらくサエキングの肩を持つじゃないか。ひょっとしてサエキングに頼まれて投稿してくれとかじゃないよな。でも、オレもサエキングは好きだ。ああ見えて、もの凄くキレイ好きらしいしな! クックックク。

目撃情報が止まらない!

★先日、五反田の駅で高瀬大樹選手を目撃しました。ボクは目が悪いのですが、金髪のガタイがいい青年だったので、たぶん間違いないと思います。JR五反田の駅のホームでピンク色のケータイをいじりながら、新宿方面行きの電車を待っている様子でした。格闘家を目撃したのは初めてなのですが、やっぱ凄く目立ちますね。
【東京都・ゴタンゴさん】

★この前、原宿駅周辺をウロウロしていたら、デッカイ外国人がいたので誰かと思ったら、なんとジャイアント・バーナードでした!　バーナードはこれまたデッカいサングラスとヘッドフォンをしてのっしのっしと歩いていました。ボーッと歩いてたボクは、突然のことすぎてドキドキしました!【東京都・びよんせ大好きさん】

お八ガキ募集!!

おハガキ、どんどん送ってくれよ!
ケータイからでもOKだぜ!!
どんな意見、感想、苦情、抗議、
お悩み、ダメだしでも、ぜーんぜんキャッチするから安心しろって!　待ってるぜ!

こんな情報も24時間どんとこい!
ってヤツだ。
- 譲ってほしいもの
- タレコミ情報
- 選手に対するコメント、試合の感想
- その他、オールOKだ!!

以上、すべてのお便り・
イラストのあて先&メールアドレスは
radical@kamipro.com
〒151-0051
東京都渋谷区千駄ヶ谷5-16-6
パレ・ジュノ2F
(株)ダブルクロス kamipro編集部
「進退を懸ける」係まで。

携帯サイト『kamipro Move』からの
投稿もできるぜ。

格闘技愛あふれる玉稿をチェケラッチョ!

おっと、ユーたちはまたまた続きがみたいのかい? こりゃ、ひょっとしたら最後まで掲載されるかもしれないなあ。ま、投稿したマコトにとってみたら、こんなに嬉しいことはないだろうな! じゃあ、前回の続きだ。千歳の父親と、そして母親が出てきたところからだ。しっかりリードしろよ!

『世紀末の格闘技』

東家の収入は母親の玲子による。玲子は、医者だ。外科医。メガネをかけていて、あまり表情が変わらないので、知的で冷静な人に見える。いかにもクールな女医と言う感じだ。

玲子は、娘の千歳から見ても美人だ。そんな玲子が、なぜ、稜介なんかと結婚したのか、千歳には謎だったりする。

ついでに、玲子も背が高い。東家は、みんな背が高い。

そんな東家は、幸福に満ち溢れているとは言い難いが、これといった不幸もない、そこそこ幸せな家庭だ。千歳は、そう思っていた。

この日も、いつものように平和だった。

父親の稜介は、台所で皿を洗っている。母親の玲子は、本を読んでいる。千歳はテレビを観ている。

東家における夕飯後のいつもの風景。

玲子が千歳に話しかける。

「千歳、悪いけど今度の授業参観、お母さん、仕事だからいけない」

「そう、別にいいよ」

玲子はすまなさそうに言ったが、千歳はぜんぜん気にしていなかった。中学生にもなると、親が来るのは寧ろ迷惑なくらいだ。

しかし、そこへ、台所から父親が来て言う。

「俺が行くよ」

なんで? と、千歳は思った。そして、それだけはやめてと、本気で願った。

はっきり言って、稜介のこの申し出は千歳にとって迷惑以外のなにものでもなかった。稜介はどこへ行くにもジャージに下駄で、今日の午後もそれで恥ずかしい思いをしたばかりだ。

しかし、稜介も玲子も、そんな千歳の気持ちは知らない。

「それじゃあ、お父さん、お願いします」

玲子は笑顔で稜介に言う。

父親に来ないでとは言えない千歳は、ただ泣きそうな顔になっていた。

【熊本県・塘岡真さん】

※ああ、いったいどんな授業参観になるのか、このオレもだんだん気になってきたぜ!　これは間違いなく次回もドント・ミス・イットだ!

筆者はレスリングマスター長与千種に、さらに数回のインタビュー

が「たとえ一つでも試合順を前にされるのは自分は耐えられない」とい

解していたということでしょうか。
長与　うん。自分はどちらかと言え

プロレスじゃねえや」ってどこかでずっと思ってた。それだけで勝敗を

なったんですね。もちろん、山崎照朝先生にもお世話になったんですけど。

1993年の女子プロレス

全女にケンカを売った女が明かす驚ガクの真実

“最狂団体”内派閥闘争

長与千種

『1976年のアントニオ猪木』著者の柳澤健氏による好評連載『1993年の女子プロレス』。今回登場するのはクラッシュギャルズで一大ブームを巻き起こした長与千種だ。のちに自らの理想を追い求めガイアジャパンを立ち上げた長与にとって“最狂団体”全女とは？

聞き手／柳澤健　構成／阿修羅チョロ　試合写真／平工幸雄

1980年代に『デラックス・プロレス』（※通称『デラプロ』）という雑誌がありました。

創刊当初はUWFの選手たちがメインでしたが、やがて〝長与千種マガジン〟と化してしまいました。この『デラプロ』の中で毎号行なわれていた長与千種インタビューは私が知るかぎり、日本で最も素晴らしい雑誌記事の一つです。聞き手は井田真木子さん（故人・大宅賞作家）でした。

井田さんの質問は、まるで怜悧（れいり）なメスのように長与千種に突き刺さり、長与千種は心中に深く秘めた思いを吐露せざるをえません。必然的に、記事は世にも恐ろしい心理戦となりました。

長与千種のファンは、テレビを観てクラッシュギャルズの活躍に熱狂し、緊張感あふれる『デラプロ』の記事を読んで、スーパーヒロインの複雑な心中に分け入っていきました。長与千種のファンこそは、世界で一番幸せなファンだったに違いありません。

さて、『1993年の女子プロレス』のテーマは、「全女のプロレスは、なぜ危険で魅力的なものに変質し、やがて崩壊してしまったのか？」ということにあります。

したがって、今回の長与千種への質問も、右のテーマに沿ったものになりました。

しかし、長与千種というレスラーの本当の凄さは、観客の心理を自在に動かす能力にあります。誌面では、その点に関して触れる余裕がありませんでした。

筆者はレスリングマスター長与千種に、さらに数回のインタビューを重ねるつもりです。
それらの成果については、たいへん恐縮ですが、携帯サイト『カミプロムーブ』の「1993年の女子プロレス外伝」をご覧いただければと思います。　（柳澤健）

――今回のインタビューでは、最後の女子プロレスブームと言われる、全女が東京ドーム大会を開催した前後の話に至るまでのお話を中心にお聞きしたいと思います。
長与　よろしくお願いします。
――その前に、まずは長与さんのデビュー戦の話を聞かせください。デビュー戦の相手は大森ゆかり選手ですよね。
長与　そうですね。
――その試合は大森選手が勝つわけですけれど、この前、（ライオネス）飛鳥さんに話を聞いたら、「全日本と名のつくベルトは全部シュートだった」と言っていて、ちょっと驚きました。
長与　そうでしたよ。自分、最初から最後までシュートだと思います。
――最後までというと？
長与　自分が全女を辞めるまで。シュートといっても、勝敗だけのシュートではなく、すべてが勝ち残り、生き残り戦なので。もうね、全女は毎日がサドンデスですよ（笑）。足も引っぱるし、隙を見せれば、根こそぎ精神的にズタズタにされるし。それが全女の凄さだったのかなって、いまになって思いますね。
――なるほど。以前、北斗（晶）さんが「たとえ一つでも試合順を前にされるのは自分は耐えられない」というような話をしていたんですが、その気持ちもわかります？
長与　あ～、わかりますね。
――「とにかくメインかセミを取る。休憩前の試合なんてありえない」と。そういう意味での生き残り方、闘い方ということですよね。サドンデスというのは。
長与　そうです。昭和55年の8月に自分がデビューするまでは、「シュートですよ」なんて言われないし、シュートの意味がわからなかった。そういうもんだと思っていたし。
――あえて説明はされなかった？
長与　そうですね。逆に、自分は強くなかったんですよ。ハッキリ言って。当時から観てた人たちって、長与千種に対して凄く強いイメージがあるんでしょうけど、基本的に凄く弱かったので（苦笑）。
――そこは飛鳥さんとは違う、と。
長与　全然違いましたね。もちろん、勝ち負けは悔しいけど……本当にシュートで負けて悔しいと思ったのは一回だけですよね。
――それは誰との試合ですか？
長与　立野（記代）戦ですね。
――後輩の立野さんに福島で負けてしまった試合ですね。たしか、福島には長与さんの後援会があって、大勢のファンの前で負けたのが悔しかった、と。
長与　そう。そのときだけですね。
――ということは、プロレスというものが「相手を押さえ込む力」とは、まったく違う力学で動いているということを、長与さんは最初から理解していたということでしょうか。
長与　うん。自分はどちらかと言えば、押さえ込みで勝敗をつけるということに対しては否定的な部分がありました。「あれで勝敗を決めるんだったら、なんのための練習をしてるのかな？」っていつも思っていたので。みんな押さえ込みの練習をするんですけど、「プロレスの練習イコール、押さえ込みの練習じゃないじゃん」って。

今回の取材は長与が経営する都内・文京区湯島にあるライブハウス&レストラン『Super Freak』で行なわれた。すでに現役を引退してからかなりの時間が経過しているが、やはりこの人にプロレスを語らせたら止まりません。

――まったくそのとおりですね。
長与　と同時に、プロレスって「いろんな要素が集まった総合的な格闘技」だと思っていたんですね。自分が若いときの全女というのは……とくに、押さえ込みをやるための練習をみんなするんですよ。「だったら、べつに受け身とか必要ないじゃん」とか、「なんのためにスクワットや縄跳びをするの？」とか、「それでしか査定されないんだったらプロレスじゃねえや」ってどこかでずっと思ってた。それだけで勝敗を決めるんだったら、身体のデカいほうが圧倒的に有利じゃないですか。
――ええ。
長与　だから、どちらかといったら自分は押さえ込みには否定的だった。自分が弱かったから否定するのではなくて、すべてにおいて辻褄が合わないので。だから、その当時は、まったくもってやる気がなかったと言ってもおかしくない。
――長与千種に、やる気がない時期もあったんですか？
長与　やる気もなかったし、その頃は遊んでましたけどね（笑）。「（巡業に）連れていかれなくてもいいや」って、どこかで思ってたし。
――かなりやさぐれてました？
長与　やさぐれてましたね（笑）。当時はディスコとか流行っていたので、六本木に行ってディスコサウンド聴いて踊って汗をかいたり。そっちのほうがよっぽどいい運動になるじゃないですか。
――なるほど（笑）。先ほど、「プロレスにはいろいろな要素が入っている」とおっしゃいましたが、たとえばどんな要素ですか？
長与　プロレスには無駄がないんです。格闘技の中でもおいしいところだけをつまんでいると思います。たとえば、蹴り一つに関しても自分はシーザー武志さんに凄くお世話になったんですね。もちろん、山崎照朝先生にもお世話になったんですけど。
――あとは有名なところだと、前田（日明）さんや佐山（聡）さんからも指導を受けていますよね。
長与　そうですね。藤原（喜明）組長にも寝技を教わったり、自分はとにかくおいしいとこだけ、おいしいエッセンスをいただきました（笑）。
――そういった練習はクラッシュになってから通うようになったんですか？
長与　UWFの道場やシーザージムはあとからですけど、ボクシングジムや空手の道場には、クラッシュ前から行ってましたね。
――長与さんの中では「押さえ込みはあくまでプロレスの一部にすぎない。いろんなエッセンスを取り入れて自分のスタイルを作り、観客にしっかり観てもらうことこそがプロレスなんだ」という考えが最初からあった、と？
長与　もちろんです。押さえ込みで勝負がついて何が楽しいのかなって思いましたね。観てる人がわけわかんないうちにゴングが鳴っても、お客さんはウンともスンとも言わないわけじゃないですか。盛り上がっているのは会社だけであって。
――会社というのは松永兄弟ということですよね。「コイツとコイツをやらせたらおもしろいだろうな」

本当にシュートで負けて悔しいと思ったのは一回だけです

長与千種

って自分たちでマッチメイクをして、シュートをやらせて喜んでいた、と。

長与　しかも、賭けてましたからね(笑)。

――アハハハハハ！　どっちが勝つかを、兄弟で賭けてたんですか？

長与　そうなんですよ(笑)。勝敗もそうだし、「どっちが行くか？」っていうところでも勝負してましたからね。兄弟同士で。

――「行くか」っていうのは、トップまで行く、チャンピオンになるということですか？

長与　そうです。と同時に、勝ち星もドンドン行くかとか。

――じゃあ、松永兄弟の中でも「この人はこのコを贔屓している」っていうのがあったんですか？

長与　ありました、ありました。見えない派閥ですよ(笑)。

――見えない派閥！　長与さんは国松さん派だったんですよね？

長与　自分はそうですよ。

――ちなみに飛鳥さんは？

長与　俊国さんでしょ。

――へぇ～、おもしろい(笑)。

長与　そのへんは付いてた先輩によるんですよ。自分はデビル（雅美）さんに付いていたので。デビルさんは国松さんに、ジャガー（横田）さんは俊国さんに凄くかわいがられていたので。そこに付けば必然的にそうなっていくというか。

――松永兄弟としては、当然、自分がかわいがってる選手に勝ってもらいたい、チャンピオンになってもらいたいわけですよね。

長与　あの兄弟がよくケンカしてる姿を見たことがありますよ。要はどっちもメインを取りたいんですよ。

――アハハハハハ！　自分のかわいがってる選手をメインに出したい、と。

長与　そうです。でも、国松さんはけっこう折れてましたけどね。

――リング外でも闘いがあったわけですね(笑)。

長与　そうそう(笑)。国松さんも、自分が折れたときは悔しいから、「おまえ、この興行の中でベストバウトを取れよ」とか言うんだけど、私は、その頃は実力的にも自信がなかった。ある程度のレベルに到達していれば、「何言ってるんだ、このオヤジは？」って思えたんだろうけど(笑)。

――そうでしょうね(笑)。

長与　私は私で、「人は人じゃん」とか「アンタが教えたんでしょ！」って、いつも言い合いになるんですよ。だから、控室が熱いんですよ(笑)。

――控室で言い合ってたわけですか。

長与　ああでもない、こうでもないって。それを黙って見てるのが（松永高司）会長ですよ。会長は黙って見てるだけだったんで。

――会長は派閥とかには一切属さず？

長与　一番上にドンといるだけでしたね。

――へぇ～。やっぱり全女って本当にとんでもないですね。

長与　でも、結局はお客さんがすべてじゃないですか。自分たちや松永兄弟がどれだけ納得しても、お客さんが納得しなければ「プロとしてはどうなの？」というところなので。

――もちろんです。

長与　その日のお客さんの反応がよければ国松さんが「飯食うか！」って寄ってきますからね(笑)。試合で自分を出しきって、なおかつお客さんも一緒についてくるような試合ができれば、それこそボクシングでチャンピオンになったのと一緒ですよ。

――会長はあまりそういうことを言わない人なんですか？

長与　会長は、自分がプロレスを辞めてから人づてに言われたことがありますね。「国松は長与のことを本当にかわいがっていた」「国松は長与に対して少し過保護すぎるところもあったけど、でも長与の扱い方はアイツがピカイチだった。誰かが動かそうと思っても、長与は国松の言うことだけは聞いていたし。俺はそれを黙って見ていた」とか。実際に自分と会うと、会長は二言目には「あ～、もう一回プロレスやりてえなあ！」ってずっと言ってたんですよ。

――ホントに女子プロレスが好きだったんですね。

長与　いつ会ってもそればっかり言っていて。でも、そういう派閥があるからこそ全女なんですよ(笑)。

――そうでしょうね。このあいだ、飛鳥さんに聞いたら、「ジャガー（横田）さんとジャッキー（佐藤）さんのタイトルマッチもシュートだった」って言っていて驚きました。

長与　ああ、そうですよ。

――「タイトルマッチなのに、そんなことありえるのか？」と思ったんですけど、全女の選手にとってはあたりまえなんですか？

長与　あたりまえ。でも、あの試合は駄作だと思う。

――駄作ですか？

長与　あの試合は両者にとってもよくないと思う。お二人とも先輩ですし、本人たちはどうかわからないですよ。先輩に対して失礼なことを言うようだけど、勝ったジャガーさんというのは凄いですよ。でも、試合後の表情はいまでも忘れないです。

――結果だけ見ると、後輩のジャガーさんがジャッキーさんに勝利して、世代交代を成し遂げたようなかたちでしたけど。

長与　でも、ジャガーさんは全然嬉しそうな顔をしてなかった。ハッキリ言って、あの試合は、あのやり方（シュート）じゃなかったほうがよかったと思いますね。

――負けたジャッキーさんはもちろん、勝ったジャガーさんも満足していなかった、と？

長与　そう。この前の選挙と一緒ですよ。政権交代するときは、圧倒的に強いほうに期待を寄せて交代するわけですよね。でも、期待を寄せられれば、それだけプレッシャーもかかってくる。（チャンピオンになることは）タイトルマッチ以上にプレッシャーですよ。重荷を課すことなので。逆に、あとにそれが待っているんだから、プロセスの部分で、（シュートマッチにすることは）「それってどうなの？」って。ただ、ジャッキーさんもずっとチャンピオンでいたかったんでしょうね。

今年7月に亡くなった三男の松永高司氏（写真右）、次男の健司氏（写真左）、四男の国松氏、五男の俊国氏の松永四兄弟で運営されていた全女。長与はジミー加山としてレフェリーを務めていた国松派だったんだとか。国松氏は05年8月に自殺している。

――それはそうでしょうね。

長与　でも「勝たなきゃいけない人たち」っているんですよ。「勝っていないとダメな人たち」が絶対にいるんだと思う。

――なるほど！　長与さんとは全然違う価値観を持つ人が、女子プロの世界には存在する、と。

長与　そう。そのために本当に全力をつくして、とにかくシュートで強くなっていく。勝たなきゃいけない人たちって絶対にいると思う。

――赤いベルト（ＷＷＷＡ世界シングル選手権）を巻いた人たちは基本的にそういう系譜なんですか？

長与　自分も赤いベルトを獲りましたけど……。

――正直、長与さんにはあまり似合わないような気がしました。

長与　獲れて嬉しかったですよ。嬉しかったけど……、嬉しさが長続きするときってあるじゃないですか。人から何かいただき物をすると何日も嬉しいときが。でも、あのときは一日で切れちゃったんですよね。

――そうでしょうね。

長与　やっぱり、自分には似合わない（苦笑）。

――なぜ僕が「そうでしょうね」と言ったかというと、赤いベルトを獲る前、『デラプロ』のインタビューで「赤いベルトは死のベルト」とおっしゃっていたからです。「巻いてしまえば、その先がない」と。

長与　その先もないし、やっぱり自分には似合わない。逆に白いベルト（オールパシフィック選手権）で気楽に遊んでいたときのほうがおもしろかった。

――そうですか（笑）。

長与　勝ちは少なかったけど、弱い自分がいましたね（笑）。で、さっきの話に戻りますけど、ジャッキーさんとジャガーさんの試合は……。

84年8月にライオネス飛鳥とともにクラッシュギャルズを結成し、女子プロ界にビューティ・ペア以来の大ブームを巻き起こした長与。89年に一度引退したのち、93年の11月に復帰。94年のガイアジャパン設立まではJWPを中心に活躍した。

――どういう試合だったんですか？　詳しく知らないので教えてください。

長与　凄くあやふやだったんですよ。ジャガーさんがずっと押さえ込んで、7カウントも8カウントも入るはずなのに、レフェリーが全然カウントを取らない。

――不自然な試合だったんですね。

長与　ビデオに残ってるはずなんで、観たらわかると思うんですけど。それはジャガーさんにとってもとても失礼ですよね。一方で、6カウント、7カウントになっても、下から一生懸命返そうとするジャッキーさんの気持ちもわかる。そのへんは凄く複雑だけど、両方の気持ちがわかりますね。あの試合は選手も観客もレフェリーも苦しい試合だったと思う。選手に対する失礼さもあったし、そうさせてしまった会社のやり方にも納得がいかなかったし、自分は全然おもしろくなかった。実際、試合後に国松さんに言いましたもん。

――なんて言ったんですか？

長与　「つまんねえ試合やりやがって！」って。レスラーがつまらない試合をやったという意味ではなく、レフェリーに対して怒ったんです。「誰のイエスマンなんだよ？　誰がそうやって命令してるんだよ!?　だからつまんないんだよ。女子プロレスは！」って凄く言いましたね。

――その頃の長与さんはまだ若かったでしょうに。

長与　自分、悪かったんで（苦笑）。でも、あの試合で思ったのは、のちに赤いベルトは何人もの選手が巻きましたけど、一回の試合で3回も4回も勝ってたのはジャガーさんだけですよ。

――そうでしょうね。

長与　持ち上げて言うわけじゃないですけど、真の全女のチャンピオンというか、〝ストロング・オブ・全女〟はジャガー横田だと私は思いますね。

――〝ストロング・オブ・全女〟！　当時から長与さんは会社に対して言いたいことは言っていた？

長与　国松さんにはね（笑）。

――それはクラッシュの前から？

長与　さすがにキャリア一年目では無理ですよ。二年目ぐらいから、ちょこちょこ。いろんなことにムッとしてましたからね。

――具体的にはどんなことに怒ってたんですか？

長与　国松さんの練習のときとかですね。自分には凄くキツいことばっかやらせるんで、やっぱりムッとするしかないじゃないですか。「いつか毒を盛ってやる！」って思ってましたからね（笑）。

――アハハハハ！

長与　まあ、それくらい向かっていったので、向こうもおもしろかったんだと思いますけど。

――クラッシュ以前の、ジャッキーさんの頃のプロレスと、ジャガーさんが赤いベルトを獲ってからの女子プロレスは変わりましたか？

真の全女のチャンピオンはジャガー横田だと私は思います

それとも変わっていないですか？

長与　基本はあんまり変わっていないと思います。ただ、小が大を制した。それは素晴らしいことじゃないですか。やはり時代が動くわけですから。小さいものが大きいものに勝てるなんて。ジャガーさんがそれを証明したようなものですよ。それは時代が動きますよね。

――確かに。

長与　しかし、すべてが変わるかといえば、あの中ではそう変わっていなかった。そういう気がします。

――なるほど。それはたとえば、「キックは胸板以外は蹴るな」とか、「この技の次にはこの技をかけなさい」という、全女の文脈や文法から外すことは許さないというような、会社側の制約がガッチリあったからこそつまらないということですか？

長与　会社ではなく選手の中での制約かもしれない。それがいつ始まったことなのかはわからないし、自分が入る以前のものかもしれない。なんでも会社のせいにすれば楽かもしれないけど、それは違うと思う。プロレスがつまらないのは会社のせいじゃない。

――放任主義の会社が関知しない中、いつの間にか選手の中で、先輩、後輩の序列ができて「これはダメ」とか「ここまではOK」みたいなものができた、と。

長与　具体的にはないんですけど、

暗黙のルール的な部分はあったと思う。ただ、なぜ会社が関与していないと思ったかというと、自分たちがガッと出たときに大喜びしましたからね。「新しいものをやり始めた」って。

——クラッシュギャルズがそれまでにないスタイルで人気が出たら、国松さんが大喜びしたんですね。

長与　そうですね。それ以前は暗黙のルールはあったんだと思う。それは「プロレスラーである前に女性だから」という部分が強かったかもしれない。

——クラッシュは、それまでの女子プロレスから考えると、危ないことを始めちゃったわけですよね。会社側は寛容でも、周りの先輩レスラーたちは、いろいろなことを言ってきたでしょう？

長与　「当たりたくない（対戦したくない）」と言ってましたね。

——危ないし、怖いし？

長与　そうでしょうね。だいたい、クラッシュって、自分（長与）が先鋒で口火を切っていくんですよね。それで、ずっとやられることが多かったんですけど（苦笑）。その頃の目に見える変わり方って、「レガースを着けました」「打撃技や関節技、いろんなかたちのスープレックスを交えます」。つまり「異文化」ですよね。あとは、目に見えてわかりやすかったのは、たとえば野球でいうピッチャーとキャッチャーの役割。キャッチャーは女房役ですよね。

——そう言われますよね。

長与　それがハッキリした瞬間だったのかもしれない。どちらかといったら、自分は受け派だったような気がします。

——もちろんそうでしょう。

長与　自分はとにかく女房役。受けてナンボで。受ける身体を作るために練習していたところもあるし。技のスキルもなかったわけじゃない。少しはあったと思います。

——いやいや、かなりあったと思います。

長与　でも、それはプロレス的なものではない。打撃やグラウンド技とか。スープレックスもいろんな角度から投げる技をやった。以前の全女のスタイルとはまったく違うものです。逆に言えば、ダイナミックで力技で、なおかつ確実に攻めのスキルが高いのは相方（飛鳥）のほうですね。断然スキルが高いので。だから、カッチリ分かれて、わかりやすい構図になるんですよね。

——僕はビューティ・ペアの試合を観ていないので本当に申し訳ないのですが、ビューティの場合はジャッキーさんが飛鳥さんの役割で、マキ上田さんが長与さんの役だったのかな、と思うんですけど。ビューティよりもクラッシュのほうがもっと役割分担がハッキリしていた、と。

長与　うん。会長がよく言っていました。「ジャッキーは男だ。マキは女なんだ」と。「飛鳥は男っぽい。でも、おまえは中性なんだ」とよく言われてましたね（笑）。

——なるほど。そのとおりですね。

長与　「おまえは男の子にも人気があったし、女の子にも人気があった」と。だから珍しい存在なんだ、と。あと「おまえは〝当たり〟だよな」って。「当たりハズレで言うんだ。このオヤジは！」って思いましたけど（笑）。

——アハハハハハ！

長与　でも、その話を聞かされたとき、「ああ、そういうことが当たりなんだ！」って自分でも思いましたね。

——飛鳥さんは「クラッシュのアイデアは全部、千種が出していた」と言っていました。つまり「千種が受けてヒールにやられる。飛鳥が出ていって蹴散らす」という基本的な構図を考えていたのは長与さんだったということですよね。

長与　そうですね。でも、飛鳥は本当に強かったし、クラッシュの役割もちゃんと決まっていたから信頼していろいろ指示を出せたんだと思う。やっぱり、飛鳥はベストパートナーだったと思うし、飛鳥じゃなきゃダメだったと思いますね。

——素晴らしい関係だったんですね。そのクラッシュギャルズは、女子プロレス界に史上最大のブームを巻き起こしたわけですが、大スターになってから、自分の中のプロレス観は変わりました？　それとも、芸能の仕事がドカンときて、そんなことを考える暇もなくなっちゃいました？

長与　あの頃はとにかく練習に飢えてましたね。

——芸能活動で忙しかったから？

長与　そうですね。それがあったから有名にもなれたんでしょうけど、痛し痒しで。練習ができないつらさっていうのが「こんなにキツいの？」って。いままで練習で楽しい思い出はないです。キツさが100パーセントを占めるんですけど、でも当時は練習ができなくて、苦しい思いをした時代でもありましたね。

——一方、その時期に飛鳥さんは精神的にもふさぎ込んでしまって、芸能活動をやめたりとか、いろいろとあって、結局、長与さんが先に赤いベルトを獲りました。

長与　そうですね。

——当時の長与千種がハツラツとしたWWWAチャンピオンだったかというと、そうでもなかった。会社に対する不満もあっただろうと思いますし、当時のインタビューでもそういうことをおっしゃっていました。八方塞がりの中で、その突破口として見つけられたのが、神取忍という選手だったのかな、と思うのですが。

北斗晶は凄い！ 後輩で唯一リスペクトするのは彼女です

長与　自分、神ちゃんとはコソコソと会ってましたから。じつは。

——「乱入してこいよ！」とか話したりしてたんですか？

長与　「シングルでやりたいね」とか「自分、メチャクチャにやられちゃってもいいんだ」とハッキリ言ってましたね。

——そんなことまで!?

長与　「だって柔道のチャンピオンでしょ。そんなの倒されたらおしまいじゃん」とかいろんな話をしてました。「でも、そういうことをやりたいの」って。

——結局、神取戦は実現しませんでした。

長与　そうですね。当時の自分は刺激がほしかったんですよ。横綱でいることにつまらなさを感じていた時期だったんで。横綱でいなきゃいけない、看板でいなければいけない。あまりにも型にはまりすぎちゃってて。そいつをゴンッて叩き潰してくれる人が出てきたら、それが起爆材料になってこっちもガッと行けるんじゃないかって、そういう気がしてたんですよね。神ちゃんには本気でやって勝てるとは思ってなかったし。「だったら、この人に倒されてみたい」というのがありましたよね。

——勝ち負けよりも「凄い試合を見せてやるぜ」ってことですか。

長与　と、思ってたんですけどね（苦

長与千種

笑）。でも、それができなかったときっていうのは……要はメリット、デメリットですよね。全女としては「ウチにとってメリットは何があるのか？」と。そう言われたときに「ここまで来て自分のやりたいことができないなら、つまんねえな、ここは」って。ホントに嫌になりましたよね。

——プロレスがつまらなくなってしまった、と。

長与　自分、そのときも会社に言いに行きましたからね。「メリット、デメリットって何？　このままやってたって、全女はおもしろくねえじゃん」って。「新しくできた団体（ジャパン女子プロレス）があるんだったら、そこと交わらなくても、一戦でも対抗するぐらいはいいんじゃない？　お互いの起爆材料になるはずだから」と言いたかったんですよ。

——それでも受け入れてもらえず？

長与　一生懸命言ったつもりなんですけど、当時の全女のデカさってハンパじゃなかったですから。独裁主義というか、女子プロレスは全女しかないというくらいデカかったので、ダメでしたね（笑）。

——その後、平成元年に引退されるじゃないですか。僕がわからなかったのが、あのとき長与さんは『デラプロ』のインタビューの中で「フリーランスになる」とおっしゃっていたんですよ。長与さんだったら、全女を辞めたあとにフリーになって、「長与vs神取」をメインにして興行を打てば、武道館クラスの会場を満員にできたはずだと思うんですけど、どうしてできなかったんですか？

長与　会長は「去る者は追わない人」なんですよ。基本的に。会長は凄くクールで、かといって弾き出すような感じでは全然なく、淡々と「おまえにもそういう時期が来たな」と。「おまえにしてやれることを最後にやって、それで幕引きにしようか？」って言ってくれたんですけど、国松さんは残したかったみたいですね、ずっと。ブッカーとして。

——選手としてではなくブッカーとして残ってもらいたかった、と。わかります。

長与　とにかく「ブッカーをやれ」「俺の跡を継げ」ってずっと言われていて。「ううん。イヤだ」と。

——ブッカーをやりたいとは思わなかった？

長与　自分がブッカーをやれる人間だとは思っていなかったから。だから「無理」って。あとはやっぱり、国松さんを裏切ることはできなかったですよね。

——そういうことだったんだ！　なるほどねぇ……。

長与　だって、自分の育ての親ですからね。心地よく「裏切れないよな」って。ガイアを創るときも、最初に国松さんに相談しましたからね。

——全女を辞めたあとも、そういう精神的なつながりがあったんですね。

長与　うん。だって、自分がへこたれそうになったときって、いつも彼が背中を押してくれましたからね。凄い名トレーナーですよ。『あしたのジョー』の矢吹ジョーとおやっさん（丹下段平）みたいな（笑）。

——へぇ～！

長与　カッコよく言えば、ですよ（笑）。いつも近くにいるというか、見守ってくれてたんです。だから、初めてですよ。全女を辞めるとき、「もう、おまえみたいなヤツには二度と会わないな」「おまえみたいなヤツはもう出てこねえな」って言われて、「うわっ、絶対にこの人を裏切れない」って本気で思いましたもん。ずっと二人三脚だったんで。飛鳥がいないときはとくに。

——そうでしょうね。で、長与さんが全女を辞めて、半年後には飛鳥さんが辞めた。スーパースターのクラッシュギャルズがいなくなって、ボロボロになってしまった全女を立て直したのは、意外にもヒールのブル中野でした。僕はブル様というのは、非常に尊敬に値する偉人だと思っています。ブル様とアジャの凄い試合が男のプロレスファンを全女に呼び込んだわけじゃないですか。

長与千種が「女子プロレスラーで唯一認めている」と語っていたのが90年前半の女子プロブームの立役者の北斗晶。北斗は全女からWCWを経て96年にガイアに入団。02年4月に長与とタッグマッチで対戦し、引退している。

長与　そうですね。

——そこで女子プロレスは変質したのだ、と思うのですが、長与さんもそうお考えになりますか？　自分たちクラッシュがやっていたプロレスと、ブル様とアジャがやっていたプロレスというのは、やはり異質なものなのでしょうか？

長与　違うと思う。

——何が違うのでしょう？

長与　ある意味……女の子がやらないことを彼女たちはやったんですよ。だって、金網なんて基本的にデスマッチじゃないですか。金網のトップロープから飛ぶって。WWEみたいにやるところもありますけど、その当時、そこまで根性を据えるヤツっていなかったわけじゃないですか。

——全然いないと思います（笑）。

長与　それは、男の人も圧巻だったと思う。だから、そういった意味で、彼女たちは捨て身ですからね。

——捨て身にならないと、長与千種に対抗できなかった、ということなんでしょうね。

長与　でも、やっぱり凄かったですよね。その覚悟は。でも、女子プロレスにはそのあとの立役者がいますからね。

——立役者というと？

長与　北斗晶です。あの人は……あの人は凄い！

——ブル様とアジャがするような激しいプロレスをして、しかも弁が立つ。空気が読める人でしたよね。

長与　あの人は策士です。策略家です。と同時に、智将です。自分が唯一認めている人です。

——女子プロレスラーの中で？

長与　はい。あと何人かいるんですけど、あそこまでは到達している人はいないですね。

——そこまで評価してましたか。

長与　彼女はクレバー。後輩でここまでリスペクトするのは唯一、彼女だけですね。だって凄いもん。

——凄い人だと思います。僕はブル様は偉人だと思っていて、北斗さんも大好きなんですけど、北斗選手の凄さを長与さんから説明していただけると読者も嬉しいと思います。

長与　たとえるなら、ブルちゃんは劉備玄徳です。

——『三国志』ですね。

長与　諸葛孔明が北斗晶です。あの人は闘うこともできれば、魔術、マジックを使うこともできる。あとは戦略や戦術を伝えることもできるし。兵法を学んでいるような人。

——なるほど。ブル様はもうリーダーとしてのリーダーというか。

長与　そうです。……って言えば伝わるかな（笑）。

——非常にわかりやすいです。わからない人は『三国志』を勉強してもらいましょう（笑）。

長与　だから、自分は憧れるんです。

——長与さんはどちらかというと、北斗さんに近いと思ってません？

長与　そう。自分はそっち側だと思います。だから、ある意味、最大の敵ですよ。長与千種の（笑）。

——そうですか（笑）。でも、クラッシュが女子プロレスを危ない方向

じつはいま頑張ってるレスラーの中にも策士や智将はいます

長与千種

に変えて、さらにブルvsアジャの流れで女子プロはとんでもなく危険で、魅力的なものに変わってしまったと思うんです。でも、その結果、レスラーになりたいと思う人数が減ってしまった。たとえば、長与千種がトップの頃は3000人もの人間がオーディションにやってきましたよね。

長与 それぐらい来てましたね。

——リング上で歌うクラッシュに憧れる女子中高生は多くても、ブル様vsアジャ以降の対抗戦時代のプロレスを観て、「自分もやってみたい」という人間が凄く少ないのはあたりまえです。その結果、トップアスリートとか、身体がしっかりしていて、レベルが高いプロレスラーが女子プロレスに入ってくることがなくなった。女子プロレスの寂しい現状は、そこに大きな原因があったのではないか、と思うのですが。

長与 危ないというか、女房が下手クソになったんじゃないですか。だから、そこまでやらなきゃいけなくなったんじゃないの（笑）。

——受ける側がヘタになったと。なるほどねえ。

長与 わかります？ 「女房が下手クソになる」というのは。1の技を100で見せるというか。女房って凄く大変な役割だと思うんですよ。

——なんとなくわかります。

長与 たとえば、野茂（英雄）がフォークを投げて、バットを振らなかったら絶対ボール球なのに、キャッチャーがパッとミットを動かしてストライクにしちゃうでしょ。あれって、メチャ技だと思うんですよ。あまりにも落ちすぎたフォークをそのままボール球で受けたら、つまんなくて仕方ないじゃないですか。審判って全部見てるわけじゃないんだから。……自分、爆弾発言してます？

——全然問題ないと思います（笑）。

長与 要は、威厳を持って女房が女房役に徹しなかったのがいけないのかなあ……とは思う。だって、そうじゃなければ、起き上がってこれないですもん。自分だったら起き上がってこない。みんなジャーマンをやって、すぐ起き上がってきたりするけど、それは自分のセオリーの中にはなかったですし。だからと言って、自分がやらなかっただけで、もうそういう流れになっちゃってたんです。

——気がつけば「大技を食らってもすぐ起きて、次の攻防にいく」というプロレスが主流になっていた、と。

長与 そうそう。人間の身体って限界点があると思うんです。そのぶんだけケガも増えたじゃないですか。

——そのとおりですね。

長与 ケガが増えるということは、限界を超えた攻め方であり、なおかつ、それに対応する受けの技術が伴なわなかったということですよね。だから、「ニワトリが先か卵が先か」と言っているようなもので。自分なりに解釈して言わせてもらえば、ある意味、女房にも問題があるんじゃないかという気はする。

ながよ・ちぐさ■1964年12月8日、長崎県出身。中学卒業後、全女に入団。80年8月の大森ゆかり戦でデビュー。84年8月にクラッシュギャルズを結成し大ブームを巻き起こす。その後、94年にガイアジャパンを設立。05年4月に引退。現在は株式会社マーベルカンパニー代表として『Super Freak』（TEL.03-5818-3915）などを運営。http://www.marvelcompany.co.jp/

——受ける側にも問題がある、と。長与さんとダンプ（松本）さんが対戦していた頃というのは、古典的なベビーとヒールとの関係があって、ある種の役割分担が凄くハッキリしていたし、それで観客も充分納得していた。だけど、ブル様とアジャが見せたプロレスは男のお客さんを連れてきた。それはまったく凄いことで僕らもビックリしました。長与さんは古典的なベビーとヒールの関係を崩してしまった発端は自分にあるということを言っていましたよね。

長与 発端にはなっているかもしれないですね。

——これまでの女子プロレスの秩序みたいなものをクラッシュして（壊して）しまう長与千種という人がいて、それが何人ものケガ人を生んでしまったのではないか。その反省に基づいて長与さんはガイアという団体を創った。そこでは、ほかの団体とは違うことで見せる団体にしようとしたという話をある人から聞いたことがあります。それは正しいですか？

長与 正しいですね。

——結局、ガイアで見せようとしたことは、全女へのアンチテーゼということだったんでしょうか。それとも時代へのアンチテーゼなんですか？

長与 ガイアは〝ベーシック全女〟ですね。

——〝ベーシック全女〟！

長与 後楽園でガイアの旗揚げ興行をやったとき、第1試合目から第3試合目まで新人が出ましたよね。やってることは全女の一番初期の技でしかないんです。たいして大きな技もなく、本当にクラシックな技をやったら、みんな「ワ～ッ！」とか言っちゃって。「あら、また戻っちゃった」って思いましたね。要は「顔や身体で表現する」「指先、足先まで全部活かす」。なおかつ「敵に背中を見せるな」「闘いなんだ」。それと「勝ってどれだけ嬉しいんだ？」「負けてどれだけ悔しいんだ？」と。そういう部分を意識してましたね。

——当時「驚異の新人」と言われてましたよね。

長与 だから「なんだよ！」と思いましたけど（苦笑）。でもある意味、賭けだったんですよ。時代的に「派手なことをやらなきゃいけないのか？」とも思ったんですけど、「絶対に違う」と思って。ここに賭けるしかない、と。

——なるほど。

長与 自分でキュッと方向を変えたかったんですね。さんざん言われましたからね。「クラッシュが凄いこと始めたから、こんなになっちゃったんだ」って。「うわっ、自分たちの責任？」って思いましたもん（笑）。

——周りに言われてそう思ったのですか。それとも自分でそう感じていたんでしょうか？

長与 いや、周りから言われて「クラッシュの前はこういう時代でしたよ」というのを表に出しただけですから。自分がやりたかったこと、目指していたものは。まあでも、そのガイアもなくなっちゃいましたし、松永会長も亡くなって、女子プロレスはどうなっていくんでしょうね。

——長与さんや北斗さんのようなプロレス頭を持ったレスラーが出てくるのを待つしかないのでは？（笑）。

長与 いやいや（笑）。現役のコたちに頑張ってもらうしかないですよね。じつはいま頑張ってるレスラーの中にも策士や智将がいますから。

——へぇ～、いるんですか！ それは誰か気になりますね。

長与 誰とは言いませんけど。

【09年10月8日／都内・御徒町『スーパーフリーク』にて収録】

提言特集
レフェリング問題

レフェリーが格闘技を殺すのか!?

いまそこで何が起こっているのか?“至近距離からの真実”を徹底検証!!

最近のマット界で大きな議論を巻き起こしているレフェリング問題。
はたしてこれだけ物議を醸す原因とはいったいなんなのか?
主要団体のレフェリー・関係者の話を中心にDo Judge!!

終わりなきレフェリング問題 その根底に潜むものとは？

レフェリーが格闘技を殺すのか!?

2005年に70歳の節目で引退したボクシング界の名レフェリー、森田健氏は、あるインタビューで「私は一度もミスジャッジをしたことがない」と言いきっていた。ジャッジを含めれば、裁いた試合は3万試合を超えるにも関わらず、である。ダウンかスリップかをめぐって訴訟を起こされたこともあるという氏がそう断言できるのは、やはり確固たる信念を持ってレフェリングに臨んでいるからだろう。

10月末の格闘技界は25日の『DREAM・12』大阪城ホール大会、26日のK－1 MAX横浜アリーナ大会とビッグマッチが連日開催されたが、この2大会を通してファンのあいだで最も大きな議論を呼んだのは、レフェリング問題だった。

両大会とも熱戦、好勝負がいくつもあったにもかかわらず、数日が経過しても話題になり続けたのはレフェリングに関する議論がほとんどだったのだ。

『DREAM・12』で問題となったのは、桜庭和志vsゼルグ〝弁慶〟ガレシックの一戦。開始早々に得意の低空タックルを決めて足関節を取りにいった桜庭に、弁慶がパンチを集中砲火。80発以上のパンチを食ら

った桜庭だったが、一瞬でヒザ十字に捕ら

った桜庭だったが、一瞬でヒザ十字に捕らえ弁慶をタップさせることに成功した試合だ。

この試合についてファンからは「あれだけパンチを食らっているのだから、レフェリー（この試合の担当は大城盛敬レフェリー）はもっと早く止めるべきではなかったのか！」「最終的に桜庭が勝ったからいいとでも言うのか！」といった声が噴出。

誰もが06年8月の『HERO'S』におけるケスタティス・スミルノヴァス戦でパンチを受けまくった桜庭の姿を思い起こしたはずで、だからこそ桜庭の逆転勝利を喜ぶよりもダメージを心配する声のほうが多くなったのだろう。

続くK―1 MAXでは、武田幸三の引退試合、vsアルバート・クラウス戦が物議の対象となった。得意技のはずのローキックを逆にクラウスに連発されてダウンを奪われた末、両目を腫らして2RドクターストップによるTKO負けを喫するという展開だった。

問題となったのは2R、武田がクラウスのローとジャブで2度ダウンしたあとに、角田信朗レフェリー（K―1競技統括プロデューサー）がダウンと思われる場面（2度あった）でスリップと判定して試合が続行されたこと。また2度目のダウンの際、クラウスのジャブで目を直撃された武田の倒れ方が通常は見られないような異様なものだったことで、こちらも「引退試合だからダウンを見逃したのか！」「武田を殺す気か！」とファンの怒りが沸騰した。

武田の場合も、シチュエーションは桜庭と似ている。昨年大晦日のvs川尻達也戦を思い起こすまでもなく、近年の武田はダメージが蓄積されすぎていると感じているのはファンだけではない。多くの関係者も認めるところなのである。グラップラーとKOパンチャーという違いこそあれ、リスクをいとわず一本／KOを狙いにいく闘い方こそが彼ら二人の身上だが、それと引き換えに受けた攻撃も半端ではない。だからこそ彼らの身体が心配になり、その心配がレフェリングへの疑問に向いてしまうのだろう。

ネットでは多くのブログや掲示板で議論が勃発しただけでなく、有名SNSサイト「m・i・x・i」ではFEGに対してレフェリーの処分などを求める署名運動も起こった。「総合格闘技」と「K―1」の両方でほぼ同時に起きた署名トピックはどちらも多くの賛同者を集め、発案者は「責任を持ってFEGに送る」としている。

また当事者の一人である角田は自身のブログでこの試合に関していくつか投稿しており、その中には「僕らはいつも信念を持って行動している」「競技を統括する立場としては見解を明らかにし場合によっては相応の責任も取り進退も賭けないといけなくなる可能性もあるかもしれません」といった記述もある。

桜庭の逆転勝利はたたえたいし、武田の最後まで闘い抜く姿勢にも賛辞を送りたい。その気持ちは誰にもあるだろう。だが、それがレフェリングという、選手たちの攻防以外の理由によって意識を削がれてしまうのは困ってしまう。

その点でもわかりやすさを求めたいし、もし観客に伝わりづらくてもレフェリーには見えていた事実があるというのなら、その説明を聞きたいのである。

そこでこの2試合の問題を契機に、レフェリング問題について徹底的に考えてみる。当該の2団体はもちろんのこと、それ以外の団体や別の立場で関わる人物にも話を聞き、「レフェリング問題」とはなんなのか、考察してみる。

ただイチャモンをつけて騒ぎたいわけではない。ここでみんなで考えてみることは、いつになってもなくならない（としか思えない）こうした問題をなくす、いや少なくとも減らす助けにもなるはずだ。

ちなみに冒頭で紹介した森田氏も、ボクシングファンのあいだでは90年2月のマイク・タイソンvsジェームス・ダグラス戦（タイソンがKO負けし、プロ初黒星で王座を失なった試合）での採点などで物議を醸している。そんな事実と「一度もミスジャッジをしたことがない」という発言のあいだにあるものはいったいなんなのか。この特集が追い求めるのは、まさにその部分だ。

文／高崎計三　構成／鈴木佑　試合写真／乾晋也

レフェリーが格闘技を殺すのか!?

物議を醸す〝角田裁き〟への見解とは?

「レフェリングの是正が信頼回復への課題」

K-1 大成敦 ルールディレクター

今回の特集のきっかけの一つとなった武田vsクラウスの一戦。その舞台であるK-1からはルールディレクターの大成氏に話を聞いてみた。これまでにもK-1ではレフェリングに関して数々の波紋を巻き起こしてきたが、審判部としてどのようにこの問題を捉えているのだろうか?

聞き手/ジャン斉藤　試合写真/乾晋也

――大成さんはK―1のルールディレクターをされてるそうですが、これは審判団の中で一番責任のあるポジションになるんでしょうか?

大成　いえ、K―1の競技部としては競技統括プロデューサーの角田(信朗)がおりますので、私はその下というかたちになりますね。

――ああ、角田さんが一番偉いんですね(笑)。

大成　おもな役割としては新ルールの作成や大会当日のレフェリングの編成、あとは何かレフェリングで問題があったときに審判員の意見をまとめて、それを発表する書類を作成しています。

――なるほど。さて、今回の特集を組んだきっかけの一つが武田幸三vsアルバート・クラウスでの角田さんのレフェリングなんですよ。

大成　かなり話題になってるようですね(苦笑)。あの試合に関しては先日、審判団で集まって実際に映像を観ながら検証を行ないました。

――ちなみにどのようなお話に?

大成　まず、K―1ではダウンや試合をストップするタイミングは、基本的にその選手を一番近くで見てるレフェリーに権限があるんですね。今回の武田vsクラウス戦は「早めにストップするべきだったのではないか?」という点を検証したわけですが、あれは非常にギリギリのラインだったと思うんです。

――あれでギリギリなんですか。

大成　はい。「もう少し早く止めるべきだった」というファンや視聴者のご意見はこちらにもかなり寄せられていて、僕たちレフェリーが危険だと判断する基準と、ファンの方々が危険だと判断するレベルには

隔たりがあるように感じました。そこが
解釈で。武田選手は蹴られたダメージで
ンを取らなかったという声もあります
思うんですよ。そういう点を踏まえて、K

角田さんの処分はミスジャッジではなく混乱を招いたのが理由です

隔たりがあるように感じました。そこが今回の検証では争点となったんですが、やはり試合を間近で見てる人間にしかわからない部分もあるんですね。

――客席からとレフェリーでは見える光景が違う、と。

大成　しかし、K―1はメジャースポーツを目指しているということを考えると、やはり世間一般の方の見方と僕たちが判断するレベルがあまりに離れているのは問題だと思うんです。

――今回、あの試合が物議を醸している要素の一つとして、通常の試合に比べてダウンを取るのが極端に遅かったという点があると思うんですが、試合によってダウンの基準は曖昧だったりするんですか?

大成　いえ、基本的にダウンの解釈に違いはないです。ただ、選手個人が持つ特性を考慮することはありますね。たとえば武田選手であれば、長年のキャリアでダメージが蓄積されてることや、打たれもろいという部分。そもそも僕たちレフェリーの一番大事な仕事は選手の安全管理なので、選手の特性を捉えてダウンの基準に若干の差が出てくることは可能性としてありますね。

――その判断はめまぐるしく変化するものなんですか?

大成　いや、それはないです。基本的にダウンというのは相手の攻撃のダメージによって倒れて、足の裏以外の部分がついた状態という解釈なんですね。ただ、あの試合で難しいのはローキックのダメージの解釈で。武田選手は蹴られたダメージで倒れたのか、それともバランスを崩して倒れたのかという。なるべく完全決着を目的としているK―1では、そういう曖昧な攻撃ではダウンを取りづらいという部分はありますね。

――そこは観客論にも通じますね。

大成　そうですね。そういう意味でも、ファンとのあいだで判断のレベルが乖離(かいり)してしまうのは良くないと思いますし。

――あの一戦は武田選手の引退試合ということもあって、角田さんが意識してダウンを取らなかったという声もありますが?

大成　まぁ、気持ちとして角田さんにもそういう部分もあったのかもしれません。そういったことを含めてご本人と審判団の中で協議した結果、角田さんはペナルティとして3ヵ月のレフェリー業務停止処分ということになりました。

――それはどういった理由で?

大成　一番はご本人からの「一歩離れた位置でK―1を客観的に見てみたい」という申し出ですね。

――では、ミスジャッジであったということを認めたわけですね。

大成　いえ、そういうことではなく、「レフェリーの判断したダメージと視聴者の判断したダメージとのあいだに乖離、隔たりが大きく、混乱をきたした」ということですね。

――ダウンを取らなかったのはミスジャッジではないが、混乱を招いたという部分で処分を受けたということですか。う～ん、それは非常に解釈が難しいですね。

大成　混乱を招くことは競技の方向性として良くない。これを一つの範例として、今後同じようなケースがあった場合は早めのストップ、それから早めのダウンの宣告をしていこうという結論になりました。

――お話を聞いていると、K―1は競技的なレフェリングに加えて、お客さんがどう見ているかというところを加味しているわけですね。

大成　お客さんがというよりは、一般の方たちにも理解していただけるかというところですね。

――今回物議を醸している原因の一つとして、もともと観る側の中には「角田信朗は信用できない」というムードもあったと思うんですよ。そういう点を踏まえて、K―1の競技部として角田さんのレフェリングにはどういった評価をされてますか?

大成　アンチというのは、たとえば角田さん自身の芸能活動を含めてとかっていう……?

――いや、芸能活動はあれですけれども(笑)。まぁ、島田(裕二)さんと同じなんですが、いわゆる試合展開を作ろうとする部分といいますか。

大成　なるほど。まず、基本的にK―1ルールには「お互いアグレッシブに試合をするように」という規定があるんですね。それをどうレフェリングで表現するかという部分では個人差があって。

――あ、あるんですか?

大成　もちろん、本当はあってはいけないことだと思います。ただ、僕らは常に試合中は選手に「攻撃しろよ」と声をかけたり、クリンチがあったりすると小さなペナルティを与えたりして、アグレッシブな展開になるように試合の方向性を考えてるんですよ。その中で角田さんは、レフェリング経験が豊富な部分や他ジャンルでの活動を通して培った力があるでしょうから、そういった試合展開にもっていく能力に長けてると思います。

――たとえば、以前に角田さんが武蔵選手と藤本祐介選手の試合のときに、「これ以上膠着が続くようであれば両者失格にする!」って突然マイクで宣告したことがありましたよね。

大成　あの試合に関していうと、まずレフェリーは膠着を続けていた二人を失格にすることは可能なんですよ。

――あ、そうなんですか?

大成　あのときのメインレフェリーは僕

魔裟斗vs佐藤嘉洋では、角田氏のとっさの判断によって「10-9」と記されたジャッジペーパーの採点が、ルール上にない「9-8」に改ざんされて物議を醸した。はたしてこの超法規的措置ともいえる角田裁きは、K-1がメジャースポーツに発展する近道となりうるのだろうか?

だったんですが、自分自身の能力の足りなさか、両者に注意を与えても試合が膠着してしまった。そこでオブザーバーの立場から角田さんがああいった行動を起こされたんです。あの、どうしても角田さんはその雰囲気やしゃべり方から、観る側にやってることが拡大解釈されて受け取られるというところはあると思うんですね。でも、あの試合も結局はKOで決着がついたので、「アグレッシブに試合をする」という意味では、角田レフェリーの警告が功を奏したとは思います。

——でも、そういったジャッジを観る側がスポーツとして受け入れられるかどうかは別の話ですよね（笑）。

大成　そうですね（苦笑）。たとえば、僕なんかはただの町道場のオヤジだったりもするので、ああいう場面に直面すると緊張して判断が鈍るところがあると思うんです。でも角田レフェリーは普段から芸能やさまざまな活動をされてるので、瞬時の判断を求められたときに反応する能力が非常にあるというか。

——まぁ、いきなり「両者失格！」とはなかなか言えないですよね（笑）。

大成　少なくとも僕には言えません（笑）。でも、K—1が目指すべき方向というのは、誰がどんな試合をしても同じ答えが出ることが求められると思いますので。そういう観点から武田vsクラウス戦に関しては、ファンの方と僕たちの判断基準が違うことを問題と捉えて、角田レフェリーに処分を下した、と。僕らもすべてのレフェリーが同じようなレフェリングができるように努力はしていく必要性を感じています。

——それは普通のアマチュア競技のジャッジとは違うものですよね。

大成　そうですね。まず前提としてアマもプロも選手の安全管理が大切ですが、プロはお客さんからお金をいただいているという部分で、レフェリーは試合をわかりやすく伝えるという役目もあると思うんですよ。これは試合を作るとかそういう意味ではなくて。

——単刀直入に聞きますが、K—1のレフェリングに対して、観る側との信頼関係が欠如してるというムードは感じてますか？

大成　それはもう充分に。僕はわりと打たれ弱いんで、2ちゃんとかは見ないようにしてるんですけど（笑）。もちろん批判は批判でお受けしますし、そういったものを払拭していこうと、今回の件も踏まえて審判団で話し合ったばかりですし。

——あと、これはK—1にかぎった話ではないんですが、よくファンのあいだでは「レフェリーが主催者に指示されてるんじゃないか？」みたいなことも言われてますよね。

その判定の瞬間、場内から「え〜っ？」という声も上がったHIROYAvs日下部の一戦。観客がフィルターとして主催者側の“HIROYAプッシュ”を感じながら観ていることを、如実に表わす場面だったと言えるかもしれない。

レフェリーが格闘技を殺すのか!?

大成　中にはそういう意見もありますね。

——でも、それは基本的にはありえないという解釈を自分はしてるんですね。要はそのレフェリーが辞めて「じつはあの試合は指示されてた」なんて言われる可能性もありますし、リスクが大きいというか。ただ、レフェリーやジャッジが「その場の“空気”を読みすぎてるんじゃないか？」っていう印象はあるんですよ。そのあたりはいかがでしょう？

大成　たとえば、武田vsクラウスが行なわれた日にＨＩＲＯＹＡ vs 日下部の試合がありましたよね。あれも判定に対して疑問の声が上がっていたので、審判団で集まって検証したんですよ。

——微妙な判定でＨＩＲＯＹＡ選手が勝利しました。

大成　はい。何十回も試合映像を見ましたけど、実際にほぼ差がないんですよね。

——客観的に見るとどちらとも言えないですよね。ただ、そこの信頼関係が薄くなってるという感じなんでしょうね。

大成　そもそもK—1甲子園はどうしてもプロ以上に安全性を重視しなければならないところがあるので、ただでさえ差が出にくいところがあるんです。その中で勝敗を決めなければならないので「主催者の意図が見え隠れしてるんじゃないか？」と言われやすい部分はあると思います。でも、それについて僕たちは「そんなことはない」と。

——判定でいうと魔裟斗vs佐藤嘉洋戦で、角田さんがジャッジングペーパーの点数を突然変えたという話もありましたよね。それを自分自身のブログで書くのもどうかなって思うんですけど（笑）。

大成　そうですね（苦笑）。僕はそれを拝見してないんですけれど、公式の場で発表すべきことをブログで発表するのは良くないことだと思いますし、いまはご本人もそれはご理解されてるか、と。

——この試合を含めて、角田さんはやっぱり試合をおもしろくしようとしてるんですかね？

大成　おもしろくというか、角田さんの感性というか……（笑）

——か、感性ですか！（笑）。

大成　ただ、角田さんはよく「K—1はメジャースポーツを目指してるんだから」っておっしゃるんですね。そういう観点からすると、今回の一件についてはファンとレフェリーのあいだで差があってはいけないと感じたからこそ、自ら処分を願い出たと思うんですよね。

——メジャースポーツとして成立させるには、レフェリングって凄く重要だと思うんですよ。わかりやすい試合のほうが世間の関心も呼びますけど、逆にレフェリーが介入しすぎるとそれはそれで世間には「またへんなことやってるよ」みたいに言われますよね。

大成　非常に難しいところだと思います。でも、僕はK—1の仕事で世界中いろいろな大会に行くわけですが、レフェリングに関しては日本が一番だと思いますよ。

——まだ日本はマシって感じですか？

大成　全然マシですよ（笑）。僕は海外でオブザーバーをやることが多いんですが、おかしいと思うレフェリングはかなりありますね。

今後は競技部とイベントサイドを切り離す方向を目指していきます

——今回の件でいろんな方に話をうかがって、皆さん口を揃えて言うのがいわゆるレフェリング問題はレフェリーだけの問題じゃないということなんですね。要するにセコンドやマッチメイクにも問題があるというか。

大成　そうですね。マッチメイクに関しては僕らにはどうにもならないですよね（笑）。大会当日は僕たちもある程度は試合の展開を予測して、レフェリー会議で「こういうふうになるんじゃないか。ここを注意してやろう」というようなことを意見交換するんですよ。そういった意味で力の差のあるマッチメイクというのは、ちょっと控えてほしい部分はありますね。

——試合を裁く側としては難しい、と。

大成　はい。まぁ、こういったことを僕ら競技サイドから主催者サイドに意見提出することは可能なので、もっともっと緊密なコミュニケーションをとっていきたいですね。

——あとはセコンドのタオル投入についてはどうお考えですか？　なかなか危険な場面でも投入しない傾向にあるようですが。

大成　確かにセコンドは試合を止めづらいっていうのはありますよね。K—1では必ず大会前日にルールについてもう一度レクチャーする場があるので、「セコンドには試合を止める権利があるんだから、それは躊躇しないで行使してほしい」っていうことはお願いしてるんですが。

——総じて日本のレフェリングはスター選手が劣勢なほど、止めるのが遅いっていう印象があるんですけど、K—1の解釈としてなるべくギリギリまで闘わせるという考えなんでしょうか？

大成　いや、そういうことは基本的にはないです。ただ、先ほど言ったように選手一人一人の性質の個人差もありますし、レフェリーそれぞれの技量も関係してくると思うんです。K—1はもの凄い大きい舞台でやるのでレフェリー自身も緊張するということもありますし。たとえば決勝戦でレフェリングをするには、それまでにそれなりの場数を踏む必要がある。そうじゃないと、それこそレフェリーが試合を作るということじゃなくて、逆に試合を壊してしまうっていう可能性も出てくるので。やっぱりオープニングファイトから経験を積んで、ようやくメインを裁くまでには長い時間や経験が必要なんです。

——そういう中でも日本のレフェリングのレベルが一番高いということは胸を張って言える、と？

大成　それは間違いないです。海外ではダウンコールも取らないなんてよくありますから（苦笑）。我々は細かくミーティングも繰り返してますし。今回の武田vsクラウス戦のような一件があっても、そういった範例を積み上げることで、K—1という競技がさらに確立していくと思ってますので。

——最後に、現在の競技部はK—1内に存在するわけですが、イベント側と切り離さないことには、なかなかいま観る側が抱いているようなマイナスのイメージは払拭できないと思うんですがどうでしょうか？

大成　そうですね。僕たちも競技サイドとイベントサイドは切り離して考えてますし、これからのK—1の競技部としてはそういう方向を目指すべきだというのが統一した見解です。これは谷川さんにプロモーションサイドも同じ見解だということを確認しました。やっぱりそうすることがK—1にとってもプラスになることだと思いますので。

——なるほど。今日はありがとうございました。

【09年11月12日／都内・FEG本社にて収録】

タオル投入によって決着がついた試合として記憶に新しいのが7月の魔裟斗vs川尻戦。このタオル投入については「早すぎるんじゃないか」といった意見もあったが、今後セコンドのタオル投入のタイミングについても議論が重ねられることが予想される。

この取材の翌日、角田信朗レフェリーの3ヵ月業務停止処分が発表された。今回のこの処分、誰が言ったかは忘れたが、「こっちも大人なんだから、周りがおかしいと感じていることは、自分だっておかしいと思ってるんだよ。でも、こうするしか仕方ないんだ！」という言葉が脳裏をよぎった。そうだよな、大人は矛盾を抱えながら前に進まなければいけない。ボクも大人だ。疑惑のレフェリングや今回の処分の違和感は、このままグッと飲み込もう。何よりこれから不可解なレフェリングがなくなることが望ましい。昨日より明日。みんなも大人なら何も言わず飲み込もう！　……という大人な態度で大成氏のインタビューをまとめていたら、一人だけ大人じゃない人間が現れた。今回の騒動の張本人でもある角田信朗氏だ。

処分が発表されたその日に、角田氏のブログが更新された。あまり反省された様子が見られない文章の最後は、捨てゼリフと受け止められてもおかしくない言葉でシメられていた。きっと角田氏本人も更新後にそれに気付いたのだろう。いまではその部分は削除されている（現在のシメも充分に挑発的だが）。

この特集に登場する島田裕二氏や梅木良則氏は、レフェリングのバッシングについて「ファンやマスコミが問題を作ろうとしてるのではないか」といったニュアンスの発言をしている。ボクから言わせれば「問題を大きくしているのはそちらの対応の仕方では？」と思ってしまうんだが、角田氏のブログはその最たるもの。

あの試合を止めるべきだったかどうかはそれぞれの立場によって主張はあるだろう。少なくとも今回のブログの更新は絶対に止めるべきだった。ただでさえグラついていたちゃぶ台をおもいきりひっくり返してしまったのだ。あれはないよ、角ちゃん！　（ジャン斉藤）

エンタメレフェリングは是か非か？

「レフェリングの柱は観客論。観客がどう楽しめるか」

DREAM 島田裕二 ルールディレクター

DREAMからは同イベントのルールディレクターを務める島田裕二氏に語っていただく。島田氏といえば、日本人で唯一ネバダ州&カリフォルニア州のアスレチックコミッションのライセンスを所持しているが、ファンには試合展開をも左右しかねないレフェリングのイメージが強い。いわゆるエンタメレフェリングってやつだが、島田氏はどんな哲学をもとに試合を裁いているのか。

聞き手／ジャン斉藤　試合写真／乾晋也

——いまレフェリング問題がけっこうな話題になってるんですよ。

島田　そうなのか。オレ様の耳には届かないからさ。

——耳をふさいでるんじゃないんですか？

島田　全然。だって斉藤と会うのだって何年かぶりだろ？　ほかの記者を含めてボクのところに誰も聞きに来ないからね。

——簡単に説明すると、こないだK—1で武田（幸三）選手の引退試合があったんですけど、角田さんのレフェリングが……。

島田　（さえぎって）今日はそれがテーマなの？　どうなる『ハッスル』、どうする山口日昇じゃないの？

——クックックッ。島田さん、あの試合はご覧になりました？

島田　現場で観た。いいんじゃないですかね？　全然いいと思うよ。

——ホントっすか。あれってあきらかにダウンしてるんじゃないんですか？

島田　っていうよりも、そもそも周りがレフェリングどうこうを言うのはね、ちょっと違うと思うんだよね。

——違うというのは？

島田　実際ね、レフェリングだけの問題じゃないと思うんだわ。セコンドのあり方だって考えないといけないしさ。

——タオル投入ができないセコンドは多いですからね。でも、それ以前に今回はレフェリングの問題であって、ダウンを取らないといけないんじゃないんですか？

島田　それはK—1のレフェリー陣が判断することでしょ。どこにダメージがあるのかっていうのは、もう至近距離で見ているレフェリーの判断でしかないからさ。

——まあ、そうなんでしょうけど。

島田　昔のK—1はフラッシュダウンも取ってたじゃないですか。カウント5で

レフェリーが格闘技を殺すのか!?

ね。そうやって試行錯誤してきてるわけですよ。で、いまのK―1ルールはボクがやってたときと違うからさ、たとえば視聴者から観ると、いろいろと疑問点があるのかもしれないから、エデュケート番組があってもいいんじゃないかな。

――視聴者を教育していくべきだ、と。

島田 そっちのほうがじつは重要なんじゃないかなと思いますよ。どうやってレフェリングしてるのか、なんでダウンカウントをすぐ取らないのか、ダメージはどう取ってるのか。そういう前提がないまま騒ぐのはちょっと違うと思いますよ。で、キミたちに冷たい言い方をすると、その部分で取材力が足りないと思う。

――あらら。ホントに冷たいですねぇ。

島田 プロ野球とかはさ、番記者がいるじゃん。ずっと特定の選手に張りついてさ。昔の『東スポ』の記者もプロレスラーに張りついてたじゃん。天龍源一郎に張りついて寿司をごちそうになったりとか。

――角ちゃんに張りつく余裕も時間も我々にはないです（笑）。思うに、レフェリー陣は大会後にコメントする場があったほうがいいんじゃないですかね。

島田 いや、いちいちコメントする必要ないと思うんだよね。「自分たちはちゃんとレフェリングやってます」でいいんだよ。それをプロモーターが間違っていると思うんなら処分すればいいし。周りからのバッシングなんてさ、どの業界でもあるわけじゃない。逆にそれをかばってあげるのが、じつはプロモーターだったりもするわけだけど。

――いまのジャッジやレフェリングがファンや選手から信頼されてないっていうムードがあるとは思いませんか?

島田 それはさ、やっぱり世の中は反体制が好きなのよ。

――そういう問題かなあ。

島田 やっぱりアンチ角ちゃんもいるんだと思うよ。ボクは好きだけどねぇ。とは言っても、自分もプライベートで付き合ってるわけじゃないけど、角田さんがK―1のルールディレクターやってるときにお手伝いさせてもらって、そこから持ち帰ったことがたくさんありますから。勉強会やったりとか、映像見てレフェリングチェックしたり。K―1はそれをずっとやってたからさ。ほかになかったよ、そんなところ。これは凄いなと思いましたから。で、角田さんが世界各国でK―1をやるときにいろんな国と揉めるわけじゃん。揉めるっていうかね、その国には国のルールがあるじゃないですか。「でもK―1にはK―1のルールがある」って話す姿を見て、

弁慶のパウンドは100パーセントのものじゃない。桜庭は足をちゃんとキャッチしていた。

こういうネゴシエートがあるんだと思って。ボクの場合はすぐ寝ちゃうけどね。まずスリーカウント取らしといてから、あとで返してもらえばいいやっていう（笑）。

――ダハハハ。

島田 でも、角田さんは譲らないからさ。だからネバダ州のアスレチックコミッションと揉めたりさ。そういう姿勢は好きですけどね。

――ちょっとK―1の話題は置いといて、こないだのDREAMの桜庭さんの試合は「止めたほうがよかったんじゃないか」という声も上がってますけど。

島田 もし止めていたら、オレは大城（盛敬／DREAMレフェリー）を怒ってますね。

――あの試合って、島田さんがレフェリーの大城さんに下からいろいろと指示をしてたって聞いたんですけど。

島田 下から「止めるな、止めるなよ」って言ってましたよ。というか、あの試合だけじゃなくて、そもそもレフェリー陣はすべての試合でリング下から声を出したりするフォーメーションを組んでますから。

――どういう規準で止めるなって指示をされたんですか?

島田 弁慶もあそこでパウンドをガンガン打っているように見えますけど、100パーのパンチじゃないですから。ニーオンザベリーやマウントから打ってるわけじゃない。キャッチされて足に力が入らない状態で打ってる。だから弁慶はパンチを当てにいってるだけ。体格差があるからみんなが錯覚するだけであって。

――もしも桜庭さんが弁慶の足を離していたら止めていたってことですか?

島田 離してたら「止めろ！」って言うよ。止めなくても「危ないぞ、選手の目を見ろよ！」って言う。でも、（桜庭は）ちゃんとキャッチしてるから大城に「止めちゃダメだよ」って言ってたんだよ。何度も言いますけど、あの試合にかぎらず、下でボクらはそういうフォーメーションを組んでレフェリングをしていますから。サブレフェリーとかサブジャッジがリングサイドにいっぱいいるでしょ。

――まあ、桜庭さんの試合だとなかなかセコンドがタオルを投げられないとか、最近は打たれ弱くなってたり、今回もかなり急な日程だったじゃないですか。そんなほかの要素も加わったうえで試合を見がちになってると思うんですよね。

島田 それはね、こう言うとなんだけど、格闘技を潰すような反対勢力が騒いでるような気がするんだわ。

――いったいどんな陰謀論ですか（笑）。いないでしょ、そんなの。

島田 いやいや、なかにはいるんですよ。

――そうなのかなあ。あとは、島田さんはけっこうなエンターテインメントレフェ

本文中でも触れられているが、島田氏は桜庭vs弁慶の試合において、レフェリーの大城氏にケージの外から指示を出していた。写真の右下に島田氏を確認できる。

リングぶりじゃないですか。試合の展開を作ろうとするというか。

島田 そんなことないですよ。ネバダ州とカリフォルニア州のライセンスを持ってるのは日本でボクだけですよ。エンターテインメントレフェリングなんてやっていたら、ライセンスはもらえませんよ。

――たとえば先日の青木真也vsヨアキム・ハンセンだと、ヨアキムは島田さんのレフェリングに対して文句を言ってたんですけど、そのへんはどう思われますか？

島田 直接文章で抗議が来たら答えるけど、そんな独り言にいちいち答えてられないですよ。

――いい機会なので、ちょっと答えていただきたいですけど。ヨアキムが下のポジションから、青木さんの側頭部を叩いてるときに島田さんがいちいちうるさかったみたいなことですね。あと「ワーク・トゥ・フィッシュ」の指示も執拗だったり、ロープ際の攻防で青木真也が有利になるようにしたんじゃないかとか。

島田 それは誰に対しても言ってることですから。そもそも後頭部・延髄への打撃はDREAMルールでは反則ですよ。ここでいう後頭部って頭の真うしろのことで、側頭部や耳の周りは後頭部とはみなさないですから。その付近に打撃を加えていたら、「後頭部は反則だぞ」って言うのはあたりまえのレフェリングでしょ？ ロープ際の攻防うんぬんを言うのであれば、そもそも「ヨアキム、ロープをつかむな」ってことですよね。

――わざとロープの外に出てブレイクを狙うストライカーは多いですよね。

島田 たとえばビビアーノ・（フェルナンデス）だってそうですよ。『HERO'S』はべつにイエローカードで罰金とかもなかったんですよ。でもDREAMに参戦してから抗議文が何度かきて「あのイエローカードをやめてほしい」って。で、ちゃんとボクらと話をして、そうしたらこないだのフェザー級決勝は闘い方を変えてきてたでしょ。

ロープ際の攻防の処理、ドント・ムーブやブレイクのタイミングの難しさはリング形式のファイトが抱える大きな悩みの一つ。そのうえ最近はロープの外に逃げることでテイクダウンを防いだり、ブレイクを狙う選手の姿が頻繁に見られる。そんな行為が口頭注意程度で済んでスタンド再開になるんだから、一度のテイクダウンで体力を大幅に消耗するグラップラーからすればたまったもんじゃない。ロープつかみや場外逃亡などのテイクダウン逃れをした場合は、問答無用でマウント再開の刑に処してほしい。

レフェリーが格闘技を殺すのか!?

――そういえば、1回戦や2回戦と違ってアグレッシブでしたね。

島田 でしょ？ なにかしら言い訳したいんですよ、「レフェリーのせいで負けた」って。そこをマスコミは冷静に見て選手の声を聞かないとダメですよ。ただでさえ選手寄りの判断をするのはマスコミのわけですから。たとえばさっきのヨアキムの話にしても、普通は選手の声しか世間に届かないわけですから。クイントン（・"ランペイジ"・ジャクソン）も負けたときは必ずボクのせいにしてましたから。「おまえがレフェリーだったから負けた」「じゃあ次からオレ、やらないね」「それはやめてくれ。おまえがやってくれるから安心感がある」。

――どっちなんだ、クイントン（笑）。

島田 だいたいね、青木真也だって文句は言いたかったと思うよ。金的のときだって「これでできなかったらあなたの負けね」って言ったからね。

――え？ 青木真也の負け？

島田 そりゃそうでしょ。ドクターが「できる」って言ってるし、ボクも「できる」って判断したんだから。青木本人が闘う意思を見せないなら、青木真也のギブアップじゃないですか。

――でも、ヨアキムの反則で続行できないんですよ。金的に顔面2発を食らって。

島田 確かに反則もあったけど、「それでもできる」とボクらは判断してるわけだから。ドクターもできない、競技陣もできないと思ったらヨアキムの反則負けですよ。だから何が言いたいかっていうと、ヨアキムも自分だけ言われているわけじゃないよってこと。

――なるほどねぇ。ところで島田さんがレフェリングするときの一番の柱っていうか、一番守らなきゃいけないと思ってることはなんでしょうか？

島田 やっぱり観客がどう観てるかっていう部分だね。だって自分の主観はいらないじゃん。あくまでも観客論。

――競技論じゃなくて？

島田 やっぱりお金をもらっている以上は、お客さんが楽しんでまた観に来ようと思うようなレフェリングをすることが大切でしょ。それは選手だって同じ。だから第三者になってどこまで冷静にできるかっていうのがじつは一番重要だから。主観があるとやっぱりさ、気持ちが入っちゃうからね。だからオレ、女子のレフェリーとかできないもんね。

――どうしてですか？

島田 カワイイ子がいるから。

――こいつは好みじゃないから早く止めるみたいな（笑）。

島田 うん。なんか言われたら「うるせえブス！」とか言っちゃうもんね。

――……主観というより島田さんの人格問題のような気がする。

島田 そういえば、UFCでやったLYOTOとショーグンの試合の判定が騒がれるのも、やっぱりレフェリングが悪いという気がしますよ。あの試合をDREAMでやっていたら、LYOTOにイエローカードを出してるでしょうし。そうすると3ラウンド目にLYOTOのノックアウ

ト勝ちですよ！

島田 はい。

異なることだと思うんですよね。

しね。ラウンドでも違ってくるし。

ト勝ちですよ！
―LYOTOがもっとアグレッシブに攻めていた、と？
島田　うん。そういうふうに自分の頭の中で試合の展開を考えるし、この選手とこの選手が闘ったらどうなるっていうのをジャッジ陣で話をしてますよ。こういう展開にならなかったらどうしよう、こういう選手同士が闘ったらどこでジャッジングを取りますかっていうのを、じつは会場に入ってから話をしてるんですよ。
―でも、アメリカの場合だと、レフェリーが試合の展開を作るのはあまり好ましくないと思われてますよね？
島田　そんなことないと思うけどね。もしUFCにイエローカードを取るルールがあるのであれば、僕らみたいなフォーメーションになるだろうし、そのことと試合に介入することとは別だと思いますけどね。
―いまは試合の展開を作ろうとするレフェリングが疑問視されてると思うんですけど。なんか無理矢理に介入されてる感じがして。
島田　いや、そんなことはないと思うな。何かそこにはまず"アンチ角田"があるような気がするけど。
―それと同じく"アンチ島田"のムードってあると思いませんか？
島田　あるんだろうけどさ、オレ様は全然気にしてないね。「文句があるならこの地位に来てみろ！」って。
―でも、こないだの武田戦って、テレビで流れてるわけじゃないですか。

もしUFCにイエローカードを取るルールがあれば、僕らと同じフォーメーションになる

島田　はい。
―一般視聴者たちは、K―1のレギュレーションは知らないわけですよね。で、あのレフェリングを観たら「なんじゃこりゃ？」って普通に思うでしょう。
島田　そこでわかりやすく伝えたいんだったら、言っちゃあなんだけど、そういうマッチメイクを組むプロモーターが悪いんですよ。だからサダハルンバが悪い！
―ダハハハハ！　だから、信頼感がないのは、武田戦にかぎらず、どこの団体もダウンやブレイクの規準が試合によって

島田氏がとくに批判されるのは「ギブアップ？」コールだろう。３階席まで興奮を届けようとする"大会場レフェリング"のなせる業だが、時代性とともにどう変化していくのか。とりあえず、レフェリングがけっこう面倒なモンスターマッチは、向こう10年間は島田氏以外の出番はなさそうだが……。

異なることだと思うんですよね。
島田　それはしょうがないね。
―あら、しょうがないんですか？
島田　しょうがないですよ。ダメージの具合にしても、テレビで見るのと現場で見るのと全然違いますから。トーナメントとワンマッチのレフェリングの仕方も変わってくるだろうし。
―同じ団体で同じルールでやったとしても、マッチメイクによってレフェリングが変わってくるってことですか？
島田　全然違う。レフェリングが変わってくるっていうか、試合展開によっても変わってきますよ。一日2試合のトーナメントにしても、やっぱダメージがあればあるほど決勝に行けなくなるじゃないですか。だからダメージがどこまであるのかちゃんと見極めてストップしなくちゃいけないですし。逆に「ワンマッチだったらもうちょっと見てもいいかな」っていうのは絶対あるでしょう。
―島田さんには「この選手の場合は早く止めない」っていう意識はありませんか？
島田　全然ないよ。あるとすれば、お客さんが喜んでまた来たいと思わせるかっていう意識かな。それで選手もファイトマネーをもらえるし、ボクらも生活できる。
―いま時代的に厳格さが求められてるところってないですか？
島田　いや、そんなことないよ。それはキミたちがそう仕向けてるの。
―そうかなあ。……あ、そうだ。リングだとブレイクやドント・ムーブがあるじゃないですか。そのタイミングもけっこういろいろと言われると思うんですけど、マッチメイクや試合展開によってブレイクをかける瞬間って変わってきます？
島田　タイムが違うと全然変わってくるしね。ラウンドでも違ってくるし。
―2ラウンドだったら早めにブレイクするとか？
島田　それはある。ブレイクありルールだったらね。DREAMみたいにジャッジがマストシステムで、このままじゃどちらにもつけづらい展開のときには、その状況によってブレイクの指示は出しているけどね。でも、それは判定のために試合を動かすってこととは違いますよ。
―確認なんですけど、DREAMって審判団って用具チェックしてる人まで含めるとどのぐらいの人数なんですか？
島田　15人ぐらいだね。オレ様の人選です。だから何が起きてもオレ様の責任。選手や関係者から文句があったら、その場で判断せずに「島田に聞いてみます」「島田に言ってください」っていうかたちにしている。そのほうがわかりやすいけど、競技役員にもちゃんと権限を与えているよ。やっぱりナメたことやってくる選手がいるんですよ。だからバックステージでもイエローカードがバンバン出てる。
―たとえば、どんなことですか？
島田　たとえばグローブを返さないとか。
―それも罰金になるんですか？
島田　罰金。グローブ係も競技委員の末端だけど、その子たちがナメられるってことはボクがナメられるってことだから。そこをしっかりしないと、選手と競技委員の緊張関係はなくなるしな。ボクはそこで選手に嫌われてもいいからさ、そこは厳しくやってるよ。
―……そうじゃなくとも嫌われてると思いますけど。
島田　まだまだ!!　魔王のとこまでいきたいね（笑）。

【09年11月某日／都内某所にて収録】

レフェリーが格闘技を殺すのか!?

あの“オイルショック”を経て起きた変化とは?

「レフェリング問題はレフェリーの責任だけで解決できることではない」

戦極 梅木良則 ルールディレクター

MMA史上、その裁定が最も物議を醸したともいえる桜庭vs秋山の一戦。あの試合を裁いたレフェリーとして大バッシングを受けたのが梅木氏だ。ヌルヌル事件を経て変化したこと、そしてここ最近で波紋を広げているレフェリングについて、13年のキャリアをもとに語ってもらった。

聞き手/高崎計三　構成/鈴木佑　試合写真/乾晋也

梅木良則レフェリーは96年にパンクラスでレフェリーデビューし、いまは『戦極』の審判部長を務めるほか、パンクラス、DEEP、ZST、ケージフォース、K—1、ジュエルス、ヴァルキリーなどルール・男女問わず幅広い団体でレフェリー活動を行なっている。そのレフェリング技術は関係者のあいだでも高い評価を得ており、現在の日本総合格闘技界では、最も忙しいレフェリーの一人といって間違いない。

まずはその梅木氏の目から、武田幸三vsアルバート・クラウス戦(10・26『K—1 WORLD MAX』)はどう見えたのだろうか? ちなみに、桜庭和志vsゼルグ“弁慶”ガレシック戦はインタビュー時点で「まだ見ていない」とのことだった。

「武田選手の試合は審判団の一人としてお手伝いをしながら、会場内のかなり遠いところから観ましたが、武田選手の凄さを感じましたね。何度も立ち上がって。

いつもそうなのですが、自分がメインレフェリーやジャッジなど、試合に関わっているとき以外は、本当にファンというか、観客の目線で観ていることが多いです。レフェリーとしての目はオフにしているというか。すべての試合をレフェリーとして観ていると、現状では集中力が続きません」

物議を醸している、角田レフェリーのダウン判定に関してはこういう意見だ。

「他のレフェリーが裁いた試合に関しては、やはりそのレフェリーの判断が絶対ですからね。客席から観て『あれはダウンだろ!』と思う場面でも、レフェリーというのは唯一、リング内の至近距離から見ている存在ですから、見えている光景はまったく違います。リングサイド1列目からでも、距離や角度は全然違いますからね。だ

から自分がリング上にいなかった試合に

議していたことから、「止めるのが早かっ

の見解は違うものだった。

ことは仕方ないですからね。逆にほめら

から自分がリング上にいなかった試合について聞かれても、答えようがないというのが正確なところです」

続けて、梅木氏はこうも言う。

「疑問を持たれた試合や場面について『あなたならどうしましたか?』と聞かれても、その場にメインレフェリーとしていなかった身としては答えようがありません」

と。

梅木氏の場合、過去にはそのレフェリングがファンのあいだで物議を醸した試合がいくつかある。たとえば2007年9月、『HERO'S』での山本"KID"徳郁vsビビアーノ・フェルナンデス戦だ。この試合ではドント・ムーブ後のポジション再現について紛糾し、試合が中断している。

「あの試合はまず、ビビアーノ選手が同じポジションで再開するのを嫌がったんです。ロープ際で難しいポジションではありましたが、自分は再現できる自信がありました。ただ、ビビアーノ選手が拒んだために時間がかかってしまい、審判部長だった平直行さんが『再生の難しいポジションだからブレイクで再開にしよう』と決定されました」

一般的には「梅木氏が再現しようとしたポジションが複雑すぎた」と認識されているが、そう見えたのはドント・ムーブのあとにビビアーノが動いたからだった。試合中、レフェリーの声はマイクで拾われているが、選手の声は場内に聞こえないため、そういった部分が伝わらなかったという事情がある。

次に、2005年大晦日のKID vs須藤元気。この試合はスタンドのパンチで倒れた元気にKIDがパウンドを入れてTKO勝利しているが、止めるまでの時間が短く、また立ち上がった元気が梅木氏に抗議していたことから、「止めるのが早かったのでは」という意見が渦巻いた。

「グラウンドでKID選手のパンチが入ったとき、須藤選手の目が飛んで、ガードしようとしていた腕から一瞬、力が抜けています。そのまま続行していればパンチを浴び続けて、受けなくてもいいよけいなダメージを受けていたことと思います。須藤選手が立ち上がって『まだできる』と言っていましたが、そのときもきちんと歩けてなかったですからね。あのストップは、自分の中ではじつはいい仕事の一つだと思っています」

その再開の体勢で揉めた山本KIDvsビビアーノ戦。場内がザワつく中、時間をかけて体勢の再現を試みたが、結局はスタンドからのスタートに。

やはりレフェリーが下した判断については、そのレフェリー自身に聞くしかないということなのだろうか。しかし日本の総合格闘技もこれだけ年月と試合数を重ねているが、それでもまだ「レフェリング問題」がなくならないというのはなぜなのだろう?　この疑問をぶつけると、梅木氏

レフェリーは唯一試合を至近距離から見ている存在で、その光景は客席から見えているものとはまったく違うんです

の見解は違うものだった。

「そうですか。いまは初期に比べたらレフェリングのシステムもかなり整備されて、サブレフェリーなども含めてフォーメーションができていますから、レフェリーがリング上で一人困ってしまうという場面はほとんどないです。『HERO'S』では途中から平審判部長が本部席に座って、レフェリー陣が迷ったときにはその立場から決定を下すというかたちになりました。これはその後、パンクラスでも採用しましたが、レフェリングはやりやすくなりました」

レフェリーの立場から見れば、問題は確実に縮小しているということのようだ。だが、レフェリングにしても判定にしても、レフェリーやジャッジによってあまりにばらつきがあるようにも感じられるのだが。

「レフェリーというのは、たとえて言えば『裁判長』だと思います。個々の事件の裁定というのは裁判長の判断に任されているわけですよね。同じ法律に従うにしても、細かい部分の判断は裁判長の意向が出る。レフェリーもまさにこれと一緒なんじゃないでしょうか」

確かに裁判の判決でも、最終的な焦点は「並べられた材料を、裁判長がどう判断するか」という点に絞られる。判決報道で、法曹関係にくわしいコメンテーターが「この裁判長はこういう傾向がある」と話したりしているのをよく聞く。

だとすれば、だ。自分たちとしては間近に見た光景をもとに自信と信念を持って下した判断にこれだけ異論が噴出する仕事というのは、やっていられなくはないのだろうか。

「人前に出る職業である以上、批判されることは仕方ないですからね。逆にほめられることはほとんどない。それはライターさんも同じじゃないですか?(笑)。そこは割りきれるようになりました」

割りきれるようになったというのは、やはり嵐のような大騒ぎとなった2006年大晦日の桜庭vs秋山成勲、いわゆる"オイルショック"の一件があったことが大きいという。ではあの騒動を経て、変わったことはあるのだろうか。

「塗布物に過敏になりました(笑)。実際、業界全体としてあの一件以降、塗布物チェックの対策を考える必要が出てきたのは確かですしね。あとは何かが起きたときでも、他のレフェリーを慰めやすくなりました(笑)」

確かにあれだけのバッシングにさらされた梅木氏に慰められれば、納得するしかない気はする。梅木氏はこうも言った。

「なんだか、いまの風潮は問題を作ろう作ろうとしているように感じてしまいます。そもそも誰か一人の責任にできることなのかな、と。武田選手の試合にかぎらず、本当に危ないと思ったなら、レフェリーじゃなくても止められるわけですから。セコンドもタオルを投げなきゃいけないでしょうし、非常識なことを言えば誰かが無理矢理リングに上がってくることもできるわけじゃないですか。それに選手のもともとの状態として危ないということなら、それはマッチメイクの問題でもあるでしょうし。レフェリーの責任だけで解決できることではないと思います」

最後に、梅木氏がレフェリングをする際に最もキモとしていることは何かを聞いた。答えは「ルールどおりやること」。即答だった。

【09年11月5日/都内某所にて収録】

ゃあ、なんで総合格闘技は報道されない

に話も来てませんからね。その時点で、も

がないから、レフェリー一人、ドクター一

するんだけど、ブレイクって膠着した「時

レフェリーが格闘技を殺すのか!?

プロモーターから見たルール問題

「レフェリー、セコンド、主催者全部が向上しないとダメ！」

DEEP

佐伯繁 事務局代表

各団体のルールディレクターに話を聞いているこのレフェリング企画。DEEPのルールディレクターは『戦極』同様、梅木レフェリーということで、ここでは佐伯代表にプロモーターから見たルール問題を語ってもらった。公的コミッションがない日本では、やはりルールと主催者は密接な関係があるのだ。

聞き手&撮影／堀江ガンツ　DREAM試合写真／乾晋也

――今日はレフェイング&ジャッジ問題についてうかがいたいんですが。

佐伯　ジャッジ問題？　それなら何時間でもしゃべれるわ！

――そんなにジャッジ問題で言いたいことがありますか（笑）。

佐伯　ただ、凄く難しい問題だよね。このジャッジやレフェリング問題というのは、団体関係なしに全体の問題だからね。どこの団体だろうがだいたいジャッジで揉めるでしょ？

――そうですね。

佐伯　しかもね、ルールやジャッジについては、それぞれの団体でそれぞれの考え方があるんだけど、レフェリーはみんな兼任してて、団体所属のレフェリーじゃないんですよ。

――そうですよね。でも各団体、同じ総合格闘技でも厳密にいうとルールは違うし、たとえばブレイクのタイミングとかも違うわけですよね？

佐伯　全部違います。だから統一した基準ってないし、どのルール、どのタイミングが一番いいかっていう答えも出てないんだわ。

――いまだルールについては試行錯誤の日々ですか（笑）。

佐伯　そうですよ。で、これは間違えちゃいけないんだけど、現時点では総合格闘技ってスポーツであってスポーツじゃないんですよ。

――どういうことですか？

佐伯　たとえばDREAMの試合結果をフジテレビの『すぽると！』で流しますか？って話。

――流しませんね。

佐伯　バドミントンもビーチバレーも、みんなどこの局でも報道してるじゃん。じ

各団体の客入りや予算が全然違う中でレフェリングや基準を統一するのは難しい

ゃあ、なんで総合格闘技は報道されないの？　要はメディアがスポーツとしてじゃなく、興行としてしか認めてないんですよ。興行でしかないからには、ルールや基準の統一化がどうのって土台無理な話なんですよ。

――そういった基準作りもできませんか？

佐伯　だって、大きな会場でやるビッグイベントと、小さな会場でやる試合とでは、見せるものが違うんだから。同じものを見せたっておもしろくないんですよ。だからイベントによって、エンターテインメントを重視するイベントもある、競技性を重視するのもある、その中間もある。それぞれ興行主の考え方が違うんだから、統一するなんて不可能じゃん。

――提供したいものが違うからこそ、同じMMAでもいろんな面で基準の違いが出てくる、と。

佐伯　逆に言えば、べつにルールと基準が統一されてもいいですよ。だったら、それをまとめてくれる人が必要ですよね。ホントなら、格闘技の協会が日本にもできて、そこからレフェリーなり、ドクターなりが派遣されたら、それでいいんですよ。アメリカみたいな公的なコミッションがあればいいんだろうけど、実際問題難しいですよね。

――まあ、『戦極』ができる際に日本総合格闘技協会っていうのが立ち上がったはずなんですけどね（笑）。

佐伯　でも、あれは僕のところには発表前に話も来てませんからね。その時点で、もう話が違うでしょ？　しかも、プロの興行を経験したことがない人たちに突然「協会を立ち上げました」って言われても「わかってるんですか？」ってなるじゃん。

――まあ、そうですよね（笑）。

佐伯　それにね、もしコミッションなり協会なりができたところで、各団体の客入りは違うし、予算も全然違うんですよ。

――ああ、なるほど。

佐伯　たくさん試合やるのに「うちは予算がないから、レフェリー一人、ドクター一人でいいです」っていうところもあるんだわ。それじゃ、全然公平じゃないでしょ？　やっぱり興行ってどうしても収支の問題があって、予算が各団体違うから難しいですよね。金をかける部分がどこなのかって話になってくるから。

DEEPのルールディレクターおよびメインレフェリーを務める梅木レフェリー。佐伯代表はこの梅木レフェリーの技量と、レフェリングに対する姿勢に大きな信頼を置いているという。

――たとえばレフェリー一人増やすより、選手のギャラ上げてやりたいと考える主催者もいるだろうし。

佐伯　そうそう。ホントだったら、僕らがレフェリーを所属にさせて食わせることができればいいんですよ。そうすれば、少なくともウチの基準でのレフェリング、ジャッジというのはしっかりするし。でも、なかなかレフェリーをそこまで拘束するお金も厳しいし、だいたいレフェリーがいないんですよ。

――「いない」っていうのは、レフェリーの絶対数が少ないということですか？

佐伯　全然足りない。あとは東京ならいいけど、地方になってくるとまた問題があるんですよ。まずレフェリーの交通費がかかるでしょ？

――そういう問題もありますね。

佐伯　地方に選手やコーチはいても、レフェリーはいないんですよ。だからホントにレフェリー不足は凄く問題だし、いまは正直、打つ手がない。いまやってくれてる人たちが一生懸命向上してもらうしかないんだわ。

――各レフェリーに、そのイベントごとのルールや基準をしっかり把握してもらって裁くしかない、と。

佐伯　それでもブレイクのタイミングっていうのは難しいんだけどね。大会前のルールミーティングでも「こういう基準で、ブレイクはこうしましょう」って話はするんだけど、ブレイクって膠着した「時間」で計れるものでもないんですよ。たとえば、DREAMフェザー級GP2回戦での（前田）吉朗vs高谷（裕之）選手のとき、吉朗が上からパウンド入れてるときのブレイクなんて見た？

――見ました。

佐伯　あれはどう考えても早いでしょ？　ブレイクを比較的早めにするウチでもあんな早さはないですよ。しかも、パスガードする瞬間にブレイクだからね。あれはありえない。

――あのブレイクで試合の流れが変わりましたよね。

佐伯　それで、まったく同じ日にやった川尻（達也）選手とJZカルバンの試合では、川尻選手が上になってガードポジションが続いてたのに、なかなかブレイクしなかったじゃない。同じ大会で、同じルールでも、レフェリーによってこういうことが起きちゃうんですよ。

――川尻vsカルバン戦では、ブレイクしなくても観客から「ブレイクしろ！」っていう声が上がらなかったというのもありますよね。

佐伯　だから、プロの興行だと〝空気感〟で済む場合もあるんだよね。たとえば、ウチで吉朗と今成（正和）がやったとき、お互い見合ってるだけなんだけど、お互いが仕掛けようとしてる空気感があって膠着には見えなかったり。

――あそこで「ファイト！」って言ったり、イエロー出すレフェリーはダメレフェリーになりますよね。

佐伯　でも、攻防が見られない「時間」でいったら、ブレイクがかけられるべきってことになるし。だから時間じゃないんですよ。

――同時に、単なる競技じゃないってことですよね。ブレイクに関して言うと、ストップ・ドント・ムーブの問題もありますよね。

佐伯　あるね～！

――たとえばダウンさせてパウンドで追い込んでるときに、頭がちょっとロープから出てて、「はいストップ」。そこで真ん中に持っていって、「はい、ゴー」ってやったら、さっきのパウンドラッシュは展開が変わっちゃいますよね。

佐伯　だからウチはドント・ムーブはないんですよ。結局、同じ状態で再開するっていっても、今度はスタートの瞬発力の問題になるわけでしょ。同じ状態になるわけないと思って。

――そうなんですよね。

佐伯　だからストップ・ドント・ムーブには僕も反対。そのままやらせるか、ブレイクで立たせるから。で、逆に僕がルールミーティングでみんなに言うのは、「ロープ際の攻防で『こいつのときは止めた』『こいつのときは続行させた』っていうのは運だ」と。それでも文句言うなら、ロープ際で試合するなって言うんですよ。だから、それからはロープ際のことで文句は言われてませんよ。

――あと、レフェリーやジャッジで一番揉めるのは、やっぱり判定ですよね。

佐伯　これはね……難しい！　これも格闘技は競技じゃなくて興行だって話とリンクするんだけど、格闘技においてジャッジって権限があるようでないんですよ。

――権限がないんですか!?

佐伯　だってね、たとえばジャッジがへんな判定しても、最終的にそのジャッジと選手が揉めることはないんですよ。選手と団体で揉めるんですよ。

――あ～、確かにそうですね。佐伯さんもよく文句言われてますよね（笑）。

佐伯　そう、へんなジャッジつけたとき、結局それを処理させられるのって俺じゃん！　ジャッジが「自分のつけた判定は間違ってない」って言ったところで、その選手が「じゃあいいよ。こんな判定するなら、もう俺、違う団体に行くからいいわ」って言ったらどうする？

――それは主催者としては、頭が痛いところですね。

佐伯　だから、そういうことがないように、他団体とそういった協定は結ばなきゃならない。だからね、本来ならミスジャッジがあったり、判定に抗議したければ、審判団に訴えるべきなんだけど、その審判団っていうのは、単に団体に雇われた人たちだから。結局、最後は団体と選手の問題になっちゃう。

DEEPルールがほかの団体と違うところは、寝技でロープ際の攻防になっても、ストップ・ドント・ムーブがないこと。ご覧のように選手の頭がロープの外に出ていても試合は続行され、リングから落ちそうな場合はブレイクしてスタンドから再開となる。

レフェリーが格闘技を殺すのか!?

プロ格闘技におけるジャッジって権限があるようで、じつは権限がないんですよ

――それってやっぱり、レフェリーのジャッジよりも主催者の意向のほうが、優先されやすいという危険性がつきまといますよね。

佐伯　だからたとえば、ウチなんかは主催者の意向が勝敗に極力絡まないように、ジャッジペーパーを出すときに、僕はいじれないようになってるんです。そうじゃなかったら、主催者の意向で勝敗が調整できちゃうもん。だから、ウチは絶対にしない。

――「ウチは絶対にしない」ということは、ほかはジャッジペーパーの主催者チェックがあったりするんですか？

佐伯　いや、それはわからんけどね。少なくともウチはないし、判定結果が出て、僕が「えーっ！」と思うこと、何度もありますよ。

――先ほどの「レフェリーは主催者に雇われてる」ということから言うと、レフェリーが主催者の顔色というか意向に沿って、スター選手のストップを遅くしたりってことは起こりませんか？

佐伯　ウチに関してはそれはないですね。逆に止めるのが早すぎちゃう。やっぱり事故が起きないようにビビッちゃって、まだできるのに止めちゃうのも問題。

――DEEPではなくても、もっと大きな団体だとスター選手を負けさせられないってことで、ストップの遅れとか出たりしませんかね？

佐伯　ほかの団体はわからんけどね。ウチは逆にタイトルマッチとか、上の試合になるほど「できるだけ見て止めないで」って言ってます。やっぱり、選手もそれだけの思いで挑んでる試合だし、すべてを懸けてる人もいるんだわ。早く止めることで、その試合が消化不良になるよりは、ギリギリまで見てあげようって考えですね。

――でも、それだと危険じゃないですか？

佐伯　それを言うならね、もっとセコンドを教育しなきゃダメ！　レフェリーのストップが遅くて、危ないと思うんなら、なんでタオル投げないの？　って。

女子部門もあるDEEPでは、ストップするタイミングなども、男子と女子とでは若干の違いがあるという。やはり女性は身体がやわらかく関節技が極まりにくいこともその理由の一つだ。

レフェリーに「止めるのが遅い」と言うならなんでタオルを投げないのって話

——ああ、確かにそうですね。

佐伯　だってセコンドがその選手のこと一番よく知ってるわけじゃん。その選手の攻め方もわかってるし、弱いところもわかってるし、体調もわかってるわけでしょ？　レフェリーが「止めるの遅い」って言われるなら、セコンドは何をしてたんだって話になるじゃん。

——本来はセコンドこそ、選手の生命を預かってるわけですからね。

佐伯　だから、セコンドをもっと教育しなきゃ、ダメですよ。ボクシングなんか、タオル投入で終わること多いじゃない。あれはセコンドが「これ以上やらせたら危険だ」ってことがわかってるからだろうし、選手もそういう判断をセコンドに託してる信頼関係もあるだろうしね。それをやらずに何がセコンドだって！

——確かにそうですね。そういったことも含めて、セコンドの意識や質の向上も必要ということですね。

佐伯　選手の意識も含めてね。だからさ、タオルを投げるってことに関して言えば、セコンドが自軍コーナーから一歩も動けないっていうルールもおかしいんだわ。だって、反対側のコーナーでパウンドもらってたりしたら、見えないじゃん。どうすんの？

今年5月26日に行なわれた『DREAM.9』。そこで川尻達也vsJZカルバン戦、前田吉朗vs高谷裕之戦がそれぞれ組まれたが、同じようなガードポジションからの攻撃でも、レフェリーのブレイクのタイミングに大きな違いがあった。こうした選手によって、またレフェリーによって大きく基準が違ってしまうのは、課題といえるだろう。

——そういう問題もありますよね。

佐伯　だからホントは、ジャッジ一人、セコンド一人は、多少動いてもいいのかなって気もするんだよね。じゃないと、タオル投入のタイミングがわからなくなるから。

——動けるセコンドは一人限定とかにすれば、そんなに問題もないでしょうしね。

佐伯　それでも、カメラマンがいてジャマだってこともあるけど、ちょっと角度を変えるだけで、選手がどんな状況だか見えるからね。それは必要なんじゃないかな。

——佐伯さんは、DEEPだけじゃなく、DREAMに対してもそういう提言はしてるんですか？

佐伯　島田（裕二）さんとは、ルールやレフェリング、ジャッジについてはよくしゃべるけどね。でも、これは何度も言うけど難しいよ。俺は興行やってる人間だけど、選手側に立つんだよね。

——常にこのDEEPの事務所兼ジムにいて、選手に近い存在ですもんね。

佐伯　だから、僕は選手の立場というか、気持ちがわかるから、「興行主が厳しいこと言ってるな」って思うこともあるよね。

——どういったことですか？

佐伯　アグレッシブに攻めても連敗してるヤツがタイトルマッチに挑戦できるかって話だから。興行論ってそこが難しいところですよ。

——確かにそうですね。主催者は何か選手に要求するんだったら、それに対するケアが必要っていう。

佐伯　要求じゃなくて、選手との信頼関係の中で、いろんなマッチメイクを考えていくべきだし、そのマッチメイクが試合内容にもかかわってくると思う。プラス、レフェリーとかドクターにしても、やっぱり興行論もあるし、いろんな部分があるし。ただやっぱり、みんなにもっと勉強してほしいっていうのはあるけど、そこを束縛する能力も金もないしね、実際。そういう中で、一つ一つのレベルを上げていくしかないんだわ。まだ歴史がないんで。

——レベルアップさせながら、競技と興行の折り合いをつけていく、というか。

佐伯　だから結局、ノーピープルでやってるなら杓子定規なルールでいいと思うんですよ。でも結局、プロ格闘技って会場のお客さんあっての話でしょ？　そこだと思うんですよ。お金取ってるんだから。アマチュア競技だったら、まったく何も言う必要ないと思います、そんなの。

——アマチュアだったら、ジャッジが合ってるか、ミスジャッジかの二つに一つでしょうからね。

佐伯　だから、そこは難しいと思いますよ、凄く。レフェリーには、その難しいことを要求してはいるんですけど、ただ一つ、俺がレフェリーに言いたいのは、頼むから当日ぐらいは各団体のルールブック持ってきて見ようよ、と。

——そうなんですか⁉

佐伯　そういう人も実際いるんですよ。だからもっとレフェリーとして飯が食えるようになったり、スポンサーが応援してくれるようになったらみんながもっとよくなるけど。現状では、主催者もレフェリーもなんとか頑張って、いまの状況を良くしていくしかないわな。もう大変だわ！

——えー、今日はルール問題とともに、格闘技興行をやっていく大変さがよくわかりました（笑）。どうもありがとうございました！

【09年11月5日／都内・DEEP事務局にて収録】

フェリング事例集

いま、いろんなところで問題となっている判定&レフェリング問題。これまでも何度か騒がれてきたが、どんな問題が起こってきたのか。ここでは事例別に紹介していきたい。

構成／堀江ガンツ　試合写真／乾晋也

レフェリーのストップが遅い!? 疑惑

「桜庭を殺す気か!」(前田日明)、「闘う男がリングで死ねれば本望でしょうが!」(I編集長)。そんな賛否両論飛び交ったことでも記憶に残る、桜庭和志vsスミルノヴァス戦をはじめ、レフェリングでよく問題になるのが、この「ストップが遅すぎる疑惑」だ。

10.26『K-1 MAX』での武田幸三vsクラウスでは、もはや立っていられない状況の武田に対し、ダウンすら取らない角田レフェリーに非難が集中! その前日、桜庭vs"弁慶"ガレシックでも、サクの一本勝ちで帳消し感があったものの、アキレス腱固めの体勢に入りながら、ボコボコに殴られるサクの姿を観て「止めろ!」と思った人も少なくないはずだ。

これ以外にもPRIDE時代の吉田秀彦vsトンプソンや、『戦極』での泉浩デビュー戦などでも、殴られ続けながら、なかなかストップされなかったが、やはり「日本人スター選手はなかなかストップされない」という目で見られてしまう事態が起きがちだ。

レフェリーのストップ早すぎ!? 疑惑

武田vsクラウスとは逆に、「ちょっと止めるの早すぎるんじゃないか?」と思われる試合もある。05年の『Dynamite!!』で行なわれた『HERO'S』ミドル級トーナメント決勝、KIDvs元気はKIDのカウンターの右フックからパウンドでKO勝ちとなったが、元気が止められた直後に抗議したため、物議を醸した。また、PRIDE時代のサクvsシャムロックは、サクのパンチラッシュでスタンドのままKOが宣告され、シャムロックが激高する場面も。

これとは別に、関節技でのストップでも揉めることはある。吉田秀彦のデビュー戦では、吉田がホイスに袖車を極めながら「落ちた! 落ちた!」と叫び、それを聞いたレフェリーが試合を止めたが、ホイスは「落ちてないし、極まってもいない!」と猛抗議。大会終了後、一族総出でリングに上がり抗議を行なった。また、秋山vs金泰泳も同じように秋山の十字で金が止められたが、金は涼しい顔で技から抜け出そうとしていたところだったので、これまた猛抗議。

これら「ストップが早すぎる疑惑」の試合は「止めるのが遅い疑惑」と逆で、スター選手が勝った試合が多いため、「勝たせようとしてストップを早くしてるのでは?」と思われてしまう例が多いのだ。

判定延長しすぎ!? 疑惑

レフェリングやジャッジで、一番やり玉にあがるのが、この判定問題だろう。なにしろジャッジ一つで勝利か敗北か、天国か地獄か、有罪か無罪か、文字どおりリング上ジャッジメントが下されてしまうからだ。

そんな審判の場で、なかなか結審されない。そんなことがK-1ではたびたび起こっている。最も有名なのは、04年のK-1 WORLD GP決勝戦、武蔵vsボンヤスキー。本戦3Rでボンヤスキー優勢ながら2ポイント以上差がつかず、延長突入。怒りのボンヤスキーは延長戦で猛然とラッシュをかけるが、それでも判定は1-0で、まさかの再延長。結局、再々延長ラウンドでようやくボンヤスキーが判定勝利したが、一部では「武蔵が優勢になるまで終わらないのでは?」などと揶揄されることとなってしまった。

また、04年の『K-1 MAX』決勝でも、本戦3Rをブアカーオが優勢に試合を進めながら、なぜか判定は1-0で延長に突入。結局、延長戦でブアカーオが優勝したものの、試合後、K-1は審判団のミスジャッジを認め、大成ジャッジ(ルールディレクター)と中川ジャッジは審判員報酬50%減俸。角田競技統括は25%減俸処分が発表された。

これらの試合は、魔裟斗や武蔵を優勝させるための操作ではないのか? という疑惑がファンのあいだで広まってしまった例だ。

どーなってるの!? 疑惑の(!?)判定&レフ

判定内容についての疑惑

判定結果というのは、試合を最も左右する重要なものであるが、その重要な判定を下すジャッジの判定基準が試合中に変わってしまうという前代未聞の事態もあった。それが08年『K-1 MAX』準決勝での魔裟斗vs佐藤嘉洋だ。

K-1では判定の透明性をアピールすべく、近年ラウンドごとのオープンジャッジ制を敷いているが、この試合、1Rはジャッジ3者とも10-10のイーブン。2Rは魔裟斗が優勢に進め、3者ともに10-9で魔裟斗にポイントをつけた。そして問題の3R。なんと魔裟斗は佐藤の右ストレートでダウン。K-1のルールでは、一方のみがダウンした場合、10-8となりダウンを奪い返せなかった魔裟斗は2ポイント取られたはず。結果、佐藤の判定勝ちとなるはずだが、結果はなんとドロー! 延長で魔裟斗が勝利したが、リング内にはペットボトルが投げ込まれるなど、暴動寸前の不穏な空気となってしまった。

この判定について試合後、角田競技統括は「ダウンを奪われたあと、魔裟斗は反撃に転じラウンドを支配したのに、ダウンを奪われた場合、必ず10-8というのはおかしい。すぐにそのルールは訂正したい」と、前代未聞、試合中の電撃ルール変更を発表!!

その後、角田競技統括は自身のブログで3ラウンドの裁定について「10-9と書いてきたジャッジがいて、ダウンを奪いながら9というのはおかしいから、9-8に書き直した」と、まさかの電撃改ざんも告白!

確かに、どんなに反撃してもダウンを奪われたら10-8というルールはおかしいし、そういうルールさえなければ、3Rは9-8のジャッジがあってもおかしくはないが、問題なのはルール上は「9-8」がないルールで行なっていながら、それがないがしろになったこと。決められたルールより、角ちゃんの独断が優先されることが問題視されているのだ。

トーナメント勝ち上がりについての疑惑

ワンマッチ以上にいろいろと問題が起こるのはトーナメント。目玉選手が初戦で負けるのと勝ち上がるのとでは、大会の盛り上がりがまったく違ってくるため、判定で問題になる機会がたびたび出てきている。

中でもとんでもなくズンドコだったのは、04年にソウルで行なわれたK-1アジアGP。曙の決勝進出が強く期待されたこの大会だが、曙は1回戦で張慶軍の一発殴ったら逃げ回るという超ヒットアンドアウェー戦法に大苦戦し、判定負け。ところが2回戦開始前に角田競技統括が例によってマイクを握り、「張選手が右拳を骨折して棄権。曙選手が準決勝進出します!」と発表。そのときCSフジテレビのカメラが控室の張の姿を映すと、張は拳ではなく足首を冷やしながら、骨折しているはずの右手でカメラに向かってピースサイン! 視聴者全員が「拳ケガしてないじゃん! 元気じゃん!」と、一斉に突っ込みを行なう事態となった。

さらに、ルール改正により敗者復活ルールが消滅。勝者が試合に出られない場合は、代わりにリザーバーが上がることになっており、曙さんの勝ち上がりはルール上不可能であることが発覚したのだが、曙さんが準決勝"負け上がり"を拒否したので、やっぱりリザーバーが準決勝に出場するという空前のズンドコ裁定が行なわれたのであった。

このような事態の連続により、トーナメントシステム自体の信用問題にも及んでしまっているのだ。

試合後に判定が覆る疑惑

かつてプロレス界では、NWA世界ヘビー級選手権などで、ベビーフェイスの挑戦者が王者に勝ちベルトを奪取したものの、試合後にオーバー・ザ・トップロープ等の反則が発覚し、翌日裁定が覆りぬか喜びに終わるという、おなじみの展開があったが、21世紀の格闘技界でも、そんな牧歌的な手法が用いられている。

記憶に新しいのは07年大晦日『やれんのか!』での三崎和雄vs秋山成勲戦。これは三崎のフックからの顔面蹴りでKO勝ちとなったが、「最後の蹴りが3点ポジションでの蹴りではないのか?」と秋山側が提訴。すると通常、3点ポジションだったら三崎の反則負け。そうでなければ、三崎の反則勝ちなのだが、「どちらとも言えない」とのことで驚愕のノーコンテストに! 野球でいえばファールかフェアか微妙だから、サヨナラ勝ちが「没収試合」になってしまったかのような不可解きわまりない判定。こんなのありえないよ!

この時点で、三崎の『戦極』出場が発表されており、「その報復としてのノーコンテストではないのか?」と、タイミング的にファンの不信感を招く、お粗末な裁定だった。

レフェリーの権限乱用!? 疑惑

どんな競技であろうと、レフェリーの権限は絶対。競技者は審判の裁定に従わなければならないが、それは同時に「ルールは絶対」ということ。しかし、K-1ではたびたびルールを超えて、レフェリーが権限を持ってしまうというか、勝手に持ったことにしてしまうことがある。おなじみ我らが角田競技統括だ。

07年3月、武蔵vs藤本祐介のK-1ヘビー級王座挑戦者決定戦が行なわれたが、両者攻め手に欠き、本戦ドロー。すると延長戦に入る前、角ちゃんは大好きなマイクを握り「消極的なままなら両者失格にする!!」と、武蔵と藤本に最後通告! まさに「俺がルール」な角ちゃん宣言。この角ちゃんマイクに対し、試合後、武蔵は「セコンドの指示に集中してたので聞いてなかった」とのこと。あ〜あ。

レフェリーのブレイクについての疑惑

総合格闘技では、角ちゃんのような豪快に物議を醸すことは少ないが、試合中のちょっとしたレフェリングで、試合展開を変えてしまうようなことがよくある。今年のDREAMフェザー級GPでの前田吉朗vs高谷裕之戦では、前田が終始試合を優位に進める中、グラウンドで上になりサイドポジションにいこうとしたまさにそのとき、芹沢レフェリーはなんとブレイク! この不可解なブレイクで、スタンドでの再開のチャンスをつかんだ高谷は、大逆転のKO勝ち。前田は悔やんでも悔やみきれない負けとなってしまった。

このように試合結果にほぼ直接的に影響を与えなくても、ブレイクやストップ・ドント・ムーブは、試合展開をおおいに変えることがある。今年10月の青木vsハンセンで、ハンセンはレフェリーの「アクション!」の指示があまりにも頻繁なことに不満を表明したり、『戦極』での横田vsライアンでは、ライアンのタックルでロープをつかんでテイクダウンを免れた横田に対し、注意のみでスタンド再開となり、横田のKO勝ちとなったりした。

このような不可解なタイミングでのブレイクがあると、勝った選手の評価に水を差す結果となってしまうことが多々あり、非常に残念だ。

ファイターから見たレフェリングの問題点とは？

「レフェリーがほぼ試合に介入しない UFCが一番闘いやすかった」

さすらいの殺戮ピラニア

長南亮

今回の特集・レフェリング問題の最後にご登場願ったのは“やる側”代表の長南亮。
世界最高峰と言われた頃のPRIDE、そして現在の世界最高峰であるUFCでしのぎを削ってきたファイターが、
その身をもって感じたレフェリングの問題点をズバっと激語り!

聞き手／鈴木佑　試合写真／乾晋也、Josh Hedges（UFC）

試合を作るのはレフェリーじゃなく あくまでも選手であるべきなんです

——今日は最近何かと話題になってるレフェリング問題について長南さんにお聞きしたいと思ってまして。

長南　それは全然かまわないんですけど、またなんで俺になんですか？

——以前、ドーピング問題について取材したときにズバっとお話しいただけたので、現役選手で聞くならご意見番の長南さんかな、と（笑）。

長南　物議を醸してる話題は俺に語らせろってことですか（笑）。まぁ、勘違いしないでほしいのはドーピングにしろレフェリングにしろ、そういう部分が整備されてたら自分はいい試合ができたとか勝てたとか、そういうことではないんで。ただ、こうあったほうがいいんじゃないかって理想は、やる側として常に持ってますけどね。

——まさにそのやる側目線で語ってほしいんですが、レフェリングについてこれだけ議論が巻き起こってる現状は率直にいかがですか？

長南　まず、レフェリーにも言い分があるはずなんですよ。だから最初に思うのが、レフェリーは待遇面でもっと優遇されるべきなんじゃないかってことなんです。噂で聞くぶんには、給料にしてもそれほどもらってるわけじゃないみたいだし。

——職業意識を高める意味で、ということですか？

長南　そうですね。たとえば、何かレフェリングで問題があったときは一斉に叩かれるのに、そこまでいい思いをしてるわけでもない。巧いレフェリングをしたからって、そうそうほめられるわけでもないし、それがあたりまえとされる。そういうことを考えると、選手の命を守るという責任のある仕事として、もうちょっと報われてもいいんじゃないかとは思いますね。

——実際、レフェリーだけで生活してる人って相当かぎられますよね。

長南　それは「レフェリーになりたい人っているの？」って話にもつながるし。いまの格闘技イベントって、レフェリーの顔ぶれもだいたい同じような状況じゃないですか？　だから志願者が増えるように待遇を改善してその競争率を上げていけば、レフェリングのレベルも自ずと上がると思うんですよ。そうすれば選手を辞めてからレフェリーを目指す人もいるだろうし。

——なるほど。

長南　あと、レフェリーっていうのはあくまで試合では第三者なんですよね。それなのに、試合中に露骨に前に出てこられると気になる部分はありますね。そうすると競技ではなくショー的なものに寄っていってしまうというか。

——いわゆる試合の〝演出〟という部分でのレフェリングですね。

長南　そうそう。レフェリングで重要なのはいかに〝空気〟のように試合を裁けるかってことだと思うんですよ。レフェリーには常にそういうスタンスであってほしいですね。

——日本と比べて、長南さんも参戦していたUFCのレフェリングはどうですか？

長南　もちろん、UFCでも日本ほどじゃないにしろ「あのブレイクはおかしい」「止めるのが早い」だとかそういう問題は起きてますよ。でも、いままで俺が試合した中でレフェリングが一番良かったのはやっぱりUFCなんです。なぜかっていうと、それはレフェリーが試合でほとんど何もしないからで。

——要するにレフェリーの試合介入が少ない、と。

長南　そうですね。試合を作るのはレフェリーじゃなく、あくまでも選手なんです。アメリカの場合、日本とはルール面の違いもありますけど、レフェリーの「ブレイク！」とか「アクション！」っていう声の役割を、お客さんの歓声がはたしてるんですよ。ブーイングが起これば、それだけ膠着してるんだって選手もわかるわけだし。

MMAにおいて多くのファンが退屈を感じるであろうグラウンド状態での膠着シーン。そこからどのように会場を盛り上げるか、MMAを競技として考えた場合には選手に委ねられてしかるべきだが……。

——歓声がレフェリングの役割をしてるっていうのはおもしろいですね。

長南　それに比べて、いちいちレフェリーが試合のリズムを作ろうとするのは、俺はどうしてもプロレスっぽさを感じちゃいますね。

——実際、日本だとプロレスのレフェリーをやってた人がMMAを裁いてることも珍しくないですし。

長南　よく関節技のアクションに入ったときに島田（裕二レフェリー）さんとかが「ギブアップか？」って聞くじゃないですか？　あれ、俺からすればおかしなことなんですよ。だって、頑張って耐えてる人間に、なんでいちいちギブアップを誘うようなことを聞くんだって話で。そのためにタップがあるんだから、わざわざ聞く必要もないっていうか（笑）。

——興行として考えた場合、どうしてもそうすることで会場を盛り上げるっていう要素はありますよね。

長南　まぁ、極端な話をしちゃうと俺らがレフェリングをおかしいと思ってても、お客さんがそう感じなきゃいいんですけどね。でも、観てる人たちが「いまのブレイクのタイミングはおかしい、なんでここでストップするんだ？」って気づき始めてる状況なのに、いつまでもPRIDE初期からの伝統みたいなレフェリングを続けてても仕方ないんじゃないかなって。

——お客さんの目が肥えてきてる、と。

長南　それと最近思うのは、ロープ際のレフェリングが凄く厄介だなってことですね。選手によっては故意でロープの外に身体を出したり、ロープ自体をつかんじゃう人間もいますけど、そのときのレフェリングにあまりにも不自然さを感じるっていうか。いちいちストップ・ドント・ムーブで試合を止めて、「そのかたちだぞ」って言いながら体勢を変えるのに、なんか違和感があるんですよ。

——違和感というと？

長南　たとえば、そのロープ際の攻防の中には、選手にすれば先を見据えた必要な動きがある場合も多いんです。でも、それがストップ・ドント・ムーブの一言でリセットされて、なおかつ不利な体勢にされることもあるわけで。

——UFCだと金網に押し込まれたときに、その金網を利用した〝際〟の攻防というのが、独特な技術として存在しますよね。

長南　それに比べると、日本はロープ際で人工的にレフェリーの手が入るケースが多すぎる（キッパリ）。最近だと青木（真也）くんと（ヨアキム・ハンセンの試合（10・6『DREAM.10』）ですかね。ロープの外に片方の足が出ちゃったハンセンに対してレフェリー、ジャッジ陣がよってたかってその足を持ち上げて、それでバランスを崩した瞬間に青木くんにテイクダウンされたりしてましたからね。やっぱりそういうのはおかしいと思いますよ。

——確かに選手にしてみればたまらないですね。

長南　いまのケースは稀だとしても、本当は凄い攻防が展開されるかもしれないのに、それを見えなくしてしまうのはレフェリングのせいって場合もありますからね。

――イエローカードについてはどう思いますか？

長南　……俺はイエローカード自体がいらないと思うんですよ。

――イエローカードはいらない！　それはまた斬新な意見です（笑）。

長南　あれは試合を盛り下げちゃってると思うんですよ、結果的には。カードを出すことで「この試合は膠着してますよ」っていうことを、わざわざお客さんに知らせちゃってるんだから。だったら、イエローカードじゃなくてブレイクでいいじゃないかって思うし。極端にいえば、イエローを出さざるをえないような選手だったら、最初から使わなきゃいいんですよ。使っておいて「つまんねえ」とか「膠着すんな」とか言うんだったら。

――なるほど。長南さんが日本でレフェリングが安定してると思うイベントは？

長南　個人的には修斗ですかね。そういう部分で修斗は揉め事が少ないじゃないですか？　そこは全体的に見習っていかなきゃいけないんじゃないかなって。

――修斗のレフェリングはどんなところが優れてますか？

長南　バッティングとヒッティングの見分けができることですね。たとえば、どさくさに頭が相手に当たっても、PRIDEとかだったらだいたいOKなんですよ。でも、修斗のレフェリングだと「いまのは頭だ」って試合をストップすることができる。本来、レフェリングはそういう部分を取り締まって選手の安全面を管理しないといけないのに、ほかの多くのイベントは試合をおもしろく見せることに重点を置いてるっていうか。もちろん、それはレフェリーも主催者サイドから言われてることなんでしょうけど。

――長南さんが「このレフェリングはおかしい」と思った試合というと？

長南　代表的なのは野口（大輔）レフェリーが裁いた吉田秀彦vsホイス・グレイシーの試合ですかね。最後、袖車が極まってないのに止めてしまった試合（笑）。

――あのときはグレイシー側の抗議も凄かったですもんね（笑）。

長南　でもそういう試合を経験するからこそ、レフェリーも成長していくものだろうし。実際にあのあと、野口レフェリーもどんどんうまくなっていきましたからね。あと、自分の試合でおかしいと思ったのは『PRIDE武士道』のときですね。あの頃、グリーンカードっていうのが出始めたんですよ。

――ありましたね～、判定基準にはならないけど膠着すると出されるっていう不思議なカードが（笑）。

長南　相手によってはホールディングばっかりしてきて、こっちはどうにもできない状態のときに、グリーンカードをバンバン出されたりしたんですよね。言い訳じゃないですけど、それで試合のペースを狂わされた部分も少なからずあったんで（笑）。もう、MMAはだんだんとロープでやる時代じゃなくなってきてるんじゃないかなとは思いますね。

――DREAMに続いてDEEPもケージを導入しますし、そういう傾向はあるかもしれませんね。あと、闘ってる選手によってブレイクのタイミングが違ったりするのはどう思いますか？　たとえば桜庭和志さんの試合なんかはブレイクが遅いという声が上がることも多いですけど。

長南　まぁ、選手によってというか、そもそもレフェリーによっても判断基準が違いますからね。それも本来なら統一されるべきことですけど。

――やっぱり「このレフェリーはストップが早い」とかあるんですか？

長南　だいぶありますよ！　でも、試合やってるときは夢中なんで、誰がレフェリーか把握してない場合が多いんですよ。けっこう試合後に「あの人がレフェリーだったのか」って気づくこともありますし。

――へ～、そういうもんなんですね。

長南　前にもレフェリーに「あの試合は俺が裁いてたんだよ」って言われて、こっちが「そうだったんですか？」って返したら、「よくあるんだよね、選手が気づいてないのって」って言われましたよ（笑）。

――よく長南さんはいろんな選手のセコンドにもついてますよね。

長南　やっぱりレフェリングがおかしいと思ったら抗議に行ったりもしますよ。ただ、さっきも言ったように、本当にレフェリングが嫌だったらそのイベントには出なければいいだけであって。逆にいえば、選手はレフェリーに従うしかないんですから。だから理想的には選手会みたいなものがあって、主催者側やレフェリー陣とレフェリングについて意見交換する場があったら一番いいんですけどね。

――競技の成熟ということを考えるなら、そういう機関が設置されるべきですね。

長南　本当だったらそういうことは大げさに表立ってやるんじゃなく、水面下で進んでいって、お客さんが「最近の○○のレフェリングはいいな、なんの問題もないな」っていうふうに思ってもらえるのがベストですよね。もちろん、ブレイクとかを必要としちゃう選手たちも悪いわけだから、それはやっぱり自分たちで試合を作れるように心がけて。ただ、やっぱりレフェリーに対しては「試合をおもしろくするのはあなた方の仕事ではないですよ」っていうことは言いたいですね。

――なるほど。長南さん自身はこれから日本で闘っていく中で、レフェリングのことを考えるとリングよりケージのほうがベターですか？

長南　やっぱりケージの中での動きをずっと練習してきたんで、そういうところはありますね。それにまたいつかUFCにも挑戦したいっていう気持ちもあるんで。……こんな感じでどうですかね？　そんな物騒なことは言ってないつもりなんですけど（笑）。

――非常に建設的なご意見だったと思います（笑）。今回もズバっとありがとうございました！

【09年11月2日／都内・吉田道場近くの「王将」にて収録】

もうMMAはロープでやる時代じゃなくなってきてると思います

長南亮

ちょうなん・りょう■1976年10月8日、山形県出身。01年DEEPにてプロデビュー。06年2月に桜井隆多を下しDEEPミドル級王者に（07年12月返上）。その後『PRIDE武士道』で活躍したのち、07年11月から今年4月までは『UFC』に参戦。Team.M.A.D所属。175cm、77kg。

椎名基樹のサムライ三昧

第43回

『角田師範の国歌斉唱』

東京、初冬の風物詩、Jリーグ、ヤマザキナビスコカップ。来場者にナビスコお菓子の詰め合わせが配られるという素敵な大会。今年の対戦カードは、FC東京と川崎フロンターレという、お互いのホームスタジアムが多摩川を挟んで所在する、人呼んで「多摩川ダービー」。

東京近郊のチーム同士の対決とあって、伝統の国立競技場のスタンドは、Jリーグファンがこれほどいたのかと、あらためて驚かされるほど、びっしりと超満員の観衆で埋め尽くされていた。いったい、いくつの『チップスター』や『リッツ』や『オレオ』が消費されたのだろうか。ナビスコ商品をボリボリと食らう、数万の人の姿を見たら、木村佳乃もきっと感動の涙を流したことだろう（木村佳乃の〝さくらん〟の濡れ場最高）。あと余談であるが（つーか冒頭からすべて余談であるが）『エアリアル』というナビスコのスナック菓子は、新食感でうまい。

んなことを考えながら筆者は日曜の昼間、寝ころびながらテレビ画面を眺めていた。両チームがピッチに整列し、ダイナマイト・キッドが「日本のタイトルマッチのオープニグセレモニーは、格式高く行なわれ、雰囲気を盛り上げる」と自伝の中で語っていたように、サッカーでも同様に厳かに、このお菓子の優勝杯をめぐる闘いの開会式が行なわれた。

国歌斉唱。どーして、日本のクラブチーム同士の一戦の前に、世界の舞台に立つと、その独特ぶりがいっそう際だつ、我らがナショナルアンセム「君がYO！」が歌われるのだろう、と不思議に思って眺めていた。

君がYO！
いなけりゃ意味ないYO、この世
いくら金があったって、無意味だYO、
それ何YO！
職務質問、いいかげんにしつこいYO！
怒るYO、しまいにはYO！
YO！　YO！　YO！

などと、自作のラップ「君がYO！」を、『修斗伝承』の興行で、五味vs中蔵の一戦の前に会場に流され、熱気を帯びた観客を一気にヒートダウンさせた、「Z-NRO」のCMのバックトラックに乗せて、頭の中で歌っていると、そのあまりに幼稚な一人遊びを絶ち切るような衝撃が走った。「国歌斉唱、角田信朗！」と名前を呼ばれて、緊張の面持ちでマイクの前に立ったのは、「角田」とは言い得て妙な、顔も身体も角張った、全身将棋駒さながらのルックスの男。緊張のためか硬直したかのように「気をつけ」をしているので、さらに角張って見える。季節外れの日焼け面は、まさに使い込まれ黒光りした将棋駒。その髭面の角行は、紛うことなかれ、正道会館・角田師範であった。

スタンドで観戦していたサッカーファンの、チップスターを口に運ぶ手も一瞬止まったに違いない。筆者も固まったYO！　角田師範といえば、栄養ドリンクのCMでも、その美声を披露して、歌自慢は有名であるが、それにしてもこれは驚きの人選であった。かくしてその「君がYO！」の歌唱力のほどは、アカペラで歌うと、素人歌手の音痴が悲しくも露呈したものの、スタジオを埋め尽くしたサッカーファンから、粉だらけの手で万雷の拍手を受けたのであった。師範、ご苦労様でした。

その角田師範は、K-1MAXにおける武田幸三の試合のレフェリングが「試合を止めるのが遅く危険であった」と批判を受けているらしい。DREAMの桜庭の試合も同様の批判を受けているという。しかし、危険というのなら、責められるべきはレフェリーだけではなく、むしろセコンドのほうが責任は重い。特に打撃系の格闘技の場合は。

もちろん、そういう論議が巻き起こり、格闘技がいい方向に向かうことは非常によいことだ。でも、絶対スポーツとして確立されないYO！　日本のテレビ格闘技はYO！　みんな目先のことしか考えてないYO！　YO！

今月は、DREAMの初めてのケージマッチ、判定が議論の的になっているというUFCのLYOTO vsショーグン（筆者的には、納得できた。挑戦者は、もう少しはっきりとした差を見せるべき）、今年のベストバウ候補にもなるだろう、ヒョードルの試合の画期的なネット中継（ヒョードルはやっぱ強い！　皇帝は、とにかく速いことを再認識）、バリジャパ、『戦極』（小見川選手おめでとう）など、さまざまな格闘技の話題がありながらも、サッカーの話題で恐縮であったが、最後に野球の話題。

クライマックスシリーズでドラゴンズを下し、日本シリーズ進出を決めた試合でヒーローとなった、ジャイアンツのヤワラちゃんのダンナこと、谷佳知。ヒーローインダビューを受ける、彼の声、小学生のようなたどたどしい話し方を聞いていて、どこかで聞き覚えがあると感じる。よ〜く自分の記憶と照らし合わせてみると、その声の主は、我らが藤波辰爾だと気づく。よくよく見れば、顔も似ている。

〝ジャイアンツドラゴン〟原辰徳から背番号「8」を受け継ぎ、（中日）ドラゴン・ボンバーをはたした、藤波同様の恐妻家（数ある芸能人カップルを抑えて、ヤワラちゃんに谷が贈った、婚約指輪のダイヤのカラット数は、歴代の芸能人カップル中で一番デカイ）の谷佳知に、ドラゴンの呪いを見たのであった。

サッカー以外では04年のプロ野球開幕戦でも国歌斉唱を務めている角田師範。その美声を活かしCDリリースも多数。『ケロロ軍曹』などアニメの声優も何度か経験。『CR花の慶次』では主題歌を熱唱してるぞ！

捉ポルシェの萌え萌え女々苑

イラスト◎ゴローちゃん

第41回 日向あずみ（JWP）の巻

女子プロ萌えの架け橋こと『萌え萌え女々苑』。今月のゲストは12・27後楽園で引退する日向あずみ選手！ 試合はハードで激しいのに、プライベートは独特の不思議な空気感に包まれてたまりません！ 読めばあずみが好きになる、衝撃のぽんやりインタビュー！

捉 引退を決めた一番の理由は？

日向 何っていうか、これっていうのはないんですけど、まあ、いろいろ（微笑）。

捉 なんか理由がぼやけてますねぇ。理由は一つではないってことですか？

日向 ……そうですね。身体のこともあるし、年齢的なものもあるし、将来的なこととかもあるし、いろいろです（微笑）。

捉 引退後の進路もまだ決まってない？

日向 ……まだ何も決まってないんで。そのへんもこれからですね（微笑）。

捉 辞めてから、ゆっくる考えると？

日向 ゆっくりする暇とか余裕はないんですけど（微笑）。何か働かないと。

捉 花嫁修業的なことをしていくとか？

日向 あ～、結婚もしたいんですけど、とくに花嫁修業とかは……予定もまったくないですし（微笑）。

捉 30歳手前ぐらいのインタビューだと、「結婚もしたいし、お店も開きたい」みたいなことを言ってたんですよ。

日向 へぇ～。一応、昔の人生設計では、27歳で結婚してる予定だったんですけど、どんどん崩れて来ちゃって（微笑）。

捉 JWPのブログを拝見したんですけど、日向さんの文章を見ると、激しい試合スタイルからはうかがい知れない、モノ凄くのんびりした感じが伝わってきて、とてもおもしろいんですよ。

日向 えっ、ホントですか？ ……書かないと怒られたりするんで（微笑）。

捉 仕方なく書いてる感じは確かに出てます（笑）。

日向 いやいや、楽しく書いてます（笑）。

捉 自発的に「自分の思いを文章で伝えたい」ってタイプではないですもんね。

日向 そうですね。携帯で打ってて自分でもワケがわかんなくなっちゃうときがあって、「もういいや」って消しちゃうこととかよくあるし（笑）。

捉 そんな感じがモロに文章から伝わってきます（笑）。09年6月のブログだと、「ラーメンが好き」っていうタイトルなんですけど、「味噌ラーメンが好き」と書いたすぐあとに「でも、おいしければなんでも好き」って書いてあっていきなり前言撤回してますし（笑）、「カップラーメンは日清のカップヌードルと赤いきつねが好き」って書いたあとに「赤いきつねはうどんですけど……」みたいに常に何が言いたいのかわからない感じで（笑）。

日向 アハハハハハ。

捉 続けて「きつねとたぬきと言えば、阿部（幸江）ちゃんとKAZUKIのイメージなんだけど、2人は赤いきつねと緑のたぬき、どっちが好きですか？」って、地味に失礼な感じもあったり（笑）。

日向 そんなことないです（微笑）。

捉 そういえば、引退を決めてからちゃんと料理もするようになったとか？

日向 はい。

捉 でも、台所の電球を2年間切らしっぱなしなので、とりあえず電球を代えるところから始めなきゃいけないって。電球は代えました？

日向 ……まだです（微笑）。アハハハ。

捉 そうだと思いました（笑）。

日向 とりあえず、隣の部屋の灯りで、なんとかなってるんで（微笑）。

捉 結局、料理は全然してない？

日向 全然ってことはないですけど、基本的に得意じゃないんで、なんでもお鍋に入れちゃえばいいや、みたいな（微笑）。

捉 まあ、プロレスラーですもんね。なんでもちゃんこにしちゃえっていう（笑）。ちなみに、ベストバウトは誰との試合ですか？ よく言われるのは田村欣子選手との60分フルタイム戦ですけど。

日向 う～ん、よく聞かれるんですけど……、でも一つに決められない……いっぱい……いっぱいっていうか、地方とかでやった試合もあるし、どれってこう、いつも言えないんですよ。……またぼやけた答えになっちゃいますけど（微笑）。

捉 いいですよ、それで（笑）。でもホント、日向さんの文章を読むと幸せな気持ちになれるんで、引退後もブログは続けてほしいですね。

日向 あ、ホントですか。お～、初めて言われました（微笑）。でも、文章書くのは難しいですよね。けっこう本とかは好きでよく読んでるんですけど。

捉 読書が趣味なんですよね。最近読んでおもしろかった本は？

日向 最近は……題名とかを、いっつもちゃんと覚えてないんで……。

捉 期待どおりの答えですね（笑）。

日向 でも、最近よく読んでるのは東野圭吾さんの本です。

捉 どんなところがおもしろいですか？

日向 え、なんだろう？ ……なんか読んでると、次々と読みたくなっちゃう？

捉 アハハハ！ あまり語りたがらないタイプなんですかね。

日向 なんか、うまく言葉に出てこないっていうか、頭が悪いのかも（笑）。

捉 大丈夫です。頭が悪い人は読書できませんから！

日向 けっこうジャンルは問わず、なんでも読むんですけどね。

捉 活字がないとちょっと困る？

日向 いや、そんなことないです。

捉 あ、困らないんだ（笑）。プロレスラーって「自分が自分が」っていうような世界じゃないですか？ でも、日向さんからは微塵もそういう雰囲気は感じられないですよね。

日向 そう……ですかね。

捉 リングに上がれば変わっちゃう？

日向 う～～ん、そこがダメだと言われるんですけど（微笑）。

捉 でも、試合になると急に怖くなりますもんね。

日向 いや、そんなことないですよ。よく「怖そう」とは言われますけど。

捉 試合スタイルはさておき、普段のこの感じがもっとみんなに伝われば、まだ違った人気が出るんじゃないかと思いますよ。

日向 あ、そうですか。アハハハ（微笑）。

捉 では最後に、引退試合に向けての意気込みをお願いします！

日向 1人でも多くの方に観てもらいたいので、ゼヒ観に来てください。……こんな感じでいいんですかね？（笑）。

捉 日向さんらしくてよろしいかと（笑）。

ひゅうが・あずみ■本名・久住智子（くずみ・ともこ）。1975年1月6日、千葉県出身。94年にJWPに入団、12月の後楽園大会での能智房代線でデビュー。99年に本名から日向あずみとリングネームを変え、JWPを中心にさまざまな団体で活躍。09年12月27日の後楽園大会で惜しまれつつも引退。得意技はみちのくドライバーII。160cm、58kg。捉さんも絶賛の日向ブログも読めるJWPオフィシャルサイトアドレスは→http://www.jwp-produce.com/

取材時には決定していなかったものの、この号が発売される頃には発表されてるはずの日向の引退試合の対戦相手。12・27後楽園大会前にも何大会かあるので各自調査の上、ぼんやりモードではなく"怖い"日向あずみを応援に行こう。いましかないぞ！

JWP女子プロレス
日向あずみ引退
後楽園ホール
12月27日（日） 開場11:15 試合開始12:00
JWP－CLIMAX 2009
～日向あずみFINAL～

Okite Porsche◎捉ポルシェ■田代まさしとの前科あり／なしユニット・マーシー☆ポルシェのCD『監獄ポップ』（United World Music）、インディーズで発売中！ そこいらの器の大きいCDショップでのみ販売なので、近所のCD屋に置いてない場合は店内で泣いて地団駄踏んで思いきりゴネるなどして、各自死にもの狂いで入荷してもらうように。片やロマンポルシェ。でのライブ予定は12・5（土）神戸VARIT（078-3921-6655）、1・16（土）札幌 ホール・スピリチュアル・ラウンジ（011-221-9199）、1・17（日）旭川 カジノドライブ（0166-26-6022）。その他の情報はブログをチェック！［http://blog.excite.co.jp/porsche/］

徹底討論!?

女子格はエッチな目で見てもいいのか?

業界震撼のツーショット!

クマクマンボとメモ8がジャンルの未来について中年'sトーク!!

本誌No.139で「まぁ、イヤラしい!」と微妙な反響が続出だった
クマクマンボ&佐伯繁DEEP代表による女子格座談会!
今回は「俺の女子格をそんな目で見るな!」とばかりに
長尾メモ8氏が緊急参戦!　ネオン輝く都会の夜景すらかすむ
ダンディなミドルエイジ二人が、やっぱりイヤらしくみだらに語る!?

聞き手／ジャン斉藤　構成／鈴木佑
写真協力／GBR、GCMコミュニケーション　モデル／長野美香

※格闘情報ウェブサイトGBRで「長野美香セクシーショットデジタル写真集」公開中!
アドレス→http://gbring.com/

間口として手ブラもいいですけど根底には実力がないと（メモ8）

——今回は女子格を〝**エッチな目**で見ちゃいけない派〟のメモ8さんと、〝**エッチな目**で見ちゃう派〟の熊久保さんに熱い議論をしていただきます。

熊久保　だから僕は**エッチな目**で見てないですって！（怒）。この前の佐伯さんとの座談会もそういう話じゃなかったのに、『ｋａｍｉｐｒｏ』マジックであぁいうふうになってましたけど（詳しくは本誌Ｎｏ・１３９を各自調査！）。

メモ8　あの、始まって早々なんですけど、そもそも俺には熊久保さんが女子格好きっていう印象はあんまりないんですよね（冷たく）。

——まぁ、**エッチな目**でしか見てないですからね。

熊久保　いやいや、そんなことないですよ。

メモ8　だって、熊久保さんはブログで女子格のことあんまり書かないじゃないですか？　キックのことばっかりで。

——噂によると、好きなアイドルのことはよく書いてるそうですね。

メモ8　ただ、熊久保さんは、自分が主催してたスマックガール－Ｆっていう新人主体の大会をずっと取材してくれてたんですよ。ＧＢＲで映像流すためだったんですが。でもそうか、それもずっと**エッチな目**で見てたのか（笑）。

熊久保　ちがっ！　見てない見てない。

——なんでブログに女子格のことを書かないんですか？

熊久保　あれですよ、興行数が少ないからそう見えるだけであって。だってこの前、ジュエルスのこと書きましたもん！（ムキになって）。

メモ8　だからジュエルスができてからなんですよ。要はビジュアル路線を推し進めるイベントが出てきて、**エッチな目**で見てもよくなったからでしょ（笑）。

熊久保　いやいや、ちゃんと辻結花の試合に感動したときは「女子格は男子格闘技と肩を並べた」って書いたんですから！

——え〜、読者的にはどうでもいい議論が白熱しておりますが、まず団体側として、メモ8さんは**エッチな目**で見られるのはよしとしない感じなんですか？

メモ8　いや、べつにそういう目で見られてもメディアへの露出が増えるんならかまわないんですよ。ただそれだけになっちゃうとっていう話で。

——**エッチな目**だけで見てくれるな、と。

熊久保　だから間口の話ですよね。最初、そういう目で見に来てもらっても、ちゃんと試合で「ああ、おもしろいな」って思わせればいいわけじゃないですか。

——間口としての**エッチな目**はどうですか？

メモ8　まぁ、一番はノーマルな露出をコンスタントに続けていくことですよね。ウチに関していえば、いままで人手の関係で広報活動が少なかったのが最大の問題点だったんで。もちろん間口があったほうがバーンと行く可能性はあるんでしょうけど。

熊久保　だって実際ね、いま女子のアスリートで人気がある選手はみんな顔ですよ、あれ。

——要は見た目重視というか、みんな**エッチな目**で見てる、と。

熊久保　そうですよ、ビーチバレーにしろゴルフにしろフィギュアスケートにしろ……なんでもまずは顔から入るんです。顔ですよ、顔！（ツバを飛ばしながら）。

——そ、そんな強調しなくても。

メモ8　でも、たとえば浅尾美和は間口としてはいいけど、ジャンル自体は背負えないですよ。要は客寄せであって、浅尾美和がいることでビーチバレーっていう競技が育つかっていうと、俺はそうは思わない。やっぱり本当に強い選手じゃないと。

——根底には実力がないとダメだ、と？

メモ8　Ｋ－１ ＭＡＸがあれだけ世間に届いたのも、魔裟斗っていう超実力者がいたからじゃないですか？

熊久保　でも、ＭＡＸだって入り口は顔ですよ。魔裟斗も最初はヴィジュアルで売ったんですから。有名な話があってね、谷川さんが『ＨＥＲＯ'Ｓ』のトーナメント出場者を選考してるときに、ＺＳＴの両雄である所英男と小谷直之の写真を見比べて、迷わず所を顔で選んだんですよ。

——試合ではなく顔で選んだ、と。

熊久保　だから男でさえビジュアルで選ばれる時代なんですよ。もちろん、そこで期待に応えられるかどうかが、そのジャンルの発展につながるわけですけど。魔裟斗や所は結果を出しましたからね。で、実力が伴うか伴なわないかっていうのも重要な話ですけど、結局は伴なわなくてもビジュアルで引っぱる選手と実力者が別々にいても全然いいと思いますしね。

——まぁ、まったくビジュアルを否定しちゃうのは問題ですよね。

メモ8　確かに長野美香の手ブラ見たさに**エッチな目**でＧＢＲの有料会員になった人が、そこを間口として女子格全体に興味を持ってくれるかもしれないですしね。こういう言い方はあれですけど、ジュエルスさんが間口になって、実力主義であるヴァルキリーに流れればいいんじゃないかなって（笑）。

——熊久保さん、あの手ブラの反響はやっぱり凄いんですか？

熊久保　あの反響は凄い！（キッパリ）。ウチのサイトでもずっとＴＯＰ画面ですから。

メモ8　……じつは俺、それが見たくてＧＢＲの有料会員になっちゃったんですよ（笑）。

熊久保　マジですか⁉　ほらほら、メモ8さんでも結局は**エッチな目**で見てるわけじゃないですか！

——メモ8さんも〝**エッチな目**で見ちゃう派〟でしたか（笑）。あの、さっき話に出たＫ－１ ＭＡＸですけど、その底辺はキックボクシングの団体が支えてるじゃないですか？　でも女子格の場合はジャンルとして裾野がそこまで広がってないですよね。

ヴァルキリーにもビジュアルで勝負できるツヨカワファイターが！　愛くるしいルックスで人気急上昇中なのが闇愚羅のSACHI。あのワオ木さんも一目置くほどSO CUTEなのだ、クククク！

座談会出席者

熊久保英幸
格闘情報ウェブサイトＧＢＲ編集長。元『ゴング格闘技』編集長。古武術からＺＳＴガールの３サイズまで、業界随一の格闘技の知識量を誇る。スケベ声が特徴。
ブログ→http://blog.livedoor.jp/gbrkuma/

長尾メモ8
ネットの住人として名を馳せつつ、03年からはスマックガール実行委員会として女子格の発展に尽力。現在はヴァルキリーを裏から支えている。アニメ声が特徴。
ブログ→http://d.hatena.ne.jp/memo8/

メモ8　そう、下が全然育ってないわけですよ。ただ、それも2007年時点のスマックガールでは、先ほど話した新人大会もあって、いびつではあるけれど、ちゃんとピラミッド構造になってたんですよ。ところが、自分がスマックを抜けて、そういう大会をやめた途端、若い選手がいつの間にか辞めちゃったりしてるんですよね。要はそういう選手のためにも、大会を開催しないとダメなんですよ。目標を設定してあげないと。

――そうしないとモチベーションが続かなくて辞めちゃう、と。

メモ8　だからその意味でいまはジュエルスとヴァルキリーという2団体があって、そこに出場することをモチベーションにする選手が出てきてますから。ようやく07年当時の環境に戻りつつあるとは思うんです。

熊久保　メモ8さんが言ってたような新人主体の大会に力を入れるのは、底辺を育てるという意味ではいいですよね。

――ちなみにいまの女子格の選手ってただ強くなりたいのと有名になりたいのと、どっちの気持ちが強いんですかね？

メモ8　そこはプロになったときにスポットライトを浴びてどう変わるかですよね。さらに強さを求めて練習するのか、手ブラに走るのか（笑）。

熊久保　個人的には、たぶんいまの女子格の選手は強くなりたいって気持ちのほうが大きいと思いますよ。というのは、いまの女子格でアイドルになろうと思っても、有名にはなれないじゃないですか？

――ジャンルとして有名になるほどの注目がない、と。

熊久保　そうそう。テレビや雑誌にバンバン出てるような選手がいれば、そういう目標も出てくると思うんですけど、まだそういう存在がいないんですよ。

メモ8　まだまだですよね。女子格の創成記から活躍している藪下めぐみ、辻結花、藤井恵のレベルに追いついた選手がいないような状況ですから。やっといまMIKUがそこまできた感じで。

――女子格の選手にとってのゴールってなんなんですかね？

熊久保　ゴール……自分の強さに満足するかじゃないですか？　現時点では。

――男子だと「山本KIDみたいになりたい」とか「桜庭さんみたいに」とか、まだ目標をイメージしやすいと思うんですよ。女子はなかなかイメージしづらいんじゃないかな、と。

熊久保　単純にジャンルがそこまでいってないというか、未成熟ってことでしょうね。

メモ8　だからいまの女子格は、K-1MAXが始まる前の70キロ以下級のキックボクシングの世界観に近い感じなんじゃないですかね。

――その当時のキックボクサーには世間に対するコンプレックスとかはあったんですか？

熊久保　ありましたよ～。というか、いまだって持ってますよ、石川直生とか。だから『Dynamite!!』出場をアピールしてるんだろうし。昔だったらなおさらで、「自分たちが命を懸けてやってるのに誰も評価しない、見向きもしてくれない、テレビもついてくれない」っていうような意識が凄かったと思いますよ。

――女子格の選手にはそういうコンプレックスはあるんですかね？

メモ8　昔、MARSっていう男子の大会で辻結花の試合を組んだんですよ。そのときに辻が「ただ女子格というジャンルがあることを知ってほしい」って言ったんですね。やっぱりマスとはいかないまでも、少しでも多くの人に届かせたいっていう気持ちはトップ選手ならみんな持ってると思いますよ。そういう選手ほど広報活動にも協力的ですし。もちろんマスに届かないのは我々の責任という部分が大きいんですけど。

文中に出てくるように、かつて地上波で放送された大会で名を上げた渡辺久江。05年～06には有名下着メーカーのピーチ・ジョンをスポンサーにつけるなど、自己プロデュースにも長けていた。08年5月に引退するも、今年復帰を宣言。また第一線に舞い戻ってくるか？

――やっぱりそういうことを考えると、メモ8さんが言うように地道にやっていくのは、マスに届けるには相当時間がかかるような気がしますね。

メモ8　そこはジュエルスさんに手ブラなんかで**エッチな目**で見るお客さんを引きつけてもらって、ウチはそのおこぼれをもらうっていうか（笑）。

――でもあの手ブラ的なのも、どのジャンルの女子でもありがちというか、本当の意味でのブレイクとしてはイメージしづらいですよね。

熊久保　だから、本当にジャンルがブレイクするための要因って、最終的には試合なんだと思いますよ。伝説に残るような凄い試合があれば、たぶん**エッチな目**以外にも多くの人が食いつくだろうし。

メモ8　それはこれまでにもいくつかあったとは思うんだよなぁ。そもそも女子格自体が格闘技界で注目を集めだしたきっかけは、藪下めぐみvsスベトラーナ・グンダレンコ（00年12月5日・ReMix）なんですよね。で、それに匹敵するのが辻のvsエリカ・モントーヤ戦（04年8月5日・スマックガール）とアンナ・ミッシェル・ダンテスとの2戦目（07年9月6日・スマックガール）。あとは渡辺久江vsしなしさとこ（06年8月4日・DEEP）も凄かった。

目で見てもいいのか？

熊久保　確かにどの試合も凄かったんですけど、マスにまでは届いてないんですよね。たとえば渡辺なんかは凄いチャンスがあったんですよ。かつてTBSの番組内で開催された女子格のトーナメントで優勝したわけですし（※04年5月に放送されたテレビ番組『黄金筋肉』の「女子総合格闘技最強女王決定トーナメント」）。あのときにもっとガンガン売り出すべきだったんだよなぁ。

――そうですね。渡辺批判ですか？

熊久保　いやいや、批判じゃないですよ。やめてください、女子はデリケートなんだから（笑）。

――そもそも女子格の選手って、有名になるためには**エッチな目**で見られてもかまわないって選手は多いんですかね？

メモ8　昔からいる選手は「女子格自体がメジャーになるのなら**エッチな目**もべつにかまわない」っていう子も増えてますね。02～03年の頃は「スマックなんてキャットファイトだよ」なんて言われると、「私たちはキャットじゃない」っていう意識があったんですよ。でも、いまはそこまでかたくなじゃないと思いますよ。たとえば久保（豊喜GCM社長）さんが、茂木（康子ヴァルキリー・プロデューサー）さんに「おまえ、イベントに注目が集まるならおっぱい見せるか？」って冗談交じりに聞くと、茂木さんも「それでお客さんが来てくれるならいくらでも見せますよ！」って言い返してますからね。もちろん実際に見せるかどうかは別として（笑）。

熊久保　はは～ん。

――あ、**エッチな目**で見てる。

熊久保　いやいや、そんなことない

ですよ！（笑）。

満足しちゃうっていうのもあるのか

かって「mimipro」にも登場したヴァルキリー・

うことは考えてると思うんですよ。

からビジュアル路線では難しいのか

ですよ！（笑）。

メモ8 うちの自慢のプロデューサーに複雑な笑いをしないでくださいよ（笑）。

——じゃあ、選手側も**エッチな目**にはとくに抵抗はない、と。

メモ8 やっぱりそれを入り口に試合を見てほしいって感じでしょうね。

熊久保 あとジャンルの広がりを考えると、メジャー団体が手をつけるかっていう部分も大きいですね。

——普通に『Dynamite!!』でも女子格をやればいいのにって思うんですよ。とりあえずかわいい選手が出てればとくにストーリーはいらないですし、それこそ世間の**エッチな目**が集まるでしょうし（笑）。

熊久保 ねえ（笑）。谷川さん、今年はじめには「女子の大会をやる」ってブチ上げてたのにまったくもってその話が消えちゃいましたからね。

——メジャーでいうと、ストライクフォース躍進の起爆剤となったジーナ・カラーノはどうですか？

メモ8 ジーナは下手すればもう引退なのかなあ？　女優業にも進出してるみたいだし。

熊久保 あれもビジュアルでバーンと行きましたね。ひょっとしたら女子の選手のほうが「名前が売れたらタレントに転向しちゃおう」みたいなのは強いかもしれないですね。

——先ほどの渡辺選手の話じゃないですけど、ある程度のスポットライトを浴びると格闘技の選手としては満足しちゃうっていうのもあるのかもしれないですね。

メモ8 結局そこで格闘技を続けるモチベーションになるのは大スターになるとかいうよりも、やっぱり強くなりたいっていう競技者としての欲が残ってるかどうかですよね。

——いま、女子格の選手たちが格闘技を本業としてそれ一本でやっていくのって、やっぱりきついんですか？

メモ8 最近いろんな選手と話すんですけど、たとえばボクシングや相撲なんかは後援会っていうかたちで選手を支援する組織があるじゃないですか？　ああいう選手の生活を支えてくれるものを確立する方法を考えていかないとダメでしょうね。

熊久保 まさにそのとおりです。だから、女子は一人一人がファンクラブを持つべきなんですよ！　で、ボウリング大会でもなんでもいいんで、会員のために毎月なにかしらで交流する機会を設けて。そういう場で会員の人たちにチケットを買ってもらうような作業を地道にしていかないとダメですよね。そういう組織は女子のほうが作りやすい気はしますけどね、なじみの飲み屋さんにグループを作ってもらうとか。

メモ8 うーん。でも現実問題、月に生活費として最低限20万円作れればいいと思うんですけど、その毎月20万を集めることがどんなに大変なことか……（シミジミと）。それが簡単にできるなら、ジム側だってそういうことは考えてると思うんですよ。でも、現状はなかなかできない。

熊久保 たとえばヤンキー出身の女子とかいないんですか？

——なんでヤンキーなんですか？

熊久保 ヤンキーのほうがそういう結びつきというか、バックアップ体制は整いやすいと思うんですよ。だってアウトサイダーが成功してるのって結局それですしね。

メモ8 ああ、なるほど。

——でも、格闘技にとってはあんまりよくはないですよね。どんどんスモールワールドになっていきそうで。

熊久保 それはそれでおもしろいとは思いますけどね。会場は盛り上がるし。

メモ8 だから極端な話をしちゃうと、後楽園ホールレベルまでなら全部身内でもいいと思いますよ。

熊久保 あと、選手層が薄いのと同時にトップクラスの選手の年齢がけっこういってるのも問題だと思うんですよね。

——あ、女性を敵に回しそうな発言ですね〜。要するに**エッチな目**では見れない、と？

熊久保 ちがっ！　そういう意味で言ったんじゃないですよ！　やっぱり若いスターを育てないと。

メモ8 これ、おもしろい話なんですけど、やっぱり20代の若い選手は遊びたい盛りなんですよね。で、結婚して一回家庭に入ってセカンドライフを考え始めた選手のほうが、練習に一生懸命なんですよ。「あの選手、凄いパンチ打つな、歳いくつ？」、「36です」みたいな（笑）。茂木さんだって柔術を始めたの28歳ですからね。だからビジュアル路線では難しいのかもしれないけど、上の選手のほうがモチベーションがしっかりしてるから続くんですよ。女子格で昔から残ってる選手って公表してないからあれですけど、じつは30代後半から40超えた選手が何名もいますしね。

——結婚して生活の基盤がある選手のほうが伸びやすい、と。あとはジャンルとしてアイコンになりえる選手が出てくるかどうかですかね。

熊久保 MIKUなんかはそうなりえる存在だと思うんですけどね。ヴァルキリーでは誰を売り出そうとしてるんですか？

メモ8 いまはV一が辻を超えられるかどうかっていう流れができてるんで、その図式を盛り上げていきたいですね。数年前のスマックのある大会のあとに、高島学が俺のところにきて「今日は全試合のレベルが高かった」って言ったことがあるんですよ。それまで女子をさんざん馬鹿にしていた高島学に届いてなぜ世間に届かないんだろう？

——いや、高島学さんに届いたところで世間には届かないと思いますよ（笑）。高島さんを**エッチな目**で見させるぐらいじゃないとダメなんじゃないですか？

メモ8 いや、高島は**エッチな目**で見てますよ。「ジーナのおっぱいが好き」って言ってましたから（笑）

熊久保 ハッハッハ！

——では、高島学さんでさえ**エッチな目**で見てるんだから、女子格はどんどん**エッチな目**で見てもいいということで（笑）。

【09年11月5日／都内・某所にて収録】

女子は一人一人がファンクラブを持つべきなんですよ！（熊久保）

かつて「mimipro」にも登場したヴァルキリー・プロデューサー茂木庸子。マッチメイクから選手交渉からなんでもこなす縁の下の力持ちなのだ。もちろん選手としても活動。顔面にパンチを受けても下がらず立ち向かう、その女子格にかける生き様を見よ！

スマックガールの頃から女子格を牽引してきた辻結花。現在はヴァルキリーで初代フェザー級王者として活躍。その辻に次回大会で挑戦予定なのがV一。実力伯仲の両者の闘いなら、エッチな目のお客さんも満足すること間違いなし!?

女子格はエッチな目

フルボッコらしいよ? な読者プレゼント

kamipro PRESENTS

応募要項

ハガキに応募券を貼り、①～⑧の質問の答えをご明記の上、下記の宛先まで郵送してください。応募多数の場合はそれぞれ抽選で決定いたします。ただし、雑誌公正競争規約の定めにより、懸賞に当選された方は、この号の他の懸賞に当選できない場合がありますのでご了承ください。なお、当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます(商品は2009年12月25日(金)頃発送予定です)。

【質問事項】
①郵便番号・住所・電話番号②氏名③年齢・職業④希望商品⑤おもしろかった記事&その理由⑥つまらなかった記事&その理由⑦大晦日に見たいカードは?⑧来年の格闘技界はどうなってると思いますか?

【宛先】〒151-0051
東京都渋谷区千駄ヶ谷5-16-6パレ・ジュノ2F
(株)ダブルクロス『kamipro』編集部
「エルボーで腹痛い腹!!」係まで

※応募締切は2009年12月21日(月)当日消印有効

PRESENT*01

1名様

サイン入り

青木真也サイン入りキックパンツ

[MANTO/非売品]

今回、シカゴ郊外でストライクフォースを観て、エメリヤーエンコ・ヒョードルとの対談が実現した青木真也から練習で使用しているMANTOのキックパンツにサインとメッセージを入れてプレゼントします。アメリカで書いた心の叫び(!?)です。ぜひGETを!!

DREAM■http://www.dreamofficial.com/

PRESENT*02

1名様

FRONT / BACK

エメリヤーエンコ・ヒョードルTシャツ

[白/30ドル]

ストライクフォースの会場で本誌読者のために自腹を切って購入しました!! かっこいいヒョードルの新作Tシャツです。サイズはM。

PRESENT*03

1名様

FRONT / BACK

エメリヤーエンコ・ヒョードルTシャツ

[赤/30ドル]

こちらもロシア的なセンスがキラリと光るヒョードルの新作Tシャツ。こちらもサイズはMです。アメリカでも多くのファンが着ていました。

PRESENT*04

1名様

BACK / FRONT

ストライクフォース大会記念Tシャツ

[30ドル]

前にはM-1とストライクフォースのロゴが入り、うしろにはヒョードルとロジャースの顔が入った大会記念Tシャツ。こちらはLサイズです。

ストライクフォース■http://www.strikeforce.com/

PRESENT*05

1名様

FRONT / BACK

レオナルド・サントスTシャツ

[ブルテリア/¥3,500(税込)]

『戦極』出場を記念して作成されたノヴァ・ウニオンの柔術戦士レオ・サントスのTシャツ(サイズはM)をプレゼント!!

ブルテリア■http://www.b-j-j.com/

PRESENT*06

1名様

藤原喜明直筆の剛竜馬イラスト

[闘道館]

昭和58年の年賀状に、イラストの腕前も名人級だった藤原喜明画伯が故剛竜馬さんを描いた貴重な逸品。両選手のサイン入りです。闘道館にはこのような貴重なお宝が多数あります。

闘道館■http://www.toudoukan.com/Page/TOP

PRESENT*07

1名様

横田一則&戦極グリーンサイン色紙

[非売品]

『戦極～第十一陣～』で光岡映二に勝利した横田。その強さもハゲキャラもすっかり定着してきたが、難敵グリーンを攻略できたのか!?

戦極■http://www.sengoku-official.com/pc/

PRESENT*08

1名様

DVD プロレススーパースター列伝 No.5『ザ・シーク&ドン・カーチス』

[クエスト/¥5,040(税込)]

アメリカンプロレスの黄金期を支えたレスラーたちの往年の名勝負とインタビューなどで構成されるファン感涙のドキュメント作品。

PRESENT*09

1名様

DVD『修斗』20th ANNIVERSARY Best of Knock Out

[クエスト/¥5,880(税込)]

長い修斗の歴史で迫力満点のKOシーンを抽出、格闘技のおもしろさを詰め込んだ156試合を収録!! ルミナ、マッハ、五味らの試合を収録!!

PRESENT*10

1名様

DVD 小室宏二『柔道古技上達法 上巻』

[クエスト/¥5,880(税込)]

柔道界を代表する寝技の使い手でブラジリアン柔術黒帯の小室宏二五段が寝技が上達するための練習方法や実戦例も伝授。寝技で勝つための技術を徹底紹介!!

株式会社クエスト■http://www.queststation.com/

kamipro141 応募券 蟹油勝利

ちぎって持ってっちゃダメだぞ!!

こちらでも毎週プレゼント実施中!! http://kamipro.com/

kamipro 紙のプロレス
No.141
2009年12月8日 発行

発行人
浜村弘一
編集人
斉藤慎一
編集統括本部長
ジャン斉藤
編集スタッフ
坂井ノブ
堀江ガンツ
阿修羅チョロ
松下ミワ
スズキィ
八木賢太郎（披露宴出席のため非番）
終身名誉バイザー
吉田 豪
助っ人
ジャイ子
編集次長（シカと遭遇）
松林 貴
デザインGM
出田さん（TwoThree）
デザイン班長
金井ヒサくん（TwoThree）
デザイン
松坂マツくん
廣田ブンちゃん
野口ノグッチー
鐘田やっちゃん
白木みのる（以上、TwoThree）
カメラマン
乾 晋也
菊池茂夫
平工幸雄
山口比佐夫
吉場正和
平 専英
戸成嘉則
タイコウクニヨシ
梅木麗子
丸山剛史
Esther Lin（ストライクフォース）
お勘定
工藤ちゃん
奉祝
入江ちょうちん（TwoThree）
雑誌営業
堂前秀隆
中村宣忠
業務部
樽本“アドニスラブ”義之
編集庶務
原 正典
山内ユリコ
終身名誉編集庶務
高木由美子
編集チアガール
金川“ナツコ”奈津子
白倉“クララ”明子
踊りまくりマダム
廣橋久美子
発行所
株式会社エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1
☎0570-060-555（代表）
発売元
株式会社角川グループパブリッシング
〒102-8177東京都千代田区富士見2-13-3
印刷
図書印刷株式会社
協力
BUSHIDO KOVOTOJO KELIAS
FightSport

[カスタマーサポート]
☎0570-060-555
（受付時間／土日祝祭日を除く 12:00～17:00）
メールアドレス support@ml.enterbrain.co.jp

『戦極』に突如現われたスーパーハルク！

シャキーン！

中国の大巨人

リュウ・トクリはどこへ行く!?

NEXT ISSUE

一寸先はハプニングな大晦日情報満載!!

No.142は12月22日（火）発売予定！

※地域によっては多少発売が遅れることがあります。謝謝。